

三 鉸釘孔及螺釘孔ハ之ヲ無キモノト看做ス
四 寸法ノ單位ハミリメートルス

第二章 標準強力

第八十四條 本章ニ於テ強力甲板マデノ深サトハLノ中央ニ於テ龍骨ノ上面ヨリ最下ニ在ル強力甲板ノ甲板梁ノ船側ニ於ケル上面迄ノ垂直距離ヲ謂フ

第八十五條 第八十六條、第八十八條及第八十九條ノ規定ハ平爐ニ依リ製造セラレ毎平方ミリメートルノ抗張力四一キログラム以上五〇キログラム以下ニシテ標點間ノ長さ二〇三ミリメートルニ付伸長ノ割合百分ノ十六以上ナル鋼材ヲ以テ構造シタル鋼船ニ付之ヲ定メタルモノトス

第八十六條 標準縱抵抗率ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

L x D x B

L	30
	36
	42
	48
	54
	60
	66
	72
	78
	84
	90
	96
	102

d ハ第三十五條第一項、第九十七條、第一百一條又ハ第九十九條ノ規定ニ依リ定メタル船體ノ形狀ニ基ク夏期乾舷又ハ海水乾舷ニ相當スル吃水ニテ

f ハLニ應ジ定メタル係數ニシテ左表ニ依ル

備考	f	L	f
Lガ表ニ掲グルモノノ中間ニ在ルトキハ挿間法ニ依リ算定ス	19386	108	3777
	21232	114	4193
	23106	120	4892
	25051	126	5621
	27031	132	6533
	29146	138	7470
	31268	144	8669
	33480	150	9920
	35770	156	11253
	38063	162	12774
	40414	168	14335
	42868	174	15897
	45368	180	17615

第八十七條 前條ノ標準縱抵抗率ハ左ノ各號ノ範圍内ニ在ル寸法ノ鋼船ヲ標準トシ之ヲ定メタルモノトス

- 一 Lハ一八二・八八メートル以下
- 二 BハLノ十分ノ一ニ一・五二メートルヲ加ヘタルモノ以上ニシテLノ十分ノ一ニ六・一〇メートルヲ加ヘタルモノ以下
- 三 Lト強力甲板迄ノ深サトノ比ハ一〇・〇〇以上ニシテ一三・五〇以下

第八十八條 標準肋骨抵抗率ハ第八十九條ニ規定スル場合ヲ除クノ外左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$S(C_1 + C_2)$$

二

備考	f ₂	K
肘板ノ上端トノ中央ヨリ、普通肋板ヲ有スル船ニ在リテハ中心線ニ於ケル肋板ノ上面ト船側ニ於ケル肋板ノ上端トノ中央ヨリ最下層梁ノ梁肘板ノ深サノ中央迄ノ垂直距離ニテ	0	0
	1041	1.5
	2084	3.0
	4133	4.5
	6217	6.0
	9275	7.5
	13358	9.0
	18467	10.5
24600	12.0	

f₂ ハKニ依ル係數ニシテ左表ニ依ル

備考

備考	f ₁	H
Hハ二重底ヲ有スル船舶ニ在リテハ船側ニ於ケル内底板ノ上面ト二重底線板ノ外側ニ附スル	19050	0
	23218	2.1
	26234	2.7
	31290	3.3
	39355	3.9
	49551	4.5
	60877	5.1
	74144	5.7
	88564	6.3
	104892	6.9
121552	7.5	

船舶滿載吃水線規程

第八十九條 一層甲板船ニ於テ前條ノ規定ニ依ルHガ五・四九メートル未滿ナルトキハ標準抵抗率ハ前條ニ依リ算定シタル抵抗率ニ左ノ算式ニ依リ算定シタル係數ヲ乘ジタルモノトス

$$f_3 = 0.50 + 0.05 \left(\frac{H}{0.305} - 8 \right)$$

第九十條 前二條ノ標準肋骨抵抗率ハ左ノ各號ノ範圍内ニ

在ル寸法ノ鋼船ヲ標準トシ之ヲ定メタルモノトス

一 D₀ハ四・五七メートル以上ニシテ一八・二九メートル以下

二 BハLノ十分ノ一ニ一・五二メートルヲ加ヘタルモノ以上ニシテLノ十分ノ一ニ六・一〇メートルヲ加ヘタルモノ以下

三 Lト強力甲板迄ノ深サトノ比ハ一〇・〇以上ニシテ一三・五以下

四 肋骨ノ外面ヨリ之ニ最モ近キ梁柱列ノ中心線迄ノ水平距離ハ六・一〇メートル以下

第三章 強力ニ依ル吃水ノ算定

第九十一條 縦抵抗率ニ依ル吃水ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$M \times 1.1$$

Mハ縦抵抗率

fハ第八十六條ノ規定ニ依ル

第九十二條 肋骨抵抗率ニ依ル吃水ハ各種船内肋骨ニ付各

場合ニ應ジ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタル吃水中最小ナルモノトス

一 一層甲板船ニ於テ第八十八條ノ規定ニ依ルHガ五・四九メートル未滿ナル場合

$$\frac{S(f_1 + f_2) \times f_3}{m} + t \times 1.1$$

二 前號ニ該當セザル場合

$$\frac{S(f_1 + f_2)}{m} + t \times 1.1$$

mハ肋骨抵抗率

S、t、f₁、f₂及f₃ハ第八十八條及第八十九條ノ規定ニ依ル

第九十三條 第八十五條ニ掲グル規格ニ合格セザル材料ヲ

以テ船體ノ要部ヲ構造シタル船舶ノ強力ニ依ル吃水ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第四編 甲板積木材貨物ヲ運送スル汽船、槽

船及水汽船ノ乾舷ニ關スル特別規定

第一章 甲板積木材貨物ヲ運送スル汽船

第九十四條 船舶ニ標示スル木材滿載吃水線ノ種類及又ニ對スル乾舷ハ左表ニ掲グル六種トス

滿載吃水線	乾舷	摘要
夏期木材滿載吃水線	夏期木材乾舷	冬期北大西洋
冬期木材滿載吃水線	冬期木材乾舷	冬期北大西洋
冬期北大西洋木材滿載吃水線	乾舷	吃水線ハ近海ノ航行區域ヲ有スル船舶ニハ之ヲ標示セザルモノトス
熱帯木材滿載吃水線	熱帯木材乾舷	
夏期淡水木材滿載吃水線	夏期淡水木材乾舷	
熱帯淡水木材滿載吃水線	熱帯淡水木材乾舷	

第九十五條

前條ニ掲グル各種木材乾舷ハ船舶ガ第百條ノ規定ニ從ヒ甲板積木材貨物ヲ積附ケ運送スル場合ニ限リ夫々第二十一條乃至第二十四條又ハ第二十六條第一項ノ場合ニ於テ保持スベキ最小乾舷トス

第九十六條

海水ニ於ケル各種木材滿載吃水線ハ第二十九條第一項ニ掲グル圓標ノ中心ヨリ後方五四〇ミリメートルノ箇所ニ前線ヲ有スル垂直線ノ後線ヨリ後方ニ向フ長さ二五〇ミリメートルノ水平線ノ上線ヲ以テ之ヲ標示シ又淡水ニ於ケル各種木材滿載吃水線ハ該垂直線ノ前線ヨリ前方ニ向フ長さ二五〇ミリメートルノ水平線ノ上線ヲ以テ之ヲ標示スベシ

船舶滿載吃水線規程

前項ノ木材滿載吃水線ノ標示ニハ左表ニ掲グル記號ヲ附スベシ

木材滿載吃水線ノ種類	記號
夏期木材滿載吃水線	LS
冬期木材滿載吃水線	LW
冬期北大西洋木材滿載吃水線	LWNA
熱帯木材滿載吃水線	LT
夏期淡水木材滿載吃水線	LTF
熱帯淡水木材滿載吃水線	LTFE

第九十七條

夏期木材乾舷ハ第三十五條第一項及第二項ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定ム此ノ場合ニ於テハ船樓ニ關スル修正高ハ第六十六條ノ表ニ掲グル船樓係數ノ代リニ總テノ船型ニ對シ左表ニ掲グル船樓係數ヲ用キテ之ヲ算定ス

船樓ノ有效ノ長さノ和トLトノ比	船樓係數
0	0.2000
0.10	0.3075
0.20	0.4150
0.30	0.5225
0.40	0.6300
0.50	0.6925
0.60	0.7550
0.70	0.8150
0.80	0.8750
0.90	0.9375
1.00	1.0000

備考
船樓ノ有效ノ長サノ和トLトノ比ガ表ニ掲グルモノノ中間ニ在ルトキハ挿間法ニ依リ船樓係數ヲ算定ス

第九十八條 冬期木材乾舷ハ夏期木材乾舷ニ之ニ相當スル

吃水ノ三十六分ノ一ヲ加ヘタルモノトス
冬期北大西洋木材乾舷ハL一〇〇・五八メートル以下ノ汽船ニ在リテハ第三十九條ノ規定ニ依ル冬期北大西洋乾舷、L一〇〇・五八メートルヲ超ユル汽船ニ在リテハ第三十八條ノ規定ニ依ル冬期乾舷ニ等シキモノトス
熱帶木材乾舷ハ夏期木材乾舷ヨリ之ニ相當スル吃水ノ四十八分ノ一ヲ減ジタルモノトス

第九十九條 夏期淡水木材乾舷又ハ熱帶淡水木材乾舷ハ夫々夏期木材乾舷又ハ熱帶木材乾舷ヨリ第四十四條ノ規定ヲ準用シテ算定シタル修正高ヲ減ジタルモノトス

第四十五條ノ規定ハ冬期淡水木材乾舷及冬期北大西洋淡水木材乾舷ニ之ヲ準用ス

第一百條 甲板積木材貨物ノ積附及積附設備ハ左ノ各號ニ適各スルゴトヲ要ス

一 乾舷甲板下ノ場所ニ通ズル甲板口ニシテ甲板積木材

貨物ニ蔽ハルルモノハ艙口梁、縱材、蓋板等ノ閉鎖裝置ヲ夫々所定ノ位置ニ配置シテ固ク之ヲ閉ヂ且帶金ヲ以テ締附クベシ

二 甲板積木材貨物ヲ積載スル場所ニ在ル通風管ハ十分ニ之ヲ保護スベシ

三 船員室區域、機關室其ノ他船員ノ作業ニ使用スル場所ヘノ通行ニ十分ナル通路ヲ存スベシ該通路ニ當ル開口ノ附近ニ於テハ各開口ヨリ浸水スルコトヲ防グ爲隨時之ヲ閉ヂ且留メ得ル様木材貨物ヲ積付クベシ又甲板積木材貨物ノ上面ハ步行ニ適スル様十分平坦ナラシメ且其ノ各側ニハ貨物ノ上方少クトモ一・二メートルノ高サ迄堅ニ三〇センチメートル以内ノ間隔ニ配置セラレタル保護欄干又ハ保護索ヲ設クルコトヲ要ス

四 操舵裝置ハ木材貨物ニ依リ損傷セラレザル様十分ニ之ヲ保護シ且成ルベク之ニ近寄り易キ様爲シ置クベシ
五 乾舷甲板上船樓又ハ甲板室ナキ部分ニハ少クトモ船橋樓ノ標準ノ高サニ等シキ高サ迄木材貨物ヲ滿載スベシ但シ船舶ガ冬期ニ於テ季節冬期帶域内ニ在ル場合ニ於テハ木材貨物ノ高サハ乾舷甲板上船舶ノ最大幅ノ三分ノ一ヲ超ユルコトヲ得ズ

六 甲板積木材貨物ハ之ヲ密ニ積附ケ縛リ且動カザル様爲スベシ又其ノ積附方ハ船舶ノ航行及必要ナル操作ニ支障ナク且水分ノ吸收ニ依ル木材ノ重量ノ増加竝ニ燃料及倉庫品ノ消費ニ依ル其ノ重量ノ減少其ノ他船内ニ於ケル重量ノ變更ヲ考慮ノ上航海ノ全道程ヲ通ジ復原性ノ十分ナル餘裕ヲ保持シ得ルモノナルコトヲ要ス

七 甲板積木材貨物ノ性質ニ依リ支杆ヲ要スル場合ニ於テハ適當ナル強力ヲ有スル木製又ハ金屬製ノ支杆ヲ以テ甲板積木材貨物ヲ支持スベシ支杆ノ間隔ハ三・〇五メートル以内トシ木材ノ長サ及性質ニ應ジ之ヲ適當ニ配置スベシ

支杆ハ梁上側板ニ固著シタル堅牢ナル山形材若ハ金屬製壺金又ハ同一效力ノ裝置ニ依リ之ヲ留ムルコトヲ要ス
八 甲板積木材貨物ハ三・〇五メートルヲ超エザル間隔毎ニ貨物ノ兩側ニ跨ル各別ノ縛索ニテ縛リ其ノ全長ニ亘リ十分ニ締附クベシ木材ノ長サ三・六六メートル未滿ナルトキハ其ノ長サニ適應シテ縛索ノ間隔ヲ減ズルカ又ハ他ノ適當ナル方法ヲ講ズベシ
縛索ニハ徑一九ミリメートル以上ノ短環鎖又ハ之ト同

船舶滿載吃水線規程

等ノ強力ノ柔軟鋼索ヲ使用シ何時ニテモ近寄り得ル箇所ニ於テ之ニ滑鈎及緊螺ヲ取附クベシ尙縛索トシテ鋼索ヲ用ウルトキハ其ノ長サヲ調節スル爲短キ長環鎖ヲ取附ケ置クベシ
縛索ヲ一・五二メートル以内ノ間隔ニ配置スルトキハ其ノ寸法ヲ前項ニ掲グルモノヨリ適當ニ減ズルコトヲ得但シ鎖ヲ用ウルトキハ徑一二・七ミリメートル以上、索ヲ用ウルトキハ之ト同等以上ノ強力ヲ有スル寸法ノモノナルコトヲ要ス
九 縛索ヲ留ムルニ必要ナル裝置ハ縛索ノ強力ニ相當スル強力ヲ有スルモノナルコトヲ要ス
十 船樓甲板ニ設クル支杆ハ其ノ間隔ヲ約三・〇五メートルトシ十分ナル強力ノ橫縛索ヲ以テ之ヲ動カザル様爲スベシ

第二章 槽 船

第一百條 槽船ノ夏期乾舷ハ第一百二條乃至第一百四條ニ規定スル事項ヲ除クノ外第三十五條第一項及第二項ノ規定ニ依リ之ヲ定ム

第一百二條 槽船ノ表定乾舷ヲ求ムルニハ第五十條ニ掲グル表ノ代リニ左表ヲ用ウルモノトス

備考	乾舷 (耗)		乾舷 (耗)	
	L	L	L	L
	1680	126.5	527	56.5
	1732	129.0	560	59.0
	1785	131.5	593	61.5
	1839	134.0	626	64.0
	1894	136.5	660	66.5
	1948	139.0	695	69.0
	2001	141.5	731	71.5
	2053	144.0	767	74.0
	2105	146.5	804	76.5
	2155	149.0	842	79.0
	2204	151.5	881	81.5
	2253	154.0	921	84.0
	2301	156.5	961	86.5
	2348	159.0	1003	89.0
	2394	161.5	1045	91.5
	2440	164.0	1087	94.0
	2484	166.5	1129	96.5
	2528	169.0	1171	99.0
	2572	171.5	1213	101.5
	2613	174.0	1256	104.0
	2653	176.5	1301	106.5
	2693	179.0	1346	109.0
	2732	181.5	1391	111.5
	2771	184.0	1437	114.0
			1484	146.5
			1531	119.0
			1579	121.5
			1627	124.0

備考 Lガ表ニ掲グルモノノ中間ニ在ルトキハ挿間法ニ依リ乾舷ヲ算定ス

第三百三條

槽船ニ在リテハ船樓ニ關スル修正高ノ算定ニ付テハ第六十六條ノ表ニ掲グル船樓係數ノ代リニ總テノ船型ニ對シ左表ニ掲グル船樓係數ヲ用ウルモノトス

備考	船樓ノ有效ト長サノ和	船樓係數
	0	0
	0.070	0.10
	0.140	0.20
	0.210	0.30
	0.310	0.40
	0.410	0.50
	0.520	0.60
	0.630	0.70
	0.753	0.80
	0.877	0.90
	1.000	1.00

第三百四條 舷弧ノ平均高ガ其ノ標準平均高ヨリ大ナル槽船ノ舷弧ニ關スル修正高ノ算定ニ付テハ第七十八條ニ掲グル算式ノ代リニ總テノ船型ニ對シ左ノ算式ヲ用ウルモノトス

$$(S - S_0)(7.5 - 5H) \approx D \times T \times L$$

S₀ハ舷弧ノ標準平均高ニセンチメートル
Sハ舷弧ノ平均高ニセンチメートル
T₁ハ船樓ノ長サノ和トLトノ比

第三百五條 槽船ノ冬期北大西洋乾舷ハ冬期乾舷ニ船ノ長サ一〇メートルニ付八・三三ミリメートルノ割合ノ修正高

ヲ加ヘタルモノトス

第三章 木汽船

第六六條

木汽船ノ夏期乾舷ハ第二編第一章ノ規定ニ依リ平甲板船ニ對スル表定乾舷ヲ必要ニ應ジ第六十七條ノ規定ニ依リ修正シタルモノニ船船ノ構造ノ種類ニ應ジ左表ニ掲グル係數ヲ乗ジタルモノトス

構造ノ種類	係數	
	輕	重
甲板船	2.00	1.40

管海官廳ハ船體ノ材料、構造、固著方、工事若ハ現狀ノ良否又ハ船齡ニ應ジ前項ノ係數ヲ適當ニ増減スルコトヲ得

第六七條

木汽船ノ夏期乾舷ハ前條ノ規定ニ拘ラズ第二編ノ規定ヲ適用シテ算定シタル夏期乾舷ヨリ小ナルコトヲ得ズ但シ第二編ノ規定ヲ適用スルニ當リテハ船樓ニ關スル修正ハ管海官廳ニ於テ船樓ノ構造及其ノ閉鎖裝置ヲ適當ト認メタル場合ニ限リ之ヲ爲スモノトス

第五編 帆船ノ乾舷ニ關スル特別規定
第一章 鋼帆船

船舶滿載吃水線規程

第三百八條 Lノ中央ニ於ケル船底勾配ガ八分ノ一ヨリ大ナル鋼帆船ニ在リテハDハ其ノ下端ガ第六條第一項ニ規定スル點ヨリ上方左ノ算式ニ依リ算定シタル高サニ相當スル箇所ニ在ルモノト看做シ之ヲ測ルコトヲ得

$$\frac{1}{2} \left(R - \frac{1}{8} \right) \times \frac{B}{2}$$

RハLノ中央ニ於ケル船底勾配但シ其ノ勾配ガ二十四分ノ五ヲ超ユルトキハ二十四分ノ五

第三百九條

鋼帆船ノ海水乾舷ハ第三十五條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定ム此ノ場合ニ於テハ表定乾舷ノ決定並ニ船樓及DトLトノ比ニ關スル修正ニ付テハ第三百十條乃至第三百十二條ノ規定ニ依ル

第三百十條

鋼帆船ノ表定乾舷ハ肥瘠係數ガ〇・六二以下ナルトキハLニ應ジ左表ニ依リ求メタル乾舷トシ肥瘠係數ガ〇・六二ヲ超ユルトキハ該乾舷ニ左ノ算式ニ依リ算定シタル係數ヲ乗ジルモノトス

$$Q + 0.62$$

1.24

〇ハ肥瘠係數但シ肥瘠係數ガ〇・七二ヲ超ユルトキハ〇・七二

備考	乾舷 (耗)	L
	228	24.0
	265	26.5
	304	29.0
	345	31.5
	387	34.0
	431	36.5
	475	39.0
	520	41.5
	565	44.0
	612	46.5
	660	49.0
	710	51.5
	760	54.0
	810	56.5
	860	59.0
	910	61.5
	962	64.0
	1014	66.5
	1067	69.0
	1120	71.5
	1174	74.0
	1229	76.5
	1284	79.0
	1341	81.5
	1399	84.0
	1457	86.5
	1515	89.0
	1573	91.5
	1632	94.0
	1692	96.5
	1752	99.0
	1813	101.5

Lガ表ニ掲グルモノノ中間ニ在ルトキハ插間法ニ依リ乾舷ヲ算定ス

第百十一條 鋼帆船ニ在リテハ船樓ニ關スル修正高ハ左ノ算式ニ依リテ算定ス

$e = \frac{76 + 8.336(L - 24.4)}{L}$ ヲ用テ
LハL二四・四メートル未満ノ船舶ニ在リテハ二四・四、L一〇〇・五八メートルヲ超ユル船舶ニ在リテハ一〇〇・五八
eハ船樓係數ニシテ左表ニ依ル

備考	乙	甲	船型
橋樑有ニ上ナル鋼帆船	十分ノ二以上ナル鋼帆船	有效ノ長サガLノ十分ノ二以上ナル鋼帆船	船橋樓有セザル鋼帆船
	(e)數	係數	船樓ノ和トLトノ比
	0	0	0
	0.070	0.070	0.10
	0.147	0.130	0.20
	0.220	0.170	0.30
	0.320	0.235	0.40
	0.420	0.300	0.50
	0.560	0.475	0.60
	0.700	0.700	0.70
	0.800	0.800	0.80
	0.900	0.900	0.90
	1.000	1.000	1.00

一 船樓ノ有效ノ長サノ和トLトノ比ガ表ニ掲グルモノノ中間ニ在ルトキハ插間法ニ依リ船樓係數ニシテ算定ス

二 數ヲ算定ス

有スル鋼帆船ニ在リテハ甲欄及乙欄ニ掲グル係數ノ間ニ插間法ニ依リ船樓係數ヲ算定ス

第百十二條 D₀ガLノ十二分ノ一ヲ超ユル鋼帆船ニ在リテハ在ノ算式ニ依リ算定シタル修正高ヲ表定乾舷ニ加フベシ

$1.093 \times (D_0 - \frac{L}{12}) (76.20 \div L)$ ヲ用テ

第二章 木帆船

第百十三條 木帆船ノ海水乾舷ハ第百六條ノ規定ニ依リ算定シタル夏季乾舷ニ等シキモノトス

第百十四條 木帆船ノ海水乾舷ハ前條ノ規定ニ拘ラズ當該船舶ノ鋼帆船ト看做シ本編第一章ノ規定ヲ適用シテ算定シタル海水乾舷ヨリ小ナルコトヲ得ズ但シ本編第一章ノ規定ヲ適用スルニ當リテハ船樓ニ關スル修正高ハ管海官廳ニ於テ船樓ノ構造及其ノ閉鎖裝置ヲ適當ト認メタル場合ニ依リテ算定ス

第六編 船舶ノ構造及設備

第一章 通則

第百十五條 第三十五條第一項又ハ第百九條ノ規定ニ依リ乾舷ノ指定ヲ受クル鋼船、木材滿載吃水線ノ指定ヲ受クル汽船及槽船ノ構造及設備ニ付テハ本編ノ規定ニ依ル強力ニ依ル吃水、船舶所有者ノ豫定シタル吃水ノ限度等ニ依リ第三十五條第一項又ハ第百九條ノ規定ニ依リ乾舷ヨリ大ナル乾舷ノ指定ヲ受クル鋼船ニ付テハ管海官廳ハ乾舷ノ増加ノ程度ニ應ジ本編第二章乃至第五章ノ規定ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第百十六條 木船ニ付テハ其ノ性質上適當ニシテ且實際上可能ナル範圍内ニ於テ前條ノ規定ヲ準用ス

第百十七條 本編ノ規定ニ該當セザル構造又ハ設備ハ管海官廳ニ於テ本編ノ規定セルモノト同一ノ效力ヲ有スト認ムルモノニ限リ之ヲ本編ノ規定ニ適合スルモノト看做ス

第二章 乾舷甲板又ハ船樓甲板ニ於ケル

第百十八條 乾舷甲板又ハ船樓甲板ニ於ケル船口ノ縁材ノ高サハ船口ノ種類ニ應ジ左表ニ掲グルモノ以上ト爲スベシ

第一種	船口ノ種類	船口ヲ設ケタル甲板ノ種類及位置	第一種
暴露セル船樓	暴露セル乾舷甲板	船首ヨリノ四分ノ一ニ相當スル箇所迄ノ場所	610

船舶滿載吃水線規程

第三種	第二種	甲板
閉鎖裝置ノ效力ガ第一級閉鎖裝置ノ效力ニ及バザル船樓内ノ乾舷甲板	閉鎖裝置ノ效力ガ第二級閉鎖裝置ノ效力ニ及バザル船樓内	船首ヨリノ四分ノ一ニ相當スル箇所ヨリ後方ノ場所
閉鎖裝置ノ效力ガ第二級閉鎖裝置ノ效力以上ナル船樓内	閉鎖裝置ノ效力ガ第二級閉鎖裝置ノ效力ニ及バザル船樓内	
229	457	

第百十九條 船口ノ縁材ハ鋼材ヲ以テ堅牢ニ構造スルコトヲ要ス

第一種船口ノ縁材ニ在リテハ其ノ上縁ヨリ下方二五四ミリメートルニ相當スル箇所ヨリ低カラザル位置ニ横防撓材ヲ取附ケ且船口ノ長サ又ハ幅ガ三・〇五メートルヲ超ユルトキハ該防撓材ヨリ甲板ニ達スル肘板又ハ支柱ヲ三・〇五メートル以内ノ間隔ニ設ケ縁材ヲ補強スベシ但シ船樓等ニ依リ保護セラルル端縁材ニ付テハ其ノ補強方法ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第百二十條 暴露セル船口ニハ有效ナル蓋板ヲ備ヘ支面ノ幅六三ミリメートル以上ノ支材ヲ以テ之ヲ支フル裝置ト爲スベシ船口蓋板ヲ木製ト爲ス場合ニ於テハ其ノ仕上ノ厚サハ支點ノ間一・五二メートル以内ナルトキ少クトモ六〇ミリメートルト爲スベシ

第百二十一條 木製蓋板ヲ備フル暴露船口ノ船口梁及縱材ノ心距及寸法ハ第一種船口ニ在リテハ左ニ掲グル甲表ニ依リ、第二種船口ニ在リテハ左ニ掲グル乙表ニ依ルベシ

表 乙

梁		口		船		山附上又球 形ス下ハ板 材ル兩平ノ 二部板上 重ニノ部
キトルザケ設ヲ材縦		キ ト ル ク 設 ヲ 材 縦		ノ 梁 口 船		
(米) 距 心		ノ 梁 口 船				
	1.22	1.52	1.83	2.44	3.05	
3.05	球 サ深 サ厚 203×10	サ深 サ厚 230×11	サ深 サ厚 241×11.5	サ深 サ厚 267×12.5	サ深 サ厚 292×13	球板 75×75×10
3.66		230×11	254×12.5	280×12.5	280× 7.5	330× 8.5
4.27	板	254×12.5	292×12.5	280× 7.5	330× 8	381× 8.5
4.88		280× 7.5	280× 7.5	305× 8	381× 8.5	432× 9
5.49	平	280× 7.5	305× 8	386× 8.5	432× 9	483× 9.5
6.10		305× 8	330× 8.5	406× 9	483× 9.5	533× 9.5
6.71		318× 8	356× 8.5	432× 9	508× 9.5	584×10
7.32		330× 8.5	368× 8.5	457× 9	533× 9.5	635×10
7.93		344× 8.5	381× 8.5	48 × 9.5	559× 9.5	660×10.5
8.54	板	356× 8.5	406× 9	508× 9.5	584×10	680×10.5
9.14		381× 8.5	432× 9	533× 9.5	610×10	711×10.5
材 縦 中						
長縦 サ材ノ (米)	材 縦 板 球			材 縦 製 木		
	(米) 距 心	ノ 材 縦	形二附上球 材重ス部板 山ルニノ	(米) 距 心	ノ 材 縦	
	0.91	1.22	1.52	0.91	1.22	1.52
1.83	サ深 サ厚 130× 8.5	サ深 サ厚 140× 8.5	サ深 サ厚 150× 9	65×65× 9	サ深 幅 120×18	サ深 幅 140×18
2.44	150× 9.5	180×10	190×10.5	65×65× 9.5	150×180	165×180
3.05	180×11	200×11.5	230×12.5	65×65×10	180×180	190×180
3.05	200×12.5	240×12.5	280×12.5	65×65×10	200×180	215×200
3.05	230×12.5	280×12.5	330×12.5	65×65×10	230×180	250×200
材 縦 側 兩						
長縦 サ材ノ (米)	材 縦 形 山 球			材 縦 製 木		
	(米) 距 心	ノ 材 縦	山ス部材球 形ルニノ山 材單附上形	(米) 距 心	ノ 材 縦	
	0.91	1.22	1.52	0.91	1.22	1.52
1.83	サ深 サ厚 130×75× 8.5	サ深 サ厚 140×75× 8.5	サ深 サ厚 150×75× 9	65×65× 9	サ深 幅 130×130	サ深 幅 140×130
2.44	150×75× 9.5	180×75×10	190×90×10.5	65×65× 9.5	150×130	165×150
3.05	180×75×11	200×60×11.5	230×90×12.5	65×65×10	180×150	190×170

表 甲

梁		口		船		山附上又球 形ス下ハ板 材ル兩平ノ 二部板上 重ニノ部
キトルザケ設ヲ材縦		キ ト ル ク 設 ヲ 材 縦		ノ 梁 口 船		
(米) 距 心		ノ 梁 口 船				
	1.22	1.52	1.83	2.44	3.05	
3.05	球 サ深 サ厚 230×11.5	サ深 サ厚 254×12.5	サ深 サ厚 280× 7.5	サ深 サ厚 305× 8	サ深 サ厚 356× 8.5	球板 75×75×10
3.66		280×12.5	305×12.5	305× 8	356× 8.5	432× 9
4.27	板	305×12.5	305× 8	356× 8.5	432× 9	508× 9.5
4.88		305× 8	356× 8.5	406× 9	483× 9.5	559× 9.5
5.49	平	356× 8.5	406× 9	457× 9	533× 9.5	635×10
6.10		381× 8.5	457× 9	508× 9.5	610×10	711×10.5
6.71		406× 9	483× 9	559× 9.5	660×10.5	762×11
7.32		432× 9	508× 9.5	584×10	711×10.5	813×11
7.93		457× 9	533× 9.5	610×10	736×10.5	864×11.5
8.54	板	482× 9.5	559× 9.5	635×10	787×11	915×12
9.14		508× 9.5	584×10	66 ×10.5	813×11	965×12
材 縦 中						
長縦 サ材ノ (米)	材 縦 板 球			材 縦 材 木		
	(米) 距 心	ノ 材 縦	形二附上球 材重ス部板 山ルニノ	(米) 距 心	ノ 材 縦	
	0.91	1.22	1.52	0.91	1.22	1.52
1.83	サ深 サ厚 150× 9.0	サ深 サ厚 165× 9.5	サ深 サ厚 180× 9.5	65×65× 9	サ深 幅 140×180	サ深 幅 150×180
2.44	180×10.5	200×11	230×11	65×65× 9.5	165×180	190×180
3.05	200×12.5	240×12.5	280×12.5	65×65×10	200×180	215×200
3.05	230×12.5	280×12.5	330×12.5	65×65×10	230×180	250×200
材 縦 側 兩						
長縦 サ材ノ (米)	材 縦 形 山 球			材 縦 製 木		
	(米) 距 心	ノ 材 縦	山ス部材球 形ルニノ山 材單附上形	(米) 距 心	ノ 材 縦	
	0.91	1.22	1.52	0.91	1.22	1.52
1.83	サ深 サ厚 150×75× 9.5	サ深 サ厚 165×90× 9.5	サ深 サ厚 180×90× 9	65×65× 9	サ深 幅 140×140	サ深 幅 150×150
2.44	180×90×10.5	200×75×11	230×90×11	65×65× 9.5	165×165	190×180
3.05	200×90×12.5	240×90×12.5	280×90×12.5	65×65×10	200×180	215×200

備考

一 船口ノ幅、船口梁ノ心距又ハ縱材ノ長サ若ハ心距
ガ表ニ掲グルモノノ中間ニ在ルトキハ船口梁又ハ縱
材ノ寸法ハ挿問法ニ依リ之ヲ定ム

二 船口梁ノ深サハ其ノ長サノ中央ニ於テ上部山形材
ヨリ梁ノ下縁迄測リタルモノ、縱材ノ深サハ船口蓋
板ノ下面ヨリ縱材ノ下縁迄測リタルモノトス

Lガ三〇・五メートル以下ノ船舶ニ在リテハ平板及山形
材ヲ以テ構造シタル船口梁ノ深サハ船口ノ種類ニ應ジ前
項ノ甲表又ハ乙表ニ掲グルモノノ十分ノ六、球板及山形
材ヲ以テ構造シタル船口梁並ニ球山形縱材ノ深サハ同表
ニ掲グルモノノ十分ノ八ト爲シ平板、球板及球山形材ノ
厚サハ其ノ深サニ對シ同表ニ掲グル厚サニ等シクシ又木
製縱材ノ深サ及幅ハ同表ニ掲グルモノノ十分ノ八ト爲ス
コトヲ得但シ平板、球板及球山形材ノ厚サハ七・五ミリメ
ートルヨリ又中央木製縱材ノ幅ハ一六五ミリメートルヨ
リ小ナルコトヲ得ズ

Lガ三〇・五メートルヲ超エ六一メートル未滿ノ船舶ニ
在リテハ船口梁及縱材ノ寸法ハ船口ノ種類ニ應ジ第一項
ニ依ルモノト前項ニ依ルモノトノ間ニ挿問法ニ依リ之ヲ

船口ノ箇所ニ於ケル甲板ノ幅ノ百分ノ六十ヲ超ユル幅ノ
第一種船口ニ在リテハ特別ノ締附裝置ヲ備フベシ

第二百二十七條 閉鎖裝置ノ效力ガ第一級閉鎖裝置ノ效力ニ
及バザル船樓内ノ乾舷甲板ニ於ケル船口ニハ第二百二十條
乃至第二百二十五條ニ規定スル閉鎖裝置ヲ備フベシ此ノ場
合ニ於テハ船口梁及縱材ノ寸法及心距ニ付テハ第二種船
口ニ對シテハ暴露セル第一種船口、第三種船口ニ對シテ
ハ暴露セル第二種船口ニ關スル規定ニ依ル

第二百二十八條 本章前各條ノ規定ハ載炭口ニ之ヲ準用ス
第二百二十九條 船樓甲板ニハ平載炭孔ヲ設クルコトヲ得又
特殊ノ航路ニ使用スル小形船ニ在リテハ管海官廳ニ於テ
差支ナシト認ムルトキハ乾舷甲板ニモ之ヲ設クルコトヲ
得

前項ノ平載炭孔ノ枠及蓋ハ鐵製又ハ鋼製ニシテ堅牢ナル
構造ノモノナルコトヲ要シ又蓋ハ螺込止ノモノトシ螺番
ニ依リ枠ニ取附クルカ又ハ鎖ヲ以テ枠ニ連結シ置クベシ
第三百十條 乾舷甲板ノ暴露部又ハ蔽圍シタル船樓ノ甲板
ノ暴露部ニ於ケル昇降口室ハ堅牢ナル構造ノモノナルコ
トヲ要シ船首ヨリLノ四分ノ一以内ノ箇所ニ在ルトキハ
之ヲ鋼製トシ鉸釘ヲ以テ鋼甲板ニ固著スルコトヲ要ス

定ムルコトヲ得

第二百二十二條 船口梁ヲ構造スル球板ノ上部又ハ平板ノ上
下兩部ニ附スル山形材ノ兩邊ノ幅相等シカラザルトキハ
廣邊ヲ水平ニ置クベシ又上部ノ山形材ハ梁ノ全長ニ連續
シテ通達セシメ縱材ヲ支フル爲之ヲ屈折セシムルコトヲ
得ズ

木製縱材ハ其ノ支面ヲ鋼板ニテ包ムベシ
第二百二十三條 船口梁及縱材ヲ支フル承金又ハ壺金ハ厚サ
一二・五ミリメートル以上支面ノ幅七五ミリメートル以
上ニシテ鋼製ノモノナルコトヲ要ス

第二百二十四條 暴露セル船口ノ緣材ニハ其ノ外面ニ於テ六
一〇ミリメートル以内ノ心距ニ幅六三ミリメートル以上
ノ堅牢ナル帶金承ヲ取附ケ且端末ノモノハ船口ノ各隅ヨ
リ一五〇ミリメートル以内ノ箇所ニ之ヲ置クベシ
帶金及楔ハ船口ヲ閉鎖スル爲有效ノモノニシテ良好ナル
状態ニ在ルコトヲ要ス

第二百二十五條 暴露セル各船口ニハ船口覆布試驗規程ニ依
ル甲種覆布二枚以上ヲ備フベシ

第二百二十六條 暴露セル船口ニハ蓋板ヲ締附クル爲環附螺
釘ヲ備フルカ又ハ其ノ他ノ裝置ヲ爲スベシ

前項ノ昇降口室ニ於ケル戸口ノ緣材ノ高サハ昇降口ノ位
置ニ應ジ第一百十八條ニ定ムル船口緣材ノ高サ以上ト爲シ
戸ハ堅牢ニシナ其ノ兩側ヨリ閉鎖定著シ得ルモノト爲ス
コトヲ要ス

第三章 乾舷甲板又ハ船樓甲板ニ於ケル
機關室口、通風筒及空氣管

第三百一十一條 暴露セル乾舷甲板又ハ船樓甲板ニ於ケル機
關室口ハ之ヲ適當ニ構造シ且堅牢ナル鋼製圍壁ヲ以テ蔽
圍スルコトヲ要ス

乾舷甲板又ハ低船尾樓甲板上ノ機關室圍壁ニシテ他ノ建
設物ニ依リ保護セラレザルモノハ特ニ其ノ強力ヲ十分ナ
ラシムベシ

焚火室口、煙筒及通風筒ノ緣材ハ適當ニシテ且實際上可
能ナル限り暴露甲板上高キ位置ニ之ヲ設ケ又焚火室口ニ
ハ常設的ニ取附ケタル堅牢ナル鋼製蓋ヲ備フベシ

第三百十二條 閉鎖裝置ノ效力ガ第一級閉鎖裝置ノ效力ニ
及バザル船樓内ノ乾舷甲板ニ於ケル機關室口ハ之ヲ適當
ニ構造シ且鋼製圍壁ヲ以テ蔽圍スルコトヲ要ス

第三百十三條 前二條ノ機關室口圍壁ニ設クル戸口ノ緣材
ノ高サハ左表ニ掲グルモノ以上ナルコトヲ要ス

機關室口圍壁ヲ設ケタル甲板ノ種類及位置	緣材ノ 甲板上ノ 高サ(耗)
暴露セル乾舷甲板	610
暴露セル低船尾樓甲板	457
低船尾樓甲板以外ノ暴露セル船樓甲板	380
閉鎖裝置ノ効力ガ第一級閉鎖裝置ノ効力ニ及バザル船樓内ノ乾舷甲板	229

前項ノ戸口ニ設ケル戸ハ堅牢ナル構造トシ常設的ニ圍壁ニ取附ケタルモノナルコトヲ要シ暴露セル場所ニ設ケラルルトキハ之ヲ兩側ヨリ閉鎖定著シ得ルモノナルコトヲ要ス

第三百三十四條 暴露セル乾舷甲板又ハ船樓甲板ニ於ケル通風筒ニシテ乾舷甲板下ノ場所又ハ閉鎖裝置ノ効力ガ第一級閉鎖裝置ノ効力以上ナル船樓内ノ場所ニ通ズルモノニハ鋼製ノ堅牢ナル緣材ヲ備ヘ釘徑ノ四倍ノ心距ニ配置セラレタル鉸釘ニ依リ又ハ同一効力ノ方法ニ依リ之ヲ甲板

載炭門等ニハ水密ナル戸又ハ蓋ヲ備フベシ此等ノ戸又ハ蓋ハ之ヲ定著スル裝置ヲ有シ且十分ナル強力ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

第三百三十八條 乾舷甲板下ノ場所ヨリ船側ヲ貫通スル各排出管ニハ自働不還弁二箇ヲ備ヘ中一箇ハ何時ニテモ近寄り得ル場所ニ之ヲ設置スベシ但シ弁ガ容易ニ近寄り得ル場所ニ在リテ乾舷甲板上ノ場所ヨリ之ヲ閉ヂ得ル裝置ヲ有シ且該場所ニ弁ノ開閉ヲ示ス裝置ヲ備フルトキハ自働不還弁一箇ノミナルモ妨ナシ

船側ニ取附クル弁ハ鑄鐵製ナルコトヲ得ズ
第三百三十九條 閉鎖裝置ノ効力ガ第一級閉鎖裝置ノ効力ニ及バザル船樓内ノ乾舷甲板ニ排水管ヲ設ケタルトキハ乾舷甲板下ノ場所ニ不意ニ浸水スルコトヲ防グ爲適當ナル裝置ヲ爲スベシ

第四百十條 海水ニ於ケル最高滿載吃水線ヨリ一五二ミリメートル未滿ノ箇所ニ下緣ヲ有スル舷窓ハ舷窓試驗規程ニ適合スル甲種舷窓又ハ之ト同等以上ノモノナルコトヲ要シ又海水ニ於ケル最高滿載吃水線ヨリ一・二二メートル未滿ノ箇所ニ下面ノ最低點ヲ有スル甲板ノ下方ニ設ケル舷窓ハ同規程ニ適合スル乙種舷窓又ハ之ト同等以上ノ

船舶滿載吃水線規程

ニ固著シ緣材ノ底部ニ當ル鋼甲板ハ甲板梁ノ間ニ於テ十分ニ之ヲ防撓スルコトヲ要ス

前項ノ通風筒ノ口ニハ有效ナル閉鎖裝置ヲ備フベシ
第三百三十五條 前條ノ通風筒ノ緣材ノ高サハ通風筒ノ閉鎖裝置ガ一時的ノモノナルトキハ暴露セル乾舷甲板又ハ船首ヨリ一ノ四分ノ一ノ箇所迄ノ船樓甲板ニ在リテハ九一五ミリメートル以上、其ノ他ノ暴露船樓甲板ニ在リテハ七六〇ミリメートル以上ナルコトヲ要ス
通風筒ノ緣材ハ其ノ高サガ九一五ミリメートルヲ超ユルトキハ特別ニ之ヲ支持シ且固著セシムベシ

第三百三十六條 脚荷水槽其ノ他ノ槽ニ通ズル空氣管ガ乾舷甲板又ハ船樓甲板ノ上方迄達スル場合ニ於テハ管ノ暴露部ハ堅牢ナルモノナルコトヲ要シ且管口ヲ閉鎖スル爲十分ナル設備ヲ爲スコトヲ要ス又「ウエル」ニ於テハ甲板ヨリ管口迄ノ高サハ乾舷甲板上ニ在リテハ九一五ミリメートル以上、低船尾樓甲板上ニ在リテハ七六〇ミリメートル以上、其ノ他ノ船樓甲板上ニ在リテハ四四七五七ミリメートル以上ト爲スベシ

第四章 乾舷甲板下ノ船側ニ於ケル開口
第三百三十七條 乾舷甲板下ノ船側ニ於ケル舷門、載貨門、

モノナルコトヲ要ス

前項ニ掲グルモノノ外乾舷甲板下ノ場所又ハ閉鎖裝置ノ効力ガ第二級閉鎖裝置ノ効力ト同等以上ナル船樓内ノ場所ニ設ケル舷窓ニハ蝶番ニ依リ取附ケタル内蓋ヲ備ヘ完全ニ水密トナル構造ト爲スベシ但シ雜居三等旅客ニ非ザル旅客又ハ船員ニ專用スル船樓内ノ容易ニ近寄り得ル場所ニ設ケル舷窓ノ内蓋ハ取外シ得ルモノト爲スルコトヲ得

前項但書ノ場合ニ於テハ内蓋ヲ常ニ舷窓ノ近クニ備置ク爲ノ裝置ヲ爲スベシ
第二項ノ舷窓ノ枠ハ黃銅、鑄鋼其ノ他適當ナル金屬ヲ以テ堅牢ニ構造シタルモノナルコトヲ要シ之ヲ鑄鐵製ト爲スベカラズ又蝶番ノ軸針及締附螺釘ハ黃銅製ナルコトヲ要ス

第五章 船樓端ノ隔壁、船員ノ保護裝置及放水口

第四百十一條 標準ノ高サヲ有スル船首樓、船橋樓又ハ船尾樓ノ暴露セル端ニ於ケル隔壁ハ其ノ厚サヲ左表ニ掲グルモノ以上ト爲シ同表ニ掲グル寸法ノ防撓材ヲ七六センチメートル以内ノ心距ニ堅ニ取附ケ之ヲ防撓シタルモノナルコトヲ要ス

備考 Lガ表ニ掲グルモノノ中間ニ在ルトキハ隔壁板ノ厚サ及防撓材ノ寸法ハ挿間法ニ依リ之ヲ定ム	船首樓及船橋ノ後端		部分的ニ保護セラルル船尾ノ壁又ハ舷柱ノ間ノ壁		端壁及ノ前	
	サ	厚	サ	厚	サ	厚
	(耗) 5.0	48.75 下以	(耗) 6.0	48.75 下以	(耗) 7.5	61.00 下以
	7.5	122.00 上以	9.5	122.00 上以	11.0	115.80 上以
防撓材ノ種類及寸法						
	材形山	L	材形山	L	材形山球	L
	(耗) 65×65×6.5	45.70 滿未	(耗) 75×65×7.5	45.70 滿未	(耗) 140×75×7.5	48.75 滿未
	75×65×7	45.70	90×65×8	45.70	150×75×8	48.75
	90×75×7.5	76.20	100×75×8.5	61.00	165×75×8.5	61.00
	100×75×8	106.70	115×75×9	76.20	180×75×9	73.20
			130×75×9.5	91.45	190×75×9.5	85.35
			140×75×10.5	106.70	205×75×10	97.55
			150×75×11	121.90	215×75×10.5	109.75
			165×90×11.5	137.15	230×75×11	121.90
			180×90×12	152.40	240×90×11.5	134.10
			180×90×12.5	167.65	255×90×12	146.30
					265×90×12.5	158.50
					280×90×13	170.70

第四百十二條

前條ノ規定ニ依リ船尾樓及船橋樓ノ前端隔壁ニ設ケタル防撓材ノ上下兩端ハ短山形材ヲ以テ之ヲ甲板ニ固著セシムルコトヲ要シ又船首樓及船橋樓ノ後端隔壁ニ於ケル防撓材ハ隔壁ノ線山形材間ノ全距離ニ互リ之ヲ取附クルコトヲ要ス

第四百十三條

平甲板船ノ乾舷甲板ニ設ケタル居住用ノ甲板室ノ周壁ハ前二條ニ規定スルモノト同等ノ強力ヲ有スル構造ト爲スベシ

第四百十四條

乾舷甲板及船樓甲板ノ暴露セル部分ニハ適當ノ保護欄干又ハ舷牆ヲ設クベシ

第四百十五條

船員室區域ニ出入スル船員ヲ保護スル爲ニ適當ナル通路、保護索又ハ其他ノ設備ヲ爲スベシ

第四百十六條

乾舷甲板上又ハ船樓甲板上ノ暴露部ニ於ケル舷牆ガ「ウエル」ヲ形成スルトキハ之ニ十分ナル放水口ヲ設クベシ

前項ノ放水口ハ其ノ全面積ヲ乾舷甲板上及低船尾樓甲板上ノ場所ニ在リテハ左表ニ掲グルモノ以上、其ノ他ノ船樓甲板上ノ場所ニ在リテハ左表ニ掲グルモノノ二分ノ一以上ト爲シ且全面積ノ三分ノ二ハ船ノ中央寄ニ於ケル樓壇半部ニ之ヲ設クベシ

船舶滿載吃水線規程

備考	各舷ニ於ケル舷牆ノ長サ(米)	各舷ニ設クベキ放水口ノ全面積(平方米)	舷牆ノ長サ一米ニ付 0.061 平方米ノ割合
	4	0.726	
	6	0.787	
	8	0.846	
	10	0.909	
	12	0.970	
	14	1.031	
	16	1.092	
	18	1.153	
	20	1.220	
	20ヲ超ユルトキ		

放水口ノ面積ハ舷弧ノ高サガ標準舷弧ノ高サヨリ小ナル船舶ニ在リテハ前項ニ規定スルモノヨリ適當ニ之ヲ増スコトヲ要シ又「ウエル」ノ長サガLノ十分ノ七ヲ超ユルトキハ適當ニ之ヲ減ズルコトヲ得

第六十一條

第一號ニ該當スル船樓内ニ於テハ常設閉鎖裝置ヲ備ヘザル甲板口ノ位置ニ適當ノ放水口ヲ設クベシ

第四百十七條

放水口ハ甲板上成ルベク低キ位置ニ之ヲ設クルコトヲ要シ其ノ下線ハ舷線山形材ノ上線ヨリ高カラザル様爲スベシ
放水口ニハ約二三センチメートルノ間隔ニ柵又ハ横樑ヲ取附クベシ又戸ヲ取附ケタルトキハ樑塞ノ虞ナキ構造ト爲シ且蝶番ハ黃銅製軸針ヲ有スルモノト爲スベシ

第六章 木材滿載吃水線ノ指定ヲ受クル汽船

第四百四十八條 本章ノ規定ハ木材滿載吃水線ノ指定ヲ受クル汽船ニ之ヲ適用ス

第四百四十九條 船體ノ構造ハ甲板積木材貨物ノ重量ニ對シ十分ナル強力ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

第四百五十條 船舶ハ標準ノ高さ以上ノ高さ及Lノ百分ノ七以上ノ長さノ船首樓ヲ有シ且船尾樓又ハ堅牢ナル鋼製ノ「ブード」若ハ甲板室ヲ後部ニ備フル低船尾樓ヲ有スルコトヲ要ス

第四百五十一條 乾舷甲板上ノ機關室圍壁ハ其ノ側ニ木材貨物ヲ積載スルニ十分ナル強力及高さノモノナルカ又ハ標準ノ高さ以上ノ高さノ船樓ヲ以テ保護セララルモノナルコトヲ要ス

第四百五十二條 中央部Lノ二分ノ一間ニ二重底ヲ備フル船舶ニ在リテハ該部分ノ二重底槽ハ適當ナル縱區畫ヲ有スルコトヲ要ス

第四百五十三條 木材貨物ヲ積載スル甲板ニハ高さ九九センチメートル以上ニシテ上縁ニ於テ特ニ防撓セラレ且十分ナル放水口ヲ有スル舷牆ヲ備フルカ又ハ之ト同一ノ高さニシテ特ニ堅牢ナル構造ノ欄干ヲ備フルコトヲ要ス

第四百五十九條 船尾樓ト船橋樓トノ間ニハ甲板下ノ通路ヲ利用シ得ル場合又ハ同一效力ノ通路設備ヲ備フル場合ヲ除クノ外船樓甲板ト同一ノ高さヲ有スル堅牢ナル常設通路ヲ備フルコトヲ要ス船員室ヲ船首ニ設ケタル槽船ニ在リテハ船橋樓ト船首樓トノ間ニ付亦同ジ

前項ノ通路ト船員室區域、機關室其ノ他船舶ノ操作ニ必要ナル場所トノ間ニハ何時ニテモ利用シ得ル安全ナル通路ヲ設クベシ但シ乾舷甲板ヨリ直接出入スル「ボンブ」室ニシテ第五十三條ノ規定ニ適合スル閉鎖裝置ヲ備フルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第四百六十條 乾舷甲板及膨脹「トランク」甲板上ノ艙口ニハ有效ナル鋼製蓋ヲ以テ水密ニ閉鎖スル裝置ヲ備フベシ

第四百六十一條 乾舷甲板ニ設クル通風筒ハ十分ナル強力ヲ有スルモノト爲スカ又ハ船樓若ハ同一效力ノ設備ニ依リ之ヲ保護スベシ

第四百六十二條 甲板ノ暴露部ニ於テハ該部分ノ長さノ二分

船舶滿載吃水線規程

前項ノ舷牆ニハ梁ノ箇所ニ於テ甲板ニ固著シタル堅牢ナル支柱ヲ取附クベシ

第四百五十四條 船舶ニハ有效ナル補助操舵裝置ヲ備フルコトヲ要ス

第四百五十五條 甲板積木材貨物ノ兩側ニ跨ル縛索ヲ留ムル眼附板ハ三・〇五メートル以内ノ間隔ニテ且船樓端ノ隔壁ヨリ最初ノ眼附板迄ノ距離ガ一・九八メートルヲ超エザル様配置シ鉸釘ヲ以テ之ヲ舷側厚板ニ固著セシムベシ但シ追加ノ眼附板ハ之ヲ梁上側板ニ取附クルモ妨ナシ縛索用眼附板ハ縛索ノ強力ニ相當スル強力ヲ有スルモノト爲スベシ

第七章 槽船

第四百五十六條 本章ノ規定ハ槽船ニ之ヲ適用ス

第四百五十七條 槽船ハ標準ノ高さ以上ノ高さ及Lノ百分ノ七以上ノ長さノ船首鋼ヲ有スルコトヲ要ス

第四百五十八條 乾舷甲板上ノ機關室圍壁ハ標準ノ高さ以上ノ高さノ蔽圍シタル船橋樓若ハ船尾樓又ハ之ト同一ノ高さ及同等ノ強力ヲ有スル甲板室ニ依リ之ヲ保護スルコトヲ要シ又該圍壁ノ開口ニハ鋼製ノ戸ヲ備フルコトヲ要ス前項ノ船樓又ハ甲板室ハ其ノ端ニ於テ第四百四十一條及第

ノ一以上ノ間ヲ開放欄干ト爲スカ又ハ該部分ニ設クル舷牆ニハ特ニ有效ナル放水裝置ヲ備フベシ

第四百六十三條 舷側厚板ノ上縁ハ實際ニ差支ナキ限り低キコトヲ要シ成ルベク舷緣山形材ノ上縁ヨリ高カラシメザルコトヲ要ス

附則

第四百六十四條 本令ハ昭和九年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

第四百六十五條 昭和七年六月三十日以前ニ龍骨ヲ据附ケタル船舶ノ滿載吃水線ノ指定ニ付テハ左ノ各號ニ依ル
一 開口ノ保護、保護欄干、放水口及船員室區域ヘノ通路ニ關スル構造及設備ニ付第六編ノ規定ニ適合セザル船舶ト雖モ實質上該規定ニ略適合シ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムル場合ニ於テハ之ヲ同章ノ規定ニ適合スルモノト看做ス

二 第四百五十條ニ規定スル船樓ヲ有セザル汽船ト雖モ實質上同條ニ規定スル船樓ト略同一ノ效力アル船樓ヲ有シ且第六編第六章ニ規定スル他ノ條件ヲ具備スルトキハ木材滿載吃水線ノ指定ヲ受ケ之ヲ標示スルコトヲ得

此ノ場合ニ於テハ管海官廳ハ當該船舶ガ第五百十條ノ規定ニ適合セザル程度ヲ考慮シ適當ニ其ノ乾舷ヲ増加ス

三 第五百十七條、第五百十八條及第六十二條ノ規定ニ適合セザル槽船ト雖モ實質上同條ノ規定ニ依ル構造及設備ト略同一ノ構造及設備ヲ有シ且第六編第七章ニ規定スル他ノ條件ヲ具備スルトキハ管海官廳ハ第四編第二章ノ規定ニ依リ該船舶ノ乾舷ヲ算定スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ管海官廳ハ當該船舶ガ第五百十七條第五百十八條及第六十二條ノ規定ニ適合セザル程度ヲ考慮シ適當ニ其ノ乾舷ヲ増加ス

第六十六條 船舶滿載吃水線法ニ依リ船舶ニ標示シタル滿載吃水線ノ位置ハ之ヲ本令ニ依リ定メタルモノト看做ス但シ同法ニ依リ汽船ニ標示シタル淡水滿載吃水線ノ位置ハ本令ニ依ル夏期淡水滿載吃水線ノ位置トス

船舶區畫規程

(昭和九年二月 遞信省令第八號)

第一章 總則

- 第二章 浸水率
- 第三章 可浸長
- 第四章 區畫室ノ長サ
- 第五章 區畫ニ關スル特別條件
- 第六章 區畫滿載吃水線
- 第七章 水密隔壁ニ於ケル開口
- 第八章 限界線下ノ船側ニ於ケル開口
- 第九章 二重底
- 第十章 水密隔壁等ノ構造最初ノ試驗
- 第十一章 耐火隔壁、水密區畫室ヨリノ出口
- 第十二章 「ポンプ」排水裝置
- 第十三章 特殊ノ航路又ハ特殊旅客ノ運送ニ使用スル船舶ニ對スル特別規定

附則 船舶區畫規程

第一章 總則

- 第一條 本令ニ於テ區畫滿載吃水線トハ第三章乃至第五章ノ規定ニ依リ船舶ノ區畫ヲ決定スルニ用ウル吃水線ヲ謂ヒ最高區畫滿載吃水線トハ區畫滿載吃水線中最大吃水ニ對スルモノヲ謂フ
- 第二條 本令ニ於テ船ノ長サトハ最高區畫滿載吃水線ノ兩

端ニ於ケル垂線間ノ距離ヲ謂フ但シ首尾ニ於テ特殊ノ形狀ヲ有スル船舶ニ付テハ遞信大臣ノ適當ト認ムル所ニ依ル

船ノ長サハLヲ以テ之ヲ示シ其ノ單位ハメートルトス

第三條 本令ニ於テ船ノ幅トハ最高區畫滿載吃水線以下ニ於テ肋骨ノ外面ヨリ外面迄ノ最大幅ヲ謂フ

第四條 本令ニ於テ隔壁甲板トハ橫置水密隔壁ノ達スル最上層ノ甲板ヲ謂フ

第五條 本令ニ於テ限界線トハ隔壁甲板ノ船側ニ於ケル上面ト船側外板トノ交線ニ平行ニ其ノ下方七六ミリメートルノ位置ニ引キタル線ヲ謂フ

前項ノ上面ハ船側ニ於ケル隔壁甲板ノ厚サ一樣ナラザル船舶ニ在リテハ其ノ最小ノ厚サニ依リ又特ニ申請アリタル場合ニ於テハ隔壁甲板ノ全長ニ付算定シタル平均ノ厚サニ依リ之ヲ定ム但シ平均ノ厚サノ算定ニ付テハ實際ノ厚サガ最小ノ厚サニ五〇ミリメートルヲ加ヘタルモノヨリ大ナルトキハ實際ノ厚サハ之ヲ最小ノ厚サニ五〇ミリメートルヲ加ヘタルモノト看做ス

第六條 本令ニ於テ吃水トハLノ中央ニ於テ龍骨ノ上面ヨリ區畫滿載吃水線迄測リタル垂直距離ヲ謂フ

船舶區畫規程

第七條 本令ニ於テ或場所ノ浸水率トハ該場所中水ニ依リ占メラレ得ル容積ト該場所ノ全容積トノ百分率ヲ謂フ限界線ノ上下ニ互ル場所ノ浸水率ハ限界線以下ノ容積ニ付之ヲ定ムルモノトス

第八條 本令ニ於テ機關室區域トハ主機關、補機關及常設石炭庫ニ専用スル場所ヲ限ル橫置水密隔壁ノ間ノ限界線下ノ部分ヲ謂フ

本令ニ於テ前艙區域トハ機關室區域ノ前方ノ限界線下ノ部分ヲ謂ヒ後艙區域トハ機關室區域ノ後方ノ限界線下ノ部分ヲ謂フ

第九條 本令ニ於テ旅客室又ハ船員室トハ手荷物室、倉庫、食料品庫及郵便物室ヲ除キ旅客又ハ船員ノ居住若ハ使用ニ充テラルル場所ヲ謂ヒ居室トハ旅客室及船員室ヲ包含スルモノヲ謂フ

第十條 或場所ノ容積ハ外板又ハ隔壁板ノ内面迄測リテ之ヲ算定ス

第二章 浸水率

第十一條 蒸汽機關ニ依リ推進スル船舶ニ在リテハ機關室區域ノ浸水率ハ左ノ算式ニ依リ之ヲ算定ス

$$80 + 12.5 \left(\frac{a-c}{v} \right)$$

a ハ機關室區域ニ在ル居室ノ容積
 c ハ機關室區域ニ在ル貨物、石炭又ハ倉庫品ニ供用セラルル甲板間ノ場所ノ容積

v ハ機關室區域ノ全容積

發動機ニ依リ推進スル船舶ニ在リテハ機關室區域ノ浸水率ハ前項ノ算式ニ依リ算定シタル數ニ五ヲ加ヘタルモノトス

第十二條 管海官廳ハ特ニ申請アリタルトキハ前條ノ規定ニ拘ラズ機關室區域ノ現狀ニ應ジ適當ト認ムル方法ニ依リ該區域ノ浸水率ヲ算定スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ居室ノ浸水率ハ九五、貨物艙石炭庫又ハ倉庫ノ浸水率ハ六〇ト爲スベシ

第十三條 前艙區域又ハ後艙區域ノ浸水率ハ左ノ算式ニ依リ之ヲ算定ス

$$\frac{63 + 35 - a}{v}$$

a ハ當該區域ニ在ル居室ノ容積

v ハ當該區域ノ全容積

第十四條 二箇ノ横置水密隔壁ノ間ノ甲板間ノ場所ニ常設ノ鋼製隔壁ヲ以テ完全ニ圍繞セラレザル居室アルトキハ前三條ノ規定ニ依リ浸水率ノ算定ニ付テハ該場所中常設

ノ鋼製隔壁ヲ以テ完全ニ區分セラレ且他ノ用途ニ供用セラルル場所ヲ除キタル殘餘ノ全部ヲ居室ト看做ス

第三章 可浸長

第十五條 lノ或點ニ於ケル可浸長トハ該點ヲ中心トスル船舶ノ部分ノ長サニシテ該船舶ガ區畫滿載吃水線ニ對スル吃水及第二章ノ規定ニ依リ浸水率ヲ有スル場合ニ於テ之ニ浸水セシムルモ限界線ヲ超エ沈下スルコトナキ最大限度ノモノヲ謂フ

第十六條 連續セル隔壁甲板ヲ有セザル船舶ニ在リテハ浸水後ノ沈下及縱傾斜竝ニ關係水密隔壁ノ達スル箇所ヲ考慮シテ連續ノ限界線ヲ假定シ之ニ付可浸長ヲ定ムルモノトス

第十七條 可浸長ハ船舶ノ形狀其ノ他ノ特性ヲ考慮シ管海官廳ノ適當ト認ムル方法ニ依リ之ヲ定ム

第四章 區畫室ノ長サ

第十八條 船舶ニ於ケル區畫室ノ長サハ其ノ中央ニ於ケル可浸長ニ第二十條乃至第二十四條ノ規定ニ依リ區畫係數ヲ乘ジテ得タル長サ(以下可許長ト稱ス)ヲ超ユルコトヲ得ズ但シ本令ニ於テ別段ノ定メアル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第十九條

船舶ノ用途ノ標準數(以下單ニ標準數ト稱ス)

第二項ノ規定ニ依リ假想容積(P₁)ト限界線下ニ在ル居室ノ容積(P)トノ割合ニ應ジ左ノ算式ニ依リ之ヲ算定ス

$$P_1 \text{ ガ } P \text{ ヨリ大ナルトキ}$$

$$\frac{72}{V + P_1 - P}$$

$$P_1 \text{ ガ } P \text{ ヨリ大ナラザルトキ}$$

$$\frac{72}{M + 2P}$$

$$P_1 \text{ ガ } P \text{ ヨリ大ナラザルトキ}$$

$$\frac{72}{M + 2P}$$

$$V$$

M ハ機關室區域ノ容積ニ前艙區域又ハ後艙區域ニ於テ二重底内底板ノ上方ニ常設燃料油槽ヲ設ケタルトキハ其ノ容積ヲ加算シタルモノ

P ハ限界線下ニ在ル居室ノ容積

P₁ ハ假想容積

V ハ限界線下ノ全容積

假想容積P₁ハ左ノ算式ニ依リ之ヲ算定ス但シ算定シタル容積ガ限界線下ニ在ル居室ノ容積ト限界線以上ニ在ル旅客室ノ容積トノ和ヨリ大ナルトキハ之ヲ該和及算定シタル容積ノ三分ノ二ノ中大ナルモノト爲スコトヲ得

$$0.056L \times N \text{ 立方メートル}$$

船舶區畫規程

N ハ旅客定員

連續セル隔壁甲板ヲ有セザル船舶ニ在リテハ前二項ノ各容積ハ可浸長ノ決定ニ用キタル限界線迄測リテ之ヲ算定ス

第二十條

l一三メートル以上ノ船舶ノ區畫係數ハ標準數ニ應ジ左ノ各號ノ算式ニ依リ之ヲ算定ス

- 一 標準數二三以下ナルトキ

$$\frac{58.2}{l - 60} + 0.18$$

- 二 標準數一一三以上ナルトキ

$$\frac{30.3}{l - 42} + 0.18$$

- 三 標準數一一三ヲ超ヘ一一三未満ナルトキ

$$A - \frac{(A - B)(C - 23)}{100}$$

C₀ ハ標準數

A ハ第一號ノ算式ニ依リ算定シタル數

B ハ第二號ノ算式ニ依リ算定シタル數

前項ニ依リ算定シタル係數ガ〇・四〇ヨリ小ナル船舶ニ付管海官廳ニ於テ該係數ニ依リ機關室區域ヲ區畫スルコト實際上不可能ナリト認ムルトキハ該區域ニ對スル區畫係數ヲ〇・四〇ト爲スコトヲ得

第二十一條 L七九メートル以上一三一メートル未満ノ船

船ノ區畫係數ハ標準數ニ應ジ左ノ各號ニ依リ之ヲ定ム
一 標準數ガ左ノ算式ニ依リ算定シタル數以下ナルトキハ區畫係數ハ之ヲ一トス

$$\frac{3574-25L}{13}$$

二 標準數ガ一二三以上ナルトキハ前條第一項第二號ノ算式ニ依リ算定シタル數ヲ區畫係數トス

三 標準數ガ第一號ノ算式ニ依リ算定シタル數ヲ超エ一三未満ナルトキハ左ノ算式ニ依リ區畫係數ヲ算定ス

$$1 - \frac{(L-B)(C_1-S)}{123-B}$$

C₁ハ標準數

Sハ第一號ノ算式ニ依リ算定シタル數

Bハ前條第一項第二號ノ算式ニ依リ算定シタル數

第二十二條 旅客定員ガ左ノ算式ニ依リ算定シタル數及五〇ノ中小ナルモノヲ超エザル船舶ノ區畫係數ハ前二條ノ規定ニ拘ラズ之ヲ一トス

$$L_2$$

$$650$$

第二十三條 L七九メートル未満ノ船舶ノ區畫係數ハ標準數ニ拘ラズ之ヲ一トス

甲區畫室ト之ニ隣接セル丙區畫室トノ合長ガ何レモ合長ノ中央ニ於ケル可浸長ヲ超ユルコトナク且可許長ノ二倍ヲ超エザルトキハ甲區畫室ノ長サハ可許長ヲ超ユルモ妨ナシ

甲區畫室ノ浸水率ト乙又ハ丙區畫室ノ浸水率トガ相等シカラザルトキハ前項ノ規定ノ適用ニ付テハ各區畫室ノ浸水率ノ平均ヲ兩區畫室ヲ通ズル浸水率ト看做ス甲區畫室ノ區畫係數ト乙又ハ丙區畫室ノ區畫係數トガ相等シカラザルトキハ第一項ノ規定ノ適用ニ付テハ可許長ノ二倍ノ代リニ左ノ算式ニ依リ算定シタル長サヲ用ウルモノトス

$$L + \frac{(C_2 - L) \cdot F_2}{F_1}$$

Lハ丙區畫室ノ中ノ任意ノ一區畫室ノ長サ

F₁ハ長サLナル區畫室ニ對スル區畫係數

F₂ハ他ノ區畫室ニ對スル區畫係數

Lハ兩區畫室ニ對スル區畫係數ヲF₁ト看做シタル場合ノ可許長

第二十七條 L一三一メートル以上ノ船舶ニ付テハ船首隔壁ノ次ノ横置隔壁ヨリ前部垂線ニ至ル距離ハ可許長ヲ超ユルコトヲ得ズ

第二十八條 横置隔壁ヲ屈折セシメタル場合ニ於テハ屈折

船舶區畫規程

第二十四條 左ノ各號ノ船舶ニ付前三條ニ定ムル區畫係數

ニ依リ區畫スルコト實際上不可能ナリト認ムル部分アルトキハ管海官廳ハ該部分ノ區畫係數ニ付適當ニ斟酌スルコトヲ得

一 前二條ニ掲グル船舶

二 L七九メートル以上一三一メートル未満ニシテ標準數ガ第二十一條第一號ノ算式ニ依リ算定シタル數ヨリ小ナル船舶

第五章 區畫ニ關スル特別條件

第二十五條 船首隔壁ハ船舶ノ前部垂線ヨリLノ百分ノ五

ノ箇所ト同箇所ヨリ三・〇五メートル後方ノ箇所トノ間ニ之ヲ設クベシ

船首部ニ於テ長キ船樓ヲ有スル船舶ニ付テハ船首隔壁ヲ隔壁甲板ノ直上ノ甲板迄延長シ其ノ部分ヲ風雨密ノ構造ト爲スベシ

前項ノ延長部ハ船舶ノ前部垂線ヨリLノ百分ノ五以上ノ箇所ニ設クルトキハ之ヲ下方ノ隔壁ノ直上ニ設ケザルモ妨ナシ此ノ場合ニ於テハ階段ヲ形成スル隔壁甲板ノ部分ヲ風雨密ノ構造ト爲スベシ

第二十六條 甲區畫室ト之ニ隣接セル乙區畫室トノ合長及

部ハ如何ナル部分ニ於テモ最高區畫橫載吃水線ノ水平面ニテ該部分ノ横截面ニ於ケル外板ヨリ中心線ニ直角ニ測リ船ノ幅ノ五分ノ一ニ相當スル箇所ヲ通ル縱垂垂直面ヨリ内方ニ在ルコトヲ要ス但シ區畫ガ第二十九條各號ノ一ニ該當スルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第二十九條 横置隔壁ハ區畫ガ左ノ各號ノ一ニ該當スルニ非ザレバ之ヲ階段アルモノト爲スコトヲ得ズ

一 當該隔壁ニ依リ仕切ラレタル二區畫室ノ合長ガ可浸長ノ百分ノ九十ヲ超エザルトキ

二 隔壁ガ一平面ナル場合ト同一ノ安全程度ヲ保ツ様當該箇所ニ區畫ヲ増設シタルトキ

第三十條 横置隔壁ニ屈折又ハ階段アル場合ニ於テハ區畫室ノ長サハ同一ノ效力ヲ有スル平面隔壁迄之ヲ測ルモノトス

第三十一條 相隣レル二箇ノ横置隔壁間ノ距離ガ三・〇五メートルニLノ百分ノ二ヲ加ヘタルモノヨリ小ナルトキハ區畫室ノ長サノ決定ニ付テハ當該二隔壁中何レカ一箇ハ之ヲ無キモノト看做ス

前項ノ規定ノ適用ニ付テハ屈折アル隔壁ニ在リテハ前條ニ依ル同一ノ效力ヲ有スル平面隔壁ヲ横置隔壁ト看做シ、階段アル隔壁ニ在リテハ該隔壁ヨリ次ノ隔壁ニ至ル

最短距離ヲ横置隔壁間ノ距離ト看做ス

第三十二條

横置水密區畫室ガ局部的ノ區畫ヲ有スル場合ニ於テ三・〇五メートルニLノ百分ノ二ヲ加ヘタル長サニ互ル如何ナル損傷ヲ船側ニ受クルモ該區畫室ノ全容積ニ浸水スル虞ナキトキハ管海官廳ハ該區畫室ノ長サヲ浸水ノ虞ナキ部分ノ容積ニ應ジ局部的區畫ナキ場合ノ可許長ヨリ適當ニ増スコトヲ得

前項ノ規定ノ適用ニ付テハ損傷ヲ受ケザル船側ニ付假定スル有效浮力ノ容積ハ損傷ヲ受ケタル船側ニ付假定スル有效浮力ノ容積ヨリ大ナルコトヲ得ズ

第三十三條

水密甲板又ハ縦通隔壁若ハ内側外板ヲ設クル場合ニ於テハ之ヲ設ケタル部分ノ浸水ニ依リテ生ズル船舶ノ傾斜其ノ他ノ原因ニ因リ船舶ノ安全ヲ害セザル様適當ナル配置ト爲スベシ
前項ノ配置ハ管海官廳ニ於テ適當ト認ムルモノナルコトヲ要ス

第三十四條

船尾隔壁ハ船舶ノ區畫ニ依ル安全ノ程度ヲ減少セザル限リ之ヲ隔壁甲板ノ下方ニ止ムルコトヲ得

第三十五條

船尾管衛帶ヨリ浸水スル場合ニ於テモ船舶ガ限界線ヲ超

ス

船舶ガ淡水ニ在ルトキハ當該區畫滿載吃水線ハ標示セラレタル當該滿載吃水線ノ上方ニ於テ船舶滿載吃水線規程ニ定ムル淡水ニ對スル修正高ニ等シキ箇所ニ在ルモノトス

第七章 水密隔壁ニ於ケル開口

第三十九條

水密隔壁ニ設クル開口ノ數ハ出來得ル限リ之ヲ少クシ又各開口ニハ之ヲ水密ニ閉ヅル爲適當ナル裝置ヲ備フルコトヲ要ス

水密隔壁ヲ貫通シテ管、電燈線等ヲ設ケタルトキハ該隔壁ノ水密ヲ保ツ爲適當ナル方法ヲ講ズベシ

第四十條

水密隔壁ニハ支水弁ヲ設クルコトヲ得ズ
左ニ掲グル隔壁ニハ人孔又ハ出入口ヲ設クルコトヲ得ズ
一 限界線下ノ船首隔壁
二 貨物艙ト貨物艙又ハ常設若ハ豫備ノ石炭庫トヲ仕切ル水密横置隔壁但シ甲板間ニ於ケル貨物艙トヲ仕切ル隔壁ヲ除ク

第四十一條

船首隔壁ニハ船首艙内ノ水其ノ他ノ液體ヲ處理スル爲限界線下ニ於テ一箇ヲ限リ管ヲ通スコトヲ得但シ該管ニハ隔壁甲板ノ上方ヨリ操作シ得ル螺締弁ヲ設ケ

エ沈下スルコトナキ程度ノ容積ヲ有スルモノノ内ニ之ヲ設置スルコトヲ要ス

第六章 區畫滿載吃水線

第三十六條

區畫滿載吃水線ハ船舶滿載吃水線規程ニ定ムル圓標ノ前方ニ於ケル垂直線ノ後緣ヨリ後方ニ向フ長サ二五〇ミリメートル、幅二五ミリメートルノ水平線ノ上緣ヲ以テ之ヲ標示スベシ

區畫滿載吃水線ガ船舶滿載吃水線規程ニ依ル當該船舶ノ海水ニ於ケル最高滿載吃水線ヨリ上方ニ在ルトキハ該最高滿載吃水線ノ位置ニ在ルモノトス

第三十七條

區畫滿載吃水線ノ標示ハ主タル旅客搭載狀態ニ對應スルモノニハO₁其ノ他ノ狀態ニ對應スルモノニハ順次O₂、O₃等ノ記號ヲ附スベシ

區畫滿載吃水線ノ標示ハ船舶滿載吃水線規程ニ定ムル方法ニ準ジ之ヲ爲スベシ

第三十八條

區畫滿載吃水線ニ對スル乾舷ハ船舶滿載吃水線規程ニ依ル乾舷甲板ヲ標示スル水平線ノ上緣ヨリ當該區畫滿載吃水線迄之ヲ測ルモノトス

前項ノ乾舷ハ船舶ガ之ニ對應スル旅客搭載狀態ニ於テ實際航海ニ從事スル場合海水ニ於テ保持スベキ最小乾舷ト

ス

弁匣ハ船首艙内ニ於テ船首隔壁ニ之ヲ取附クルコトヲ要ス

第四十二條

機關室内ニ於テハ石炭庫及軸路ニ通ズルモノノ外機關室内ノ交通用トシテ各横置隔壁ニ付一箇ヲ限リ出入口ヲ設クルコトヲ得但シ機關室ガ縦通水密隔壁ニ依リ區畫セラレタ場合ニ於テ管海官廳差支ナシト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラズ

前項ノ出入口ノ下緣ハ出來得ル限リ高キ位置ニ在ルコトヲ要ス

第四十三條

隔壁ノ開口ニ設クル水密戸ハ左ニ掲グルモノヲ除クノ外之戸ナルコトヲ要ス
一 船側ニ於ケル最低點ノ下面ガ最高區畫滿載吃水線ノ上方二・一三メートル以上ノ箇所ニ在ル甲板ノ上方ニ於ケル旅客室、船員室及作業場所ニ設クル水密蝶番戸
二 甲板間ニ於ケル貨物艙ヲ仕切ル隔壁ニ於テ船側ニ載貨門ノ設置ヲ許サルル高サノ箇所ニ設クル水密番戸
三 機關室内ニ於ケル隔壁ニ螺釘ヲ以テ固定スル取外シ得ル板戸

前項第二號ノ水密蝶番戸ハ其ノ設置ヲ特ニ必要トスル事由アル場合ニシテ其ノ構造及配置ニ付管海官廳ニ於テ差

支ナシト認ムル場合ニ限リ之ヲ設ケ得ルモノトス

第四十四條 蝶番戸ニハ隔壁ノ各側ヨリ操作シ得ル掛金ヲ備フルコトヲ要ス

二戸ハ水平ニ動クモノナルモ又ハ垂直ニ動クモノナルモ妨ナシ手動ノ閉閉装置ノミヲ備フル二戸ノ閉閉装置ハ戸ノ箇所及隔壁甲板ノ上方ノ近寄り得ル場所ニ於テ之ヲ操作シ得ルモノナルコトヲ要ス

水密戸ガ自己又ハ他ノ重量物ノ落下作用ニ依リ閉ヅルモノナルトキハ之ニ閉鎖運動ヲ調節スル爲適當ナル装置ヲ備フルコトヲ要ス閉鎖装置ハ戸ノ箇所及隔壁甲板ノ上方ノ近寄り得ル場所ニ於テ戸ヲ放動セシメ得ルモノトシ且落下作用ニ依ラザル手動閉閉装置ヲ備フルコトヲ要シ該装置ハ戸ノ箇所及隔壁甲板ノ上方ニ於テ之ヲ操作シ得ルモノトシ戸ノ落下閉鎖ノ爲該装置ヲ外シタル後各操作場ニ於テ迅速ニ再ビ之ヲ仕掛ケ得ルモノト爲スベシ

水密戸ガ中央操作場ヨリ動力ニ依リ操作セラルル装置ナキトキハ戸ノ箇所ニ於テモ動力ニ依リ之ヲ操作シ得ルモノト爲スベシ

前項ノ動力閉閉装置ハ中央操作場ヨリ閉ヂラレタル後局部操作場ニ於テ開カレタル戸ガ自働的ニ閉鎖セラレ又戸

置ヲ備フルモノナルモ妨ナシ

四 戸ノ數ガ五箇以下ニシテ標準數ガ三〇ヲ超エザルトキハ各二戸ノ閉閉装置ハ手動ノモノナルモ妨ナシ

第四十六條 船舶ノ航行中石炭線ノ目的ヲ以テ開クコトアル水密戸ヲ隔壁甲板下ノ甲板間ニ於テ石炭庫ヲ仕切ル隔壁ニ設クルトキハ其ノ閉閉装置ハ動力操作ノモノナルコトヲ要ス

第四十七條 二箇以上ノ横置隔壁ヲ貫キテ冷蔵貨物艙ニ通ズル圍壁路ヲ設クル場合ニ於テ開口ノ下縁ガ最高區畫滿載吃水線ノ上方二・一三メートル未滿ノ箇所ニ在ルトキハ該開口ニ於ケル水密戸ノ閉閉装置ハ動力操作ノモノナルコトヲ要ス

第四十八條 船員室ヨリ焚火場ヘノ通行ノ爲、管ヲ通ス爲又ハ其ノ他ノ目的ノ爲横置隔壁ヲ貫キテ圍壁路又ハ隧道ヲ設クルトキハ該圍壁路又ハ隧道ハ水密ニシテ第六十四條ノ規定ニ適合スルモノナルコトヲ要ス
前項ノ圍壁路又ハ隧道ガ船舶ノ航行中通路トシテ使用セララルモノナルトキハ少クとも各圍壁路又ハ隧道ノ一端ニハ限界線ノ上方ニ達シ得ル様水密ニ構造セラレタル圍壁ヲ設クルコトヲ要ス

ガ中央操作場ヨリ開カルルコトヲ局部操作場ニ於テ防ギ得ルモノナルコトヲ要ス

第五項ノ動力閉閉装置ニハ戸ノ箇所及隔壁甲板ノ上方ノ近寄り得ル場所ニ於テ操作シ得ル手動閉閉装置ヲ備フルコトヲ要ス

各水密戸ニ付テハ戸ノ箇所ヲ除クノ外總テノ操作場ニ其ノ閉閉ヲ示ス表示器ヲ備フベシ

第四十五條 横置隔壁ニ設クル二戸ニシテ其ノ下縁ガ最高區畫滿載吃水線ノ下方ニ在リ且船舶ノ航行中開クコトアルモノノ閉閉装置ニ付テハ左ノ各號ニ依ルベシ但シ軸路ノ入口ニ在ル水密戸ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

一 戸ノ數ガ五箇ヲ超ユルトキハ閉閉装置ハ動力操作ノモノニシテ船舶上ノ操作場ヨリ同時ニ各二戸ヲ閉ヂ得ルモノナルコトヲ要シ且閉鎖ニ先チ警戒音響信號ヲ發スル装置ト爲スベシ

二 戸ノ數ガ五箇以下ニシテ標準數ガ六〇ヲ超ユルトキハ各二戸ノ閉閉装置ハ動力操作ノモノナルコトヲ要ス

三 戸ノ數ガ五箇以下ニシテ標準數ガ三〇ヲ超エ六〇以下ナルトキハ各二戸ハ落下式ニシテ戸ノ箇所及隔壁甲板ノ上方ヨリ操作シ得ル放動装置ヲ備ヘ且手動閉鎖裝

圍壁路又ハ隧道ハ船首隔壁ノ次ノ隔壁ヲ貫キテ之ヲ設クルコトヲ得ズ

強壓通風ノ爲必要アルトキハ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムル場合ニ限リ横置隔壁ヲ貫キテ圍壁路又ハ隧道ヲ設クルコトヲ得

第四十九條 石炭庫ニ於ケル水密戸ニ付テハ石炭ガ戸ノ閉鎖ヲ妨グルコトヲ防グ爲障板其ノ他ノ適當ナル装置ヲ設クベシ

第四十六條ニ規定スルモノヲ除クノ外常設及豫備ノ石炭庫間ニ設クル水密戸ニ對シテハ常ニ之ニ近寄り得ル様圍壁路又ハ隧道ヲ設クベシ

第八章 限界線下ノ船側ニ於ケル開口

第五十條 限界線下ノ船側ニ於ケル開口ノ閉鎖裝置ハ開口ノ用途及位置ニ適應スルモノニシテ管海官廳ノ適當ト認メタルモノナルコトヲ要ス

貨物又ハ石炭ノ搭載ニ専用スル場所ニハ舷窓ヲ設クルコトヲ得ズ

自働通風用舷窓ハ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムル場合ヲ除クノ外之ヲ限界線下ノ船側ニ設クルコトヲ得ズ

第五十一條 甲板間ニ於ケル何レカノ舷窓ノ下縁ガ最高區

畫滿載吃水線ノ上方ニ於テ船ノ幅ノ千分ノ二十五ノ距離ニ最低點ヲ有シ船側ニ於ケル隔壁甲板ニ平行ニ引キタル線ノ下方ニ在ルトキハ該甲板間ノ舷窓ハ總テ開キ得ザル型ノモノト爲スベシ

前項ノ舷窓ヲ除クノ外甲板間ニ於ケル何レカノ舷窓ノ下縁ガ最高區畫滿載吃水線ノ上方ニ於テ三・六メートルニ船ノ幅ノ千分ノ二十五ヲ加ヘタル距離ニ最低點ヲ有シ船側ニ於ケル隔壁甲板ニ平行ニ引キタル線ノ下方ニ在ルトキハ該甲板間ノ舷窓ハ總テ錠前附ノモノナルコトヲ要ス前二項ノ舷窓以外ノ舷窓ハ普通ノ開キ得ル型ノモノト爲スコトヲ得

第五十二條

左ニ掲グル舷窓ニハ有效ナル蝶番附内蓋ヲ備ヘ容易ニ之ヲ閉ヂ且水密ニ保チ得ル装置ト爲スベシ

- 一 第五十一條第一項又ハ第二項ノ舷窓
 - 二 前部垂線ヨリLノ八分ノ一以内ノ場所ニ設クル舷窓
 - 三 航行中近寄り難キ場所ニ設クル舷窓
 - 四 水夫、火夫又ハ下級旅客ノ居住場所ニ設クル舷窓
- 前項ニ掲グルモノヲ除クノ外隔壁甲板下ニ設クル舷窓ニ

第五十五條

限界線下ニ設クル舷門、載貨門及載炭門ハ十分ナル強力ヲ有スル構造ト爲スベシ

一部又ハ全部ガ最高區畫滿載吃水線下ニ在ル載貨門又ハ載炭門ハ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムル場合ニ限り之ヲ設置スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ構造ニ付テハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ルベシ

第五十六條

灰棄筒、芥棄筒其ノ他類似ノモノノ船内ニ於ケル開口ニハ有效ナル蓋ヲ備フベシ

前項ノ開口ガ限界線下ニ在ルトキハ該開口ノ蓋ハ水密ニ閉鎖シ得ルモノト爲シ且最高區畫滿載吃水線ノ上方ニシテ容易ニ近寄り得ル場所ニ於テ筒ニ自働不還弁ヲ取附クベシ

第九章 二重底

第五十七條

L六一メートル以上ノ船舶ニ付テハ左ノ各號ノ部分ニ二重底ヲ設クベシ

- 一 L七六メートル未満ノ船舶ニ在リテハ機關室前端隔壁ヨリ船首隔壁迄

ハ有效ナル内蓋ヲ備フベシ
前項ノ内蓋ハ之ヲ附近ニ備ヘ置ク装置ヲ有スルトキハ取外シ得ルモノト爲スコトヲ得

第五十三條 船側ニ設クル機關用ノ吸水孔及放水孔竝ニ其ノ他ノ開口ニハ船内ヘノ不慮ノ浸水ヲ防ギ得ル装置ヲ設クベシ船側ニ設クル排水孔、衛生排出孔其ノ他類似ノ開口ノ數ハ出來得ル限り之ヲ少クスベシ

第五十四條

限界線下ノ船側ヲ貫キテ設クル排出管ニハ船内ヘノ浸水ヲ防グ爲左ノ各號ノ一ニ依ル装置ヲ爲スベシ

- 一 隔壁甲板ノ上方ニシテ容易且迅速ニ近寄り得ル場所ヨリ閉鎖シ得ル積極装置ヲ有スル自働不還弁一箇ヲ各排出管ニ取附ケ且弁ノ開閉ヲ表示スル装置ヲ操作場ニ備フルコト
- 二 前號ノ装置ナキ自働不還弁二箇ヲ各排出管ニ取附ケ其ノ中上方ノモノハ船舶ノ就航狀態ニ於テ検査ノ爲常ニ近寄り得ル最高區畫滿載吃水線ノ上方ノ場所ニ之ヲ設置スルコト

二 L七六メートル以上一〇〇メートル未満ノ船舶ニ在

リテハ機關室前端隔壁ヨリ船首隔壁迄及機關室後端隔壁ヨリ船尾隔壁迄

三 一〇〇メートル以上ノ船舶ニ在リテハ船首隔壁ヨリ船尾隔壁迄

前項ノ船舶ニ於テ船首隔壁又ハ船尾隔壁迄二重底ヲ達セシムルコト實際上不可能ナルトキハ出來得ル限り其ノ近ク迄之ヲ達セシムベシ

第五十八條

前條ニ依リ設クル二重底ニ在リテハ二重底線板ト彎曲部外板トノ交線ハ何レノ部分ニ於テモLノ中央ニ於テ船底基線上船體中心線ヨリ船ノ幅ノ二分ノ一ノ距離ニ在ル點ヲ通り該基線ニ對シ二十五度ノ傾斜ヲ以テ引キタル横斜線ト肋骨線トノ交點ヲ通ル水平面ノ上方ニ在ルコトヲ要ス

第五十九條

排水ノ目的ノ爲ニ二重底ニ設クル塗水溜ハ必要ナル程度ヲ超エテ其ノ深サヲ大ナラシムルコトヲ得ズ且如何ナル場合ト雖モ縁板ノ内縁又ハ外板ヨリ〇・四五七

メートル未満ノ箇所ニ在ルコトヲ得ズ但シ螺旋推進器ヲ備フル船舶ニ付テハ軸路ノ後端ニ於テ外板迄達スル一箇ノ塗水溜ヲ設クルコトヲ得

第十章 水密隔壁等ノ構造及最初ノ試験

第六十條 水密隔壁ハ鋼船構造規程ニ適合スルモノナルコトヲ要ス

隔壁ノ階段部及屈折部ハ水密ニシテ且其ノ箇所ニ在ルベキ隔壁ト同一ノ強力ヲ有スル構造ト爲スベシ

肋骨又ハ梁ガ水密甲板若ハ隔壁ヲ貫通スル部分ハ木材又ハ「セメント」ヲ用キズシテ水密ヲ保ツ構造ト爲スベシ

第六十一條 本令ニ掲グル水密戸、舷窓、舷門、載貨門、載炭門、弁、管、灰棄筒及芥棄筒ノ設計、材料及構造ニ付テハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ルベシ

第六十二條 隔壁ニ設クル水密戸ハ之ヲ設クル箇所ニ於ケル限界線迄ノ水高壓力ヲ以テ之ヲ試験スベシ

前項ノ試験ハ船舶ノ就航前ニ於テ戸ノ取附前又ハ取附後ニ之ヲ行フベシ

第十一章 耐火隔壁、水密區畫室ヨリノ出口

第六十六條 船舶ニハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依リ隔壁甲板ヨリ上部ニ於テ船側ヨリ船側迄達スル耐火隔壁ヲ設クベシ

船樓内ニ於ケル耐火隔壁ノ間隔ハ四〇メートルヲ超ユルコトヲ得ズ但シ管海官廳差支ナシト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第六十七條 耐火隔壁ハ隔壁ニ於テ八一五度ノ溫度ヲ生ズル火ノ蔓延ヲ一時間阻止シ得ベキ金屬其ノ他ノ耐火材料ヲ以テ適當ニ之ヲ構造スルコトヲ要ス

鋼製隔壁ニシテ隔壁甲板直下ノ甲板間ニ於ケル水密隔壁ノ構造ト同一ノ構造ヲ有スルモノガ可燃性材料ノ内張ヲ有セザルトキハ之ヲ前項ノ規定ニ適合スル耐火隔壁ト看做ス

第六十八條 耐火隔壁ニ於ケル階段部及屈折部ハ隔壁ト同一ノ效力ヲ有スルモノナルコトヲ要シ又開口ノ閉鎖裝置ハ耐火性ニシテ且焰ノ侵入ヲ防ギ得ルモノナルコトヲ要

第六十三條 二重底(溝形龍骨ヲ含ム)及内側外板ハ限界線迄ノ水高壓力ヲ以テ之ヲ試験スベシ

液體ヲ容ルル槽ニシテ水密區畫ノ一部ヲ成スモノハ最高區畫滿載吃水線迄ノ高サ、龍骨ノ上面ヨリ槽ノ箇所ニ於ケル限界線迄ノ高サノ三分ノ二及槽ノ頂板上〇・九二メートル迄ノ高サノ中最大ナルモノニ相當スル水高壓力ヲ以テ之ヲ試験スベシ

第六十四條 甲板、圍壁、隧道、溝形龍骨又ハ通風筒ニシテ水密ナルコトヲ要スルモノハ其ノ箇所ニ在ルベキ水密隔壁ト同一ノ強力ヲ有スル構造ト爲シ圍壁及通風筒ハ少クトモ限界線迄水密ニ構造セラレタルモノナルコトヲ要ス

前項ノ甲板、圍壁、隧道等ノ水密ナルコトヲ要スル構造及之ニ設クル開口ノ閉鎖裝置ニ付テハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ルベシ

第六十五條 水密甲板ハ漲水又ハ射水ニ依リ、水密ナル圍壁、隧道及通風筒ハ射水ニ依リ之ヲ試験スベシ

ス

第六十九條 船舶ニハ旅客室又ハ船員室ノ在ル各水密區畫室ヨリ其ノ居住者ガ非常ノ際上甲板以上ノ開放セル場所ニ退去シ得ル爲適當ナル設備ヲ爲スベシ

各機關室、軸路其ノ他ノ作業場所ニハ非常ノ際ニ於ケル船員ノ避難ノ爲水密戸ト別箇ニ適當ナル設備ヲ備フベシ

第十二章 「ポンプ」排水裝置

第七十條 船舶ニハ主機關ニ依リ動作スル正塗水「ポンプ」又ハ之ニ代ル獨立機關ニ依リ動作スル正塗水「ポンプ」ノ外獨立ノ動力ニ依リ操作セラルル二箇ノ副塗水「ポンプ」ヲ備フベシ但シ五・五メートル未満ニシテ標準數三〇未満ノ船舶ニ在リテハ船舶ノ前部及後部ニ各一箇ノ「クランク」型手動「ポンプ」ヲ備フルカ又ハ移動式動力「ポンプ」一箇ヲ備フルトキハ副塗水「ポンプ」ハ之ヲ一箇ト爲スコトヲ得

標準數三〇ヲ超ユル船舶ニ在リテハ前項ノ規定ニ依ル副塗水「ポンプ」ノ外獨立ノ動力ニ依リ操作セラルル副塗

水「ポンプ」一箇ヲ増備スベシ
衛生、脚荷又ハ雜用ノ「ポンプ」ガ滲水吸出管ニ適當ニ
連結セラルルトキハ之ヲ前二項ノ副滲水「ポンプ」ト看
做ス

第七十一條 前條ニ依リ二箇以上ノ副滲水「ポンプ」ヲ要
スル船舶ニ在リテハ中一箇ハ潜水型ノ非常用「ポンプ」
トシ隔壁甲板ノ上方ニ設置シタル動源ニ依リ非常ノ際之
ヲ動作シ得ル装置ト爲スベシ

第七十二條 動力滲水「ポンプ」ハ成ルベク同一ノ損傷ニ
依リ迅速ニ浸水スル虞ナキ別々ノ水密區畫室ニ之ヲ設置
スベシ若シ機關室ガ二箇以上ノ水密區畫室ヨリ成ルトキ
ハ滲水「ポンプ」ヲ出來得ル限り各室ニ分布スルコトヲ
要ス

第七十三條 各滲水「ポンプ」ハ船首尾艙ニノミ使用スル
モノヲ除キ手動ノモノナルト動力操作ノモノナルトヲ問
ハズ船舶ノ各船艙又ハ機關室ヨリ排水シ得ル様装置スベ
シ

ノハ當該支管ニ依リ排水スベキ區畫室ノ長サニメートル
前項ノ規定ニ拘ラズ滲水主管ノ内徑ハ六センチメートル
ヨリ、滲水支管ノ内徑ハ五センチメートルヨリ小ナラザ
ルコトヲ要シ又滲水支管ノ内徑ハ一〇センチメートルヨ
リ大ナルコトヲ要セズ

第七十六條 蒸汽機關ニ依リ推進スル船舶ニ在リテハ主海
水吸入管ノ徑ノ三分ノ二以上ノ徑ヲ有スル不還弁附直接
吸水管ヲ主循環「ポンプ」ニ取附ケ之ヲ機關室内ノ滲水
ノ最低吸水位置迄導クベシ又燃料トシテ石炭ヲ使用シ若
ハ使用スルコトアル船舶ニ於テ汽機室ト汽機室トノ間ニ
水密隔壁ナキトキハ少クトモ一箇ノ循環「ポンプ」ヨリ
復水器ヲ通過セズシテ直接船外へ排水スル爲別箇ノ排水
管ヲ取附クルカ又ハ循環水排出管ニ連結セル支管ヲ設ク
ベシ

第七十七條 貨物艙又ハ機關室ノ排水ニ用ウル管ハ水槽又
ハ油槽ニ對スル管ト區別スベシ
石炭庫若ハ燃料油庫ノ下部、汽機室又ハ汽機室内ニハ排

第七十四條 各副滲水「ポンプ」ハ滲水主管ヲ通ル水ニ一
分間一二ニメートル以上ノ速度ヲ與へ得ルモノナルコト
ヲ要シ且之ヲ設置シタル區畫室ニ對シ滲水主管ノ徑ヨリ
小ナラザル徑ノ直接吸水管ヲ備フベシ
直接吸水管ハ船内ノ各側ヨリ吸水シ得ル様之ヲ配置スベ
シ

第七十五條 滲水「ポンプ」ニ連結スル滲水主管及各水密
區畫室ニ對スル滲水支管ノ内徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シ
タルモノ以上ト爲スベシ

一 滲水主管ノ徑ノ算式

$$\sqrt{\frac{L(B+D)}{36}} + 2.5 \text{ センチメートル}$$

二 滲水支管ノ徑ノ算式

$$\sqrt{\frac{L(B+D)}{21.6}} + 2.5 \text{ センチメートル}$$

B ハ船ノ幅ニメートル

D ハLノ中央ニ於テ龍骨ノ上面ヨリ隔壁甲板ノ船側
ニ於ケル上面迄ノ深サニメートル

水用管トシテ鉛管ヲ使用スルコトヲ得ズ沈澱油槽又ハ燃
料油「ポンプ」ヲ設置シタル發動機室内ニ於ケル排水用
管ニ付亦同シ

第七十八條 滲水及脚荷水ノ管系ハ海水若ハ脚荷水ガ貨物
艙若ハ機關室ニ流入シ又ハ一區畫室ニ在ル水ガ他ノ區畫
室ニ流入スルノ虞ナキ装置ト爲スベシ脚荷水及滲水ノ管
系ニ連結セラルル深水槽ニ付テハ之ニ貨物ヲ積載シタル
場合ニ於テ不意ニ海水流入シ又之ニ脚荷水ヲ積載シタル
場合ニ於テ脚荷水ガ滲水管ニ依リ吸出サルルコトナキ様
特別ノ設備ヲ爲スベシ

第七十九條 或區畫室ノ排水ニ使用スル滲水管ガ船舶ノ衝
突又ハ乗揚等ニ因リ該區畫室外ノ場所ニ於テ損傷ヲ受ケ
該區畫室ニ浸水スル虞アルモノナルトキハ之ヲ防止スル
爲適當ノ設備ヲ爲スベシ滲水管ノ何レカノ部分ガ船側ニ
近ク設置セラルルカ又ハ溝形龍骨内ニ設置セラルルトキ
ハ此ノ目的ノ爲管ノ開放端ノ在ル區畫室ニ於テ之ニ不還
弁ヲ取附クルカ又ハ隔壁甲板ノ上方ノ場所ヨリ操作シ得

ル螺締弁ヲ取附クベシ

第八十條 塗水排出装置用ノ配流節「コック」及弁ハ船舶ガ通常ノ状態ニ在ル場合ニ於テ常ニ近寄り得ル場所ニ之ヲ設ケ且非常用塗水「ポンプ」ヲ備フル船舶ニ在リテハ之ニ依リ何レノ區畫室ヨリモ吸水シ得ル様配置スベシ若シ各塗水「ポンプ」ニ共通ナル一管系ノミヲ備フルトキハ該「コック」又ハ弁ハ隔壁甲板ノ上方ヨリ之ヲ操作シ得ルモノナルコトヲ要シ又主塗水管系ノ外非常用塗水管系ヲ備フルトキハ之ヲ主管系ヨリ獨立セシメ且非常用「ポンプ」ニ依リ浸水状態ニ在ル何レノ區畫室ヨリモ吸水シ得ル様装置スベシ

第十三章 特殊ノ航路又ハ特殊旅客ノ運送ニ使用スル船舶ニ對スル特別規定

第八十一條 管海官廳短國際航海ニ從事スル旅客船ニ付特ニ必要アリト認ムルトキハ第七章乃至第九章及第十二章ニ規定スル事項ニ付適當ニ斟酌スルコトヲ得

第八十二條 管海官廳ハ天候又ハ交通ノ狀況ニ因リ特ニ危険多キ航路ニ於テ專ラ旅客ノ運送ニ從事スル船舶ニ付必要アリト認ムルトキハ其ノ區畫ヲ第四章及第五章ニ規定スルモノヨリ更ニ細密ナラシムルコトヲ得

第八十三條 管海官廳一定區域ノ航路ニ於テ臨時旅客又ハ甲板旅客ヲ運送スル船舶ニ付本令ノ規定ヲ適用スルコト實際上不可能ナリト認ムルトキハ當該航路及旅客ノ種類ヲ考慮シ適當ト認ムル程度迄之ヲ斟酌スルコトヲ得

附 則

第八十四條 本令ハ昭和九年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

第八十五條 昭和六年六月三十日以前ニ龍骨ヲ据附ケ旅客船トシテ製造シタル船舶又ハ同日以前旅客船ニ變更シタル船舶ニ付テハ管海官廳ニ於テ其ノ水密區畫其ノ他ノ設備ヲ考慮シ實行不可能ニシテ且不適當ナリト認ムル限り本令ニ依ラシメザルコトヲ得

鋼船構造規程

(昭和十五年四月 遞信省令第二十四號)

目 次

第一章 總 則……………四一〇

第二章 材料及材料試驗……………四二二

第一節 試驗片……………四二二

第二節 壓延鋼材……………四二二

第三節 鍛鋼材……………四二二

第四節 鑄鋼材……………四二二

第五節 雜 則……………四二二

第三章 龍骨、船首材、船尾骨材及船尾肋板……………四二〇

第一節 方形龍骨……………四二〇

第二節 平板龍骨……………四二〇

第三節 船首材……………四二〇

第四節 船尾骨材……………四二〇

第五節 船尾肋板及之ト船尾骨材トノ固著……………四二〇

第六節 船尾骨材ニ於ケル舵ノ壺金……………四二〇

第四章 單底構造……………四二三

第一節 肋 板……………四二三

鋼船構造規程

第二節 肋板ニ附スル山形鋼……………四二九

第三節 中心線內龍骨……………四二九

第四節 側內龍骨……………四二九

第五節 船首尾部ニ於ケル補強……………四二九

第五章 二重底構造……………四二九

第一節 總 則……………四二九

第二節 中心線桁板……………四二九

第三節 實體肋板……………四二九

第四節 組立肋板……………四二九

第五節 內底板及緣板……………四二九

第六節 外側肘板……………四二九

第七節 側桁板……………四二九

第八節 燃料油ヲ積載スル二重底……………四二九

第九節 雜 則……………四二九

第六章 肋 骨……………四三八

第一節 肋骨ノ心距竝ニ截面抵抗率ノ算定……………四三八

第二節 艙內肋骨……………四三八

第三節 船首尾艙ノ肋骨……………四三八

第四節 甲板間ノ肋骨及船樓ノ肋骨……………四三八

第五節 雜 則……………四三八

第七章 梁……………四四五

第八章 梁柱……………四五一

第九章 梁下縦材及甲板下縦桁……………四五四

第十章 外板……………四五六

第十一章 甲板……………四五八

第一節 強力甲板及有效甲板ノ有效截面積

第二節 鋼甲板及梁上帶板

第三節 木甲板

第四節 雜則

第十二章 隔壁……………四六六

第一節 總則

第二節 水密隔壁ノ構造及水密試驗

第三節 水密ヲ要セサル隔壁

第十三章 深水槽……………四七二

第一節 深水槽ノ構造

第二節 深水槽ノ設備及水密試驗

第十四章 船首尾防撓構造……………四七四

第一節 船首艙ニ於ケル防撓構造

第二節 船首隔壁ヨリ後方ニ於ケル防撓構造

第三節 船尾ニ於ケル防撓構造

第四節 雜則

第十五章 船樓及甲板室……………四七六

第一節 船樓

第二節 甲板室

第十六章 機關室及軸路……………四八〇

第一節 機關室

第二節 軸路

第十七章 艙口其ノ他ノ甲板口……………四八二

第一節 緣材

第二節 艙口梁及縦材

第三節 艙口ノ閉鎖裝置

第四節 載炭口及平載炭孔

第五節 逃口及昇降口

第六節 雜則

第十八章 機關室口……………四九一

第十九章 通風筒及橋孔……………四九四

第二十章 舷橋及舷側諸口……………四九五

第二十一章 舵及操舵裝置……………四九八

第一節 舵

第二節 操舵裝置

第二十二章 内張板……………五〇二

第二十三章 排水裝置……………五〇二

第二十四章 銑及銑接合……………五〇六

第一節 銑

第二節 銑列及衝接覆板ノ厚サ

第三節 銑ノ心距

第四節 雜則

第五節 深油槽ニ關スル特別規定

第二十五章 電弧熔接……………五二〇

第一節 總則

第二節 電極棒

第三節 熔接工ノ技術試驗

第四節 熔接施工方法

第二十六章 油槽船……………五二七

第一節 總則

第二節 船底橫肋骨

第三節 船側橫肋骨

第四節 橫置梁

第五節 船底縱肋骨

第六節 船側縱肋骨

第七節 縱梁

第八節 外板

第九節 甲板

第十節 橫置隔壁

第十一節 中心線隔壁

第十二節 膨脹「トランク」

第十三節 艙口

第十四節 油槽外ノ構造配置

第十五節 銑接合

第十六節 機關室ノ圍壁、常設歩路及舷橋

第十七節 「ポンプ」裝置

第十八節 通風裝置

第十九節 電氣裝置

第二十節 油槽ノ水密試驗

第二十七章 對水構造……………五六一

附則

第一章 總 則

第一條 本令ニ於テ上甲板トハ船體ノ主要部ヲ構造スル最

上層ノ全通甲板ヲ謂フ但シ二層以上ノ全通甲板ヲ有シ最

上層ノ全通甲板ノ暴露部ニ常設閉鎖裝置ヲ備ヘサル甲板

口ヲ有スル船舶(以下之ヲ遮浪甲板船ト稱ス)ニ在リテ

ハ最上層ノ全通甲板ノ直下ノ全通甲板ヲ謂フ

本令ニ於テ第二甲板又ハ第三甲板トハ上甲板ヨリ數ヘ順

次第二層又ハ第三層ノ甲板ヲ謂フ

本令ニ於テ遮浪甲板トハ遮浪甲板船ニ於ケル最上層ノ全

通甲板ヲ謂フ

第二條 本令ニ於テ船ノ長サノ或箇所ニ於ケル強力甲板ト

ハ其ノ箇所ニ於ケル船體ノ主要部ヲ構造スル最上層ノ甲

板ヲ謂フ

低船首尾樓ノ甲板及船ノ長サノ一五%以上ノ長サヲ有ス

ル船樓ノ甲板ハ之ヲ強力甲板トシテ取扱フモノトス

第三條 本令ニ於テ隔壁甲板トハ船首尾隔壁ヲ除キ其ノ他

ノ橫置水密隔壁力第二百七十條ノ規定ニ依リ到達スル最

上層ノ甲板ヲ謂フ

第四條 本令ニ於テ船樓トハ船側ヨリ船側ヲ達シ上部ニ甲

リ滿載吃水線迄ノ垂直距離ヲ謂フ

滿載吃水ハdヲ以テ之ヲ示シ其ノ單位ハ米トス

第九條 本令ニ於テ船樓端ノ隔壁ノ開口ニ於ケル第一級閉

鎖裝置又ハ第二級閉鎖裝置トハ船舶滿載吃水線規程ニ定

ムル第一級又ハ第二級ノ閉鎖裝置ヲ謂フ

第十條 別段ノ定アル場合ヲ除クノ外各部材料ノ寸法ハ第

二章ノ規定ニ適合シタル鋼材ヲ使用スル場合ニ付之ヲ定

メ形鋼ノ寸法ハ日本標準規格ニ適合スル形狀ノモノヲ使

用スル場合ニ付之ヲ定メタルモノトス

第十一條 方形龍骨、船首材、船尾骨材、舵、梁柱、汽罐

ノ下部ニ於ケル肋板、二重底内底板其ノ他ノ鋼板石炭隔

壁ニハ同一寸法ノ鐵材ヲ以テ鋼材ニ代用スルコトヲ得

隔壁板、軸路及木甲板ヲ張ラサル暴露甲板ニハ厚サヲ鋼

ヲ使用スルトキヨリ一〇%増ストキハ鐵ヲ使用スルコト

ヲ得

前二項ニ掲クルモノヲ除キ鋼ヲ使用スヘキ部分ニハ特ニ

管海官廳ノ承認ヲ受クルニ非サレハ鐵ヲ使用スルコトヲ

第十二條 各部ノ工事ハ良好且有效ナルコトヲ要ス

鉸孔ハ實際上可能ナル限り接面ノ側ヨリ之ヲ打貫クコト

板ヲ有スル上甲板上ノ構造物ヲ謂フ

第五條 本令ニ於テ船ノ長サトハ計畫滿載吃水線ニ於テ船

首材ノ前面ヨリ舵柱ヲ有スル船舶ニ在リテハ其ノ後面

迄、舵柱ヲ有セサル船舶ニ在リテハ舵頭材ノ中心迄測リ

タル距離ヲ謂フ

巡洋艦型船尾ヲ有スル船舶ニ在リテハ船ノ長サハ前項ノ

規定ニ依ル長サト計畫滿載吃水線上ニ於ケル船ノ全長ノ

九六%トノ中大ナルモノトス

船ノ長サハLヲ以テ之ヲ示シ其ノ單位ハ米トス

第六條 本令ニ於テ船ノ幅トハ船體最廣部ニ於ケル肋骨ノ

外面ヨリ外面迄ノ水平距離ヲ謂フ

船ノ幅ハBヲ以テ之ヲ示シ其ノ單位ハ米トス

第七條 本令ニ於テ船ノ深サトハLノ中央ニ於テ龍骨ノ上

面ヨリ上甲板梁ノ船側ニ於ケル上面迄ノ垂直距離ヲ謂フ

船ノ深サハDヲ以テ之ヲ示シ其ノ單位ハ米トス

第八條 本令ニ於テ滿載吃水線トハ船舶滿載吃水線規程ニ

依リ標示シタル圓標ノ中心ヲ通過スル吃水線ヲ謂フ但シ

滿載吃水線ノ標示ヲ爲ササル船舶ニ在リテハ計畫最大吃

水ニ對スル吃水線ヲ謂フ

本令ニ於テ滿載吃水トハLノ中央ニ於ケル龍骨ノ上面ヨ

リ要シ且打貫ノ際使用スル受臺ハ鉸孔ノ周緣部ノ捲レテ

少クスル爲成ルヘク小穴ノモノト爲スヘシ

船底彎曲部ノ肋骨其ノ他著シキ屈曲ヲ有スル箇所ノ肋骨

ハ所要ノ形狀ニ屈曲セシメタル後ニ非サレハ之ニ鉸孔ヲ

穿ツコトヲ得ス但シ豫メ小形ノ孔ヲ穿テ置キ屈曲後所要

ノ大サニ錐揉スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

鋼材ヲ接合スルトキハ接面ニ於ケル捲レ其ノ他ノ突起部

ヲ除去シ鉸打工事ニ先チ螺打ヲ以テ十分ニ締附ケ密着セ

シメ鉸孔カ一致セサルトキハ適當ニ錐揉スヘシ

鋼板ヲ著シク熱シタルトキ又ハ其ノ一部分ノミヲ熱シタ

ルトキハ取附前之ヲ適當ニ燒鈍スヘシ

第十三條 鋼板ニ山形鋼ヲ固著スル代リニ板ヲ曲線スルト

キハ曲線ノ幅ヲ成ルヘク當該部分ニ附スヘキ山形鋼ノ邊

ノ幅以上ト爲スヘシ

鋼板ヲ曲線スルトキハ屈曲ノ内半徑ヲ成ルヘク板ノ厚サ

ノ二倍以上三倍以下ト爲スヘシ

鋼板又ハ形鋼ヲ「ジヨツグル」スルトキハ屈曲ノ内半徑

ヲ成ルヘク厚サノ二倍以上ト爲スヘシ

第十四條 本令ニ依ル試驗ハ管海官廳ノ監督ヲ受ケ之ヲ執

行スヘシ

材料試験機ハ船用品試験機取締規則ニ依リ定ムル使用期間内ニ在ルモノヲ用フヘシ
材料試験ハ管海官廳ノ適當ト認ムル證明書アルモノニ付テハ之ヲ省略スルコトヲ得

第十五條 單底構造ノ船底、塗水道、汽罐室ノ下部ニ於ケル二重底内ノ船底其ノ他必要ナル箇所ニハ「ボートランド・セメント」又ハ之ト同等ノ效力ヲ有スル塗料ヲ施シ
外板、肋骨及鉄ヲ保護スヘシ
鋼又ハ鐵ヲ以テ構造シタル部分ハ「セメント」又ハ水「セメント」ヲ以テ塗裝シタルモノヲ除キ必要ニ應シ油「ペイント」其ノ他適當ノ塗料ヲ以テ之ヲ塗裝スヘシ

外部鋼材ハ鍍皮ノ除去ヲ容易ナラシムル爲製造中成ルヘク長期間十分大氣ニ暴露シタル後塗裝スヘシ
第十六條 橋、索具竝ニ揚貨、揚錨及繫船ノ裝置其ノ他ノ機裝品ハ其ノ用途ニ應シ適當ニ構造配置シ管海官廳ニ於テ行フコトアルヘキ試験ニ合格ノモノナルコトヲ要ス

第十七條 燃料油ヲ積載スル場合ノ構造及設備ニ關スル規定ハ密閉試験ニ依ル引火點攝氏六五度以上ノ燃料油ヲ積載スル場合ニ付之ヲ適用ス
攝氏六五度未満ノ引火點ヲ有スル燃料油ヲ積載スル場合

ノ構造及設備ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第十八條 本令ノ規定ニ該當セサル船體ノ構造及寸法ハ管海官廳ニ於テ本令ニ定ムルモノト同一ノ效力ヲ有スト認ムル場合ニ限り之ヲ本令ニ適合スルモノト看做ス

第十九條 Lノ特大ナル船舶又ハ特殊ノ事由ニ因リ本令ニ依リ難キ船舶ノ構造及寸法ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

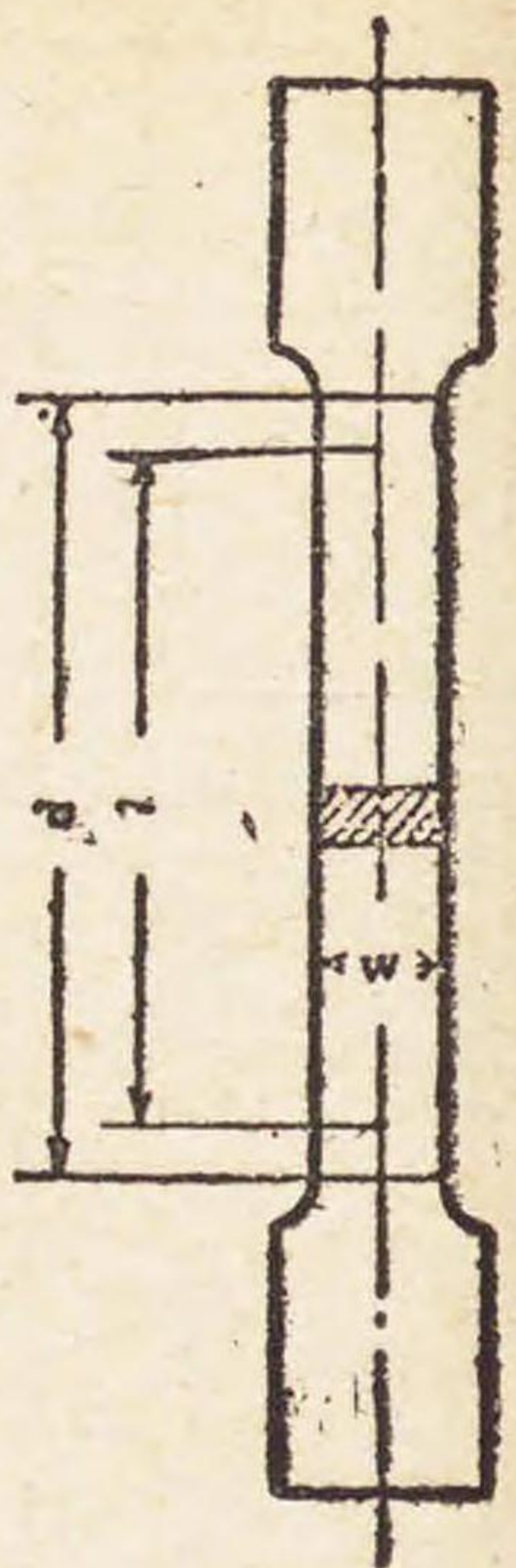
第二十條 帆船ノ肋骨、梁、梁肘板等ノ構造及寸法、局部ノ補強方法竝ニ水密隔壁ノ配置及敷ニ付テハ本令ニ明文規定アル場合ヲ除クノ外管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第二十一條 第三級船及第四級船ノ構造竝ニ材料及其ノ寸法ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第二章 材料及材料試験
第一節 試驗片

第二十二條 抗張試験ニ用フル標準試驗片ハ左ノ形狀及寸法ト爲スヘシ但シ其ノ兩端ハ試験機ニ應シ之ニ適合スル形狀ニ仕上クルモノトス

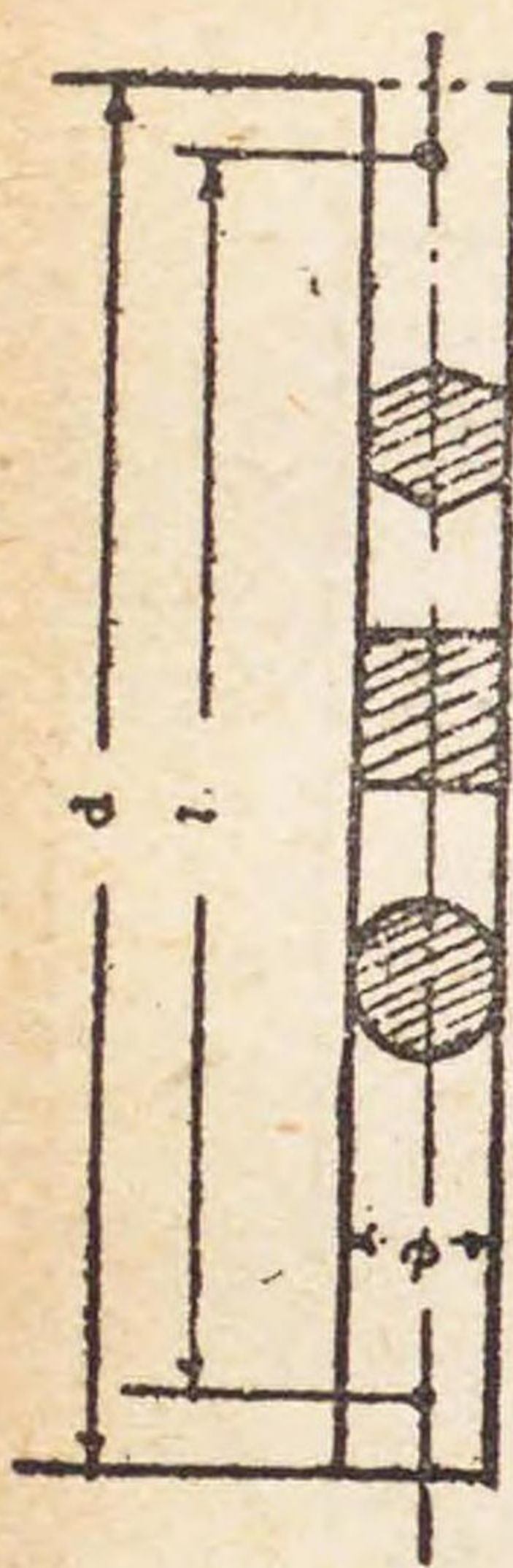
一 第一號試驗片 主トシテ鋼板及形鋼ニ對シテ用フルモノ



標點距離 L
平行部ノ長サ p
幅 W
約二〇〇耗
左表ニ依ル

試驗片ノ厚サ(耗)	試驗片ノ幅W(耗)
二 三ヲ超ユルモノ	四 〇以下
九 以上二三以下	五 〇以下
九 未滿	六 〇以下

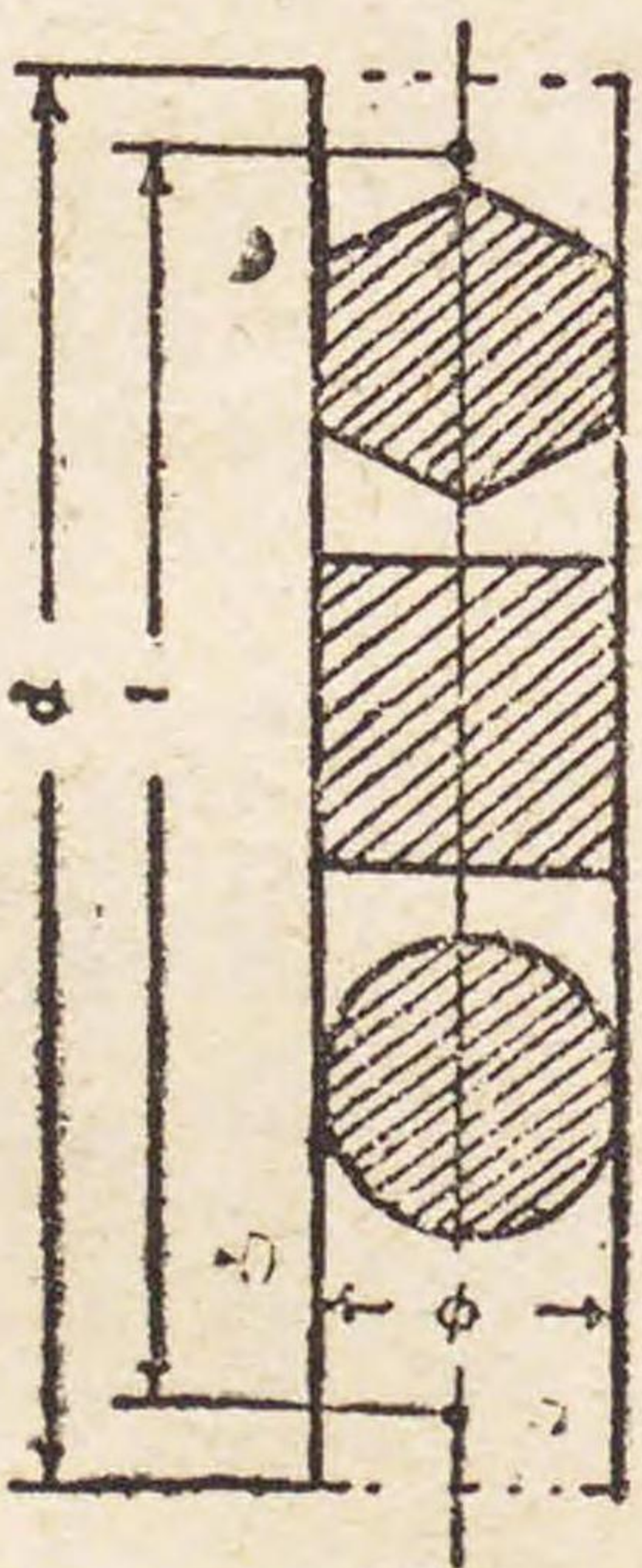
二 第二號試驗片 主トシテ徑(又ハ對邊距離)二五耗以下ノ棒鋼ニ對シテ用フルモノ



鋼船構造規程

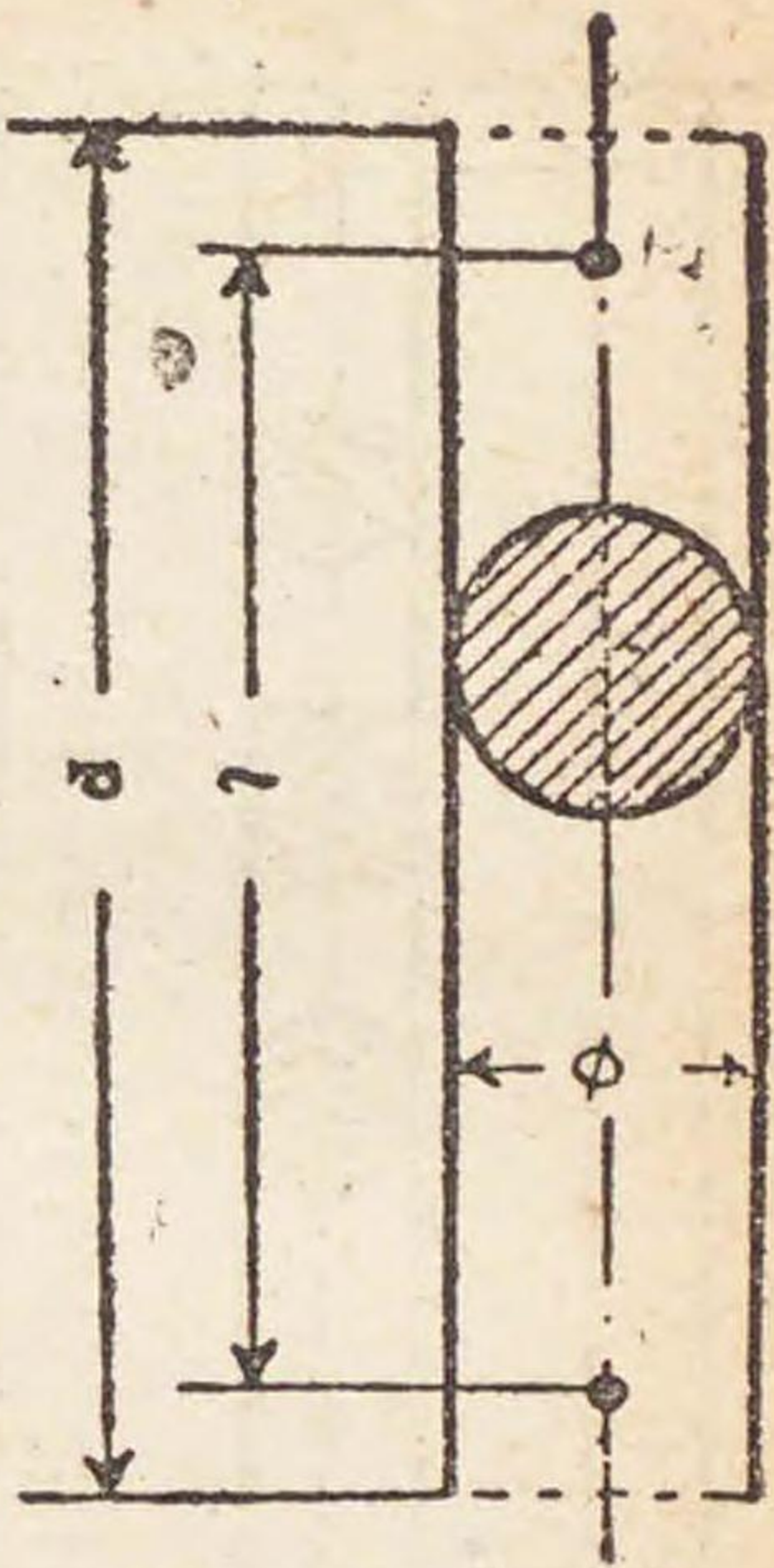
標點距離 Lハ徑(又ハ對邊距離)φノ八倍、兩端ヲ太ク
スルモノニ在リテハ平行部ノ長サpハφノ約九倍
平行部ハ壓延セル儘トシ又ハ機械仕上ニ依リ之ヲ作製
スルコトヲ得

三 第三號試驗片 徑(又ハ對邊距離)二五耗ヲ超ユル棒鋼ニ對シテ用フルモノ



標點距離 Lハ徑(又ハ對邊距離)Lノ四倍、兩端ヲ太ク
スルモノニ在リテハ平行部ノ長サpハφノ約四・五倍
平行部ハ壓延セル儘トシ又ハ機械仕上ニ依リ之ヲ作製
スルコトヲ得

四 第四號試驗片 主トシテ鍛鋼材、鑄鋼材竝ニ非鐵金屬(又ハ其ノ合金)棒ニ對シテ用フルモノ



標點距離 l
 平行部ノ長サ p
 徑 d
 五〇耗
 約六〇耗
 一四耗

材料ノ都合ニ依リ右ノ寸法ト爲シ得サルトキハ左ノ算式ニ依リ標點距離ヲ定ムルコトヲ得

$$l = \frac{4}{A} \sqrt{A} \quad (\text{耗ニテ})$$

Aハ試験片ノ横截面積(平方耗ニテ)

第二十三條 壓延鋼材ノ屈曲試験片ノ幅、徑又ハ對邊距離

ハ三五耗以上ナルコトヲ要ス但シ徑又ハ對邊距離三五耗未滿ノ棒鋼ニ對シテ用フル試験片ハ壓延セル儘ノ材料ヲ使用スヘシ

「フランジ」ノ幅五〇耗未滿ノ形鋼ニ在リテハ試験片ノ幅ヲ三五耗未滿ト爲スモ妨ナク又之ニ壓力ヲ加ヘ若ハ鎚打シテ扁平ト爲シタルモノヨリ試験片ヲ採取スルモ妨ナシ

壓延鋼材ノ屈曲試験片ニハ左ノ加工以外ノ加工ヲ爲スコトヲ得ス

一 剪斷ノ爲シタル稜角又ハ縁ノ不整ヲ鑢又ハ研磨機ニ依リ削除スルコト

二 厚サ二五耗以上ノモノニ付剪斷面ヲ機械仕上ト爲スコト

第二十四條 鍛鋼材又ハ鑄鋼材ノ屈曲試験片ハ幅二五耗厚サ一九耗ノ截面ヲ有シ角隅ニ半徑一・五耗ノ丸味ヲ附シタルモノトス

第二十五條 抗張試験片及屈曲試験片ノ數ハ特ニ規定スル場合ヲ除クノ外左表ニ依ル

種類	抗張試験片ノ數	屈曲試験片ノ數
鋼板又ハ形鋼	同一熔鋼ニ屬スル鋼板又ハ形鋼ニシテ厚サ五耗未滿ノモノニ付キ一箇但シ熔鋼ノ重量二五耗ヲ超ユルトキハ二箇未滿ト爲スコトヲ得ス 熔鋼不明ナルトキハ同一種類ノ材料ヨリ管海官廳ノ適當ト認ムル數	同一熔鋼ニ屬スル鋼板又ハ同一熔鋼ニ屬シ且同一種類ノ形鋼ニシテ厚サノ差三耗未滿ノモノニ付一箇但シ熔鋼ノ重量二五耗ヲ超ユルトキハ二箇未滿ト爲スコトヲ得ス

鑄鋼材	鍛鋼材	鋁材
二熔鋼以上ヲ使用シ一箇ノ鑄鋼材ヲ鑄造スル場合ニ於テハ該鑄鋼材一箇毎ニ四箇一熔鋼ヲ使用シ鑄造スル場合ニ於テハ鑄鋼材一箇毎ニ一箇但シ同一熔鋼ヲ使用シ鑄造スル多數ノ同形鑄鋼材ニ付テハ管海官廳ノ適當ト認ムル數	鍛鋼材一箇毎ニ一箇但シ一箇ノ重量五〇〇〇〇未滿ニシテ同一塊ヨリ鍛造シタル多數ノ鍛鋼材ニ付テハ管海官廳ノ適當ト認ムル數	同一熔鋼ニ屬スル徑ノ差五耗未滿ノモノニ付一箇但シ其ノ重量一〇〇〇〇ヲ超ユルトキハ一箇又ハ其端數毎ニ一箇熔鋼不明ナルトキハ同一種類ノ材料ヨリ管海官廳ノ適當ト認ムル數
同上	同上	同上

鋁材ノ縱壓試験片ノ數ハ前項ノ鋁材ノ抗張試験片ニ對スル規定ニ依ル

第二十六條 壓延鋼材ノ試験片ハ鋼板ニ在リテハ横又ハ縦ノ方向ヨリ、形鋼又ハ棒鋼ニ在リテハ長サノ方向ヨリ之ヲ採取シ矯正ノ必要アルトキハ常溫ノ儘矯正スヘシ

壓延鋼材ノ試験片ハ鋼材ト共ニスル場合ノ外之ニ燒鈍其ノ他ノ熱處理ヲ爲スコトヲ得ス

第二十七條 鍛鋼材ノ試験片ハ鍛鋼材ニ熱處理ヲ爲スヘキ

場合ニ於テハ之ヲ爲シタル後其ノ主體ヨリ小ナラサル截

面積ヲ有スル部分ヨリ縱ニ切取ルモノトス但シ鍛鋼品ノ形狀又ハ用途ニ依リ横ニ切取ルモ妨ナシ

第二十八條 鑄鋼材ノ試験片ハ鑄鋼材ト共ニ鑄造シ且熱處理ヲ爲シタル供試材ヨリ切取ルモノトス

前項ノ供試材ノ截面積ハ鑄鋼材ノ主體ノ截面積ニ對シ適當ナルモノト爲スヘシ

鑄鋼材ヨリ二箇以上ノ抗張試験片又ハ屈曲試験片ヲ採取スルトキハ成ルヘク隔リタル箇所ヨリ之ヲ採取スヘシ

第二十九條 壓延鋼材ハ平爐又ハ電氣爐ニ依リ製鋼セラレ

第二節 壓延鋼材

裂疵其ノ他ノ缺點ナキモノナルコトヲ要ス

第三十條 壓延鋼材ハ其ノ試験片カ鋼板又ハ形鋼ニ在リテハ左ノ第一號及第二號ノ試験ニ鋼材ニ在リテハ同各號ノ試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス

一 抗張試験 抗張力及標點間伸長百分率ハ左表ニ依ルコト但シ管海官廳ノ見込ニ依リ形鋼ニ付テハ其ノ抗張力カ左表ニ掲クル上限ヲ超ユルモ妨ケス

種類	抗張力(每平方耗斤)	標準抗張試験片		標點間伸長百分率
		第一號	第二號	
鋼板又ハ形鋼	四一以上 五〇以下	一	二	厚サ九耗以上 厚サ九耗未満 一七以上
鋼材		三	二	二五以上 三〇以上

二 屈曲試験 鋼板又ハ形鋼ニ在リテハ常溫ノ儘試験片ニ壓力ヲ加ヘ又ハ鏈打ニ依リ試験片ノ厚サノ一・五倍以內ノ内側半徑ニテ一八〇度屈曲スルモ裂疵ヲ生セサルコト

三 縱壓試験 徑ノ二倍ニ等シキ長サヲ有スル試験片ヲ赤熱シタル儘原長ノ三分ノ一ニ至ル迄縱ノ方向ニ壓縮スルモ裂疵ヲ生セサルコト

第三十一條 前條ノ抗張試験ニ於テ試験片カ標點間ノ中心ヲ得ス

ヨリ標點距離ノ四分ノ一以外ニ於テ切斷シ其ノ成績カ合格セサルトキハ其ノ試験ヲ無效トス
抗張試験、屈曲試験又ハ縱壓試験カ不合格ト爲リタル場合ハ申請ニ依リ當該試験ニ對シ其ノ試験片ヲ採取シタル鋼材ヨリ更ニ二箇ノ試験片ヲ採取シテ再試験ヲ行フコトヲ得
前項ノ場合ニ於テ二箇ノ試験片カ共ニ試験ニ合格シタル場合ニ於テハ之ヲ合格ト爲スコトヲ得
抗張試験、屈曲試験又ハ縱壓試験カ不合格ト爲リタル場合ニ於テハ之ニ依リ代表セラルル他ノ鋼材ニ付テハ鋼材毎ニ試験ヲ行ヒ合格スルニ非サレハ之ヲ合格ト爲スコトヲ得

ヲ得ス

第三十二條 鋼材ハ非金屬性物質カ内部ニ集積セサルモノナルコトヲ要ス

第三十三條 鋼材ハ第三十條及前條ノ規定ニ適合スル鋼材ヨリ製造シ左ノ各號ノ規定ニ依リ打展試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス

一 打展試験ニ用フル鋼材ノ數ハ同一徑ノモノノ重量四分ノ一遞又ハ其ノ端數毎ニ各一箇ト爲スコト但シ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムルトキハ適當ニ減スルコトヲ得

二 打展試験ニ在リテハ鋼材ノ頭部ヲ赤熱シテ脚部ノ徑ノ二・五倍迄扁平ニ打展スルモ其ノ縁ニ裂疵ヲ生セサルコト

打展試験カ不合格ト爲リタルトキハ倍數ノ鋼材ニ付再試験ヲ行フコトヲ得此ノ場合再試験ニ於テ一箇ト雖モ合格セサルモノアルトキハ之ニ依リ代表セラルル鋼材ハ之ヲ不合格トス

第三十四條 厚サ六耗未満ノ壓延鋼材、梁柱、單板舵ノ舵板其ノ他抗張力ヲ重要トセサル部分ニ使用スル壓延鋼材ニ付テハ抗張試験ヲ省略スルコトヲ得

短キ甲板室圍壁、石炭庫圍壁、鐵鎖庫圍壁、仕切隔壁、彎曲部龍骨、汽罐臺其ノ他ノ部分ニシテ強力ヲ重要トセサルモノニ使用スル壓延鋼材ニ付テハ管海官廳ノ見込ニ依リ材料試験ヲ省略スルコトヲ得

第三節 鍛鋼材

第三十五條 鍛鋼爐ハ平爐、轉爐、電氣爐又ハ坩堝爐ニ依リ製造シタル鋼塊ヨリ鍛造シ其ノ品質均一ニシテ裂疵其ノ他ノ缺點ナキモノナルコトヲ要ス
鍛鋼ニハ適當ナル熱處理ヲ爲スヘシ

第三十六條 鍛鋼材ハ主體ノ截面積ヲ原鋼塊ノ平均截面積ノ四分ノ一以內ニ、其ノ他ノ部分ノ截面積ヲ原鋼塊ノ平均截面積ノ三分ノ二以內ニ鍛鍊スヘシ但シ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三十七條 鍛鋼材ハ其ノ試験片カ左ノ各號ノ試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス

一 抗張試験 抗張力ハ鍛接ヲ爲スヘキ鍛鋼材ニ在リテハ每平方耗三四耗以上四〇耗以下、其ノ他ノ鍛鋼材ニ在リテハ每平方耗四四耗以上五五耗以下ニシテ其ノ數値ト標點間伸長百分率ノ一・五八倍トノ和カ九〇以上ナルコト

二 屈曲試験 鍛接ヲ爲スヘキ鍛鋼材ニ在リテハ常温ノ儘一八〇度屈曲シテ密接セシムルモ屈曲部ノ外側ニ裂疵ヲ生セサルコト

接鍛ヲ爲サル鍛鋼材ニ在リテハ常温ノ儘六耗以下ノ内側半徑ヲ以テ一八〇度屈曲スルモ裂疵ヲ生セサルコト但シ抗張力毎平方耗四九疋以上ノモノニ付テハ屈曲ノ内側半徑ヲ一〇耗迄増スコトヲ得

第三十八條 第三十五條第二項及前條ノ規定ハ小形鍛鋼材ニシテ鍛造完了ノ際一様ノ加熱状態ニ在ルモノ及強力ヲ重要トセサル鍛鋼材ニ付テハ之ヲ適用セス

第三十九條 第三十七條ノ抗張試験ニ於テ試験片カ標點間ノ中心ヨリ標點距離ノ四分ノ一以外ニ於テ切斷シタルトキハ申請ニ依リ再試験ヲ行フコトヲ得

抗張試験又ハ屈曲試験カ不合格ト爲リタルトキハ管海官廳ニ於テ試験ノ成績カ材質ヲ適當ニ表明セサルモノト認メル場合ニ限り當該試験ニ對シ更ニ二箇ノ試験片ヲ採取シ再試験ヲ行フコトヲ得

前項ノ再試験ヲ行ヒタル場合ニ於テ試験片中一箇ト雖モ合格セサルモノアルトキハ當該鍛鋼材ハ之ヲ不合格トス

二〇度以上屈曲スルモ裂疵ヲ生セサルコト

第四十三條 前條ノ抗張試験ニ於テ試験片カ標點間ノ中心ヨリ標點距離ノ四分ノ一以外ニ於テ切斷シタルトキハ申請ニ依リ再試験ヲ行フコトヲ得

抗張試験又ハ屈曲試験カ不合格ト爲リタルトキハ管海官廳ニ於テ試験ノ成績カ材質ヲ適當ニ表明セサルモノト認メル場合ニ限り更ニ同數ノ試験片ヲ採取シ再試験ヲ行フコトヲ得

前項ノ再試験ヲ行ヒタル場合ニ於テ試験片中一箇ト雖モ合格セサルモノアルトキハ當該鑄鋼材ハ之ヲ不合格トス

第四十四條 鑄鋼製ノ船首材、船尾骨材、舵、舵柄、舵柄弧及螺旋軸支肘ハ左ノ各號ノ試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス

一 落下試験 一材ニテ鑄造シタル船尾骨材ニ在リテハ該材ノ一端ヲ支點トシテ地面ト四五度ノ角度ヲ爲ス迄他端ヲ揚ケ又其ノ他ノ鑄鋼材ニ在リテハ其ノ形狀及重量ニ應シ二米乃至三米ノ高さヨリ之ヲ硬質ノ地面ニ落シ裂疵其ノ他ノ缺點ヲ生セサルコト尤モ豫メ鑄鋼材ノ突出部ノ形狀ニ相當スル穴ヲ地面ニ穿ツコトハ差支ナ

鋼船構造規程

ハ更ニ鍛鋼材ニ熱處理ヲ爲スコトヲ得
前項ノ熱處理ヲ爲シタル場合ニ於テハ新ニ抗張試験及屈曲試験ノ全部ヲ行フモノトス

第四節 鑄鋼材

第四十一條 鑄鋼材ハ平爐、轉爐、電氣爐又ハ坩堝爐ニ依リ鑄造シ其ノ品質均一ニシテ有害ナル疵、鑄巢其ノ他ノ缺點ナキモノナルコトヲ要ス

鑄鋼材ニハ適當ナル熱處理ヲ爲スヘシ
鑄鋼材ノ疵等ニシテ強力ニ對スル影響輕微ナリト認ムルモノニ付テハ豫メ管海官廳ノ承認ヲ受ケ鑄掛、電氣熔接又ハ他ノ適當ナル方法ニ依リ之ヲ補修スルコトヲ得

前項ノ補修ヲ爲シタル場合ニ於テ管海官廳必要アリト認ムルトキハ補修後更ニ該鑄鋼材ニ適當ナル熱處理ヲ爲スヘシ

第四十二條 鑄鋼材ハ其ノ試験片カ左ノ各號ノ試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス但シ強力ヲ重要トセサルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス

一 抗張試験 抗張力ハ每平方耗四一疋以上五五疋以下ニシテ標點間伸長百分率ハ二〇以上ナルコト
二 屈曲試験 常温ノ儘二五耗以下ノ内側半徑ヲ以テ一

シ

二 鏈打試験 前號ノ試験ヲ行ヒタル後鑄鋼材ヲ吊シ其ノ重量ニ應シ三疋乃至七疋ノ鏈ヲ以テ其ノ表面ヲ打ツモ有害ナル裂疵、鑄巢其ノ他ノ缺點ヲ認メサルコト

形狀特ニ複雑ニシテ落下試験ヲ行フトキハ變形ノ虞アル鑄鋼材ニ付テハ成ルヘク隔リタル兩端ヨリ各抗張試験片及屈曲試験片一箇宛ヲ採取シ總計四箇ノ試験片カ第四十二條ノ試験ニ合格スルトキハ落下試験ヲ省略スルコトヲ得此ノ場合ト雖モ鏈打試験ハ之ヲ省略スルコトヲ得ス

第四十五條 第四十二條ノ材料試験カ不合格ト爲リタルトキハ更ニ鑄鋼材ニ熱處理ヲ爲スコトヲ得
前項ノ熱處理ヲ爲シタル場合ニ於テハ新ニ抗張試験及屈曲試験ノ全部ヲ行フモノトス

第五節 難則

第四十六條 特殊鋼材、鐵材、黃銅材、可鍛鑄鐵材又ハ鑄鐵材ニ付テハ管海官廳ニ於テ特ニ必要アリト認ムル場合ニ限り其ノ指定スル所ニ依リ材料試験ヲ行フ

第四十七條 第三級船及第四級船ニ用フル材料ニ付テハ管海官廳ノ見込ニ依リ材料試験ヲ省略スルコトヲ得
第四十八條 管海官廳ハ材料規格ニ適合セサル材料又ハ材

四一九

料試験ヲ受ケサル材料ト雖モ其ノ使用ノ方法若ハ箇所ヲ限リ又ハ其ノ他ノ條件ヲ附シテ之ヲ使用セシムルコトヲ得

第三章 龍骨、船首材、船尾骨材

及船尾肋板

第一節 方形龍骨

第四十九條 方形龍骨ハ平爐若ハ電氣爐ニ依リ製造シタル鋼塊ヨリ鍛造若ハ壓延シ又ハ屑鐵若ハ屑鋼ヨリ鍛造スヘシ

方形龍骨ヲ屑鐵若ハ屑鋼ヨリ鍛造スル場合ニ於テハ兩者ノ混合物ヲ使用スルコトナク且成ルヘク長材ニ仕上クヘシ

第五十條 方形龍骨ノ寸法ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シL八〇米以上ノ船舶ノ方形龍骨ノ寸法ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

深サ $110+1.28L$ (耗ニテ)
厚サ $10+0.67L$ (耗ニテ)

第五十一條 方形龍骨ノ嵌接ノ長サハ該龍骨ノ深サノ二・五倍以上ト爲シ嵌接ノ末端ニ於ケル銕孔ハ龍骨ヲ盤木上ニ正確ニ配列シタル後錐採スヘシ

第五十二條 方形龍骨ト船首材又ハ船尾骨材トノ嵌接ハ方形龍骨相互ノ嵌接ト同等以上ノ效力ノモノト爲スヘシ

第二節 平板龍骨

第五十三條 平板龍骨ノ寸法ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ首尾兩端ノモノヲ除キ中央部Lノ五分ノ三間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ算式ニ依ルモノノ九〇%迄減スルコトヲ得

幅 $87.5+21.5\left(\frac{L}{10}\right) + \left(\frac{L}{10}\right)^2$ (耗ニテ)
厚サ $4+d+0.067L$ (耗ニテ)

滿載吃水カDノ八五%ヲ超ユルトキハDノ八五%ヲ前項ノ算式ノdニ充ツヘシ但シ遮浪甲板船ニ在リテハ此ノ限ニ在ラス

平板龍骨ノ厚サハ前二項ノ規定ニ拘ラス之ニ隣接スル船底外板ノ厚サヨリ小ト爲スコトヲ得ス

第五十四條 平板龍骨ハ船首材又ハ船尾骨材ト十分ニ累接シ堅牢ニ固著シ且船首材又ハ船尾骨材ノ踵部ニ附スル外板ト肋骨心距以上累接セシムヘシ

第三節 船首材

第五十五條 船首材ハ方形龍骨ニ對シ定メタル材料又ハ鑄

鋼材ヲ以テ製造スヘシ

第五十六條 船首材ノ寸法ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ滿載吃水線ヨリ上部ニ於テハ漸次其ノ寸法ヲ減少シ頂上ニ於テハ截面積ヲ下部ニ於ケル截面積ノ七〇%ト爲スコトヲ得

幅 $74+18.5\left(\frac{L}{10}\right) - 0.5\left(\frac{L}{10}\right)^2$ (耗ニテ)
厚サ $6+6.9\left(\frac{L}{10}\right) - 0.15\left(\frac{L}{10}\right)^2$ (耗ニテ)

L一八五米ヲ超ユル船舶ノ船首材ノ寸法ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第五十七條 船首材相互ノ嵌接ノ長サハ船首材ノ規定ノ幅ノ二倍以上ト爲スヘシ

第四節 船尾骨材

第五十八條 船尾骨材ハ鍛鋼材又ハ鑄鋼材ヲ以テ製造スルカ又ハ屑鐵若ハ屑鋼ヨリ鍛造スヘシ

船尾骨材ヲ屑鐵又ハ屑鋼ヨリ鍛造スル場合ニ於テハ兩者ノ混合物ヲ使用スルコトヲ得ス

第五十九條 推進器孔ヲ有セサル船尾骨材ノ寸法ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ舵頭管ノ下

部ヨリ上方ニ至ルニ從ヒ漸次其ノ寸法ヲ減少シ頂上ニ於テハ截面積ヲ下部ニ於ケル截面積ノ七五%ト爲スコトヲ得

幅 $74+18.5\left(\frac{L}{10}\right) - 0.5\left(\frac{L}{10}\right)^2$ (耗ニテ)
厚サ $8+0.76L$ (耗ニテ)

L一八五米ヲ超ユル船舶ノ推進器孔ヲ有セサル船尾骨材ノ寸法ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第六十條 推進器柱ノ寸法ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ車軸孔ヨリ上部ノ幅ハ算式ニ依ルモノノ八五%ト爲スコトヲ得

幅 $80.5+15.6\left(\frac{L}{10}\right) - 0.17\left(\frac{L}{10}\right)^2$ (耗ニテ)
厚サ $14.4+10.4d+0.89L$ (耗ニテ)

滿載吃水カDノ八五%ヲ超ユルトキハDノ八五%ヲ前項ノ算式ノdニ充ツヘシ但シ遮浪甲板ニ在リテハ此ノ限ニ在ラス

L二二九米ヲ超ユル船舶ノ推進器柱ノ寸法ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

推進器孔ヲ有スル船舶ノ船尾材ノ寸法ハ推進器柱ノ車軸

孔ヨリ上部ノ寸法以上ト爲スヘシ但シ舵頭管ノ下部ヨリ上方ニ至ルニ從ヒ漸次其ノ寸法ヲ減少シ頂上ニ於テハ截面積ヲ下部ニ於ケル截面積ノ五〇%ト爲スコトヲ得

上方垂直部ニ設クルコトヲ得ス
第六十五條 船尾骨材ノ踵部ニシテ推進器柱ト船尾材トノ間ニ在ル部分ハ成ルヘク短クシ其ノ截面積ヲ推進器柱ノ車軸孔ヨリ下部ノ截面積ノ一・二五倍以上ト爲シ其ノ幅ヲ成ルヘク大ナラシムヘシ

第六十一條 高速力ノ汽船ノ船尾骨材ノ寸法ハ前二條ニ定メタルモノヨリ適當ニ増加スルコトヲ要ス

第六十六條 船尾骨材ノ踵部ハ推進器柱ヲ有セサル船舶ニ在リテハ船尾材下部ノ前面ヨリ其ノ幅ノ九倍以上、之ヲ有スル船舶ニ在リテハ推進器柱下部ノ前面ヨリ其ノ幅ノ一〇倍及一・五米ノ中大ナル長サ以上前方ニ延長シ龍骨ト結合スヘシ但シ船尾隔壁ヲ超エテ延長スヘキ場合ニ於テ特ニ固著ヲ十分ニ爲ストキハ延長ヲ該隔壁ニ止ムルコトヲ得

特殊形状ノ舵又ハ特大ナル舵ヲ備フル爲船尾骨材ノ補強ヲ要スルトキ亦前項ニ同シ

第六十七條 平衡舵ヲ支持スル爲特ニ後方ニ突出セル船尾骨材踵部ノ寸法ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第六十二條 推進器柱ノ車軸孔ノ兩側ニ於ケル厚サハ推進器柱下部ノ厚サノ六〇%以上ト爲スヘシ

第五節 船尾肋板及之ト船尾骨材トノ固著

第六十三條 船尾骨材ノ截面力矩形ナラサル場合ニ於テハ強力及剛性力前四條ニ依ルモノト同等以上ト爲ル様其ノ寸法ヲ定ムヘシ

第六十八條 船尾肋板ノ厚サハ二重底實體肋板ノ厚サニ推進器孔ヲ有セサル船舶ニ在リテハ二・五耗ヲ、之ヲ有スル船舶ニ在リテハ五耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲シ其ノ深サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ

第六十四條 船尾骨材ヲ二材以上ニテ構造スルトキハ其ノ嵌接ノ幅ハ船尾骨材ノ幅ノ一・五倍以上、嵌接ノ長サハ船尾骨材ノ幅ノ三倍以上、嵌接末端ノ厚サハ船尾骨材ノ厚サノ一三%以上ト爲シ四列鉄ヲ以テ固著スヘシ

第六十九條 船尾材ハ船尾肋板ノ上端迄延長シ各側ニ於テ山形鋼ヲ以テ該肋板ニ二列鉄固著ト爲スヘシ

巡洋艦型船尾ヲ有スル船舶ノ船尾材ノ嵌接ハ上端壺金ノ

第七十二條 肋板ハ肋骨毎ニ之ヲ設クヘシ
第七十三條 肋板ノ寸法ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ肋骨心距力其ノ標準心距ヲ超ユルトキハ超過五〇%耗ニ付一五耗ノ割合ヲ以テ肋板ノ深サヲ増スヘシ

小形船ニ付テハ其ノ深サヲ斟酌スルコトヲ得

上ト爲スヘシ

96+9.12L

(耗ニテ)

第四章 單底構造

第一節 肋板

船尾肋板ノ上端ニ附スル山形鋼ノ厚サハ船尾肋板ノ厚サ以上ト爲シ其ノ各邊ノ幅ハ固著鉄ノ徑ニ應シ適當ニ定ムヘシ

第七十條 壺金ハ船尾骨材ト共ニ鍛造又ハ鑄造シ上端壺金ハ成ルヘク舵頭管ニ接近セシムヘシ

第六十九條 船尾材ハ船尾肋板ノ上端迄延長シ各側ニ於テ山形鋼ヲ以テ該肋板ニ二列鉄固著ト爲スヘシ

第七十一條 不平衡舵ヲ有スル船舶ノ船尾材ニ於ケル壺金ノ深サハ舵頭材ノ徑ノ七五%以上ト爲スヘシ但シ下端壺金ノ深サハ其ノ内部ニ嵌輪ヲ取附クルトキハ舵頭材ノ徑ノ二五%以上、嵌輪ヲ取附ケサルトキハ二七・五%以

L八五米ヲ超ユル汽船ニ在リテハ推進器柱ヲ上方ニ延長シ船尾材ノ固著方法ニ準シ之ヲ肋板ニ固著スヘシ

第七十二條 肋板ノ厚サ 0.01C+38 (耗ニテ)

特殊ノ形状ノ船尾骨材ノ上部ノ固著ハ前二項ノ規定ニ依ルモノト同等以上ノ效力ヲ有スルモノト爲スヘシ

第七十三條 肋板ノ厚サ 0.01C+38 (耗ニテ)

第六節 船尾骨材ニ於ケル舵ノ壺金

第七十四條 壺金ハ船尾骨材ト共ニ鍛造又ハ鑄造シ上端壺金ハ成ルヘク舵頭管ニ接近セシムヘシ

第六節 船尾骨材ニ於ケル舵ノ壺金

第七十五條 不平衡舵ヲ有スル船舶ノ船尾材ニ於ケル壺金ノ深サハ舵頭材ノ徑ノ七五%以上ト爲スヘシ但シ下端壺金ノ深サハ其ノ内部ニ嵌輪ヲ取附クルトキハ舵頭材ノ徑ノ二五%以上、嵌輪ヲ取附ケサルトキハ二七・五%以

第七十條 壺金ハ船尾骨材ト共ニ鍛造又ハ鑄造シ上端壺金ハ成ルヘク舵頭管ニ接近セシムヘシ

第七十六條 船尾骨材ノ踵部ハ推進器柱ヲ有セサル船舶ニ在リテハ船尾材下部ノ前面ヨリ其ノ幅ノ九倍以上、之ヲ有スル船舶ニ在リテハ推進器柱下部ノ前面ヨリ其ノ幅ノ一〇倍及一・五米ノ中大ナル長サ以上前方ニ延長シ龍骨ト結合スヘシ但シ船尾隔壁ヲ超エテ延長スヘキ場合ニ於テ特ニ固著ヲ十分ニ爲ストキハ延長ヲ該隔壁ニ止ムルコトヲ得

第七十一條 不平衡舵ヲ有スル船舶ノ船尾材ニ於ケル壺金ノ深サハ舵頭材ノ徑ノ七五%以上ト爲スヘシ但シ下端壺金ノ深サハ其ノ内部ニ嵌輪ヲ取附クルトキハ舵頭材ノ徑ノ二五%以上、嵌輪ヲ取附ケサルトキハ二七・五%以

第七十七條 平衡舵ヲ支持スル爲特ニ後方ニ突出セル船尾骨材踵部ノ寸法ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

壺金ノ厚サハ其ノ内部ニ嵌輪ヲ取附クルトキハ舵頭材ノ徑ノ二五%以上、嵌輪ヲ取附ケサルトキハ二七・五%以

第七十八條 船尾肋板ノ厚サハ二重底實體肋板ノ厚サニ推進器孔ヲ有セサル船舶ニ在リテハ二・五耗ヲ、之ヲ有スル船舶ニ在リテハ五耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲シ其ノ深サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ

徑ノ二五%以上、嵌輪ヲ取附ケサルトキハ二七・五%以

第七十九條 船尾材ハ船尾肋板ノ上端迄延長シ各側ニ於テ山形鋼ヲ以テ該肋板ニ二列鉄固著ト爲スヘシ

主機室ニ在リテハ肋板ノ厚サヲ第一項ニ定ムルモノヨリ一耗増シ汽罐室ニ在リテハ二・五耗増スヘシ
主機室ノ下方ニ於テハ肋板ヲ特ニ堅牢ナル構造ト爲スヘシ

隔壁ノ一部ヲ構造スル肋板ノ寸法ニ付テハ第二百七十五條ノ規定ニ依ルヘシ

第七十四條 肋板ノ上縁ハ何レノ部分ニ於テモ船ノ中心線ニ於ケル其ノ上縁ヨリ低カラサルコトヲ要ス

船ノ中央部ニ在リテハ中心線ヨリBノ八分ノ三ニ相當スル箇所ニ於ケル肋板ノ深サヲ前條ノ算式ニ依ルモノノ二分ノ一以上ト爲スヘシ

船底ノ傾斜ニ特大ナル船舶ニ在リテハ中心線ニ於ケル肋板ノ深サヲ適當ニ増スヘシ

第七十五條 肋板ヲ肋骨ニ固著スル肋板ノ寸法ハ左ノ各號ニ依リ之ヲ定メ其ノ遊邊ヲ曲縁ト爲スヘシ

一 龍骨ノ上面ヨリ測リタル上端ノ高サヲ中心線ニ於ケル肋板ノ規定ノ深サノ二倍ト爲スコト

二 肋骨ノ内縁ヨリ肋板ノ上縁ニ沿ヒ測リタル肘板ノ幅ハ中心線ニ於ケル肋板ノ深サ以上ト爲スコト

三 厚サヲ其ノ箇所ニ於ケル肋板ノ規定ノ厚サ以上ト爲

スコト

第七十六條 肋板ニハ中心線ノ各側及船底扁平ナル船舶ニ在リテハ彎曲部ノ下部ニ於テ其ノ下縁ニ附スル山形鋼ノ上部ニ塗水孔ヲ設クヘシ

肋板ニハ輕目孔ヲ設クルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ肋板ノ深サヲ増スカ又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ適當ニ補強スヘシ

第二節 肋板ニ附スル山形鋼

第七十七條 船内肋骨ト第七十五條ノ肘板トハ肋骨ノ深サノ二・七五倍以上ヲ累接スルコトヲ要ス

船内肋骨ノ下端ト船ノ中心線トノ間ニ於ケル肋板ハ其ノ厚サニ等シキ厚サノ單山形鋼ヲ以テ外板ニ一列銲固著ト爲スヘシ

前項ノ山形鋼ノ各邊ノ幅ハ第四百七十條ノ規定ニ依リ之ヲ定ムヘシ

船内肋骨ノ截面積カ前二項ニ定ムル山形鋼ノ截面積以上ナルトキハ船内肋骨ヲ船ノ中心線迄延長シ前二項ノ山形鋼ニ代用スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ延長シタル船内肋骨ト肋板トノ累接ノ幅ヲ一列銲固著ニ對スルモノニ止ムルモ妨ナシ

第七十八條

肋板ノ上縁ニハ中心線貫通板ヲ備フル場合ニ於テハ中心線ヨリ船側迄、其ノ他ノ場合ニ於テハ船側ヨリ船側迄連續スル山形鋼ヲ附スヘシ

前項ノ山形鋼ハ厚サヲ其ノ箇所ニ於ケル肋板ノ厚サニ等シクシ各邊ノ幅ヲBニ應シ左表ニ依リ定メ廣邊ヲ水平ニ置クヘシ

山形鋼	B	
	下以4	上超テ
60 × 50 (耗)	4	5
60 × 60	5	7
65 × 65	7	9
75 × 65	9	12
75 × 75	12	41
90 × 75	14	15

主機室内及汽罐臺ノ下方ニ於ケル肋板ノ上縁ニ附スル山形鋼ハ之ヲ二重ト爲スヘシ

第七十九條 肋板ノ上縁ニ附スル山形鋼又ハ第九十五條第二項ノ規定ニ依リ肋板ノ下縁ニ連續シテ取附クルコトヲ要スル山形鋼ヲ銲接スルトキハ之ニ覆山形鋼又ハ背面山形鋼ヲ附シ銲合ノ各側ニ於テ三箇以上ノ銲ヲ以テ固著ス

鋼船造構規程

ヘシ

第八十條

肋板ノ厚サヲ規定ノ厚サヨリ〇・五耗以上増加シ且其ノ上縁ヲ上縁山形鋼ノ規定ノ幅上縁曲縁スルトキハ該山形鋼ヲ省略スルコトヲ得但シ主機室内、汽罐臺下及船首ヨリLノ四分ノ一問ニ在リテハ此ノ限ニ在ラス

第八十一條

中心線貫通板ト肋板トハ貫通板ノ厚サニ等シキ厚サノ二重山形鋼又ハ二列銲單山形鋼ヲ以テ固著スヘシ但シL七〇米未滿ノ船舶ニ在リテハ一列銲單山形鋼固著ト爲スコトヲ得

前項ノ堅山形鋼ノ各邊ノ幅ハ第四百七十條ノ規定ニ依リ之ヲ定メ銲ノ數ハ肋板ノ規定ノ深サヨリ貫通板ノ下縁ニ附スル山形鋼ノ堅邊ノ規定ノ幅ヲ減シタル長サニ對シ銲徑ノ四倍ノ心距ニ配置シ得ルモノト爲スヘシ

第三節 中心線内龍骨

第八十二條 中心線内龍骨ハ左ノ各號ノ一ニ掲クル構造ノモノト爲シ出來得ル限り船首尾ニ延長スヘシ但シL六〇

米以上ノ船舶又ハ平板龍骨ヲ有スル船舶ニ在リテハ第三號ノ構造ノモノト爲スコトヲ得ス

一 中心線貫通板ト平置板又ハ同一効力ノ形鋼トヲ以テ構造スルモノ

二 二重山形鋼ト斷切板トヲ以テ構造スルモノ

三 二重球山形鋼ヲ以テ構造スルモノ

第八十三條 中心線貫通板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ減少シ首尾兩端ニ於テハ其ノ八五%ト爲スコトヲ得

$$0.058L + 6.4 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

中心貫通板ハ其ノ兩側ニ平置板ヲ設クルトキハ之等ヲ固著スル山形鋼ノ上端迄、貫通板上ニ平置板ヲ設クルトキハ肋板ノ上端迄達セシムヘシ

第八十四條 平置板ハ船首隔壁ヨリ船尾隔壁迄達セシメ其ノ厚サハ中心線貫通板ノ厚サニ等シク爲スヘシ

中心線貫通板ノ兩側ニ設クル平置板ノ幅ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ一五〇%耗未滿ト爲スコトヲ得ス

$$8.3L - 100 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ減少シ首尾兩端ニ於テハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノノ八五%ト爲スコトヲ得

$$0.066L + 5.6 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

前項ノ斷切板ト肋板及平板龍骨トハ斷切板ノ厚サニ等シキ厚サヲ有スル短山形鋼ヲ以テ一列銲固著ト爲スヘシ
主機室内、推力受臺ノ下部及前部Lノ四分ノ一間ニ於テハ斷切板ト平板龍骨トヲ二重山形鋼ヲ以テ一列銲固著ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列銲固著ト爲スヘシ

第八十七條 第八十二條第二項ニ掲クル山形鋼ハ其ノ厚サヲ斷切板ノ厚サ以上ト爲シ其ノ截面積ヲ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ截面積ヲ減シ首尾兩端ニ於テハ中央部ニ於ケルモノノ八〇%ト爲スコトヲ得

$$0.303L + 4.5 \quad (\text{平方寸} = \text{チ})$$

各山形鋼ハ肋板上ニ縱通セシメ二箇ノ銲ヲ以テ肋板上ニ縁ニ附スル山形鋼ニ固著スヘシ

第八十八條 第八十二條第三號ニ掲クル球山形鋼ノ截面積ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ截面積ヲ減

前項ノ平置板ノ幅二〇%耗ヲ超ユルトキハ中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ幅ヲ減シ首尾兩端ニ於テハ前項ニ定ムルモノノ八〇%ト爲スコトヲ得但シ二〇%耗未滿ト爲スコトヲ得ス

中心線貫通板上ニ設クル平置板ノ幅ハ前二項ニ依ルモノノ二倍ト爲スヘシ

第八十五條 中心線貫通板ト平置板及平板龍骨トハ貫通板ノ厚サニ等シキ厚サヲ有スル山形鋼ヲ以テ一列銲固著ト爲スヘシ

中心線貫通板ト平板龍骨トヲ固著スル山形鋼及中心線貫通板ト前條第四項ニ掲クル平置板トヲ固著スル山形鋼ハ主機室、内推力受臺ノ下部、前部Lノ四分ノ一間及貫通板ヲ水密構造ト爲ス箇所ニ於テハ二重ト爲スヘシ

中心線貫通板ト平板龍骨又ハ前條第四項ニ掲クル平置板トヲ固著スル單山形鋼ヲ銲接スルトキハ其ノ背面ニ適當ナル覆山形鋼ヲ附スヘシ

中心線貫通板ト前條第二項ニ掲クル平置板トヲ固著スル山形鋼ヲ銲接スルトキハ適當ナル覆山形鋼ヲ附スヘシ

第八十六條 第八十二條第二號ニ掲クル斷切板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ中央部

ノ首尾兩端ニ於テハ中央部ニ於ケルモノノ九〇%ト爲スコトヲ得

$$75 \left(\frac{L}{100} \right)^2 - 12.7 \left(\frac{L}{100} \right) + 19.1 \quad (\text{平方寸} = \text{チ})$$

各球山形鋼ハ其ノ廣邊ヲ垂直ト爲シ肋板上ニ縱通セシメ二箇ノ銲ヲ以テ肋板上ニ縁ニ附スル山形鋼ニ固著スヘシ
第八十九條 中心線内龍骨ヲ構造スル各材ノ厚サハ汽罐室ニ於テハ前各條ニ依リ定メタルモノニ二耗ヲ加ヘタルモノト爲スヘシ但シ平板龍骨ニ附スル山形鋼ニシテ「セメント」ヲ以テ覆ハルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第四節 側内龍骨

第九十條 B九米以下ノ船舶ニ在リテハ各舷ニ一個、九米ヲ超ユル船舶ニ在リテハ各舷ニ二箇ノ側内龍骨ヲ設クヘシ

前部Lノ四分ノ一間ニ於ケル船底ノ扁平ナル部分ニ於テハ側内龍骨ノ間隔ヲ一米以内ト爲スヘシ

第九十一條 側内龍骨ハ肋板上ニ縱通二重山形鋼又ハ同一効力ノ平置板ヲ設ケ之ヲ斷切板及短山形鋼ヲ以テ外板ニ固著シタル構造ト爲シ出來得ル限り船首尾ニ延長スヘシ
L三〇米未滿ノ船舶ノ側内龍骨ハ船首船底ノ扁平ナル部

分ヲ除キ肋板上ニ二重山形鋼ヲ縦通セシメタル構造ト爲
スコトヲ得

第九十二條 側内龍骨ノ縦通山形鋼ハ其ノ厚サヲ中心線貫
通板ノ厚サノ八五%以上ト爲シ其ノ截面積ヲ左ノ算式ニ
依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$0.227 L \times 4.4 \quad (\text{平方厘米})$$

前項ノ山形鋼ハ成ルヘク不等邊山形鋼ト爲シ各二箇ノ鉄
ヲ以テ肋板ノ上縁ニ附スル山形鋼ニ固著スヘシ

第九十三條 側内龍骨ノ斷切板ハ其ノ厚サヲ中心線貫通板
ノ厚サノ八五%以上ト爲シ之ヨリ少カラサル厚サヲ有ス
ル短山形鋼ヲ以テ外板ニ一列鉄固著ト爲スヘシ但シ主機
室以外ノ場所ニ於テハ斷切板ノ厚サヲ〇・五耗増ストキ
ハ其ノ下縁ヲ曲線シ外板ニ固著スルコトヲ得

中央部ニ機關室ヲ備フル船舶ニ在リテハ前部Lノ五分ノ
一間、船尾ニ機關室ヲ備フル船舶ニ在リテハ前部Lノ四
分ノ一間ニ於テハ外板ト斷切板トヲ二重山形鋼ヲ以テ一
列鉄固著ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列鉄固著ト爲ス
ヘシ

主機室ノ下部ニ於テハ斷切板ノ厚サヲ中心線貫通板ノ厚
サ以上ト爲シ之ヲ其ノ厚サ以上ノ厚サヲ有スル短山形鋼

項ノ規定ハ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

第九十六條 船首尾部ニ於テハ漸次肋板ノ深サヲ増シ兩舷
ノ固著ヲ十分ナラシムヘシ此ノ場合ニ於テハ肋板ノ深サ
ノ程度ニ依リ第七十五條ニ定ムル船側ニ附スル肋板ヲ省
略スルコトヲ得

第九十七條 船尾艙内ノ肋板ハ船尾管ノ上部迄達セシムヘ
シ船尾艙内ノ肋板ヲ船尾管ノ上部迄達セシムルコト實際
上困難ナルトキハ船尾管ノ上部ニ適當ナル兩舷結合板ヲ
取附ケ該板ノ上下兩縁ヲ曲線ト爲スカ又ハ該縁ニ山形鋼
ヲ附シテ防撓スヘシ

第九十八條 發動機又ハ特大ナル馬力ノ機關ヲ主機トス
ル船舶ニ在リテハ特ニ船尾船底ノ構造ヲ堅牢ナラシムヘ
シ

第五章 二重底構造

第一節 總 則

第九十九條 L一〇〇米以上ノ船舶ニ在リテハ成ルヘク船
首隔壁ヨリ船尾隔壁迄通達スル二重底ヲ設クヘシ
一部ニ設クル二重底ノ構造ニ付テハ管海官廳ノ承認ヲ受
ケ本章ノ規定ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

鋼船構造規程

ヲ以テ肋板ニ固著スヘシ

梁柱ノ下部其ノ他必要ナル箇所ニ於テハ斷切板ヲ短山形
鋼ヲ以テ肋板ニ固著スヘシ

第九十四條 側内龍骨ノ縦通山形鋼及斷切板ノ厚サハ汽罐
室及其側部ノ石炭庫ニ於テハ前二條ニ依リ定メタルモノ
ニ二耗ヲ加ヘタルモノト爲スヘシ斷切板ト外板トヲ固著
スル短山形鋼ニシテ「セメント」ヲ以テ覆ハレサルモノ
ニ付亦同シ

第五節 船首尾部ニ於ケル補強

第九十五條 中央部ニ機關室ヲ備フル船舶ニ在リテハ前部
Lノ五分ノ一間、船尾ニ機關室ヲ備フル船舶ニ在リテハ
前部Lノ四分ノ一間ニ於テハ外板ト肋板トヲ二重山形鋼
ヲ以テ一列鉄固著ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列鉄固
著ト爲スヘシ但シ船首隔壁ヨリ前方ニ於テハ此ノ限ニ在
ラス

前項ノ山形鋼ハ中心線貫通板ヲ備フル場合ニ於テハ中心
線ヨリ船側迄、其ノ他ノ場合ニ於テハ船側ヨリ船側迄連
續セシムヘシ

L五〇米未満ニシテ中央部ニ機關室ヲ備フル船舶ニ在リ
テハ其ノ肋骨心距力標準心距ヨリ大ナラサルトキハ第一

第一百條 二重底ハ水密ニ構造シ空氣管ノ上端迄ノ水高壓力
及水密隔壁ヲ第二甲板ニ止ムル船舶ニ在リテハ第二甲板
迄、其ノ他ノ船舶ニ在リテハ上甲板迄ノ水高壓力ノ中大
ナルモノヲ以テ其ノ水密ヲ試験スヘシ

第一百一條 水密ヲ要セサル實體肋板及桁板ニハ人孔、通氣
孔及通水孔ヲ設クヘシ但シ中央部Lノ四分ノ三間ニ於ケ
ル中心線桁板ニハ管海官廳ノ承認ヲ受クルニ非サレハ人
孔ヲ設クルコトヲ得ス

前部Lノ四分ノ一間ニ於ケル人孔ハ其ノ中心ヲ當該箇所
ノ二重底ノ深サノ中心ヨリ上方ニ置キ實體肋板ニ設クル
モノニ在リテハ其ノ高サヲ中心線桁板ノ高サノ三分ノ一
以下、其ノ幅ヲ六一〇耗以下ト爲シ桁板ニ設クルモノニ
在リテハ其ノ高サヲ中心線桁板ノ高サノ二分ノ一以下、
其ノ幅ヲ三八〇耗以下ト爲スヘシ但シL一〇〇米未満ノ
船舶又ハ管海官廳ニ於テ特ニ差支ナシト認ムル場合ニ於
テハ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

第一百二條 内底板ニハ適當ナル數ノ人孔ヲ設ケ之ニ鋼製ノ
蓋板ヲ備フヘシ

前項ノ蓋板ヲ螺釘ヲ以テ内底板ニ取附クルトキハ人孔ノ周圍ニ縁環ヲ取附クヘシ

船艙ノ二重底上ニ内張板ナキ場合ニ於テ人孔ノ蓋板又ハ其ノ取附金具カ突起スルトキハ該孔ノ周圍ニ縁材ヲ取附ケ木製又ハ鋼製ノ蓋ヲ設クヘシ

第三百三條 旅客船ノ二重底ニハ軸路ノ後端ニ於ケルモノヲ除クノ外管海官廳ノ承認ヲ受クルニ非サレハ船底外板ニ達スル塗水溜ヲ設クルコトヲ得ス

二重底ニ設クル塗水溜ハ成ルヘク其ノ深サヲ二重底ノ深サノ二分ノ一以内ト爲スヘシ

第四百條 中心線桁板ヲ固著スル上下山形鋼ノ各邊ノ幅ハLニ應シ左表ニ依リ定メ其ノ他ノ二重底用山形鋼ノ各邊ノ幅ハ第四百七十條ノ規定ニ依リ之ヲ定ムヘシ

山形鋼ノ邊	L	
	以下70	以下70
鋼形山部下	75	95
形鳥千固	75	95
形鳥千固	90	110
形鳥千固	100	140
形鳥千固	100	140
形鳥千固	115	168
形鳥千固	130	174
形鳥千固	130	174

油密一列鉸固著ノ山形鋼ノ邊ノ幅ハ必要ニ應シ前項ニ依ルモノヨリ適當ニ増加スヘシ

第三百五條

汽罐室ノ二重底用山形鋼ニシテ全部「セメント」ニ依リ覆ハルルモノノ厚サハ以下本章ノ規定ニ拘ラス船内ニ於ケル之ニ相當スル山形鋼ノ厚サト等シク爲スコトヲ得

第三百六條

國際航海ニ從事スル旅客船ノ二重底構造ニ付テハ本章ノ規定ニ依ルノ外船舶區畫規程ノ定ムル所ニ依ル

第二節 中心線桁板

第三百七條

中心線桁板ノ高サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノト爲スヘシ但シ六八〇耗未滿ト爲スコトヲ得ス

$$4L + 41.6d + 261 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

第三百八條

中心線桁板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ減シ首尾兩端ニ於テハ算式ニ依ルモノノ八五%ト爲スコトヲ得

二 主機室內及汽罐室ノ下部

三 橫置隔壁ノ下部

船首ヨリLノ五分ノ一ニ相當スル箇所ト四分ノ一ニ相當スル箇所トノ間ニ於テハ實體肋板ノ心距ヲ適當ニ定メ前後ヲ通シ該心距ニ急激ナル變化ナカラシムヘシ

第三百十一條

實體肋板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ主機室內ニ於テハ一・五耗、汽罐室內ニ於テハ三耗ヲ増スヘシ

$$0.035L + 4.9 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

第三百十二條

實體肋板ト外板及内底板トヲ固著スル山形鋼ノ厚サハ其ノ箇所ニ於ケル實體肋板ノ厚サ以上ト爲スヘシ但シL三〇米ヲ超ユル船舶ニ在リテハ機關室以外ノ箇所ニ限り其ノ箇所ニ於ケル實體肋板ノ厚サニ左ノ算式ニ依ル厚サヲ加ヘタルモノナルコトヲ要ス

$$\frac{L}{100} - 0.3 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

前項但書ノ規定ニ依リ加フヘキ厚サハ一・五耗ヲ超ユルコトヲ要セス

前部Lノ五分ノ一間ニ於テハ第一項ノ山形鋼ヲ中心線桁板ヨリ縁板迄連續シタルモノト爲シ且實體肋板ト外板ト

$$0.066L + 5.0 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

汽罐室ニ於ケル中心線桁板ノ厚サハ前項ニ依ル厚サニ二耗ヲ増シタルモノト爲スヘシ

第三百九條

中心線桁板ト平板龍骨及内底板トハ二重山形鋼ヲ以テ固著スヘシ但シL一〇〇米以上一四〇米未滿ノ船舶ニ在リテハ單山形鋼ヲ以テ二列鉸固著ト爲シ、L一〇〇米未滿ノ船舶ニ在リテハ主機室內、推力受臺ノ下部及前部Lノ四分ノ一間ニ於テハ單山形鋼ヲ以テ二列鉸固著ト爲シ、其ノ他ノ箇所ニ於テハ單山形鋼ヲ以テ一列鉸固著ト爲スコトヲ得

前項ノ下部山形鋼ノ厚サハ中心線桁板ノ厚サニ一耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲シ上部山形鋼ノ厚サハ中心線内底板ノ厚サ以上ト爲スヘシ

第一項ノ單山形鋼ヲ衝接スルトキハ其ノ背面ニ適當ナル覆山形鋼ヲ附スヘシ

第三節 實體肋板

第四百條

二重底ニハ三・五米ヲ超エサル心距ニ肋骨ノ箇所ニ實體肋板ヲ設クヘシ
左ニ掲クル箇所ニハ肋骨毎ニ實體肋板ヲ設クヘシ
一 前部Lノ五分ノ一間

ヲ固著スル山形鋼ヲ二重ト爲スヘシ
往復動主汽機ノ下部、其ノ前後適當ノ間、汽罐臺ノ下部
及推力受臺ノ下部ニ於テハ實體肋板ト内底板トハ二重山
形鋼ヲ以テ固著スルカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列銲固著ト
爲スヘシ

第百十三條 L一五〇米以上ノ船舶ニ在リテハ實體肋板ト
中心線桁板トヲ二重山形鋼ヲ以テ固著スルカ又ハ單山形
鋼ヲ以テ二列銲固著ト爲スヘシ

L一五〇米未満ノ船舶ノ實體肋板ト中心線桁板トハ主機
室內竝ニ推力受臺及汽罐臺ノ下部ニ於テハ二重山形鋼ヲ
以テ固著スルカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列銲固著ト爲シ其
ノ他ノ箇所ニ於テハ單山形鋼ヲ以テ固著スヘシ
前二項ノ山形鋼ノ厚サハ汽罐室內ニ於テハ實體肋板ノ厚
サト等シクシ其ノ他ノ箇所ニ於テハ主機室內ニ於ケル實
體肋板ノ厚サト等シク爲スヘシ

第百十四條 實體肋板ト側桁板又ハ縁板トヲ固著スル堅山
形鋼ノ厚サハ其ノ箇所ニ於ケル實體肋板ノ厚サ以上ト爲
スヘシ

第百十五條 L八五米以上ノ船舶ノ實體肋板竝ニL八五米
未満ノ船舶ノ二肋骨心距以上ノ間隔ニ配置セラレタル實

體肋板ニハ其ノ厚サニ等シキ厚サヲ有スル等邊山形鋼ヲ
一・五米ヲ超エサル間隔ニ人孔ノ箇所ヲ避ケ堅ニ取附ク
ヘシ

第百十六條 隔壁ノ下部及其ノ防撓材桁板ノ外端ノ下部ニ
於ケル肋板ハ適當ニ之ヲ防撓スヘシ

第百十七條 二重底ニハ水密肋板ヲ成ルヘク水密隔壁ノ下
部ニ設ケ之ヲ區畫スヘシ

水密肋板ハ其ノ厚サヲ汽罐室內ニ於ケル實體肋板ノ厚サ
ニ等シクシ且中心線桁板ノ深サカ九〇〇耗ヲ超ユル場合
ニ於テハ水密肋板ニ九〇〇耗ノ心距ニ堅防撓材ヲ取附ク
ヘシ

前項ノ堅防撓材ノ截面抵抗率ハ第二百七十六條ノ規定ヲ
準用シテ之ヲ定ムヘシ

水密肋板ノ周圍ヲ固著スル山形鋼ノ厚サハ該肋板ノ厚サ
カ一二耗以下ナルトキハ之ニ一耗ヲ加ヘタルモノ以上ト
爲スヘシ

第四節 組立肋板

第百十八條 實體肋板ヲ設ケサル肋骨ノ位置ニハ本節ノ規
定ニ依ル組立肋板ヲ設クヘシ
深水槽ノ下方ニ於ケル組立肋板ハ必要ニ應シ前項ニ依ル

モノヨリ適當ニ堅牢ナラシムヘシ

第百十九條 組立肋板ヲ構成スル正肋材及副肋材ノ截面抵
抗率ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$K S r^2 h \quad (r^2 = \frac{3}{8} \pi r^2)$$

Kハ係數ニシテ中心線桁板ニ附スル肘板、縁板ノ内側ニ
附スル肘板及側桁板相互ノ中間ニ形鋼支柱ヲ有セサル
トキハ六、形鋼支柱ヲ有スルトキハ三

Sハ肋骨心距(米ニテ)

lハ中心線桁板ニ附スル肘板、縁板ノ内側ニ附スル肘板
及側桁板相互ノ間隔ノ中大ナルモノ(米ニテ)ニ〇・
〇九ヲ加ヘタルモノ

hハD(吃水ノ特ニ小ナル船舶ニ在リテハ第二甲板迄測
リタル深サ)ノ三分ノ二及dノ中大ナルモノ(米ニテ)
但シ形鋼支柱ヲ有セサル場合ニ於ケル副肋材ノ寸法ヲ
定ムルトキハ龍骨ノ上面ヨリ内底板ノ上面マテノ距離
ヲ減シタルモノト爲スコトヲ得

中心線桁板ニ附スル肘板、縁板ノ内側ニ附スル肘板及側
桁板相互ノ中間ニ形鋼支柱ヲ設クルトキハ支點ノ心距ヲ
成ルヘク一・五米以下ト爲スヘシ

鋼船構造規程

體肋板ニハ其ノ厚サニ等シキ厚サヲ有スル等邊山形鋼ヲ

一・五米ヲ超エサル間隔ニ人孔ノ箇所ヲ避ケ堅ニ取附ク

第百十六條 隔壁ノ下部及其ノ防撓材桁板ノ外端ノ下部ニ

第百十七條 二重底ニハ水密肋板ヲ成ルヘク水密隔壁ノ下

水密肋板ハ其ノ厚サヲ汽罐室內ニ於ケル實體肋板ノ厚サ

前項ノ堅防撓材ノ截面抵抗率ハ第二百七十六條ノ規定ヲ

水密肋板ノ周圍ヲ固著スル山形鋼ノ厚サハ該肋板ノ厚サ

第四節 組立肋板

第百十八條 實體肋板ヲ設ケサル肋骨ノ位置ニハ本節ノ規

第百二十條 正肋材及副肋材ハ實體肋板ノ規定ノ厚サ以上

ノ厚サノ肘板ヲ以テ左ノ各號ノ規定ニ依リ中心線桁板及

一 肘板ト正肋材又ハ副肋材トノ累接ノ幅ハBノ約五%

二 肘板ト中心線桁板又ハ縁板トハ肘板ノ厚サニ等シキ

三 L七〇米以上ノ船舶ニ在リテハ肘板ノ遊邊ヲ曲線ト

第百二十一條 側桁板ニハ組立肋板ノ箇所ニ於テ堅形鋼ヲ

第百二十二條 第百十九條ノ形鋼支柱及前條ノ堅形鋼ノ截

S及hハ第百十九條第一項ノ規定ニ依ル

形鋼支柱又ハ堅形鋼ノ兩端ハ其ノ截面積ニ應シ左表ニ掲

鋼形		面積ノ
(平方)		
徑	數	以下14.6 以上
19	2	14.6—18.7
19	3	18.7—22.2
22	4	22.2—25.7
22	5	25.7—34.1
25	5	34.1—40.3

第二百二十三條 汽罐ノ下部ニ於テハ正肋材ハ其ノ厚サヲ一耗、副肋材、形鋼支柱及豎形鋼ハ其ノ厚サヲ二耗増スヘシ

第二百二十四條 隔壁ノ防撓材肘板ノ外端ノ下部ニ於ケル組立肋板ニハ特ニ形鋼支柱ヲ設ケテ補強スヘシ

第五節 内底板及縁板

第二百二十五條 中心線内底板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ左ノ特別規定ニ依ル

- 一 中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ減シ船ノ首尾ニ於テハ第二百二十六條ノ算式ニ依ル厚サト爲スコトヲ得
- 二 汽罐室ニ於テハ厚サヲ二耗増スヘシ

一 中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ幅ヲ減シ船ノ首尾ニ於テハ中央部ニ於ケルモノノ八五%ト爲スコトヲ得

二 瘠形ノ船舶ニ在リテハ管海官廳ノ承認ヲ受ケ縁板ノ幅ヲ適當ニ減少スルコトヲ得

三 船ノ首尾ニ於テハ縁板又ハ之ニ隣接スル内底板ノ厚サヲ増シ扣板、扣山形鋼又ハ帶板ノ固著ヲ特ニ堅牢ナラシムルトキハ縁板ノ幅ヲ減少スルコトヲ得

第二百二十九條 縁板ノ上邊ノ幅ハ扣板ヲ用フルトキハ内底板ノ外ニ於テ縁板ト扣板トヲ固著スルニ十分ナル幅ト爲シ又前部Lノ五分ノ一間ニ於テハ成ルヘク縁板ト實體肋板ノ上部ニ附スル山形鋼トヲ内底板ノ外ニ於テ二箇ノ鉄ヲ以テ固著スルニ十分ナル幅ト爲スヘシ

第二百三十條 縁板ノ厚サハ第二百二十五條第一項ノ算式ニ依ル中心線内底板ノ厚サニ等シク爲スヘシ但シ汽罐室ニ於テハ其ノ厚サヲ二耗増スヘシ

第二百三十一條 縁板ト外板トヲ固著スル山形鋼ノ厚サハ其ノ箇所ニ於ケル縁板ノ厚サニ〇・五耗ヲ加ヘタルモノト爲スヘシ

第二百三十二條 肋骨心距力其ノ標準心距ヲ超ユルトキハ超

鋼船構造規程

中心線内底板ノ幅ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$3.75L + 790 \quad (L = \text{チ})$$

第二百二十六條 中心線内底板ヲ除キ其ノ他ノ内底板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ左ノ特別規定ニ依ル

$$0.052L + 4.2 \quad (L = \text{チ})$$

- 一 中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ減シ船ノ首尾ニ於テハ算式ニ依ルモノノ九〇%ト爲スコトヲ得
- 二 主機室内及汽罐室内ニ於ケル内底板ノ厚サハ其ノ箇所ニ於ケル中心線内底板ノ厚サニ等シク爲スヘシ

中心線内底板ヲ除キ其ノ他ノ内底板ハ管海官廳ノ承認ヲ受ケテヲ擴張ト爲スコトヲ得

第二百二十七條 縁板ノ配置ハ之ト外板トノ間ノ角度ヲ直角ニ近カラシムル様之ヲ定ムヘシ

縁板ト外板トノ交線ハ成ルヘク二重底ニ依リ彎曲部迄ノ船底ヲ保護スル様適當ノ高サニ保ツヘシ

第二百二十八條 縁板ノ幅ハ上邊ヲ除キ中心線桁板ノ深サノ八〇%以上ト爲スヘシ但シ左ノ特別規定ニ依ル

過一〇耗ニ付〇・一耗ノ割合ヲ以テ中心線内底板ヲ除キ其ノ他ノ内底板ノ厚サヲ増スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ中心線内底板及縁板ノ厚サハ内底板ノ厚サ未滿ト爲スコトヲ得ス

第二百三十三條 艙口直下ノ内底板ニ船底内張板ヲ張ラサルトキハ該部ニ於ケル内底板ノ厚サヲ二耗増スヘシ

擱揚機其ノ他機械的裝置ニ依リ荷役ヲ爲ス船舶ニ在リテハ内底板ノ厚サヲ適當ニ増スヘシ

第二百三十四條 主機礎板又ハ推力受臺ヲ直接ニ取附クル内底板ノ厚サハ一六耗以上ト爲シ主機ノ大サ及出力ニ應シ之ヲ定ムヘシ

内底板ノ上面ト汽罐ノ下面トハ四五〇耗以上ノ間隙ヲ保ツヘシ但シ管海官廳ノ承認ヲ受ケ内底板ノ厚サヲ増加シ且汽罐下部ノ通風及防熱ヲ十分ナラシムルトキハ此ノ限ニ在ラス

第六節 外側肘板

第二百三十五條 艙内肋骨ト縁板トヲ固著スル外側肘板ハ其ノ厚サヲ第一百一十條ノ算式ニ依ル實體肋板ノ厚サニ一・五耗ヲ加ヘタルモノト爲シ遊縁ハ其ノ長サニ應シ之ニ適當ナル寸法ノ山形鋼ヲ取附クル力又ハ適當ナル幅ノ曲縁

ト爲スヘシ
外側肘板ハ汽罐室及石炭庫ニ於テハ其ノ厚サヲ一・五耗増スヘシ

第三百三十六條 外側肘板ト船内肋骨トノ固著ハ左ノ各號ノ規定ニ依ル

一 外側肘板ト船内肋骨トハ肋骨ノ深サノ二倍以上相累接シ肋骨ノ截面積以上ノ合計截面積ヲ有スル鉄ヲ以テ固著スヘシ但シ船内肋骨カ正肋材ト副肋材トヨリ成ルモノナルトキハ副肋材ト外側肘板トノ累接ノ長サハ副肋材ノ遊邊ノ幅ノ三倍ニ止メ又肋骨ノ截面積ノ算定ニ付テハ正副肋材ノ累接部ニ於ケル副肋材ノ截面積ヲ加算セサルコトヲ得

二 外側肘板ト船内肋骨トノ累接ノ長サカ肋骨ノ深サノ三倍ヲ超ユルトキハ前號ノ規定ニ依ル鉄ヲ外側肘板ノ上端ヨリ測リ肋骨ノ深サノ三倍ニ相當スル累接部間ニ配置スルコトヲ要シ殘餘ノ累接部ハ適當ニ固著スヘシ

三 外側肘板上端ニ於テハ其ノ幅ヲ船内肋骨ノ深サニ等シクシ且固著鉄ヲ成ルヘク竝列配置ト爲スヘシ

四 船内肋骨ヲ縁板迄延長セサルトキハ船内肋骨ノ下端

キハ扣板又ハ扣山形鋼ヲ二肋骨心距以上ノ間隔ニ配置シ鉄ノ合計截面積ヲ前號ノ截面積ニ扣板又ハ扣山形鋼ノ間隔ト肋骨心距トノ比ヲ乘シタルモノト爲シ且ツ鉄ノ總數ヲ四箇以上ト爲スヘシ

三 第一號ノ合計截面積ニ對スル鉄ノ全部ヲ一肋骨心距間ニ配置シ難キトキハ縁板ト外側肘板トヲ固著スル堅山形鋼ノ各邊ノ固著鉄ヲ増加スヘシ此ノ場合各邊ニ於テ増加スル鉄ノ截面積ノ合計ハ扣板、扣山形鋼又ハ帶板ニ於ケル鉄ノ不足截面積以上ナルコトヲ要ス

四 扣板、扣山形鋼及帶板ノ厚サハ其ノ箇所ニ於ケル縁板ノ厚サニ等シク爲スヘシ

五 肋骨心距カ標準肋骨心距ヲ超ユル場合ニ於テハ標準肋骨心距ニ對シ前各號ノ規定ニ依リ固著シタルト同等以上ノ効力ヲ有スル固著ト爲スヘシ

第三百三十九條 縁板ヲ略水平ニ船側迄延長スル場合ニ於テハ外側肘板ノ幅ヲ縁板ノ規定ノ幅以上ト爲シ外側肘板ト縁板及内底板トノ固著ヲ前條ノ固著ト同等以上ノモノト爲スヘシ

第七節 側 桁 厚

第四百十條 B一〇・五米ヲ超エ一九・五米以下ノ船舶ニ

鋼船構造規程

ト縁板トノ間ニ於テ外側肘板ヲ其ノ厚サニ等シキ厚サノ單山形鋼ヲ以テ外板ニ固著スヘシ

外側肘板ノ船側ニ於ケル上端ハ縁板ノ上面ヨリ低キコトヲ得ス

第三百三十七條 外側肘板ト縁板トハ肘板ノ厚サニ等シキ厚サヲ有スル山形鋼ヲ成ルヘク縁板ノ内側ニ附スル山形鋼ト同一側ニ配置シ一列鉄ヲ以テ固著スヘシ

第三百三十八條 外側肘板ト縁板及内底板トハ左ノ各號ニ依リ扣板、扣山形鋼又ハ帶板ヲ以テ固著スヘシ

一 扣板、扣山形鋼又ハ帶板ヲ外側肘板ニ固著スル鉄ノ截面積ノ合計竝ニ之ヲ縁板及内底板ニ固著スル鉄ノ截面積ノ合計ハ中央部Lノ二分ノ一間及其ノ後部ニ於テハ左ノ算式ニ依リ算定シタル截面積以上其ノ前部ニ於テハ該面積ノ一・五倍以上ト爲スヘシ但シdカDノ八五%ヨリ小ナルコト六〇〇耗ヲ超ユルトキハ其ノ超過一〇〇耗ニ付一平方種ノ割合ヲ以テ截面積ヲ減スルコトヲ得

$$1.33(D-d)^2 \text{ (平方種ニテ)}$$

nハ當該部分ニ於ケル上甲板以下ノ甲板ノ層數

二 前號ノ合計截面積ニ對スル鉄數カ四箇未滿ト爲ルト

在リテハ各舷ニ一箇、B一九・五米ヲ超エ二四米以下ノ船舶ニ在リテハ各舷ニ二箇ノ側桁板ヲ設クヘシ

主機及推力受臺ノ下部ニ於テハ適當ニ側桁板ヲ増設スヘシ側桁板ノ厚サハ其ノ箇所ニ於ケル實體肋板ノ厚サニ等シク爲スヘシ

第四百十一條 側桁板ハ厚サヲ一〇%増ストキハ前部Lノ四分ノ一間竝ニ主機、推力受臺及特設梁柱ノ下部ニ於ケルモノヲ除クノ外其ノ上縁ヲ曲線ト爲スコトヲ得

第四百十二條 前部Lノ四分ノ一間ニ於テハ中心線桁板、側桁板及縁板相互ノ間隔カ二・一三米ヲ超エサル様側桁板ヲ配置シ且其ノ間ニ當該箇所ノ肋板ノ高サノ中央ニ達スル半桁板ヲ設クヘシ

半桁板ハ山形鋼ヲ以テ外板及實體肋板ニ固著スヘシ前項ニ依リ半桁板ト實體肋板トヲ固著スル山形鋼ハ實體肋板ノ一側ニ於テハ之ヲ該肋板上端迄達セシムヘシ

第四百十三條 側桁板ト外板及内底板トハ側桁板ノ厚サニ等シキ厚サヲ有スル山形鋼ヲ以テ固著スヘシ
主機及推力受臺ノ下部ニ於テハ側桁板ト内底板トハ二重山形鋼ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列鉄固著ト爲スヘシ航海速力一四節以上ノ航洋船舶ノ船首部ニ於ケル外板

ト側桁板トノ固著ニ付亦同シ

第八節 燃料油ヲ積載スル二重底

第四百四十四條 燃料油ヲ積載スル二重底ノ中心線桁板ハ油密又ハ水密ノ構造ト爲ササルモ妨ナキモ首尾ニ於ケル小容積ノ二重底ニ於ケルモノヲ除クノ外之ニ開孔ヲ設ケルコトヲ得ス

第四百四十五條 燃料油ヲ積載スル二重底ト清水槽トノ間ニハ防油區畫ヲ設ケ之ヲ油密ニ構造スヘシ
清水槽用ノ管ハ之ヲ油管ニ兼用スルコトヲ得ス

第四百四十六條 燃料油ヲ積載スル二重底ハ成ルヘク管其ノ他ノ附屬品ヲ取附ケタル後水密試験ヲ行フヘシ

第四百四十七條 燃料油ヲ積載スル二重底ニハ内底板上ニ厚サ五〇耗以上ノ横木ヲ置キ其ノ上面ニ内張板ヲ張ルヘシ但シ機關室内ノ二重底及標準肋骨心距ニ於ケル厚サ一〇耗以上ニシテ縱橫線ヲ二列以上ノ銲接合ト爲シタル内底板ヲ有スル二重底ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第四百四十八條 燃料油ヲ積載スル二重底ノ内底板ノ縱橫線ハ機關室内ニ於テハ二列以上ノ銲接合ト爲スヘシ

第四百四十九條 燃料油ヲ積載スル二重底ニ於ケル扣板、扣山形鋼又ハ帶板ヲ固著スル銲ノ合計面積ハ第三百三十八

條ニ依ルモノノ一・四倍以上ト爲スヘシ

第九節 雜 則

第五百十條 推力受臺又ハ特設梁柱ノ下部ニ於テハ二重底ヲ適當ニ補強スヘシ

內燃機關ヲ備フル船舶ノ機關室ノ部分ニ於ケル二重底ノ構造ハ機關ノ出力及大サニ應ジ適當ニ強固ノモノト爲スヘシ

第五百十一條 船首船底ノ扁平ナル船舶、船尾部ニ機關室ヲ備フル船舶及航海速力一四節以上ノ船舶ニ在リテハ前部Lノ四分ノ一間ニ於ケル船底ノ構造ヲ特ニ堅牢ナラシムヘシ

第五百十二條 鋼材其ノ他之ニ類似ノ重量貨物ノ積載ニ使用スル船舶ノ二重底ハ特ニ堅牢ニ構造スヘシ

第五百十三條 第四百四十五條ノ規定ハ潤滑油ヲ積載スル二重底ニ準用ス

第六章 肋 骨

第一節 肋骨ノ心距並ニ截面抵抗率ノ算定

第五百十四條 肋骨ノ心距ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヲ標準ト爲スヘシ

2.98L+400 (耗ニテ)

肋骨心距ヲ前項ノ標準心距ニ二三〇耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲ストキハ肋骨、肋板、二重底用材、梁柱、外板、甲板等ノ寸法及構造ニ付特ニ管海官廳ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス前二項ノ規定ニ拘ラス船首隔壁ト船首ヨリLノ五分ノ一ニ相當スル箇所トノ間ノ肋骨心距ハ七〇〇耗及第一項ノ算式ニ依ル心距ノ中小ナルモノヲ、船首尾艙ノ肋骨心距ハ六一〇耗及第一項ノ算式ニ依ル心距ノ中小ナルモノヲ超ユルコトヲ得ス

第五百十五條 肋骨ノ截面抵抗率ノ算定ニ付テハ左ノ各號ノ規定ニ依ル

一 艙内肋骨カ標準形肋骨（正肋材及之ト同一寸法ノ副肋材ヲ以テ構造シタルモノ）ナルトキハ其ノ截面ノ中性軸ニ對スル惰率ヲ該軸ヨリ截面ノ端ニ至ル距離ニテ除ス

二 艙内肋骨カ前號ニ掲クルモノニ該當セサル場合ニ於テハ幅六一〇耗厚サ一五耗ノ外板ヲ含ミタル截面抵抗率カ同一寸法ノ外板ヲ含ミタル實際ノ艙内肋骨ノ截面抵抗率ニ等シキ標準形肋骨ヲ假想シ之ニ付前號ノ規定ヲ適用ス

三 船首尾艙ノ肋骨、甲板間ノ肋骨及船樓ノ肋骨ニ在リテハ幅六一〇耗厚サ一五耗ノ外板ヲ含ム截面ノ中性軸ニ對スル惰率ヲ該軸ヨリ肋骨ノ内端ニ至ル距離ニテ除ス

四 肋材ニ穿ツ銲孔及螺釘孔ハ之ヲ無キモノト看做ス

五 肋骨カ正肋材及副肋材ヲ以テ構造シタルモノナル場合又ハ溝形鋼ナル場合ニ於テ其ノ内側遊邊ニ銲孔又ハ螺釘孔ナキコト明カナルトキハ該肋骨ノ截面抵抗率ハ前各號ニ依ルモノノ一・一倍トス

第二節 艙内肋骨

第五百十六條 艙内肋骨ノ截面抵抗率ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ナルコトヲ要ス

$$SCD = \frac{1}{1,000} (f_1 + f_2) \quad (\text{噸ノ三乘ニテ})$$

S ハ艙内肋骨ノ心距（米ニテ）

t ハ二重底構造ノ箇所ニ在リテハ船側ニ於ケル内底板ノ上面ト二重底外側肋材ノ上端トノ中央ヨリ、單底構造ノ箇所ニ在リテハ中心線ニ於ケル肋材ノ上面ト船側ニ於ケル肋材又ハ之ヲ肋骨ニ固著スル肋材ノ上端トノ中央ヨリ龍骨ノ上面迄ノ垂直距離（米ニテ）

f₁ハHニ依ル係數ニシテ左表ニ依ル但シ船舶ノ當該部分ノ形狀ニ因リ肋骨カ附加強カヲ得ル場合ニ於テハ適當ニ斟酌スルコトヲ得

備考	f ₁	H
一	19,050	0
二	23,218	2.1
三	26,234	2.7
四	31,290	3.3
五	39,355	3.9
六	49,551	4.5
七	60,877	5.1
八	74,144	5.7
九	88,564	6.3
十	104,892	6.9
十一	121,552	7.5

f₂ハKニ依ル係數ニシテ左表ニ依ル

K
0
1.5
3.0
4.5
6.0
7.5
9.0
10.5
12.0

限シタル場合ト雖モ同條第一項ノ算式ニ依ル標準心距

ヲSトシ第百五十六條ノ算式ヲ適用スヘシ

二 中央部Lノ二分ノ一間ニ在リテハ當該箇所ノ最下層

甲板ニ付Lノ中央ニ於テHヲ測リ船内肋骨ノ寸法ヲ定

ムヘシ但シ當該箇所ノ最下層甲板カLノ中央ニ達セサ

ルトキハ上甲板ニ沿ヒ最下層甲板ノ延長面ヲ假定シテ

Hヲ定ムルモノトス

三 前後部Lノ四分ノ一間ニ在リテハ當該箇所ノ最下層

甲板ニ付首尾ヨリLノ八分ノ一ノ箇所ニ於テHヲ測リ

船内肋骨ノ寸法ヲ定ムヘシ但シ當該箇所ニ於ケル最下

層甲板カLノ八分ノ一ノ箇所ニ達セサルトキハ上甲板

ニ沿ヒ最下層甲板ノ延長面ヲ假定シテHヲ定ムルモノ

トス

四 最下層甲板ノ梁肘板ノ深テカ肋骨一本置ニ異ルトキ

又ハ肋骨一本置ニ肘板ナキトキハ肘板ノ平均ノ深サニ

依リHヲ定ムヘシ

五 Kヲ定ムルニ用フル垂直距離ハ甲板及船樓ノ配置カ

同一ナル區間ニ付該區間ノ長サノ中央ニ於テ之ヲ定ム

ヘシ

第百五十九條 Hカ肋骨ノ深サノ二倍ヲ超ユルトキハ適

鋼船構造規程

備考	f ₃
一	0
二	1,041
三	2,084
四	4,133
五	6,217
六	9,275
七	13,358
八	18,467
九	24,600

第百五十七條 一層甲板船ニ於テ前條ノ規定ニ依ルHカ

五・四九未滿ナルトキハ船内肋骨ノ截面抵抗率ノ最低標

準ヲ前條第一項ノ規定ニ依ルモノニ左ノ算式ニ依リ算定

シタル係數f₃ヲ乘シタルモノト爲スコトヲ得

f₃ = 0.10 + 0.164H

Hハ前條ノ規定ニ依ル

第百五十八條 前二條ノ規定ノ適用方ニ付テハ左ノ各號ノ

規定ニ依ル

一 前部Lノ五分ノ一間ニ於ケル船内肋骨ニ於テハ第百

五十四條第三項ノ規定ニ依リ肋骨心距ヲ七〇〇耗ニ制

當ニ船内肋骨ノ寸法ヲ増スカ又ハ他ノ補強ヲ爲スヘシ

肋骨ノ内側ニ船側縦通材ヲ設ケ斷切板ヲ以テ之ヲ外板ニ

固著シタル場合ニ於テ肋骨ノ外面ニ沿ヒテ測リタル支點

間ノ間隔カ二・一米ヲ超エサルトキハ管海官廳ノ見込ニ

依リ第百五十六條ノ算式ニ用フルf₁ヲHニ應シ定メタル

モノノ八〇%迄減スルコトヲ得但シ第三百十三條第一項

ノ規定ニ依リ設ケタル首尾防撓縦通材ニ付テハ此ノ限ニ

在ラス

前項ノ船側縦通材ノ寸法ハ第三百十三條第二項ノ規定ヲ

準用シテ之ヲ定ムヘシ

第百六十條 L一〇〇米以上ノ船舶ノ船内肋骨ノ寸法ハ成

ルヘク前四條ノ規定ニ依ルモノニ適當ナル餘裕ヲ附シ之

ヲ定ムヘシ

第百六十一條 左ニ掲クル船内肋骨ノ截面抵抗率ハ前五條

ノ規定ニ拘ラス管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

一 Dカ四・五七米未滿ナルカ又ハ一八・二九米ヲ超ユ

ル船舶ノ船内肋骨

二 BカLノ十分ノ一ニ一・五二米ヲ加ヘタルモノ未滿

ナルカ又ハ之ニ六・一〇米ヲ加ヘタルモノヲ超ユル船

舶ノ船内肋骨

三 Lト強力甲板迄ノ深サトノ比カ一〇・〇未滿ナルカ
 又ハ一三・五ヲ超ユル箇所ノ船内肋骨
 四 肋骨外面ヨリ之ニ最モ近キ梁柱列ノ中心線迄ノ水平
 距離カ六・一〇米ヲ超ユル箇所ノ船内肋骨
第六十二條 船内肋骨ト二重底外側肋骨トノ固著ハ第百
 三十六條ノ規定ニ依リ船内肋骨ト梁トノ固著ハ第百九十
 條ノ規定ニ依ルヘシ
 船内肋骨カ最下層甲板ニ止マル場合ニ於テ肋骨ノ位置ニ
 梁ナキトキハ肋骨ヲ以テ肋骨ヲ梁上側板ニ固著スヘシ但
 シ甲板間ノ肋骨ヲ船内肋骨ニ累接スルトキハ此ノ限ニ在
 ラス
 前項肋骨ノ寸法ハ肋骨毎ニ設クル梁ニ附スヘキ梁肋骨ノ
 規定ノ寸法以上ト爲スヘシ

第三節 船首尾船ノ肋骨

第六十三條 本令ニ於テ船首尾船トハ船首尾隔壁ノ前方
 又ハ後方ニ在リテ該隔壁カ上甲板以下ニ止マルトキハ其
 ノ上端ニ於ケル甲板以下ノ場所ヲ謂ヒ該隔壁カ上甲板ノ
 上方ニ達スルトキハ上甲板以下ノ場所ヲ謂フ
第六十四條 船首尾船ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ左ノ各號ノ
 算式ニ依リ算定シタルモノ以上ナルコトヲ要ス

在リテハ船内肋骨ヲ第三甲板迄達セシムヘシ
 第三甲板ト第二甲板トノ間ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ船首尾
 船ノ肋骨ノ規定ノ截面抵抗率ヲ標準ト爲シ第二甲板ト上
 甲板トノ間ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ其ノ八六%ヲ標準ト爲
 スヘシ

第六十八條 特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ニ在リテハ管
 海官廳ノ承認ヲ受ケ第二甲板、第三甲板及第四甲板ヲ順
 次ニ上甲板、第二甲板及第三甲板ト看做シ前條ノ規定ヲ
 適用スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ上甲板ト第二甲板ト
 ノ間ノ肋骨ノ寸法ハ該甲板間ヲ船樓ト看做シ其ノ位置ニ
 應シ以下本章ノ規定ニ依リ之ヲ定ムヘシ但シ第百六十九
 條第一項但書ノ規定ヲ適用スルノ限ニ在ラス
第六十九條 船樓ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ肋骨ノ位置ニ應
 シ船首尾船ノ肋骨ノ規定ノ截面抵抗率ニ左表ニ掲クル係
 數ヲ乘シタルモノヲ標準ト爲スヘシ但シ特ニ大ナル乾舷
 ヲ有スル船舶又ハL一〇〇米未滿ノ船舶ニ在リテハ管海
 官廳ノ承認ヲ受ケ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

肋骨ノ位置	係數
前部Lノ五分ノ一間ニ在ル船樓	〇・六〇

一 Dカ九・八米以上ナルトキ
 $57.2D + 46d - 700$ (Lノ三乗ニテ)
 二 Dカ九・八米未滿ナルトキ
 $150 - 7.4D + 55.6d$ (L - $\frac{2.8}{D}$ - 32 (Lノ三乗ニテ)
 ノ算式ノdニ充ツヘシ

第六十五條 左ニ掲クル船舶ノ船首尾船ノ肋骨ノ載面抵
 抗率ハ前條ノ規定ニ拘ラス管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ
 依ル

一 Dカ四米未滿ナルカ又ハ一四米ヲ超ユル船舶
 二 船首尾船ニ於ケル防撓構造力第十四章ノ規定ニ依ラ
 サル船舶

第六十六條 船首尾船ノ肋骨ト甲板梁又ハ防撓梁トノ固
 著ハ第百九十條ノ規定ニ依ルヘシ

甲板又ハ防撓層梁ノ箇所ニ於テ肋骨ノ位置ニ梁ナキトキ
 ハ梁上側板ノ幅ノ二分ノ一以上ノ幅及深サヲ有スル肘板
 ヲ以テ肋骨ト梁上側板トヲ固著スヘシ

第四節 甲板間ノ肋骨及船樓ノ肋骨

第六十七條 上甲板以下ニ於テ甲板四層ヲ備フル船舶ニ

後部Lノ八分ノ一間ニ在ル船樓	〇・五五
其ノ他ノ船樓	〇・五〇

第七十條 船橋樓ノ兩端及中央部Lノ二分ノ一間ニ在ル
 船首樓又ハ船尾樓ノ端ニ於テハ少クトモ四肋骨心距ノ間
 船樓ノ肋骨ノ寸法ヲ上甲板直下ノ甲板間ノ肋骨ノ規定ノ
 寸法ト爲スヘシ

第七十一條 甲板間又ハ船樓ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ肋骨
 心距カ標準心距ヲ超ユル場合ニ於テハ第百六十七條乃至
 第百六十九條ノ規定ニ依ルモノヨリ適當ニ之ヲ増スコト
 ヲ要ス

甲板間又ハ船樓ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ當該場所ノ高サカ
 二・六米ヲ超ユルトキハ其ノ高サト二・六米トノ比ニ比
 例シテ之ヲ増スコトヲ要シ二・六米未滿ナルトキハ其ノ
 高サト二・六米トノ比ニ比例シテ之ヲ減スルコトヲ得但
 シ第百六十七條乃至第百六十九條ノ規定ニ依ルモノノ八
 〇%未滿ト爲スコトヲ得ス

船樓上ニ更ニ船樓又ハ大ナル甲板室ヲ有スル部分ニ於テ
 ハ其ノ下方ノ船樓ノ肋骨及甲板間ノ肋骨ノ強力ヲ適當ニ
 増スヘシ

第七十二條

甲板間又ハ船樓ノ肋骨カ下方ノ肋骨ニ連続セサルトキハ肘壁ヲ以テ其ノ下部及其ノ下方ノ肋骨ノ上部ヲ梁上側板ニ固著シ上下肋骨ノ連結ヲ十分ナラシムヘシ

前項ノ場合ニ於テ肋骨ノ下部ヲ固著スル肘板ノ寸法ハ該肋骨ノ寸法ニ適應スルモノト爲シ又肋骨ノ上部ヲ固著スル肘板ノ寸法ハ梁ノ位置ニ於テハ第九十條ノ規定ニ依ルモノ梁ナキ位置ニ於テハ肋骨毎ニ設クル梁ニ附スヘキ梁肘板ノ規定ノ寸法以上ト爲スヘシ

第五節 雜則

第七十三條

正肋材ト副肋材トノ累リノ幅ハ銕徑ノ四倍ヨリ小ナルコトヲ得ス

第七十四條

水槽又ハ燃料油槽ヲ構成スル部分ノ肋骨ノ寸法ハ該肋骨ヲ深水槽ノ隔壁ノ防撓材ト看做シ定メタル寸法ヨリ小ナルコトヲ得ス

車軸管膨出部ノ肋骨ノ構造及寸法ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第七十五條

特設肋骨ニ依ル機關室ノ補強構造ハ左ニ掲クル寸法ノ特設肋骨ヲ六肋骨心距ニ設ケタル構造ヲ標準ト爲シ機關ノ種類、馬力、機關室ノ長サ等ニ應シ適當ニ之ヲ定ムヘシ

最下層甲板ノ直上ノ甲板迄達セシメ其ノ他ノ船舶ニ在リテハ最下層甲板迄達セシムヘシ

特設肋骨ハ其ノ深サ六〇〇耗ヲ超ユルトキハ外板ニ二重山形鋼ヲ以テ一列銕固著ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列銕固著ト爲スヘシ

特設肋骨ノ上端ニハ特ニ補強シタル梁ヲ設クヘシ

第七十六條

艙口端、機關室等ニ特ニ大ナル寸法ノ梁ヲ設クルトキハ該梁ノ位置ニ於ケル肋骨ヲ適當ニ補強スヘシ

第七十七條

横置隔壁カ甲板ノ箇所ニ於テ上下ニ連續セサルトキハ隔壁ノ上方又ハ下方ニ於ケル肋骨ノ寸法ヲ増スカ又ハ適當ナル方法ニ依リ横置力ノ急激ナル變化ヲ避クヘシ

第七十八條

汽罐室及常設石炭庫ニ於テハ艙内肋骨ノ厚サチ一・五耗増スコトヲ要ス但シ該肋骨カ溝形鋼ナルトキハ其ノ「ウエブ」ノ厚サチ二・〇耗増スニ止ムルコトヲ得

第七十九條

船尾斜肋骨ノ心距ハ船尾稜線ニ於テ之ヲ測リ第五十四條第一項ノ規定ニ依ル心距ヲ標準ト爲スヘシ但シ七六〇耗ヲ超ユルコトヲ得ス

鋼形山重二ルス附ニ縁内ノ骨肋設特			鋼板	D
サ深ル至ニ板甲層下最				
9.5米	7.0米	4.5米		
—	—	(耗) 75×65×8.0	(耗) 350×8.0	4.5
—	(耗) 100×75×11.0	75×75×9.5	420×9.5	7.0
—	125×75×10.0	90×75×9.5	500×11.0	9.5
(耗) 150×90×12.0	125×75×12.0	90×75×10.0	600×12.0	12.0
150×90×14.0	125×75×12.0	90×75×11.0	700×13.0	14.5

前項ノ特設肋骨ハ甲板四層以上ヲ備フル船舶ニ在リテ

船尾斜肋骨ノ截面抵抗率ハ第六十九條ノ規定ニ依ル後部Lノ八分ノ一間ニ在ル船樓ノ肋骨ノ截面抵抗率ヲ標準ト爲スヘシ

第八十條

巡洋艦型船尾ニ於ケル肋骨構造ニ付テハ左ノ各號ノ規定ニ依リ且管海官廳ノ承認ヲ受クヘシ

一 肋骨心距チ六一〇耗以下ト爲スコト

二 肋骨ノ截面抵抗率チ第六十四條ノ規定ニ依ルモノノ八六%以上ト爲スコト

三 肋骨ヲ強力甲板迄達セシムルコト

四 必要ニ應シ特設肋骨、縦通桁板等ヲ設ケ該部ヲ補強スルコト

第八十一條

横置隔壁ノ間隔カ三〇米若ハLノ二分ノ一ヲ超ユル場合又ハ舷弧ノ高サカ特ニ大ナル場合ニ於テハ必要ニ應シ適當ノ方法ニ依リ其ノ局部ノ防撓性ヲ増スヘシ

第七章 梁

第八十二條

梁ノ截面抵抗率ハ鋼甲板ヲ張ル場合ニ於テハ左ノ算式ニ依リ定メタル抵抗率以上、鋼甲板ヲ張ラサル場合ニ於テハ該抵抗率ノ一・二五倍以上ナルコトヲ要ス

3.3 SHIP (艦ノ三乘ニテ)

サ (米ニテ)

S ハ梁ノ心距 (米ニテ)

h ハ第百八十三條ノ規定ニ依リ定メタル高サ (米ニテ)

l ハ第百八十四條ノ規定ニ依リ定メタル梁ノ支點間ノ長

第百八十三條 h ハ甲板ノ種類及Lニ應シ左表ニ依リ之ヲ定ムヘシ

甲板ノ種類	L	端艇	遊歩	甲板	甲板ノ種類
上層船橋樓甲板	30以下	0.305	0.305	0.610	0.914
船尾樓甲板	40	0.400	0.400	0.629	1.011
長サカLノ十分一以下ナルカ又ハ甲板上ヲ	50	0.457	0.500	0.686	1.110
專ラ居住設備ニ充當スル船橋樓甲板	60	0.457	0.600	0.752	1.210
L一〇〇米未滿ノ船首樓甲板	70	0.457	0.700	0.776	1.310
L一〇〇米未滿ノ船首樓甲板	80	0.457	0.800	0.876	1.410
L一〇〇米未滿ノ船首樓甲板	90	0.457	0.900	0.976	1.510
L一〇〇米未滿ノ船首樓甲板	100	0.457	0.914	1.076	1.610
L一〇〇米未滿ノ船首樓甲板	110	0.457	0.914	1.209	1.710
L一〇〇米未滿ノ船首樓甲板	120以上	0.457	0.914	1.352	1.810

備考	帆船上甲板	甲板一層ノミヲ有スル箇所ノ上甲板	米	米
L一〇〇米以上ノ船舶ノ前部Lノ八分ノ一間	1.372	1.200	1.372	1.200
L一〇〇米以上ノ船舶ノ前部Lノ八分ノ一間	1.562	1.342	1.562	1.342
L一〇〇米以上ノ船舶ノ前部Lノ八分ノ一間	1.762	1.483	1.762	1.483
L一〇〇米以上ノ船舶ノ前部Lノ八分ノ一間	1.962	1.625	1.962	1.625
L一〇〇米以上ノ船舶ノ前部Lノ八分ノ一間	2.162	1.766	2.162	1.766
L一〇〇米以上ノ船舶ノ前部Lノ八分ノ一間	2.362	1.905	2.362	1.905
L一〇〇米以上ノ船舶ノ前部Lノ八分ノ一間	2.562	2.043	2.562	2.043
L一〇〇米以上ノ船舶ノ前部Lノ八分ノ一間	2.762	2.219	2.762	2.219
L一〇〇米以上ノ船舶ノ前部Lノ八分ノ一間	2.896	2.286	2.896	2.286
L一〇〇米以上ノ船舶ノ前部Lノ八分ノ一間	2.896	2.286	2.896	2.286

隔壁ノ階段部又ハ軸路ノ頂部ヲ構造スル甲板ニ對スルhハ當該甲板梁ノ上面ヨリ隔壁甲板梁ノ上面迄ノ高サカ六・一〇米以上ナルトキハ該高サト爲シ六・一〇米未滿ナルトキハ左ノ算式ニ依リ定メタル高サト爲シ二掲クルモノトノ中大ナルモノト爲スヘシ

$0.8h_1 + 1.22$ (米ニテ)

h₁ハ當該甲板梁ノ上面ヨリ隔壁甲板梁ノ上面迄ノ高サ (米ニテ)

深水槽ノ頂部ヲ構成スル甲板ニ對スルhハ當該甲板梁ノ上面ヨリ滿載吃水線迄ノ高サ、上甲板梁ノ上面迄ノ高サノ三分ノ二及滿水状態ニ於ケル水槽内ノ最高水面迄ノ高

サノ中最モ大ナルモノニ一・七九ヲ乘シタルモノカ表ニ掲クルモノヨリ大ナルトキハ其ノ値ニ依ルヘシ

甲板梁ニ冷肉其ノ他ノ貨物ヲ吊ス場合又ハ甲板上ニ特ニ重キ貨物ヲ積載スル場合ニ於テハ當該甲板ニ對スルhハ其ノ重量ニ應シ適當ニ之ヲ増スヘシ

特ニ輕キ貨物ノミヲ積載スル甲板又ハ二層以上ノ甲板ヲ備ヘ特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ノ上甲板ニ對シテハhノ値ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第百八十四條 船側ヨリ船側ニ達シ且中央ノミヲ支持スル梁ニ在リテハ中心線ヨリ梁肘板ノ内端迄ノ水平距離 (米ニテ) ナルト爲スヘシ但シBノ五分ノ一未滿ト爲スコト

ヲ得ス
 船側ヨリ船側ニ達シ且二箇所以上ヲ支持スル梁ニ在リテハ外側梁柱列ノ中心線ヨリ梁肘板ノ内端迄ノ水平距離(米ニテ)ニ〇・一五米ヲ加ヘタルモノト梁柱列ノ中心線間ノ水平距離(米ニテ)トノ中大ナルモノヲト爲スヘシ
 甲板口ノ兩側ニ設クル半梁ニ在リテハ甲板口側縁材又ハ其ノ外側ニ設クル甲板下縦桁ヨリ梁肘板ノ内端迄ノ水平距離(米ニテ)ニ〇・一五米ヲ加ヘタルモノヲト爲スヘシ
 縦通隔壁ニ肘板ヲ以テ取附ケタル梁ニ在リテハ該隔壁ヲ船側ト看做シ前三項ノ規定ヲ準用シテ定メタルモノヲト爲スヘシ
 深水槽ノ頂部及隔壁ノ階段部ニ附スル梁ハ之ヲ適當ニ支持シテ成ルヘク前四項ノ規定ニ依ルナリ四・六米以下ト爲スヘシ
第百八十五條 梁柱、甲板下縦桁及船口縁材ノ配置ニ依リ集中荷重ヲ受クル船口端梁ノ寸法ハ第二十五條乃至第二百十七條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定ムヘシ
第百八十六條 船口其ノ他ノ甲板口ノ側部ニ於テ梁柱列ノ中心線ト甲板口側縁材トノ距離カ四六〇耗ヲ超ユル部分

ニ於テハ半梁ノ寸法ヲ増スカ又ハ其ノ他ノ適當ナル補強ヲ爲シ管海官廳ノ承認ヲ受クヘシ
第百八十七條 左ニ掲クル梁ハ肋骨毎ニ取附クヘシ
 一 水槽ノ頂部軸路ノ頂部又ハ隔壁ノ階段部ヲ構成スル水密甲板ノ梁
 二 Dカ四・六米ヲ超ユル一層甲板船ノ船樓外ニ於ケル上甲板梁
 三 木甲板ヲ張ラサル強力甲板ノ梁及前部ノL八分ノ一間ニ於ケル船首樓甲板ノ梁
 四 船橋樓ノ兩端ヨリ其ノ内方八肋骨心距間ニ於ケル上甲板梁
 五 肋骨心距カ七六〇耗ヲ超ユル箇所ノ甲板梁
 梁ノ心距ハ肋骨心距ノ二倍ヲ超ユルコトヲ得ス
第百八十八條 梁ヲ肋骨一本置ニ取附クルトキハ各層ニ於ケル梁ハ上下相重ネテ同一ノ肋骨ニ取附ケ且肋骨カ正肋材及副肋材ヲ以テ構成セラレ副肋材ノ達スル高サカ肋骨ニ依リ異ナル場合ニ於テハ成ルヘク其ノ高キ方ノ肋骨ニ取附クヘシ
第百八十九條 暴露甲板梁ノ梁矢ハ成ルヘク梁ノ長サノ五十分ノ一以上ト爲スヘシ

第百九十條 梁ハ成ルヘク肋骨迄達セシメ肘板ヲ以テ之ヲ肋骨ニ固著スヘシ
 深サ九〇〇耗以上ノ梁肘板ノ遊邊ハ之ヲ曲線シ且深サ一四〇〇耗以上ノ梁肘板ニ在リテハ曲線ト平行シ之ヨリ肘

板ノ深サノ約一五%ノ箇所ニ防撓材ヲ取附クヘシ
 梁肘板ノ寸法竝ニ固著銹ノ數及徑ハ梁ノ截面抵抗率ニ應シ左表ニ依リ之ヲ定ムヘシ

梁ノ截面抵抗率 (種ノ三乘)	梁ノ上面ヨリ測リタル肘板ノ深サ (耗)	梁端ヨリ測リタル肘板ノ幅 (耗)	肘板ノ厚サ及曲線ノ幅 (耗)			肘板ノ各ル銹ニ於ケ	
			平板ノトキノ厚サ	曲線ノトキノ厚サ	曲線ノ幅	數	徑 (耗)
30	250	190	8			3	16
60	300	210	8.5	7	40	3	19
100	410	290	9.5	7.5	45	4	19
150	510	360	11	8	50	5	19
200	610	440	12	8.5	60	6	19
	550	390				5	22
300	700	520	13	9	65	6	22
400	820	620	14.5	10	75	7	22
500	930	710	16	10.5	85	8	22
610	1040	800		11	90	9	22
750	1160	900		12	100	10	22
900	1280	1000		12.5	110	11	22
1,070	1400	1100		12.5	120	12	22
1,250	1530	1200		12.5	130	13	22
1,440	1640	1300		12.5	130	14	22
1,650	1750	1390		12.5	130	15	22
1,870	1860	1480		12.5	130	16	22
2,100	1970	1570		12.5	130	17	22

肘板ノ内方ニ曲線ト平行シテ附ス
ル防撓材ノ寸法

山形鋼 75×75×12
山形鋼 90×90×13

第九十一條 一層甲板船ノ上甲板梁ノ梁肘板ノ寸法及固著ハ梁及肋骨ノ截面抵抗率中大ナルモノヲ梁ノ截面抵抗率ト看做シ前條ノ表ニ依リ之ヲ定ムヘシ甲板二層以上ヲ有スル船舶ニ在リテ第二甲板又ハ第三甲板ニ於テ肋骨ヲ切斷スル箇所又ハ上下ノ肋骨ヲ累接スル箇所ノ梁肘板ニ付亦同シ

第九十二條 艙口端梁又ハ特設梁等ニ附スル肘板ハ各邊共ニ列銲固著ト爲シ其ノ深サ及厚サ竝ニ銲ノ徑及各列ニ於ケル數ハ梁ノ截面抵抗率ノ二分ノ一ヲ其ノ截面抵抗率ト看做シ第九十條ノ表ニ依リ之ヲ定メ肘板ノ幅ハ其ノ深サニ等シク爲スヘシ但シ肘板ノ寸法ヲ該梁ニ隣接スル梁ノ肘板ノ寸法ヨリ小ト爲スコトヲ得ス

第九十三條 水槽ノ頂部ヲ構成スル甲板ニ於テ肋骨ヲ切斷スルトキハ其ノ箇所ノ梁肘板ノ深サ及幅ハ水槽頂板ヨリ水槽底部ヲ肋骨ニ固著スル肘板ノ上端迄ノ距離ノ一五%未滿ト爲スコトヲ得ス

ヲ設クルトキハ梁肘板ハ短山形鋼ヲ以テ外板ニ固著スヘシ
端艇甲板、遊歩甲板等ノ梁ノ端ハ短山形鋼ヲ以テ固著スルコトヲ得

第九十五條 板肘板ニ輕目孔ヲ設クル場合ニ於テハ其ノ周ヨリ肘板ノ遊邊及銲列線ニ至ル距離ヲ孔ノ徑ノ二分ノ一以上ト爲スヘシ

第九十六條 半梁ト甲板口側縁材トハ半梁ヲ肋骨毎ニ取附クルトキハ單山形鋼ヲ以テ固著シ肋骨一本置ニ取附クルトキハ二重山形鋼ヲ以テ一列固著ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列銲固著ト爲スヘシ

前項ノ山形鋼ハ其ノ厚サヲ縁材ノ規定ノ厚サ以上ト爲シ固著銲ノ各列ニ於ケル數ハ左表ニ依ルヘシ

各銲列ニ於ケル數	半梁ノ截面抵抗率 (噸ノ三乘)	160 以下	160 ヲ超エ 400 未滿	400 以上
2				
3				
4				

第九十七條 機關室ニハ出來得ル限り甲板ノ位置ニ於テ適當ナル全通梁ヲ取附クヘシ

第九十八條 揚錨機、揚貨機、操舵機、櫓其ノ他大ナル重量ヲ支持スル甲板梁ハ特ニ其ノ寸法ヲ増スカ之ニ梁柱ヲ増設スルカ又ハ其ノ他ノ適當ナル補強ヲ爲スヘシ

第八章 梁 柱

第九十九條 各層ノ梁ハ本章ニ規定スル梁柱又ハ之ト同等以上ノ効力ヲ有スル構造ニ依リ之ヲ支持スヘシ

第一百條 甲板間ニ於ケル梁柱ハ之ヲ艙内ニ於ケルモノノ直上ニ設クヘシ但シ當該甲板間ノ下方ノ特設梁柱ノ寸法カ第二百六條ノ規定ニ適合スルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二一一條 肋骨每又ハ肋骨一本置ニ取附クル中實圓形梁柱ノ徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$0.5(1 + \sqrt{1 + 2.5W}) \quad (W = \text{噸})$$

lハ梁柱ノ長サ (米ニテ)
wハ左ノ算式ニ依リ定メタル數

$W = W_0 + S_{hd}$
w₀ハ梁柱ノ上端ノ甲板ガ上甲板又ハ船樓甲板ナルトキハ零第二甲板以下ノ甲板ナルトキハ梁柱ノ上端ノ甲板ト其ノ直上ノ甲板トノ間ノ梁柱ニ對スルW

Sハ當該梁柱ヨリ其ノ前後ノ梁柱ニ至ル各區間ノ中心間ノ距離 (米ニテ)

bハ當該梁柱ヨリ其ノ左右ノ梁柱又ハ肋骨ノ内面ニ至ル各區間ノ中心間ノ距離 (米ニテ) 但シ該距離ガBノ五分ノ一未滿ナルトキハBノ五分ノ一

hハ梁柱ノ上端ノ甲板カ上甲板ナルトキハ三・八一、居住設備ニ充當スル上層船樓甲板ナルトキハ一・二五、其ノ他ノ船樓甲板ナルトキハ二・四四、第二甲板以下ナルトキハ梁柱ノ上端ノ甲板ト其ノ直上甲板トノ間ノ高サ (米ニテ)

第二二條 仕切板ヲ取附クル爲中實圓形梁柱ヲ二重ニ設クルトキハ其ノ徑ハ該梁柱ノ位置ニ設クル單梁柱ノ徑ノ四分ノ三ト爲スコトヲ得

第二三條 二重底又ハ水槽ノ直上ニ設クル中實圓形梁柱ノ下端ハ内底板又ハ水槽頂板ニ取附ケタル堅牢ナル形鋼ニ固著スヘシ

中實圓形梁柱ノ兩端ハ梁、踵部山形鋼等ニ密著セシメ梁柱ニ荷重ヲ直接傳達シ得ル様取附クヘシ

第二四條 中實圓形梁柱ノ上下兩端ハ左ノ算式ニ依リ算定シタル面積ヨリ少カラサル合計截面積ヲ有スル銲ヲ以

テ固著スヘシ但シ鉄ノ數ハ二箇以上ナルコトヲ要ス

0.18 Φ₀ - 5.5 (キニテ)

Φ₀ハ中實圓形梁柱ノ徑(耗ニテ)但シ該徑カ七五耗未滿ナルトキハ七五耗トス

第二百五條 筒形特設梁柱ノ外徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

18.2 $\frac{W}{t} + 12.5t + t$ (耗ニテ)

lハ梁柱ノ長サ(米ニテ)

tハ梁柱ヲ構成スル板ノ厚サ(釐ニテ)

Wハ左ノ算式ニ依リ定メタル數

W = W₀ + S₀h

W₀ハ梁柱ノ上端ノ甲板カ其ノ箇所ニ於ケル最上層ノ甲板ナルトキハ零、其ノ他ノ甲板ナルトキハ梁柱ノ上端ノ甲板ト其ノ直上ノ甲板トノ間ノ梁柱ニ對スルws及bハ第二百五一條ノ規定ニ依ル

hハ當該甲板ニ對シ第八十三條ノ規定ニ依リ定メタル高サ(米ニテ)

筒形特設梁柱ヲ構成スル板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ス

第二百七條

艙内ニ設クル特設梁柱ノ下端ハ肋板ト内龍骨又ハ二重底桁板トノ交叉スル箇所ニ取附クヘシ若シ内龍骨又ハ桁板ナキ箇所ニ梁柱ヲ設クルトキハ該梁柱直下ニ於テ肋板ノ前後一肋骨心距間ニ斷切桁板ヲ設クヘシ

第二百八條

筒形特設梁柱ノ上下兩端ハ之ヲ取附クル鋼板ニ密著セシメ鏢山形鋼ヲ以テ固著スヘシ
外徑三五〇耗以上ノ筒形特設梁柱ト鏢山形鋼トハ二列銕以上ノ固著ト爲スヘシ

筒形特設梁柱ノ下端ヲ二重底内底板又ハ水槽頂板ニ取附クルトキハ内底板又ハ水槽頂板ニ適當ノ二重張板ヲ設クヘシ

筒形特設梁柱ノ下端ヲ甲板ニ取附クルトキハ必要ニ應ジ適當ノ補強構造ヲ爲スヘシ

筒形ニ非サル特設梁柱ノ上下兩端ハ梁柱ノ形狀ニ從ヒ適當ノ山形鋼及肘板又ハ平置板ヲ以テ堅牢ニ固著スヘシ

第二百九條

軸路又ハ肋骨ニ梁柱ヲ取附クルトキハ該部分ニ於ケル軸路又ハ肋骨ヲ適當ニ補強スヘシ

第二百十條

機關室内ノ梁ニハ成ルヘク多數ノ梁柱ヲ取附クヘシ

第二百十一條

仕切隔壁ヲ以テ梁柱ニ代用スルトキハ仕切

0.022 Φ₀ + 4.6 (耗ニテ)

Φ₀ハ筒形特設梁柱ノ外徑(耗ニテ)

第二百六條

筒形特設梁柱ト其ノ前方又ハ後方ノ特設梁柱トノ中間ニ於テ甲板下縱桁上ニ上部甲板間ノ梁柱ヲ設クルトキハ該筒形特設梁柱ノ外徑ハ左ニ掲クルwヲ用ヒ前條第一項ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

W = kw₀ + S₀h

S、b及hハ前條第一項ノ規定ニ依ル

w₀ハ筒形特設梁柱ノ上端ノ甲板ト其ノ直上ノ甲板トノ間ノ梁柱ニ對スルw

kハ當該筒形特設梁柱ヨリ上部甲板間ノ梁柱ニ至ル水平距離ト當該筒形特設梁柱ヨリ上部甲板ニ梁柱ヲ設ケアル方向ニ於ケル特設梁柱ニ至ル水平距離トノ比(r)ニ應シ左ノ算式ニ依リ算定シタル係數

$\frac{2r^2 - 3r + 1}{2r - 3r + 1}$

前項ノ算式ヲ適用スルニ當リ上部甲板間ノ梁柱二箇以上ナルトキハ當該筒形特設梁柱ノ直上、之ト其ノ前方ノ特設梁柱トノ間及之ト其ノ後方ノ特設梁柱トノ間ニ在ル上部甲板間ノ各梁柱ニ付算定シタルkw₀ノ和ヲ算式ノkw₀ニ充ツヘシ

隔壁ノ構造ハ左ノ各號ノ規定ニ依ルヘシ

一 隔壁板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ六耗未滿ト爲スコトヲ得ス

3.3 S₀ + 3 (耗ニテ)

S₀ハ防撓材ノ心距(米ニテ)

二 隔壁ニハ左ノ算式ニ依リ算定シタル截面抵抗率ヲ有スル防撓材ヲ取附クヘシ

C₁S₀ + C₂S₀h (釐³ニテ)

l、S、b及hハ防撓材ヲ梁柱ト看做シ第二百五一條ノ規定ニ依リ定メタルモノ

fハ防撓材ノ深サ(耗ニテ)

C₁ハ隔壁ノ兩側ニ石炭ヲ積載スル場合ニ於テハ〇・一

三、其ノ片側ニ石炭ヲ積載スル場合ニ於テハ〇・二

五、其ノ他ノ場合ニ於テハ〇・四〇

C₂ハ防撓材ニ用フル形鋼カ山形鋼ナルトキハ〇・〇〇

七、球山形鋼ナルトキハ〇・〇一〇、溝形鋼ナルトキハ〇・〇一二

三 隔壁板ヲ甲板及二重底ニ固著スル山形鋼ノ厚サハ隔壁板ノ厚サニ二・五耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲スヘシ

四 防撓材ノ上端ハ梁ニ固著シ其ノ下端ノ固著ハ水密隔

壁ノ防撓材ノ下端ニ於ケル短山形鋼固著ト同等以上ノ效力ヲ有スルモノト爲スヘシ

五 隔壁ヲ艙口等ニテ中斷スルトキハ其ノ端ニ於ケル防撓材ノ兩端ハ肘板ヲ以テ固著スヘシ

第二百十二條 圍壁ヲ以テ梁柱ニ代用スルトキハ其ノ構造ハ場合ニ應シ甲板荷重及側壓ヲ支持スルニ十分ナルモノナルコトヲ要ス

第九章 梁下縱材及甲板下縱桁

第二百十三條 梁毎ニ梁柱ヲ取附ケサル場合ニ於テハ梁下縱材又ハ甲板下縱桁ヲ設ケ梁柱ヲ取附ケサル梁ヲ支持スヘシ

第二百十四條 梁下縱材ハ左ノ算式ニ依リ算定シタル截面抵抗率ヲ有スルモノ以上ト爲シ二箇ノ鉄ヲ以テ梁ニ固著スヘシ

$$C/2bh \quad (C \text{ノ三乗ニテ})$$

Cハ梁柱ヲ梁一本置ニ配置スルトキハ二・七、梁二本置ニ配置スルトキハ三・二、梁三本置ニ配置スルトキハ三・四

lハ當該縱材ノ支點間ノ長サ(米ニテ)

bハ當該縱材ヨリ其ノ左右ノ縱材又ハ肋骨ノ内面ニ至ル

各區間ノ中心間ノ距離(米ニテ)但シ該距離カBノ五分ノ一未滿ナルトキハBノ五分ノ一

hハ當該縱材ニ依リ支持セラルル甲板ニ對シ第八十三條ノ規定ニ依リ定メタル高さ(米ニテ)

第二百十五條 甲板下縱桁ハ下緣ニ形鋼ヲ附スルカ又ハ下緣ヲ曲線シタル切缺縱通桁板ヲ曲線又ハ山形鋼ヲ以テ鋼甲板又ハ梁上帶板ニ固著シタル構造ト爲スヘシ

桁板ノ深サハ隔壁ヨリ隔壁ニ至ル區間ヲ通シ同一ト爲シ甲板下縱桁ヲ支柱スル特設梁柱ノ心距ノ中最大ナルモノノ二十二分ノ一以上ト爲スヘシ

$$0.006d_0 + 5 \quad (d_0 \text{ニテ})$$

d₀ハ桁板ノ深サ(米ニテ)

桁板ノ下緣ニ於ケル曲線ノ幅ハ桁板ノ厚サノ一五倍ヲ超ユルコトヲ得ス但シ曲線部ニ冠板ヲ取附ケタルトキ又ハ曲線部ヲ肘板ヲ以テ支持スルトキハ此ノ限ニ在ラス

桁板ノ下緣ニ於ケル形鋼又ハ曲線及之ニ附スル冠板ノ截面ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$48 \frac{l_0 bh}{d_0} - \frac{td_0}{300} \quad (l_0 \text{ノ平方ニテ})$$

l、b及hハ前條ノ規定ヲ準用シテ定メタル長サ、距離及高さ(米ニテ)

tハ桁板ノ厚サ(米ニテ)

d₀ハ桁板ノ深サ(米ニテ)

l₀ハ隔壁ヨリ隔壁ニ至ル區間ニ於ケル特設梁柱ノ心距ノ中最大ナルモノ(米ニテ)

第二百十六條 二個ノ特設梁柱ニ依リ支持セラルル甲板下縱桁上ニ該特設梁柱ノ直上ニ在ラサル個所ニ上部甲板間ノ梁柱ヲ設クルトキハ甲板下縱桁ノ桁板ノ下緣ニ於ケル形鋼又ハ曲線及之ニ附スル冠板ノ面積ハ前條第五項ノ規定ニ拘ラス左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$48 \frac{l_0 (bh + kw)}{d_0} - \frac{td_0}{300} \quad (l_0 \text{ノ平方ニテ})$$

l₀、l、b、h、t及d₀ハ前條ノ規定ニ依ル

wハ上部甲板間ノ梁柱ニ對スル第二百一條、第二百五條又ハ第二百六條ニ掲タルw

kハ甲板下縱桁ヲ支持スル特設梁柱ヨリ上部甲板間ノ梁柱ニ至ル水平距離aトlトノ比ニ應シ左ノ算式ニ依リ算定シタル係數

$$12 \frac{a}{l} (1 - \frac{a}{l})^2$$

前項ノ算式ヲ適用スルニ當リ上部甲板間ノ梁柱カ一箇ナルトキハ之ニ近キ方ノ特設梁柱ヨリ測リタルaニ依リkヲ定メ二箇以上ナルトキハ同一特設梁柱ヨリaヲ測リ上部甲板間ノ各梁柱ニ付定メタルkwノ和ト他ノ特設梁柱ニ對シ定メタル之ニ相當スル和トノ中大ナルモノヲ算式ノkwニ充ツヘシ

第二百十七條 己ムコトヲ得サル理由ニ依リ桁板ノ深サヲl₀ノ二十二分ノ一未滿ト爲ストキハ其ノ下緣ニ於ケル形鋼又ハ曲線及之ニ附スル冠板ノ面積ハ前二條ノ規定ニ依ル截面積ニl₀ノ二十二分ノ一ト桁板ノ深サトノ比ヲ乘シタルモノ以上ト爲スヘシ

第二百十八條 梁下縱材又ハ甲板下縱桁ヲ構成スル桁板及形鋼ハ成ルヘク長材ヲ用ヒ其ノ接合ハ覆板ヲ附シタル衝接ト爲スカ又ハ累接ト爲スヘシ

第二百十九條 甲板下縱桁ノ下緣ニ於ケル形鋼又ハ曲線ノ幅一八〇耗未滿ナルトキハ桁板ト梁トヲ山形鋼ヲ以テ固著シ且一・八米ヲ超エサル間隔ニ該山形鋼ヲ桁板ノ下端迄延長シ、一八〇耗以上ナルトキハ二・七米ヲ超エサル

間隔ニ肘板ヲ取付ケ桁板及其ノ曲線部又ハ形鋼ト梁トテ固著シ且其ノ中間ノ梁ト桁板トヲ山形鋼ヲ以テ固著スヘシ

第二百二十條 甲板下縱桁ト隔壁ノ堅防撓材トハ桁板ノ下緣ヨリ測リタル深サ及防撓材ノ内緣ヨリ測リタル幅ハ各桁板ノ深サ以上、厚サハ桁板ノ厚サ以上ニシテ且遊邊ヲ曲線ト爲シタル肘板ヲ以テ二列鎮固著ト爲スヘシ
甲板下縱桁ヲ固著スル隔壁防撓材ハ該縱桁ヲ支持スルニ十分ナル效力ノモノナルコトヲ要ス

第十章 外板

第二百二十一條 本令ニ於テ舷側厚板トハ強力甲板トシテ取扱ハルル上甲板ノ舷側ニ附スル外板ヲ謂フ
本令ニ於テ龍骨翼板トハ方形龍骨ニ附スル外板ヲ謂フ
本令ニ於テ船底外板トハ龍骨翼板ヲ除キ彎曲上部迄ノ船底ニ附スル外板ヲ謂フ

本令ニ於テ船側外板トハ舷側厚板及其ノ直下ノ外板ヲ除キ彎曲上部ヨリ上甲板迄ノ船側ニ附スル外板ヲ謂フ
第二百二十二條 中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル船側外板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタル厚サニd及Dニ對ス

ル左ノ各號ノ修正高チ正負ノ符號ヲ附シタル儘加ヘタルモノ以上ト爲スヘシ

1 $5.18 + 5.96 \left(\frac{L}{100} \right) + 1.61 \left(\frac{L}{100} \right)^2$ (耗=テ)

dニ對スル修正高

2 $(0.044L + 0.37)(D - 0.06L)$ (耗=テ)

Dニ對スル修正高

$0.0027L \left(\frac{L}{12} - D \right)$ (耗=テ)

中央部Lノ二分ノ一間ニ連續スル船樓アルトキハ該船樓甲板迄ノ深サヲ前項ノ算式ノDニ充ツヘシ

第二百二十三條 中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル船底外板ノ厚サハLカ一〇五米以下ナルトキハ前條ニ依ル船側外板ノ厚サ以上ト爲シ、Lカ一〇五米ヲ超ユルトキハ前條ニ依ル船側外板ノ厚サニ左表ニ掲クル厚サヲ加ヘタルモノ以上ト爲スヘシ

L	下以	105—135
	上超テ	135—175
加フヘキ厚サ (耗)	0.25	0.50
	1.00	175—

第二百二十四條 前部Lノ四分ノ一間ニ於ケル船底外板ノ厚サハ前條ノ規定ニ依ル厚サノ一・一倍以上ト爲スヘシ

第二百二十五條 船側外板ノ厚サ及前條ニ掲クルモノヲ除キ其ノ他ノ船底外板ノ厚サハ中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次之ヲ減少シ首尾兩端ニ於テハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノト爲スコトヲ得

$4.40 + 6.67 \left(\frac{L}{100} \right) - 0.90 \left(\frac{L}{100} \right)^2$ (耗=テ)

第二百二十六條 肋骨心距カ第五百四十四條ノ規定ニ依ル標準心距ヲ超ユルトキハ超過一〇耗ニ付〇・一耗ノ割合ヲ以テ船側外板及船底外板ノ厚サヲ増スヘシ

第二百二十七條 舷側甲板ノ幅ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$1000 + 2.08L$ (耗=テ)

舷側厚板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタル厚サニd及Dニ對スル左ノ各號ノ修正高チ正負ノ符號ヲ附シタル儘加ヘタルモノ以上ト爲スヘシ但シ中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次之ヲ減少シ首尾兩端ニ於テハ船側外板ノ首尾ノ厚サニ等シカラシムルコトヲ得

$3.56 + 2.92 \left(\frac{L}{100} \right) + 5.74 \left(\frac{L}{100} \right)^2$ (耗=テ)

1 dニ對スル修正高

$(0.0016L + 4.53)(D - 0.06L)$ (耗=テ)

2 Dニ對スル修正高

$4.17 \left(\frac{L}{12} - D \right)$ (耗=テ)

第二百二十八條 舷側厚板直下ノ外板ノ厚サハ當該箇所ニ於ケル舷側厚板ノ前條ノ規定ニ依ル厚サト船側外板ノ第二百二十二條及第二百二十五條ノ規定ニ依ル厚サトノ平均以上ト爲スヘシ但シ舷側厚板ト船側外板トノ厚サノ差カ小ナルトキハ船側外板ノ厚サニ等シク爲スコトヲ得

第二百二十九條 舷側厚板及其ノ直下ノ外板ノ厚サハ前二條ノ規定ニ拘ラス當該箇所ニ於ケル船側外板ノ厚サヨリ小ナルコトヲ得ス

第二百三十條 龍骨翼板ノ幅ハ舷側厚板ノ幅以上ト爲シ、其ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次厚サヲ減スルコトヲ得

$5.79 + 7.66 \left(\frac{L}{100} \right) + 1.08 \left(\frac{L}{100} \right)^2$ (耗=テ)

龍骨翼板ノ厚サハ前項ノ規定ニ拘ラス之ニ隣接スル船底外板ノ厚サヨリ小ナルコトヲ得ス

第二百三十一條 車軸管覆外板、船尾骨材ノ踵部ニ固著スル外板、眼鏡形車軸膨出部ノ外板等火造リヲ爲ス外板ノ厚サハ前條ノ算式ニ依ル厚サ以上ト爲スヘシ
 前項ニ該當スルモノヲ除クノ外船尾骨材ニ固著スル外板ハ第二百二十二條ノ規定ニ依ル船側外板ノ厚サ以上ト爲スヘシ

第二百三十二條 船橋樓甲板カ強力甲板ナル場合ニ於ケル船橋樓ノ外板ノ厚サハ船橋樓甲板迄ノ深サヲDトシ第二百二十二條ノ規定ニ依リ算定シタル船側外板ノ厚サ以上ト爲スヘシ
 船首樓ノ外板又ハ船橋樓甲板カ強力甲板ナラサル場合ニ於ケル船橋樓ノ外板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$3.65 + 6.67 \left(\frac{L}{100} \right) - 1.03 \left(\frac{L}{100} \right)^2 \quad (\text{米ニテ})$$

船尾樓ノ外板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$4.42 + 3.83 \left(\frac{L}{100} \right) - 1.03 \left(\frac{L}{100} \right)^2 \quad (\text{米ニテ})$$

第二百三十三條 低船尾樓ヲ有スル部分ノ外板ノ寸法ハ低船尾樓甲板ヲ上甲板ト看做シ之ヲ定ムヘシ

第二百三十八條 本令ニ於テ有效甲板トハ強力甲板ノ下方ノ甲板ニシテ其ノ截面積ヲ第二百四十一條ノ規定ノ適用ニ當リ船體横截面ノ抵抗率ノ算定ニ算入スル甲板ヲ謂ヒ有效第二甲板、有效第三甲板等トハ強力甲板直下ノ有效甲板及順次其ノ下方ノ有效甲板ヲ謂フ
 臺甲板トハ強力甲板ノ下方ニ在ル甲板ニシテ有效甲板ニ非サルモノヲ謂フ

第二百三十九條 本令ニ於テ強力甲板又ハ有效甲板ノ有效截面積トハ中央部Lノ二分ノ一以上ヲ縦通スルカ又ハ縦通スト認メ得ヘキ鋼甲板ノ船體中心線ノ各側ニ於ケル截面積ヲ謂フ
 舷線山形鋼ノ截面積ハ強力甲板ノ有效截面積ニ算入スルコトヲ得

有效截面積ノ算定ニ當リテハ銕孔及螺釘孔ハ之ヲ無キモノト看做ス

第二百四十條 有效甲板ノ有效截面積ハ中央部Lノ二分ノ一間ニ在リテハ成ルヘク左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

有效第一甲板 $B(16L + 10.15)$ (平方呎ニテ)
 有效第三甲板 $B(11L + 8.04)$ (平方呎ニテ)

第二百三十四條 上下ニ隣接スル外板ノ横線ノ距離ハ肋骨ノ心距ノ二倍以上ト爲シ又一條ヲ隔テタル外板ノ横線ノ距離ハ肋骨ノ心距以上ト爲スヘシ
 龍骨ニ隣接スル外板ノ横線ハ平板龍骨ノ横線又ハ方形龍骨ノ嵌接ト適當ニ避距スヘシ

前二項ノ規定ハ船ノ首尾ニ於テハ之ヲ斟酌スルコトヲ得
第二百三十五條 暴露甲板ニ於テハ舷線山形鋼ヲ以テ梁上側板ヲ外板ニ固著スヘシ

第二百三十六條 舷側厚板ニ舷窓其ノ他ノ孔口ヲ設クル場合ニ於テ其ノ有效截面積カ孔口ヲ設ケサル部分ノ截面積ノ八〇%未滿ナルトキハ適當ナル補強ヲ爲スヘシ
 外板ニ載貨門、載炭門、吸水口、排出口等ノ開口ヲ設クルトキハ其ノ四隅ニ丸味ヲ附シ且適當ナル補強ヲ爲シ縱及横ノ強力ヲ維持スヘシ

第二百三十七條 錨鎖管ヲ取附クル外板及其ノ下方ノ外板ハ其ノ厚サ増スカ又ハ二重張リト爲シ且其ノ縦線カ錨及錨鎖ニ依リ損傷ヲ受ケサル様適當ニ構造スヘシ

第十一章 甲板
 第一節 強力甲板及有效甲板ノ有效截面積

第二百四十一條 強力甲板ノ有效截面積ハ中央部Lノ二分ノ一間ニ在リテハ船體横截面ノ抵抗率カ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上トナル様之ヲ定ムヘシ
 (f、B (圖ハ川端ニシテ))
 fハLニ依ル係數ニシテ左表ニ依ル

	f	L	f	L
	19386	108	3777	30
	21232	114	4193	36
	23106	120	4892	42
	25051	126	5621	48
	27031	132	6533	54
	29146	138	7470	60
	31268	144	8669	66
	33480	150	9920	72
	35770	156	11253	78
	38063	162	12774	84
	40414	168	14335	90
	42868	174	15897	96
	45368	180	17615	102

備考
 Lカ表ニ掲ケルモノノ中間ニ在ルトキハ挿間法ニ依リfヲ算定ス
 前項ノ規定ニ依ル船體横截面ノ抵抗率ノ算定ニ付テハ左ノ各號ニ依ルヘシ

一 船體横截面ノ水平中性軸ニ對スル惰率ヲ該軸ヨリ強力甲板ノ甲板梁ノ船側ニ於ケル上面迄ノ垂直距離ニテ除ス

二 強力甲板以下ニ在リテハ甲板梁ノ支持ヲ目的トスル梁下縦材又ハ甲板下縦桁及有効甲板ノ有効面積ニ算入セサル鋼甲板ヲ除クノ外中央部Lノ二分ノ一以上ニ達スルカ又ハ同一ノ効力ヲ有スル總テノ縦通鋼材ヲ算入シ強力甲板ノ上方ニ在リテハ梁上側板ニ附スル縦通山形材及舷側厚板ノ延長部ヲ算入ス

三 銹孔及螺釘孔ハ之ヲ無キモノト看做ス

四 面積ノ單位ハ平方耗トシ距離ノ單位ハ米トス

第二百四十二條 船舶ノ用途、構造等ニ依リ船體ノ中央頂部ニ於ケル縦材ニ過大ノ壓縮應力ヲ生スル懸念アルトキハ強力甲板ノ有効面積ヲ前條ノ規定ニ依ルモノヨリ適當ニ増加スルコトヲ要ス

第二百四十三條 左ノ場合ニ於テハ強力甲板ノ有効面積ハ第二百四十一條ノ規定ニ拘ラス管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

一 Lカ一八二・八八米ヲ超ユルトキ

二 BカLノ十分ノ一ニ一・五二米ヲ加ヘタルモノ未滿

當リLヲ一四〇米ト爲スヘシ

船樓甲板及臺甲板ノ梁上側板ノ幅ハ中央部Lノ二分ノ一間ニ在リテハ強力甲板又ハ有効甲板ノ首尾兩端ニ於ケル梁上側板ノ規定ノ幅以上ト爲スヘシ

梁上側板ノ幅ハ前三項ノ規定ニ拘ラス之ヲ二五〇耗未滿ト爲スコトヲ得ス

船樓甲板以下ノ甲板ノ梁上側板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ニシテ且強力甲板ニ在リテハ鋼甲板ノ厚サニ一耗ヲ加ヘタルモノ以上、其ノ他ノ甲板ニ在リテハ鋼甲板ノ厚サ以上ト爲スヘシ

$$0.4 \sqrt{L + 53} \quad (\text{耗=チ})$$

強力甲板ニ非サル船首樓又ハ船尾樓ノ甲板ノ梁上側板ノ厚サハ前項ノ規定ニ拘ラス其ノ箇所ニ於ケル船樓外板ノ厚サニ等シク爲スコトヲ得

強力甲板ノ梁上側板ノ厚サハ舷側厚板ノ厚サヨリ五耗以上ナルコトヲ得ス

第二百四十七條 L七六米以上九一・五米未滿ノ船舶ニ在リテハ中央部Lノ二分ノ一間ノ強力甲板ニ、L九一・五米以上一二二米未滿ノ船舶ニ在リテハ中央部Lノ四分ノ三間ノ強力甲板ニ鋼甲板ヲ張り詰メ其ノ前後ニ於テハ漸

ナルカ又ハ之ニ六・一〇米ヲ加ヘタルモノヲ超ユルトキ

三 Lト強力甲板迄ノ深サトノ比カ一〇未滿ナルカ又ハ一三・五ヲ超ユルトキ

第二百四十四條 前四條ノ規定ニ依リ要求セラルル強力甲板又ハ有効甲板ノ有効面積カ小ナルトキハ順次梁上側板、甲板口ノ側部ニ設クル梁上帶板及梁上側板ニ隣接スル鋼甲板ノ面積ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第二百四十五條 中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ強力甲板又ハ有効甲板ノ有効面積ヲ漸次減少シ首尾兩端ニ於テハ其ノ位置ニ於ケル梁上側板ノ規定ノ面積ト爲スコトヲ得

第二節 鋼甲板及梁上帶板

第二百四十六條 甲板梁ニハ梁上側板ヲ取附クヘシ

強力甲板及有効甲板ノ梁上側板ノ幅ハ中央部Lノ二分ノ一間ニ在リテハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲シ其ノ前後ニ於テハ漸次幅ヲ減シテ首尾兩端ニ在リテハ算式ニ依ルモノノ七〇%迄ト爲スコトヲ得

$$1.95 \sqrt{L - 20} \quad (\text{耗=チ})$$

L一四〇米ヲ超ユル船舶ニ在リテハ前項ノ算式ノ適用ニ

次其ノ幅ヲ減シテ梁上側板ニ一致セシムヘシ

L一二二米以上ノ船舶ニ在リテハ首尾ヲ通シ強力甲板ニ鋼甲板ヲ張り詰ムヘシ

L九一・五米以上ノ船舶ノ船首樓甲板ニハ鋼甲板ヲ張ルヘシ

第二百四十八條 木甲板ヲ張ラサル鋼甲板ノ厚サハ甲板ノ種類ニ應ジ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ未滿ト爲スコトヲ得ス但シ強力甲板ニ付テハ船體横截面ノ抵抗率カ第二百四十一條ニ定ムルモノニ比シ相當ノ餘裕アルトキハ管海官廳ノ見込ニ依リ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

一 中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル強力甲板ノ有効面積ニ算入シタル鋼甲板ニシテ横方向ニ配置シタル梁ニ張りタルモノ

$$1.391 \sqrt{S - 23} \quad (\text{耗=チ})$$

二 中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル有効甲板ノ有効面積ニ算入シタル鋼甲板ニシテ横方向ニ配置シタル梁ニ張りタルモノ

$$1.265 \sqrt{S - 23} \quad (\text{耗=チ})$$

三 中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル強力甲板又ハ有効甲

板ノ有效面積ニ算入シタル鋼甲板ニシテ縦方向ニ配
置シタル梁ニ張りタルモノ
石炭庫ノ甲板

強力甲板中其ノ面積積ヲ有効面積ニ算入セサル部分
及首尾Lノ四分ノ一間

中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル有効甲板ノ鋼甲板ニシ
テ其ノ面積積ヲ有効面積ニ算入セサルモノ

$$10.44 \sqrt{S} - 0.8 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

四 船橋樓甲板ノ暴露部中其ノ面積積ヲ強力甲板ノ有効
面積ニ算入セサル部分

暴露セル船首樓甲板

首尾Lノ四分ノ一間ニ於ケル有効甲板

$$10.12 \sqrt{S} - 1.2 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

五 暴露セル船尾樓甲板

$$9.17 \sqrt{S} - 0.7 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

六 蔽圍セラレタル貨物積載區域ノ臺甲板

$$9.80 \sqrt{S} - 1.5 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

七 蔽圍セラレタル居住區域ノ臺甲板

$$8.22 \sqrt{S} - 1.4 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

Sハ梁ノ心距(米ニテ)但シ心距カ〇・五三米未満ナル

スヘシ

L一〇七米以上ノ船舶ノ中央部Lノ五分ノ二間ニ於ケル
強力甲板及有効第二甲板ニ在リテハ機關室口、艙口、其
ノ他ノ大ナル甲板口ノ間及其ノ端ニ縦桁ヲ設ケ成ルヘク
之ヲ甲板口ノ圍壁又ハ縁材ニ結合スヘシ

前項ノ規定ハ管海官廳ニ於テ必要アリト認ムルトキハL
一〇七米未満ノ船舶ニ之ヲ準用ス

第二百五十一條

舷緣山形鋼ノ厚サハ之ヲ取附クル外板ノ
厚サト梁上側板ノ厚サトノ中小ナルモノ以上ト爲シ其ノ
厚サカ一五糎以上ナルトキハ中央部Lノ二分ノ一間ニ於
テハ二列鉄固著ト爲スヘシ

舷緣山形鋼ノ各邊ノ幅ハ其ノ厚サ及固著方ニ應シ左表ニ
依リ之ヲ定ムヘシ

山形鋼ノ厚サ(耗)		山形鋼ノ各邊ノ幅(耗)	
下以	上超	一列鉄ノ トキ	二列鉄ノ トキ
7.5	7.5—	65	
9	7.5—	75	
12.5	9—	90	
17.5	12.5—	100	150
22.5	17.5—	115	180
28.5	22.5—	125	200

トキハ〇・五三米トシ一・四米ヲ超ユルトキハ一・四
米トス

木甲板ヲ張ラサル鋼甲板ノ厚サハ當該甲板ヨリ其ノ直上
甲板迄ノ高サカ二・五米ヲ超ユルトキハ特ニ重量大ナ
ル物品ノ積載ヲ豫期スルトキハ前項ノ算式ニ依ルモノヨ
リ適當ニ増加スルコトヲ要ス

鋼甲板上ニ木甲板ヲ張りタル場合ト雖モ木甲板カ第二百
五十六條乃至第二百五十八條ノ規定ニ適合シタルモノニ
非サルトキハ木甲板ハ之ヲ無キモノト看做シ前二項ノ規
定ヲ適用ス

第二百四十九條

強力甲板ニ階段アル場合ニ於テハ階段部
ト船底トノ間ニ梁柱、縦通膜板、隔壁又ハ部分隔壁ヲ設
ケ該部ヲ堅牢ニ支持シ且各層ノ強力甲板ヲ構造スル諸材
ヲ相互ニ延長シ膜板、桁板、肘板等ヲ以テ完全ニ結合ス
ヘシ

第二百五十條

前項ノ規定ハ必要ニ應シ有効甲板ノ階段部ニ之ヲ準用ス
中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル有効第二甲板ノ大ナル甲
板口ノ四隅ニ於テハ鋼甲板ヲ二重張りト爲スカ、其ノ厚
サヲ増スカ又ハ其ノ他ノ適當ナル方法ニ依リ該部ヲ補強

舷緣山形鋼ヲ衝接スル箇所又ハ之ヲ通シテ排水孔ヲ設ク
ル箇所ニハ梁上側板ノ下面ニ舷緣山形鋼ト同一寸法ノ背

第二百五十二條

強力甲板及有効甲板ニ在リテハ梁上側
板、舷緣山形鋼及之ニ接スル外板ノ横緣ハ互ニ肋骨心距
ノ二倍以上距離スヘシ但シ船ノ首尾ニ在リテハ適當ニ之
ヲ斟酌スルコトヲ得

第二百五十三條

強力甲板及有効甲板ノ鋼甲板ノ横緣ハ之ニ隣接スル鋼甲
板又ハ梁上側板ノ横緣ト成ルヘク肋骨心距ノ二倍以上避
距スヘシ

第二百五十四條

鋼甲板ヲ張ラサル箇所ノ甲板ニハ左ノ各
號ニ依リ梁上側板ヲ設クヘシ

一 艙口其ノ他ノ大ナル甲板口ノ側部ニハ幅ハ甲板口ノ
長サノ十分ノ一以上、厚サハ梁上側板ノ厚サ以上ノ梁
上側板ヲ設ケ甲板口ノ長サカ四米ヲ超ユルトキハ側板
ヲ甲板口ノ端ヨリ肋骨心距ノ二倍以上延長スヘシ

二 梁柱ノ位置ニハ幅ハBノ四十分ノ一以上、厚サハ梁上側板ノ厚サ以上ノ梁上帶板ヲ設クヘシ
 三 甲板室ノ縁材ノ下部及大ナラサル甲板口ノ側部ニハ適當ナル梁上帶板ヲ設クヘシ

第三節 木 甲板

第二百五十五條 木甲板ニハ十分乾燥セラレ腐蝕、白身、割目及有害ナル節ヲ有セサル木材ヲ使用スヘシ
 堅材トハ「チーク」又ハ之ニ類似ノ木材ヲ謂ヒ柔材トハ米松又ハ之ニ類似ノ木材ヲ謂フ

第二百五十六條 暴露木甲板ノ各條ノ幅ハ成ルヘク柔材ニ在リテハ一二五耗、堅材ニ在リテハ一五〇耗以下ト爲スヘシ
 暴露木甲板ノ厚サハ左表ニ掲クルモノ以上ト爲スヘシ

鋼甲板上ニ木甲板ヲ張ル場合	梁ニ木甲板ノミヲ張ル場合	堅材	柔材	L六〇米未滿ノ船舶	L六〇米以上ノ船舶
		五〇耗	六五耗		
合	鋼甲板上ニ木甲板ヲ張ル場合	堅材	柔材	五〇耗	六五耗
		五〇耗	六五耗		

第二百五十七條 木甲板ハ梁、鋼甲板其ノ他ノ鋼板トノ間ニ適當ナル防蝕劑ヲ施シ之ニ密著セシムヘシ
 梁ニ木甲板ノミヲ張ル場合ニ於テ梁カ肋骨一本置ニ配置セラルトキハ梁毎ニ木甲板ヲ固著スヘシ
 鋼甲板又ハ梁上帶板上ニ木甲板ヲ張ル場合ニ於テハ鋼板ノ防撓性ヲ増ス爲成ルヘク梁ノ間ニ於テ鋼板ニ木甲板ヲ固著スヘシ

第二百五十八條 厚サ八〇耗未滿ノ柔材木甲板又ハ厚サ七〇耗未滿ノ堅材木甲板ノ固著ニハ徑一二・五耗以上、其ノ他ノ木甲板ノ固著ニハ徑一六耗以上ノ亞鉛鍍ヲ施シタル螺釘ヲ用フヘシ
 木甲板ノ固著ニハ固著箇所毎ニ板ノ幅一五〇耗以下ナルトキハ一箇、一五〇耗ヲ超ユルトキハ二箇ノ螺釘ヲ用フヘシ

第二百五十九條 木甲板ノ周縁ニ於テハ鋼縁材ニ沿ヒ木板ヲ配置シ木甲板ノ端部ト鋼材ト力直接ニ接觸スルコトナカラシムヘシ

補汽罐ノ下部及汽管ノ下部	一
冷藏庫ノ下部	二

第二百六十二條 木甲板ニハ填絮ヲ施スヘシ

中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル強力甲板又ハ有効甲板ニ木甲板ノミヲ張ルトキハ木甲板ノ横縁ハ少クトモ三條ヲ隔ツルニ非サレハ之ヲ同一ノ梁心距内ニ置クコトヲ得ス
 第二百六十條 甲板口ノ周圍ニ鋼甲板ヲ張ラサルトキハ木甲板ノ固著ノ爲其ノ兩端ノ梁ニ鋼板ヲ取附クヘシ
 木甲板ノミヲ張リタル暴露甲板ニ在リテハ中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル木甲板ノ衝接ノ箇所ニハ木甲板ノ固著ノ爲梁ニ短山形鋼又ハ鋼板ヲ取附クヘシ
 舷側水道ノ内側ニ附スル山形鋼ノ厚サハ九耗以上ト爲スヘシ

甲板室ノ圍壁、機關室口ノ圍壁等ヲ暴露甲板ニ取附クル山形鋼ノ邊ハ木甲板ノ上面ヨリ一二耗以上ノ高サニ達セシムヘシ

第四節 雜 則

第二百六十一條 濕氣又ハ熱氣ニ接スル箇所ニ於ケル鋼甲板又ハ梁上側板ハ左表ニ依リ其ノ厚サヲ増スヘシ但シ特殊ノ塗裝ニ依リ保護セラルトキハ此ノ限ニ在ラス

箇	所	増スヘキ厚サ(耗)
石炭庫ノ下部		二

第二百五十四條 鋼甲板ヲ張ラサル場合ト雖横置隔壁ノ箇所ニ於テハ隔壁ト梁トノ間ニ鋼板ヲ張り隔壁ノ堅牢ナル「セント」ヲ塗ルコト

第二百五十三條 肋骨カ甲板ヲ貫通スル箇所ニハ甲板ノ種類ニ應ジ左ノ各號ニ掲クル工事ヲ施スヘシ但シ第二號後段ノ工事ハ臺甲板又ハ積載貨物ノ種類ニ依リ必要ナシト認ムル箇所ニ於テハ之ヲ省略スルコトヲ得

一 暴露甲板又ハ水艙ノ頂部ヲ構造スル甲板ニ在リテハ鑄山形鋼ニ依ル水密工事
 二 其ノ他ノ甲板ニ在リテハ肋骨ノ内側ニ沿ヒ山形鋼ヲ取附ケ貫通箇所ノ間隙ヲ木製又ハ鋼板製ノ填材ヲ以テ閉塞シ且該山形鋼ト外板トノ間ニ適當ノ厚サ迄「セメント」ヲ塗ルコト

支持ノ爲必要ニ應シ之ヲ防撓スヘシ

第二百六十五條 鋼甲板上ニ化學的被覆材料ヲ塗裝スル場合ニ於テハ塗裝前鋼甲板ヲ填隙シ水密ナラシムヘシ
塗裝材料カ鋼材ヲ腐蝕スル虞アルモノナルトキハ塗裝前鋼板ニ絶縁塗料ヲ施スヘシ

第十二章 隔 壁

第一節 總 則

第二百六十六條 船首隔壁ハ滿載吃水線ニ於ケル船首材ノ前面ヲ距ルコト推進機關ヲ有セサル帆船ニ在リテハLノ十分ノ一、其ノ他ノ船舶ニ在リテハLノ百分ノ五ヨリ小ナラサル箇所ニ之ヲ設クヘシ
特殊ノ形狀ノ船首ヲ有スル船舶ノ船首隔壁ノ位置ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第二百六十七條 推進機關ヲ有セサル帆船ヲ除キ其ノ他ノ船舶ニ在リテハ適當ノ位置ニ船尾隔壁ヲ設クヘシ
船尾管ハ船尾隔壁又ハ其ノ他ノ適當ナル構造ニ依リ他ノ部分ト隔離セル水密區畫室内ニ之ヲ置クヘシ
機關ヲ有セサル帆船ニシテ海水ニ連結シ得ヘキ「ポンプ」ヲ船尾ニ備フルモノニ在リテハ船尾隔壁ヲ適當ナ位置ニ設ケ該「ポンプ」ヲ水密區畫室内ニ蔽圍スヘシ

ニ依ル

一 低船首樓又ハ低船尾樓ノ箇所ニ於テハ隔壁ヲ當該船樓甲板迄達セシムヘシ
二 吃水ノ特ニ小ナル船舶ニ在リテハ管海官廳ノ承認ヲ受ケ船首隔壁ヲ除キ其ノ他ノ隔壁ヲ第二甲板ニ止ムルコトヲ得
三 船尾隔壁ハ滿載吃水線以上ニ在ル甲板ヲ該隔壁ヨリ船尾迄水密ニ構造スルトキハ之ヲ該甲板ニ止ムルコトヲ得

第二百七十一條 特殊ノ用途ニ使用スル船舶ニ在リテハ管海官廳ノ承認ヲ受ケ水密隔壁ノ數又ハ其ノ達スル高サヲ減スルコトヲ得
前項ノ規定ニ依リ隔壁ヲ省略スルトキハ部分隔壁、特殊肋骨等ニ依リ適當ナル補強ヲ爲スヘシ

第二百七十二條 水密隔壁カ強力甲板迄達セサルトキハ該隔壁ノ上部ニ強力甲板ニ達シ船體ノ横強力及横防撓性ヲ維持スルニ十分ナル特設肋骨ヲ設クルカ又ハ其ノ他ノ適當ナル補強ヲ爲スヘシ

第二百七十三條 國際航海ニ從事スル旅客船ノ水密隔壁ニ付テハ本章ノ規定ニ依ルノ外船舶區畫規定ノ定ムル所ニ

第二百六十八條 機關室ノ前後ニハ水室隔壁ヲ設クヘシ
第二百六十九條 L六七米以上八七米未滿ノ船舶ニシテ機關室ヲ船尾ニ有スルモノニ在リテハ船首隔壁ト機關室前

端隔壁トノ中間ニ一箇ノ水密隔壁ヲ設クヘシ
L八七米以上一〇二米未滿ノ船舶ニシテ機關室ヲ中央ニ有スルモノニ在リテハ一箇、機關室ヲ船尾ニ有スルモノニ在リテハ二箇ノ水密隔壁ヲ船首隔壁ト機關室前隔壁トノ中間ニ設クヘシ

L一〇二米以上一二三米未滿ノ船舶ニシテ機關室ヲ中央ニ有スルモノニ在リテハ前艙及後艙ニ各一箇ノ水密隔壁ヲ設ケ機關室ヲ船尾ニ有スルモノニ在リテハ船首隔壁ト機關室前隔壁トノ中間ニ三箇ノ水密隔壁ヲ設クヘシ
L一二三米以上ノ船舶ニ付テハ前二項ノ規定ニ倣ヒ水密隔壁ヲ配置シ其ノ總數ヲL一四三米未滿ノ船舶ニ在リテハ七箇、一四三米以上一六五米未滿ノ船舶ニ在リテハ八箇、一六五米以上一八六米未滿ノ船舶ニ在リテハ九箇ト爲スヘシ

第二百七十條 前四條ノ隔壁ハ其ノ間隔ヲ成ルヘク三〇米以下ト爲スヘシ
前四條ノ隔壁ハ上甲板迄達セシムヘシ但シ左ノ特別規定

依ル

第二百七十四條 機關ヲ有セサル帆船ノ水密隔壁ニ付テハ**第二百六十六條**及**第二百六十七條**第三項ノ規定ニ依ルノ外管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル
第二節 水密隔壁ノ構造及水密試驗

第二百七十五條 隔壁板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ
$$(0.4S + 0.115)(H + 8.35) + 2.1 \quad (S = \text{米})$$

Sハ防撓材ノ心距(米ニテ)但シ船首隔壁ニ在リテハ防撓材ノ實際ノ心距(米ニテ)ニ〇・一五米ヲ加ヘタルモノ
Hハ各隔壁板ノ下緣ヨリ船ノ中心線ニ於ケル隔壁甲板迄ノ距離(米ニテ)但シ該距離カ二米未滿ナルトキハ二米
隔壁ノ最下部ニ用フル板ノ厚サハ前項ノ規定ニ依ルモノ
ニ一耗ヲ加ヘタルモノト爲スヘシ但シ隔壁ノ下部ニ於テ其ノ前後ニ互ル二重底アル場合ハ此ノ限ニ在ラス
隔壁ノ最下部ニ用フル板ノ上緣ノ高サハ二重底ノ箇所ニ於テハ内底板ノ上面ヨリ、單底ノ箇所ニ於テハ龍骨ノ上面ヨリ成ルヘク六一〇耗以上ト爲シ隔壁ノ一側ノミニ二重底アルトキハ内底板ノ上面ヨリ成ルヘク三〇〇耗以上

ト爲スヘシ

塗水路ニ於ケル隔壁板ノ厚サハ成ルヘク第一項ノ規定ニ依ルモノニ二・五耗ヲ加ヘタルモノト爲スヘシ
汽罐又ハ石炭庫ニ面スル隔壁ノ最下部ニ用フル板ハ其ノ厚サヲ第一項ノ算式ニ依ルモノニ二・五耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲シ且汽罐ニ面スルモノハ汽罐室床上一〇〇耗以上ノ高サニ達セシムヘシ
船尾管ノ貫通スル箇所ニ於テハ船尾隔壁ヲ二重張ト爲スカ又ハ其ノ厚サヲ増スヘシ

第二百七十六條

隔壁防撓材ノ截面抵抗率ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$K S^2 (H+M) \quad (H \text{ノ三乗ニテ})$$

S ハ防撓材ノ心距(米)ニテ但シ船首隔壁ニ在リテハ防撓材ノ實際ノ心距ノ一・二五倍

l ハ防撓材ノ支點間ノ全長(米ニテ)ニシテ其ノ端ニ於テハ固著部ノ長サヲ含ムモノ

H ハ l ノ中央ヨリ船ノ中心線ニ於ケル隔壁甲板迄ノ距離(米ニテ)

M ハ l 七五米以上ノ船舶ニ在リテハ〇・六、l 六〇米以下ノ船舶ニ在リテハ零、其ノ他ノ船舶ニ在リテハ左ノ

d₀ ハ桁板ノ深サ (耗ニテ)

三 桁板ノ遊縁ニ附スル形鋼又ハ桁板ノ曲線部ノ截面積ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$\frac{54}{d_0} \frac{l^2 S h}{300} \quad (平方厘米ニテ)$$

l ハ防撓横桁ノ端ノ固著部ヲ含ミタル全長(米ニテ)

S ハ當該防撓横桁ヨリ其ノ上下ノ防撓横桁、甲板又ハ内底板ニ至ル各區間ノ中心間ノ距離(米ニテ)

h ハ防撓横桁ヨリ船ノ中心線ニ於ケル隔壁甲板ノ上端迄ノ距離(米ニテ)

d₀ ハ桁板ノ深サ(耗ニテ)

t ハ桁板ノ厚サ(耗ニテ)

四 防撓横桁ノ端ハ固著部ヲ除キタル各邊ノ長サカ桁板ノ深サ以上ニシテ且遊縁ヲ曲線シタル肘板ニ依リ外板又ハ縦通隔壁板ニ二列鋸固著ト爲スヘシ

五 防撓横桁ハ堅防撓材ニ本置ニ肋板ヲ設ケテ之ヲ支持シ其ノ他ノ堅防撓材ニ短山形鋼ヲ以テ固著スヘシ

第二百七十八條

管海官廳ハ隔壁ノ達スル高サト吃水トヲ併セ考慮シ前三條ノ規定ノ適用ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

算式ニ依リ算定シタル數

$$0.04L - 2.4$$

K ハ係數ニシテ防撓材ノ兩端ヲ肘板固著ト爲ストキハ一・九、短山形鋼固著ト爲ストキハ二・八、固著セサルトキハ三・六

塗水路ノ箇所ニ於ケル特ニ長キ防撓材ニ付テハ其ノ下端ヲ特ニ堅牢ニ固著スルトキハ二重底上面迄ノ l ニ依リ其ノ截面抵抗率ヲ定ムルコトヲ得

第二百七十七條

隔壁ニ左ノ各號ニ依リ防撓横桁ヲ設クルトキハ堅防撓材ノ寸法ハ l ヲ横桁迄測リ前條ノ規定ニ依リ之ヲ定ムヘシ但シ堅防撓材カ防撓横桁ヲ貫通シ且短山形鋼ヲ以テ該横桁ニ固著セラルル場合ニ於テ其ノ固著部ノ截面積ヲ第二百七十九條ノ規定ニ依ル截面積ノ二倍以上ト爲ストキハ之ヲ肘板固著ト看做シ K ノ値ヲ定ムルコトヲ得

一 防撓横桁ハ桁板ヲ隔壁板ニ固著シ其ノ遊縁ニ形鋼ヲ附スルカ又ハ曲線シタル構造ト爲スヘシ

二 桁板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$0.006d_0 + 5 \quad (耗ニテ)$$

第二百七十九條

防撓材ノ端ヲ短山形鋼又ハ肘板ヲ以テ固著セサルトキハ之ヲ隔壁ノ周圍山形鋼ニ累ネ固著スヘシ
防撓材ノ端ヲ短山形鋼ヲ以テ固著スル場合ニ於テハ山形鋼ノ各邊ニ於ケル鋸ノ數及徑ハ防撓材ノ種類及深サニ應ジ左表ニ依リ之ヲ定ムヘシ

山形鋼ノ各邊ニ於ケル鋸ノ數	深サノキ	防撓材ノ深サノキ	
		溝形鋼ノ深サノキ	山形鋼ノ深サノキ
2	150	150	150
3	175	180	180
3	200	—	—
4	230	200	200
4	250	230	230
4	280	250	250
5	300	280	280
6	—	300	300
8	—	380	380
9	—	425	425

防撓材ノ端ヲ肘板ヲ以テ固著スル場合ニ於テハ肘板ノ寸法及固著ハ第九十條ノ表ヲ準用シテ之ヲ定ムヘシ但シ防撓材又ハ固著用山形鋼ト累ナル部分ノ肘板ノ深サ及幅ハ相等シク表ニ掲クル肘板ノ幅ト等シク爲スコトヲ得
防撓材ノ上端ヲ固著スル鋸ノ數ハ前二項ノ規定ニ依ルモノニ左ノ算式ニ依リ算定シタル係數ヲ乘シタルモノト爲スコトヲ得

四及一八第二百七十六條第一項ノ規定ニ依ル
防撓材ノ下端ノ肘板ヲ内底板ニ固著スル山形鋼ハ隔壁ノ
次ノ肋板ヲ超エテ延長スヘシ

防撓材ノ上端ノ肘板ヲ甲板ニ固著スル山形鋼ハ之ヲ隔壁
ノ次ノ梁ニ達セシメ且必要ニ應ジ該部分ニ於ケル甲板ノ
防撓性ヲ増スヘシ

第二百八十條 水密隔壁ノ周圍山形鋼ハ其ノ厚サヲ之ヲ取
附クル隔壁板ノ規定ノ厚サニ二・五耗ヲ加ヘタルモノ以
上ト爲シ船ノ中心線ニ於ケル隔壁甲板ノ上端ヨリ一〇・
七米ヲ超ユル箇所ニ在リテハ二列鉄固著ト爲スヘシ

第二百八十一條 隔壁力階段ヲ爲ス場合ニ於テハ上方隔壁
ノ下端及階段部ノ各肋骨ノ位置ニ第百八十二條ノ規定ニ
依リ梁ヲ設クヘシ但シ上方隔壁ノ下端ノ梁ハ之ニ代用ス
ル爲隔壁ノ構造ヲ特ニ堅牢ナラシムルトキハ省略スルコ
トヲ得

隔壁ノ階段部ニ張ル鋼板ノ厚サハ之ト同一ノ高サニ於ケ
ル隔壁板ノ規定ノ厚サニ一耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲ス
ヘシ但シ當該部分ノ鋼甲板ノ厚サ未滿ト爲スコトヲ得

材ヲ切斷スルトキハ戸口ニ適當ナル枠ヲ附シ防撓材ヲ切
斷セサル場合ニ於ケル隔壁ノ強力ヲ保持スルニ十分ナル
構造ト爲シ戸口ノ兩側ニハ隔壁ノ下端ヨリ戸口ノ上方相
當ノ高サニ達シ且外縁ヲ防撓シタル勾配附桁板ヲ設クヘ
シ

甲板間ノ隔壁ニ於テ水密戸ヲ設クル爲防撓材ヲ切斷セス
シテ其ノ箇所ニ於ケル防撓材ノ心距ヲ増シタルトキハ戸
口ノ兩側ニ適當ナル補強ヲ爲シ、戸口ヲ設ケサル場合ニ
於ケル隔壁ノ強力及防撓性ヲ保持スルニ十分ナル構造ト
爲スヘシ此ノ場合戸口ニ附シタル枠ヲ防撓材ト看做スコ
トヲ得ス

第二百八十四條 船首隔壁ニハ海水排出ノ爲ノ支水弁又ハ
支水「コック」ヲ設クルコトヲ得ス其ノ他ノ隔壁ト雖モ
検査ノ爲何時ニテモ近寄り得ル箇所ニ非サレハ之ニ支水
弁又ハ支水「コック」ヲ設クルコトヲ得ス

支水弁又ハ支水「コック」ノ開閉鐸ハ其ノ重量ヲ弁又ハ
「コック」ニテ支フルコトナク隔壁甲板上ノ箇所ヨリ操
作シ得ル構造ト爲シ且其ノ操作位置ニ弁又ハ「コック」
ノ開閉ヲ指示スル裝置ヲ設クヘシ

第二百八十五條 錨鎖庫ヲ船首隔壁ノ後方ニ設クルトキハ

鋼船構造規程

ス
隔壁ノ階段部ヲ支持スル梁柱ノ寸法ハ階段部ノ上面ニ作
用スルコトアルヘキ水壓ヲ考慮シテ之ヲ定メ該梁柱ノ固
著ハ其ノ下面ニ作用スルコトアルヘキ水壓ニ耐ユルモノ
ト爲スヘシ

第二百八十二條 水密戸ハ其ノ受クヘキ水壓ニ對シ十分ナ
ル強力ヲ有シ接著良好ニシテ成ルヘク製造所ニ於テ效力
試験ヲ行ヒ之ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス

水密戸ハ塵芥ノ堆積又ハ石炭ノ押壓ノ爲其ノ閉鎖ヲ妨ケ
ラレサル構造ト爲スヘシ

艙内ニ設クル水密戸ハ迂戸ナルコトヲ要ス

水密迂戸ノ開閉裝置ハ常ニ接近シ得ヘキ場所ニ之ヲ設ケ
隔壁甲板上ヨリ操作シ得ル構造ト爲シ該操作位置ニハ成
ルヘク戸ノ開閉ヲ指示スル裝置ヲ設クヘシ

水密迂戸ノ開閉軸ハ成ルヘク直接配置ト爲シ軸ノ螺旋部
ニ用フル母螺ハ之ヲ黃銅製ト爲スヘシ

甲板間ノ隔壁ニ設クル水密戸ハ管海官廳ノ承認ヲ受ケタ
ルトキハ之ヲ蝶番戸ト爲スコトヲ得

前項ノ水密戸ニ設クル蝶番ノ軸針ハ黃銅製ト爲スヘシ

第二百八十三條 隔壁ノ下部ニ於テ水密戸ヲ設クル爲防撓

水密ヲ保持スルニ十分ナル構造ト爲シ且「ポンプ」ニ依
ル排水裝置ヲ設クヘシ

第二百八十六條 水密隔壁及其ノ階段部ニハ布管内ノ水壓
力毎平方糎二厨以上ノ水ヲ注射シ其ノ水密ヲ試験スヘシ
船首隔壁ノ後方ニ在ル錨鎖庫ハ其ノ頂端迄水ヲ充シ其ノ
水密ヲ試験スヘシ

船尾管區畫室ハ滿載吃水線迄ノ高サニ等シキ水高壓力ヲ
以テ、船首艙ハ滿載吃水線迄ノ高サ及船首隔壁ノ高サノ
三分ノ二ノ中大ナルモノニ等シキ水高壓力ヲ以テ其ノ水
密ヲ試験スヘシ

第三節 水密ヲ要セサル隔壁

第二百八十七條 梁柱ニ兼用スル石炭庫隔壁ノ構造及寸法
ニ付テハ第二百一十一條ノ規定ニ依ルヘシ

第二百八十八條 梁柱ニ兼用セサル石炭庫隔壁ノ板ノ厚サ
ハ第二百一十一條第一號ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定メ防撓材
ノ截面抵抗率ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲
スヘシ

$$C_1 S_1 + C_2 \quad (\text{噸ハ三噸ニテ})$$

S 及一八第二百七十六條ノ規定ニ依ル

C₁ ハ横置隔壁ナルトキハ〇・三二、縦通隔壁ナルトキハ

C₂ハ横置隔壁ナルトキハ一五、縦通隔壁ナルトキハ一三
第二百八十九條 石炭庫隔壁ノ最下部ニ用フル板ノ厚サハ
 九耗以上ト爲シ其ノ上縁ノ高サハ焚火室床面上六一〇耗
 以上ト爲スヘシ

第二百九十條 傾斜セル石炭庫隔壁ニ在リテハ防撓材ノ寸
 法ヲ適當ニ増加シ且防撓材ト甲板梁トヲ肘板ニ依リ固著
 セラレタル扣山形鋼ヲ以テ連結スヘシ

第十三章 深水槽

第一節 深水槽ノ構造

第二百九十一條 本令ニ於テ深水槽トハ水、油其ノ他ノ液
 體ヲ積載スル爲船内又ハ甲板間ニ構造スル水槽ヲ謂フ

第二百九十二條 深水槽ヲ構造スル隔壁ノ防撓材及深水槽
 ノ部分ニ於ケル肋骨ハ約二・五米ノ間隔ニ設ケタル防撓
 横桁ヲ以テ支持スヘシ

第二百七十七條第一號、第二號、第四號及第五號ノ規定
 ハ前項ノ防撓横桁ニ之ヲ準用ス

桁板ノ遊縁ニ附スル形鋼又ハ桁板ノ曲縁部ノ截面積ハ左
 ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

板上ノ高サノ二分ノ一及一・二米ノ中大ナルモノヲ加
 ヘタモノ (米ニテ)

第二百九十四條 深水槽ヲ構造スル隔壁ノ防撓材ノ截面積
 抗率ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲シ成ルヘ
 ク之ヲ水槽ノ内面ニ取附クヘシ

KSH₂ (噸ノ三乘ニテ)

Sハ防撓材ノ心距 (米ニテ)

Hハノ中央ヨリ水槽頂板迄ノ距離ニ溢出管ノ頂板上ノ
 高サノ二分ノ一及一・二米中大ナルモノヲ加ヘタルモ
 ノ (米ニテ)

lハ防撓材ノ支點間ノ全長 (米ニテ)ニシテ其ノ端ニ於テ
 ハ固著部ノ長サヲ含ムモノ

Kハ係數ニシテ防撓材ノ端ヲ肘板ヲ以テ固著スル場合ニ
 ハ五、短山形鋼ヲ以テ固著スル場合ニハ七・五

第二百九十二條第二項及第三項ノ規定ニ適合スル防撓横
 桁ヲ設ケタル深水槽ノ隔壁ニ付テハlヲ該横桁迄測リ前
 項ノ規定ニ依リ堅防撓材ノ寸法ヲ定ムヘシ但シ堅防撓材
 カ防撓横桁ヲ貫通シ且短山形鋼ヲ以テ該横桁ニ固著セラ
 ルル場合ニ於テ其ノ固著部ノ截面積ヲ第二百七十九條ノ
 規定ニ依ル截面積ノ二倍以下ト爲ストキハ之ヲ肘板固著

$$\frac{62}{d_0} \frac{25Sh}{300} \frac{td_0}{300} \quad (\text{平方噸ニテ})$$

lハ防撓横桁ノ端ノ固著部ヲ含ミタル全長 (米ニテ)
 Sハ當該防撓横桁ヨリ其ノ上下ノ防撓横桁又ハ油槽頂板
 若ハ底板ニ至ル各區間ノ中心間ノ距離 (米ニテ)

hハ防撓横桁ヨリ油槽頂板マテノ距離ニ溢出管ノ頂板上
 ノ高サノ二分ノ一及一・二米ノ中大ナルモノヲ加ヘタ
 ルモノ (米ニテ)

d₀ハ桁板ノ深サ (耗ニテ)
 tハ桁板ノ厚サ (耗ニテ)

船側ヨリ船側ニ達シ長サ九米ヲ超ユル深水槽ニ在リテハ
 防撓横桁ノ寸法ヲ特ニ増加シ且必要ニ應ジ横制油板ヲ設
 クヘシ

第二百九十三條 深水槽ヲ構造スル隔壁板ノ厚サハ左ノ算
 式ニ依リ算定シタルモノ及八耗ノ中大ナルモノ以上ト爲
 スヘシ但シ其ノ箇所ニ於ケル船側外板ノ規定ノ厚サヨリ
 大ナルコトヲ要セス

3.75SH/H + 2.35 (耗ニテ)

Sハ防撓材ノ心距 (米ニテ)

Hハ各隔壁板ノ下縁ヨリ水槽頂板迄ノ距離ニ溢出管ノ頂

ト看做シKノ値ヲ定ムルコトヲ得

第二百九十五條 防撓材ノ端ハ第二百七十九條第二項乃至

第六項ノ規定ニ依リ肘板又ハ短山形鋼ヲ以テ固著スヘシ

第二百九十六條 隔壁ノ周圍山形鋼ハ水槽ノ外側ニ取附ケ

其ノ厚サハ之ヲ取附クル隔壁板ノ第二百九十三條ノ規定
 ニ依ル厚サニ二・五耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲スヘシ

隔壁、頂板及底板ノ周圍山形鋼ノ各邊ハ少クトモ二列鉄
 固著ト爲スヘシ但シ滿載状態ニテ液體ノ達スル最高面ヨ
 リ下方四・八米以内ノ箇所ニ於テハ一列鉄固著ト爲スコ
 トヲ得

第二百九十七條 深水槽ノ構造ニ關スル事項ニシテ前五條

ニ規定セサルモノニ付テハ第十二章ノ規定ニ依ル

復原性ノ保持ノ爲深水槽内ニ設クル縦通水密隔壁ノ構造
 ハ該水槽カ脚荷水槽ナルトキニ限り第十二章ノ規定ニ依
 ルコトヲ得

第二百九十八條 深水槽ノ頂板ノ厚サハ之ヲ其ノ位置ニ於
 ケル深水槽隔壁板ト看做シ且梁ノ心距ヲ防撓材ノ心距ニ
 充テ第二百九十三條ノ規定ニ依リ定メタル厚サニ一耗ヲ
 加ヘタルモノ以上ト爲スヘシ但シ當該箇所ニ於ケル鋼甲
 板ノ厚サヨリ小ナルコトヲ得ス

第二百九十九條 深水槽ヲ構造スル隔壁ノ前後ニ於ケル甲板下縱桁ハ該隔壁ノ位置ニ於テ成ルヘク相連續スル構造ト爲スヘシ

第三百條 航海中常ニ満水状態ニ保ツニ適當ナル裝置ナキ深水槽内ニハ適當ナル制水板ヲ設クヘシ

第二節 深水槽ノ設備及水密試験

第三百一條 罐水用ノ深水槽ニハ該水槽力満水状態ニ在ルヤ否ヤヲ検査スル爲メ螺込驗水栓ヲ設クヘシ但シ適當ナル艙口在ル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

第三百二條 深水槽内ニ於テハ諸材ニ適當ナル通氣孔ヲ設ケ空氣力槽内ノ一部ニ閉塞セラルルコトヲ防止スヘシ水槽ノ頂板ニ設ケル驗水栓ハ何時ニテモ接近シ得ヘキ位置ニ取附ケ水槽ノ充水ハ成ルヘク驗水栓ヲ開キタル儘之ヲ行フヘシ

第三百三條 深油槽ノ周圍漏油ノ虞アル箇所ニハ適當ナル防油區畫、油道、油受等ヲ設クヘシ

燃料油ヲ積載スル深油槽ト艙トナ區畫スル隔壁ノ艙側ニハ適當ナル空隙ヲ殘シ内張板ヲ張り且隔壁ニ沿ヒ適當ナル油道ヲ設クヘシ

第三百四條 満水ノ際過壓ヲ防止スル爲設ケル溢出管ハ其

ノ截面積ヲ充水管ノ截面積以上ト爲シ船外又ハ豫備水槽ニ導クヘシ

第三百五條 深水槽ノ頂部ノ汚水ヲ排除スル爲有效ナル排水裝置ヲ設クヘシ

第三百六條 第四百十六條ノ規定ハ深油槽ニ之ヲ準用ス

第三百七條 深水槽ハ溢出管ノ上端迄ノ高サ及頂板上二・四米ノ箇所迄ノ高サノ中大ナルモノニ相當スル求高壓力ヲ以テ其ノ水密ヲ試験スヘシ

第十四章 船首尾防撓構造

第一節 船首艙ニ於ケル防撓構造

第三百八條 船首艙ニ於テハ最下層甲板ヨリ肋板ノ上面迄二米ヲ超エサル間隔ニ防撓梁ヲ設クヘシ

前項ノ防撓梁ハ之ヲ肋骨毎又ハ肋骨一本置キニ配置シ其ノ寸法ハ甲板二層以上ヲ有スル箇所ノ上甲板ニシテ甲板上ヲ専ラ居住設備ニ充當スルモノニ非サルモノノ梁ノ寸法ニ等シク爲スヘシ

第三百九條 防撓梁ハ船ノ中心線ニ於テ形鋼ヲ以テ上下及前後ニ十分結合スヘシ

第三百十條 各層ノ防撓梁ニハ強力甲板ノ梁上側板ノ首尾ニ於ケル寸法ニ等シキ寸法ノ梁上側板ヲ設ケ七五米ヲ

超ユル船舶又ハ高馬力ノ船舶ニ在リテハ外板ニ二重山形鋼ヲ以テ一列鉄固著ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列鉄固著ト爲シ其ノ他ノ船舶ニ在リテハ外板ニ單山形鋼ヲ以テ一列鉄固著ト爲スヘシ

防撓梁ヲ肋骨毎ニ配置シタル場合ニ於テハ前項ノ規定ニ拘ラス梁上側板ヲ肋骨ノ内側ニ止ムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ梁上側板ノ兩縁ヲ補強シ且船首艙ニ於ケル滿載吃水線下ノ船側外板ノ厚サヲ第二百二十五條ノ規定ニ依ル厚サヨリ二〇%増加シタルモノト爲スヘシ

第三百十一條 防撓梁ト肋骨トハ第九十條ノ規定ニ依リ肘板ヲ以テ固著スヘシ

防撓梁ナキ位置ニ於ケル肋骨ハ梁上側板ノ幅ノ二分ノ一以上ノ幅及深サヲ有シ且梁上側板ノ厚サ以上ノ厚サヲ有スル肘板ヲ以テ梁上側板ニ固著スヘシ此ノ場合ニ於テハ肘板ト梁上側板トヲ固著スル山形鋼ハ梁上側板ノ内縁迄達セシムヘシ

第三百十二條 船首艙及其ノ上方ニ於テハ梁上側板ノ前端及其ノ中間ニハ必要ニ應シ船首肘板ヲ設クヘシ

第二節 船首隔壁ヨリ後方ニ於ケル防撓構造

鋼船構造規程

第三百十三條 船首隔壁ト船首ヨリLノ百分ノ十五ニ相當スル箇所トノ間ニ於テハ船首艙ニ於ケル梁上側板ノ延長線上ニ船側縱通材ヲ設クヘシ

前項ノ船側縱通材ハ縱通山形鋼ヲ斷切板ヲ以テ外板ニ固著シタル構造ト爲シ其ノ寸法ハ左表ニ依ルヘシ

山形鋼 (耗)	斷切板ノ厚サ (耗)	D
75 × 75 × 8	7.5	4
90 × 75 × 9	8.0	5
100 × 75 × 10	8.5	6
125 × 75 × 10	9.0	7
125 × 75 × 10	9.5	8
125 × 90 × 10	10.0	9
150 × 90 × 12	10.5	10
175 × 90 × 12	11.0	11
200 × 90 × 12	11.5	12
200 × 90 × 13	12.0	13
200 × 100 × 15	12.5	14

第三百十四條 斷切板ヲ外板ニ固著スル山形鋼ノ厚サハ斷切板ノ厚サト等シク爲スヘシ

第三百十五條 船側縱通材ハ肘板ヲ以テ船首隔壁ニ固著スヘシ

前項ノ肘板ハ其ノ厚サヲ斷切板ノ厚サ以上、其ノ幅ヲ船側ニ於テハ二肋骨心距以上隔壁側ニ於テハ一・五肋骨心

距以上下爲シ隔壁ニ單山形鋼ヲ以テ二列銲固著ト爲スヘシ

第三百十六條

船首隔壁ト船首ヨリLノ百分ノ十五ニ相當スル箇所トノ間ニ於ケル肋骨ヲ左ノ各號ノ規定ニ依リ構造スルトキハ前三條ノ船側縱通材ヲ省略スルコトヲ得

- 一 肋骨ノ截面抵抗率ヲ一五%増加スルコト
- 二 船首隔壁直後ノ肋骨ニ大ナル副肋材ヲ附スルコト
- 三 當該箇所ノ船内肋骨ノ寸法ヲ定ムル場合ニ用フルHカ肋骨ノ深サノ一五倍ヲ超ユルトキハ一箇、二〇倍ヲ超ユルトキハ二箇ノ縱材ヲ以テ適當ニ各肋骨ヲ連結スルコト

第三節 船尾ニ於ケル防撓構造

第三百十七條

船尾艙ニ於テハ最下層甲板ヨリ肋板ノ上面迄二・五米ヲ超エサル間隔ニ防撓梁及梁上側板ヲ設ケ船首艙ニ準シ之ヲ防撓シ該部ニ於ケル肋骨力著シク傾斜スル爲支點間ノ長サカ特ニ大トナルトキハ更ニ適當ノ防撓構造ヲ爲スヘシ

高馬力ノ船ノ船尾艙ニ於ケル肋骨ハ二列銲ヲ以テ外板ト固著スヘシ

第三百十八條

船尾隔壁ヨリ前方ニ於テハ必要ニ應シ適當

ナル防撓構造ヲ爲スヘシ

第四節 雜則

第三百十九條

甲板間ノ高サ大ナル船舶ニ在リテハ必要ニ應シ前部Lノ十分ノ一ニ於テ該甲板間ニ船側縱通材ヲ設ケルカ其ノ他適當ナル方法ニ依リ之ヲ防撓スヘシ

第三百二十條

船尾突出部ハ其ノ形狀ニ應シ必要ト認ムルトキハ特設肋骨及船側縱通材ヲ設ケルカ其ノ他適當ナル方法ニ依リ之ヲ補強スヘシ

第十五章 船樓及甲板室

第一節 船樓

第三百二十一條

船樓ノ肋骨、梁、梁柱、梁下縱材及甲板下縱材、外板及甲板ハ第六章乃至第十一章ノ規定ニ依リ構造スヘシ

第三百二十二條

船舶ニハ船首樓ヲ備フヘシ但シ遮浪甲板船特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶、船首ニ於ケル舷弧ノ高サカ特ニ大ナル船舶其ノ他管海官廳ニ於テ差支ヘナシト認ムル船舶ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第三百二十三條

船樓ノ暴露セル端ニ設ケル隔壁ハ左表ニ掲ケル厚サノ隔壁板ニ同表ニ掲ケル截面抵抗率ヲ有スル防撓材ヲ堅ニ七六〇耗以内ノ心距ニ取附ケタルモノナルコトヲ要ス

船首樓及船尾樓ノ後端隔壁		七部分のニ保護		船尾樓ノ後端隔壁	
サ厚 (耗)	L	サ厚 (耗)	L	サ厚 (耗)	L
5.0	48.75以下	6.0	48.75以下	7.5	61.00以下
7.5	122.00以上	9.5	122.00以上	11.0	115.80以上

鋼形山		鋼形山		鋼形山球	
率抗抵面載 (乘三ノ機)	L	率抗抵面載 (乘三ノ機)	L	率抗抵面載 (乘三ノ機)	L
6.3	45.70未滿	10.6	45.70未滿	3	61.4
10.1	45.70	14.9	45.70	3	77.8
14.4	76.20	21.1	61.00	4	93.4
19.8	106.70	28.0	76.20	4	112.2
		36.2	91.45	4	132.7
		47.7	106.70	5	157.3
		59.1	121.90	5	183.5
		73.4	137.15	5	213.0
		88.1	152.40	5	248.2
		91.4	167.65	5	283.5
				6	325.3
				6	365.4

船樓ノ前端隔壁ノ防撓材ノ兩端ハ前表ニ定ムル數ノ鉄ヲ用ヒ短山形鋼ヲ以テ甲板ニ固著シ其ノ後端隔壁ノ防撓材ノ兩端ハ隔壁ノ周圍山形鋼ニ累ネ固著スヘシ

第三百二十四條 船樓端ノ隔壁ノ周圍山形鋼ノ厚サハ隔壁板ノ厚サ以上ト爲シ隔壁ノ下縁ヲ甲板ニ固著スル山形鋼ノ堅邊ハ成ルヘク甲板ノ上面ヨリ一五〇耗以上ノ高サニ達セシムヘシ

第三百二十五條 船樓ノ高サカ船舶滿載吃水線規程ニ定ムル標準ノ高サヨリ大ナルトキハ其ノ端ニ於ケル隔壁ヲ前二條ニ定ムルモノヨリ堅牢ニ構造シ其ノ強サヲ標準ノ高サノ船樓端ニ於ケル前二條ニ依ル構造ノ隔壁ノ強サト同一ナラシムヘシ

特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ノ船樓又ハ船樓ノ高サカ船舶滿載吃水線規程ニ定ムル標準ノ高サヨリ小ナル船樓ニ在リテハ管海官廳ノ承認ヲ受ケ隔壁ノ構造ヲ適當ニ輕減スルコトヲ得

第三百二十六條 船樓ノ前端隔壁ノ出入口ニハ成ルヘク第一級閉鎖裝置ヲ設クヘシ

第三百二十七條 中央部Lノ二分ノ一間ニ在ル船樓端ノ隔壁ノ下部ハ船樓甲板カ強力甲板ニ非サル場合ト雖モ船樓

及其ノ上部ニ設クル甲板室ノ大小及重量ニ應シ適當ニ之ヲ支持スヘシ

第三百二十八條 遮浪甲板船及Lノ二分ノ一ヲ超ユル長サノ船首樓ヲ有スル船舶ニ在リテハLノ前端ヨリ其ノ百分ノ五以上ノ箇所ニ於テ上甲板ト遮浪甲板又ハ船首樓甲板トノ間ニ水密構造ノ隔壁ヲ設ケ之ト船首隔壁トノ間ニ於ケル上甲板ヲ水密構造ト爲スヘシ

前項ノ隔壁ノ寸法ハ遮浪甲板又ハ船首樓甲板ヲ隔壁甲板ト看做シ船首隔壁ニ關スル第十二章ノ規定ニ依リ之ヲ定ムヘシ

第三百二十九條 船橋樓ノ兩端及中央部Lノ二分ノ一間ニ在ル船首樓又ハ船尾樓ノ端ハ第七十條ノ規定ニ依ルノ外左ノ各號ノ規定ニ依リ補強スヘシ

一 船樓甲板カ強力甲板ナラサルトキハ船樓端ノ前後適當ノ間舷側厚板及上甲板ノ梁上側板ノ厚サヲ三〇%増スヘシ

二 船樓甲板カ強力甲板ナルトキハ船樓外ニ於ケル上甲板ノ梁上側板、舷側厚板及其ノ直下ノ外板ヲ少クトモBノ三分ノ一ニ相當スル長サノ間、鋼甲板ヲ適當ノ間船樓内ニ延長シ且船樓端ノ前後適當ノ間舷側厚板及梁

之ヲ補強スヘシ

一 下層強力甲板ノ舷側厚板ヲ上層強力甲板下ニ延長シ且低船尾樓前端ノ前後適當ノ間其ノ厚サヲ三〇%増スヘシ

二 低船尾樓甲板ニ鋼甲板ヲ張ラサル場合ニ於テハ其ノ前端隔壁ト其ノ直後ノ梁トノ間ニ梁上側板ト同一ノ厚サノ鋼板ヲ張ルヘシ

三 下層強力甲板ノ梁上側板及鋼甲板ヲ船舶ノ大小ニ應シ二又ハ三肋骨心距ノ間上層強力甲板下ニ延長シ適當數ノ膜板ヲ以テ之ヲ上層強力甲板ニ固著シ且該梁上側板ヲ更ニ二又ハ三肋骨心距ノ間延長スヘシ

四 上層強力甲板ノ直下ノ甲板カ有効甲板ナルトキハ前號ニ依リ延長シタル梁上側板及鋼甲板ト該有効甲板トヲ適當ニ連結スヘシ

第二節 甲板室

第三百三十二條 甲板室ノ周壁ハ鋼甲板又ハ梁上帶板ニ堅牢ニ固著スヘシ
大ナル甲板室ノ側壁及端壁ハ約九米ノ心距ニ部分隔壁又ハ特設肋骨ヲ配置シ其ノ間ニ堅防撓材ヲ取附ケ之ヲ支持スヘシ

上側板ノ厚サヲ五〇%増スヘシ但シ中央部Lノ二分ノ一間ニ在ラサル船橋樓端ニ在リテハ舷側厚板及梁上側板ノ増厚ノ程度ヲ斟酌スルコトヲ得

三 船樓外板ヲ適當ノ間船樓外ニ延長シ順次其ノ高サヲ減シ船樓端ヨリ一・五米ヲ超エサル間隔ニ設ケタル鋼板製ノ堅桁ニテ支ヘ上下兩甲板ノ強力ノ連續ニ急激ナル變化ナカラシムヘシ

四 船樓甲板カ強力甲板ナルトキハ船樓端ノ附近ニ於ケル船樓外板ノ縱縁ハ徑徑ノ四倍以下ノ心距ノ二列鉄ヲ以テ固著スヘシ

五 船樓甲板カ強力甲板ナルトキハ船樓端ノ附近ニ於テハ舷緣山形鋼ヲ梁上側板及外板ニ固著スル鉄ノ截面積ノ和ヲ前號ノ規定ニ依ル外板ノ縱縁ノ固著ニ倣ヒ適當ニ増加スヘシ此ノ場合必要ニ應シ舷緣山形鋼ノ邊ノ幅ヲ増加シ又ハ梁上側板ノ下面ニ斷切山形鋼ヲ附スヘシ

第三百三十條 低船尾樓ノ前端ニハ隔壁ヲ設クヘシ
暴露セル低船尾樓前端隔壁ノ構造ハ船橋樓前端ノ隔壁ニ準シ之ヲ定ムヘシ

前項ノ隔壁ニハ開口ヲ設クルコトヲ得ス
第三百三十一條 低船尾樓ノ前端ハ左ノ各號ノ規定ニ依リ

前項ノ部分隔壁又ハ特設肋骨ハ成ルヘク下方ニ隔壁在ル箇所ニ設クヘシ

第二項ノ部分隔壁又ハ特設肋骨ヲ下方ニ隔壁ナキ箇所ニ設クルトキハ下方ノ梁又ハ肋骨ヲ適當ニ補強スヘシ

大ナル甲板室ノ前後端附近ニ於テハ甲板室周壁ヲ甲板ニ固著スル山形鋼ノ寸法ヲ増加スルカ、鋼甲板ノ厚サヲ増スカ又ハ甲板下ニ縦材若ハ梁柱ヲ特設スヘシ

第三百三十三條 大ナル甲板室ノ側壁ニ於ケル開口ノ四隅ニハ適當ナル丸味ヲ附シ且開口ノ上下ノ側壁板ハ各開口ヲ通シ連續セル構造ト爲スヘシ

大ナル甲板室ノ側壁ニ凹入箇所アル場合等ニ於テハ適當ナル構造ニ依リ強力ノ連續ヲ維持スヘシ

第三百三十四條 甲板室ノ頂部ニハ適當ナル梁ヲ附スヘシ前項ノ梁ハ成ルヘク側壁ニ於ケル防撓材ノ位置ニ配置シ必要ニ應シ梁柱ヲ以テ支持スヘシ

第三百三十五條 L九〇米ヲ超ユル船舶ニ在リテハ居住用甲板室ノ頂部ヲ構成スル暴露甲板ニハ成ルヘク鋼甲板ヲ張ルヘシ

第三百三十六條 L九〇米ヲ超ユル船舶ノ上甲板ニ設クル居住用ノ甲板室ノ周壁ハ其ノ位置ニ應シ船樓端隔壁ニ準

テ設クルトキハ該桁板ノ間隔カ特ニ大ナラサル場合ニ限リ其ノ部分ノ中心線内龍骨ハ之ヲ省略スル事ヲ得

第三百四十一條 機關室ニ二重底ヲ備フル船舶ニ在リテハ主機礎板及推力受ヲ成ルヘク内底板ニ直接ニ螺釘ヲ以テ取附クヘシ

前項ノ螺釘ノ主要列ノ下部ニハ側桁板ヲ設ケ螺釘ハ其上縁ニ附スル山形鋼ノ水平邊ヲ貫通セシムヘシ

第三百四十二條 機械臺及汽罐臺ハ堅牢ニ構造シ且適當ナル方法ニ依リ十分ニ之ヲ支持スヘシ

第三百四十三條 推力受臺ハ推力受ニ傳達セラルル力ニ對シ十分ナル強力ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

第三百四十四條 汽罐ト隔壁トノ間ニハ汽罐ヲ検査スルニ十分ナル間隔ヲ存セシムヘシ

燃料庫隔壁、船艙隔壁及甲板ト汽罐及煙道トハ十分ニ隔離スルカ又ハ其ノ間ニ適當ナル防熱裝置ヲ施スヘシ

鋼船構造規程

第三百四十五條 石炭焚ノ補汽罐ヲ甲板上ニ据附クルトキ張板ヲ張ルヘシ

スル構造ノモノト爲スヘシ

第三百三十七條 端艇ノ搭載場所ニ面スル甲板室側壁及端艇鈎ヲ支持スル箇所ノ甲板ハ適當ニ之ヲ補強スヘシ

第三百三十八條 上層甲板ニ於ケル甲板室ニ付テハ振動ヲ防止スル爲必要ニ應シ梁柱ヲ附スル等適當ナル方法ヲ講スヘシ

第十六章 機關室及軸路

第一節 機關室

第三百三十九條 機關室ニハ特設肋骨、特設梁、特設梁柱等ヲ設クルカ其ノ他適當ナル補強ヲ爲スヘシ

高馬力ノ機關ヲ備フル船舶ニ在リテハ主機ノ高サト幅又ハ長サトノ割合、重量及出力等ニ應シ主機ノ下部ニ於ケル構造及固著ヲ特ニ強固ナラシムヘシ

第三百四十條 單底構造ノ箇所ニ在リテハ肋板又ハ其ノ上ニ設ケタル桁構ノ上ニ主機ノ大サ及出力ニ應シ十分ナル強力ヲ有スル厚板ヲ取附ケ之ニ主機ヲ固著スヘシ

前項ノ厚板ニ主機ヲ取附ケル螺釘ノ主要列ノ下部ニハ厚板ニ達スル斷切板又ハ縦通桁板ヲ設ケ螺釘ハ其上縁ニ附スル山形鋼ノ水平邊ヲ貫通セシムヘシ

船體中心線ニ主機ヲ備フル船舶ニ在リテ前項ノ縦通桁板

ハ其ノ下部ニ當ル鋼甲板ハ第二百六十一條ノ規定ニ拘ラス其ノ厚サヲ二・五耗増加シ且五〇耗以上ノ厚サ迄煉瓦ヲ敷クガ又ハ「セメント」塗裝ヲ爲スヘシ

第二節 軸路

第三百四十六條 中央部ニ機關室ヲ設クル船舶ニ在リテハ十分ナル大サノ水密軸路ヲ設ケ軸系ヲ蔽圍スヘシ

軸路ノ前端ノ出入口ニハ水密戸ヲ備ヘ隔壁甲板上ヨリ容易ニ開閉シ得ヘキ裝置ト爲スヘシ

軸路ニハ成ルヘク迷口ヲ適當ノ位置ニ設ケ且之ヲ隔壁甲板以上ノ甲板ニ達セシムヘシ

第三百四十七條 軸路ノ頂板及側板ノ厚サハ防撓材ノ心距及各艙ノ長サノ中央ニ於テ各條鋼板ノ下縁ヨリ隔壁甲板迄ノ高サニ應シ第二百七十五條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定ムヘシ但シ彎曲セル頂板又ハ彎曲セル側板ノ厚サハ防撓材ノ實際ノ心距ヨリ一五〇耗減シタルモノヲ其ノ心距ト看做シ之ヲ定ムルコトヲ得

第三百四十八條 艙口直下ニ於ケル軸路ノ頂板ハ其ノ厚サヲ前條ニ定ムルモノヨリ二耗以上増加スルカ又ハ五〇耗以上ノ厚サノ木板ヲ以テ之ヲ被覆スヘシ

前項ノ木板ハ貨物ノ爲破損セラルルコトアルモ軸路ノ水

密ヲ損ハサル様取附クルコトヲ要ス軸路ニ梯子棧等ヲ取附クル場合ニ付亦同シ

第三百四十九條 軸路ノ周圍山形鋼ノ厚サハ軸路ノ側板ノ厚サニ二耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲スヘシ

第三百五十條 軸路ノ頂板及側板ニハ左ノ各號ノ規定ニ依リ第二百七十六條ノ規定ヲ準用シテ定メタル寸法ノ防撓材ヲ設クヘシ

一 Iハ軸路ノ下端ヨリ側板ノ上端迄ノ高サトス
二 Hハ各輪ノ長サノ中央ニ於ケル隔壁甲板ヨリIノ中央迄ノ距離トス

水槽又ハ油槽ニ面スル軸路ノ構造及強力ハ深水槽ノ隔壁ニ關スル規定ヲ準用シテ之ヲ定ムヘシ

第三百五十一條 軸路ノ防撓材ノ下端ハ周圍山形鋼ニ累ネ且短山形鋼ヲ附シ之ヲ固著スヘシ但シ防撓材ノ深サカ一五〇耗未滿ナルトキハ短山形鋼ハ之ヲ省略スルコトヲ得

第三百五十二條 軸路ノ頂部ニ橋又ハ梁柱ヲ附スル場合ニ於テハ其ノ支持スヘキ重量ニ應シ當該部分ヲ適當ニ補強スヘシ

第三百五十三條 軸路ノ端室ノ頂部ノ構造ハ第二百八十一

條ノ規定ニ準シ之ヲ定ムヘシ

第三百五十四條 軸路ノ通スル通風筒及逃口圍壁ハ隔壁甲板迄水密ト爲シ其ノ受クルコトアルヘキ壓力ニ對シ十分ナル強力ヲ有スル構造ト爲スヘシ

第三百五十五條 軸路ニハ布管内ノ水壓力毎平方糎二斤以上ノ水ヲ注射シ其ノ水密ヲ試驗スヘシ

第三百五十六條 軸路ニ非サル水密隧道ヲ設クルトキハ其ノ構造ハ軸路ニ準シ之ヲ定ムヘシ

第十七章 船口其ノ他ノ甲板口

第一節 緣材

第三百五十七條 船口、載炭口、逃口、昇降口其ノ他ノ甲板口ノ緣材ノ高サハ左表ニ掲クルモノ以上ト爲スヘシ但シ左ノ各號ノ甲板口ニ在リテハ適當ニ之ヲ減スルコトヲ得

- 一 遮浪甲板ニ於ケル常設閉鎖裝置ヲ備ヘサル甲板口
- 二 閉鎖裝置ノ效力カ第二級閉鎖裝置ノ效力ニ及ハサル船樓ノ船樓甲板ニ於ケル逃口又ハ昇降口
- 三 水密閉鎖裝置ヲ備フル小ナル甲板口

甲板ノ種類及位置	緣材ノ甲板ノ高サ(耗)
暴露セル上甲板	610
暴露セル船樓甲板 (低船尾樓甲板及遮浪甲板ヲ含ム)	457
閉鎖裝置ノ效力カ第一級閉鎖裝置ノ效力ニ及ハサル船樓内ノ上甲板	229

船舶滿載吃水線規程ニ依ル船樓ノ有效ノ長サノ和トトノ比カ〇・七〇以上ナル船舶ノ前後ノ「ウエル」ニ設クル船口ノ緣材ノ高サハ前項ニ定ムルモノヨリ適當ニ大ナラシムヘシ但シ滿載吃水カ形狀ニ依ル吃水ヨリ小ナル場合ニ於テ管海官廳ノ承認ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラ

第二甲板以下ノ甲板又ハ端壁ニ開口ナキ船樓若ハ閉鎖裝置ノ效力カ第一級閉鎖裝置ノ效力以上ナル船樓内ノ上甲

板ニ設クル船口其ノ他ノ甲板口ニ於テハ其ノ周緣ニ山形鋼等ヲ取附クルトキハ緣材ヲ甲板上ニ延長セサルモ妨ナシ

第三百五十八條 暴露セル上甲板、閉鎖裝置ノ效力カ第一級閉鎖裝置ノ效力ニ及ハサル船樓内ノ上甲板又ハ暴露セル船樓甲板ニ設クル船口ノ緣材ノ厚サハL三〇米以下ノ船舶ニ在リテハ八・五耗、L六〇米以上ノ船舶ニ在リテハ八一耗、L三〇米ヲ超エ六〇米未滿ノ船舶ニ在リテハ八・五耗ト一耗トノ間ニ挿間法ニ依リ定メタルモノ以上ト爲スヘシ

第二甲板以下ノ甲板又ハ端壁ニ開口ナキ船樓若ハ閉鎖裝置ノ效力カ第一級閉鎖裝置ノ效力以上ナル船樓内ノ上甲板ニ設クル船口ノ緣材ノ厚サハ一〇耗以上ト爲スヘシ但シL六〇米以下ノ船舶ニ在リテハ適當ニ減スルコトヲ得小ナル船口ニ在リテハ緣材ノ厚サヲ前二項ニ規定スルモノヨリ適當減スルコトヲ得

第三百五十九條 船口ノ側緣材ハ船口ノ兩側ニ設クル半梁ノ下端ニ達セシムヘシ
船口ノ端緣材ハ船口端梁ニ適當ニ固著スルコトヲ要シ暴露セル船口ニ在リテハ船口蓋板ニ十分ナル傾斜ヲ與フル

爲中心線ニ於ケル高サヲ側縁材ニ於ケル高サヨリ大ナラシムヘシ

第三百六十條

船口ノ縁材ヲ鋼甲板又ハ梁上帶板ニ固著スル山形鋼ノ厚サハ縁材ノ厚サ以上ト爲シ其ノ堅邊ノ幅ハ木甲板ヲ張ル場合ニ於テハ該木甲板ノ厚サニ一〇耗ヲ加ヘタルモノト爲スヘシ

第三百五十七條第一項ニ依リ縁材ノ高サヲ規定シタル船口ノ四隅ニ於テハ前項ノ山形鋼ハ特ニ厚キ材料ヨリ火造シタルモノト爲スヘシ

側縁材ト端縁材トテ堅山形鋼ヲ以テ接續スルトキハ該山形鋼ノ厚サハ縁材ノ厚サ以上ト爲シ二列銑ヲ以テ固著スヘシ但シ長サ又ハ幅カ三米以下ナル船口ニ在リテハ一列銑固著ト爲スコトヲ得

第三百六十一條

甲板上ノ高サ六一〇耗以上ナルコトヲ要スル船口縁材ニハ其ノ上縁ヨリ下方二五四耗ノ箇所ヨリ低カラサル位置ニ幅一七八耗以上ノ防撓材ヲ横ニ取附クヘシ但シ一七五米以下ノ船舶又ハ長サ三米以下ノ縁材ニ在リテハ横防撓材ノ幅ヲ船口ノ大サニ應シ適當ニ減スルコトヲ得

長サ三・〇五米ヲ超ユル側縁材又ハ端縁材ハ前項ノ防撓

材ヨリ甲板ニ達スル堅牢ナル肘板又ハ支柱ヲ三・〇五米以内ノ間隔ニ設ケテ之ヲ補強スヘシ

前二項ノ規定ハ船樓等ニ依リ保護セラルル端縁材ニ付テハ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

第三百六十二條

船口縁材ノ高サヲ九一五耗以上ト爲ストキハ其ノ構造ハ管海官廳ノ適當ト認メタルモノナルコトヲ要ス

第三百六十三條

船口縁材ノ上端ニハ大ナル半丸鋼等ヲ取附ケ其ノ下端ハ之ヲ曲線ト爲スカ又ハ適當ナル構造ト爲スヘシ

第三百六十四條

船口ノ外側ニ設クル梁柱ノ心距カ四肋骨心距ヲ超ユル場合又ハ梁柱列ト側縁材トノ距離カ四六〇耗ヲ超ユル場合ニ於テハ船口側部ヲ特ニ補強シ其ノ構造ニ付管海官廳ノ承認ヲ受クヘシ

第二節 船口梁及縦材

第三百六十五條

暴露セル船口ノ船口梁及縦材ノ寸法ハ甲板ノ縁材ノ高サ六一〇耗以上ナルコトヲ要スル船口ニ在リテハ左ニ掲クル甲表ニ依リ其ノ他ノ船口ニ在リテハ左ニ掲クル乙表ニ依リ之ヲ定ムヘシ

船樓内ノ上甲板ニ設クル船口ノ船口梁及縦材ノ寸法ハ左

ニ掲クル甲表ニ依リ之ヲ定ムヘシ但シ閉鎖裝置ノ效力カ第二級閉鎖裝置ノ效力以上ニシテ旅客ノ搭載ニ專用セララル船樓内ニ在リテハ左ニ掲クル乙表ニ依ルコトヲ得

ヲ得

表 乙

ノ 船 幅口 (米)	梁 口 船					山ス兩板部球 形ル部ノ又板 鋼ニニ上ハノ 重附下平上
	キトルサケ設ヲ材縦					
	(米) 距 心 ノ 梁 口 船					
	1.22	1.52	1.83	2.44	3.05	
3.05	球 サ深(耗)サ厚 203×10	サ深(耗)サ厚 230×11	サ深(耗)サ厚 241×11.5	サ深(耗)サ厚 267×12.5	サ深(耗)サ厚 292×13	球 (耗) 75×75×10
3.66	230×11	254×12.5	280×12.5	280×7.5	330×8.5	75×75×10
4.27	254×12.5	292×12.5	280×7.5	330×8	381×8.5	75×75×10.5
4.88	280×7.5	280×7.5	305×8	381×8.5	432×9	90×75×10.5
5.49	280×7.5	305×8	386×8.5	432×9	483×9.5	100×75×11
6.10	305×8	330×8.5	406×9	483×9.5	533×9.5	100×75×11
6.71	318×8	356×8.5	432×9	538×9.5	584×10	115×75×11.5
7.32	330×8.5	368×8.5	457×9	533×9.5	635×10	130×90×11.5
7.93	344×8.5	381×8.5	483×9.5	559×9.5	660×10.5	140×90×12
8.54	鋼 356×8.5	406×9	538×9.5	584×10	686×10.5	鋼 150×90×12.5
9.14	381×8.5	432×9	533×9.5	610×10	711×10.5	150×90×13

縦材ノ長サ (米)	材 縦 板 球			形ニ附上球 鋼重ス部板 山ルニノ	材 縦 製 木		
	(米)距心ノ材縦				(米)距心ノ材縦		
	0.91	1.22	1.52		0.91	1.22	1.52
1.83	サ深(耗)サ厚 130×8.5	サ深(耗)サ厚 140×8.5	サ深(耗)サ厚 150×9	(耗) 65×65×9	サ深(耗)サ厚 130×180	サ深(耗)サ厚 140×180	サ深(耗)サ厚 150×180
2.44	150×9.5	180×10	190×10.5	65×65×9.5	150×180	165×180	180×180
3.05	180×11	200×11.5	230×12.5	65×65×10	180×180	190×180	200×180

縦材ノ長サ (米)	材 縦 形 山 球			山ス部材球 形ルニノ山 鋼重附上形	材 縦 製 木		
	(米)距心ノ材縦				(米)距心ノ材縦		
	0.91	1.22	1.52		0.91	1.22	1.52
1.83	(耗) 130×75×8.5	(耗) 140×75×8.5	(耗) 150×75×9	(耗) 65×65×9	サ深(耗)サ厚 130×130	サ深(耗)サ厚 140×130	サ深(耗)サ厚 150×130
2.44	150×75×9.5	180×75×10	190×90×10.5	65×65×9.5	150×130	165×150	180×150
3.05	180×75×11	200×90×11.5	230×90×12.5	65×65×10	180×150	190×150	200×180

備考
 一 船口ノ幅、船口梁ノ心距又ハ縦材ノ長サ若ハ心距ガ表ニ掲クルモノノ中間ニ在ルトキハ船口梁又ハ縦材ノ寸法ハ挿間法ニ依リ之ヲ定ム
 二 船口梁ノ深サハ其ノ長サノ中央ニ於テ上部山形鋼ヨリ梁ノ下縁迄測リタルモノ、縦材ノ深サハ船口蓋板ノ下面ヨリ縦材ノ下縁迄測リタルモノトス

表 甲

ノ 船 幅口 (米)	梁 口 船					山ス兩板部球 形ル部ノ又板 鋼ニニ上ハノ 重附下平上
	キトルサケ設ヲ材縦					
	(米) 距 心 ノ 梁 口 船					
	1.22	1.52	1.83	2.44	3.05	
3.05	球 サ深(耗)サ厚 230×11.5	サ深(耗)サ厚 254×12.5	サ深(耗)サ厚 280×7.5	サ深(耗)サ厚 305×8	サ深(耗)サ厚 356×8.5	平 (耗) 75×75×10
3.66	280×12.5	305×12.5	305×8	356×8.5	432×9	75×75×10
4.27	305×12.5	305×8	356×8.5	432×9	508×9.5	75×75×10.5
4.88	305×8	356×8.5	406×9	483×9.5	559×9.5	90×75×10.5
5.49	356×8.5	406×9	457×9	533×9.5	635×10	100×75×11
6.10	381×8.5	457×9	508×9.5	610×10	711×10.5	100×75×11
6.71	406×9	483×9	559×9.5	660×10.5	762×11	115×75×11.5
7.32	432×9	538×9.5	584×10	711×10.5	813×11	130×90×11.5
7.93	457×9	533×9.5	610×10	786×10.5	864×11.5	140×90×12
8.54	鋼 483×9.5	559×9.5	635×10	787×11	915×12	鋼 150×90×12.5
9.14	508×9.5	584×10	660×10.5	813×11	965×12	150×90×13

縦材ノ長サ (米)	材 縦 板 球			形ニ附上球 鋼重ス部板 山ルニノ	材 縦 製 木		
	(米)距心ノ材縦				(米)距心ノ材縦		
	0.91	1.22	1.52		0.91	1.22	1.52
1.83	サ深(耗)サ厚 150×9.0	サ深(耗)サ厚 165×9.5	サ深(耗)サ厚 180×9.5	(耗) 65×65×9	サ深(耗)サ厚 140×180	サ深(耗)サ厚 150×180	サ深(耗)サ厚 165×180
2.44	180×10.5	200×11	230×11	65×65×9.5	165×180	190×180	200×180
3.05	200×12.5	240×12.5	280×12.5	65×65×10	200×180	215×200	230×230

縦材ノ長サ (米)	材 縦 形 山 球			山ス部材球 形ルニノ山 鋼重附上形	材 縦 製 木		
	(米)距心ノ材縦				(米)距心ノ材縦		
	0.91	1.22	1.52		0.91	1.22	1.52
1.83	(耗) 150×75×9.5	(耗) 165×90×9.5	(耗) 180×90×9.5	(耗) 65×65×9	サ深(耗)サ厚 140×140	サ深(耗)サ厚 150×150	サ深(耗)サ厚 165×150
2.44	180×90×10.5	200×75×11	230×90×11	65×65×9.5	165×165	190×180	200×180
3.05	200×90×12.5	240×90×12.5	280×90×12.5	65×65×10	200×180	215×200	230×230

二三〇・五米以下ノ船舶ニ在リテハ平鋼及山形鋼ヲ以テ構造シタル艙口梁ノ深サハ表ニ掲クルモノノ六〇%、球板及山形鋼ヲ以テ構造シタル艙口梁竝ニ鋼製縦材ノ深サハ表ニ掲クルモノノ八〇%ト爲シ平鋼、球板及山形鋼ノ厚サハ其ノ深サニ對シ表ニ掲クル厚サニ等シクシ又木製縦材ノ深サ及幅ハ表ニ掲クルモノノ八〇%ト爲スコトヲ得但シ平鋼球板及球山形鋼ノ厚サハ七・五耗ヨリ又中央木製縦材ノ幅ハ一六五耗ヨリ小ナルコトヲ得ス

二三〇・五米ヲ超エ六一米未滿ノ船舶ニ在リテハ艙口梁及縦材ノ寸法ハ第一項、第二項又ハ第三項ニ依ルモノト前項ニ依ルモノトノ間ニ挿間法ニ依リ之ヲ定ムルコトヲ得

艙口梁ノ心距ハ三・〇五米ヲ超ユルコトヲ得ス

第三百六十六條 艙口梁ノ兩端ニ於ケル深サハ其ノ長サノ中央ニ於ケル規定ノ深サノ二分ノ一ト爲スコトヲ得但シ一五〇耗ヨリ小ナルコトヲ得ス

艙口梁ヲ構造スル球板ノ上部又ハ平鋼ノ上下兩部ニ附スル山形鋼ハ廣邊ヲ水平ニ置クヘシ

艙口梁又ハ鋼製縦材ノ上部ニ附スル山形鋼ハ該梁又ハ縦材ノ兩端ニ達セシメ且艙口梁ノ上部ニ附スル山形鋼ハ縱

材ヲ支フル爲之ヲ屈折セシムルコトヲ得ス

艙口梁又ハ鋼製縦材ノ兩端ニハ之ヲ構造スル平鋼又ハ球板ノ兩面ニ幅一八〇耗以上ニシテ厚サハ前二項ノ山形鋼ノ厚サニ等シキ鋼板ヲ附シテ表面ヲ平直ナラシムヘシ

第三百六十七條 艙口ニ縦材ヲ設ケサルトキハ艙口梁一本置ニ其ノ梁板ヲ木製蓋板ノ上面迄達セシムヘシ

鋼製縦材ト艙口梁ト交叉スル箇所ニ於テハ該縦材ノ下縁ニ堅牢ナル山形鋼ヲ取附クヘシ

第三百六十八條 木製縦材ハ乾燥完全ニシテ割目其ノ他ノ缺點ヲ有セサル松又ハ之ト同一效力ヲ有スル木材ヲ以テ製造シ其ノ兩端ノ支面ハ厚サ一二・五耗、幅一八〇耗以上ノ鋼板ヲ以テ包ミ且其ノ艙口梁ト交叉スル箇所ニハ厚サ一二・五耗、長サ二三〇耗以上ノ鋼板ヲ取附クヘシ

第三百六十九條 艙口梁又ハ縦材ヲ支フル受材ハ鋼製ニシテ幅七五耗以上ノ支面ヲ有シ艙口梁又ハ縦材ノ兩面ヲ挾ミ頸部ニ適合スル形狀ノモノナルコトヲ要ス

受材ノ底部ハ實體ト爲スカ又ハ徑二二耗ノ鋸二箇以上ヲ以テ緊著シタルモノト爲スヘシ

受材ヲ山形鋼ヲ以テ構造スルトキハ其ノ厚サハ一二・五耗以上ト爲スヘシ

側縁材ニ附スル各受材ヲ構成スル山形鋼ノ一方ハ少クトモ甲板ノ位置迄達セシムヘシ

側縁材ニ附スル各受材ヲ甲板ノ位置迄達セシメサルトキハ側縁材ノ厚サヲ増スコトヲ要ス

側縁材ニ附スル各受材ニハ艙口梁ノ脱落ヲ防ク適當ナル裝置ヲ備フヘシ

縦材カ艙口梁ト交叉スル箇所ニ於テハ艙口梁ニ堅牢ナル短山形鋼ヲ取附ケ縦材ノ移動ヲ防止スヘシ

小ナル艙口ニ於テハ本條ニ規定スル各材ノ寸法ヲ適當ニ減スルコトヲ得

第三節 艙口ノ閉鎖裝置

第三百七十條 艙口ニハ有效ナル蓋板ヲ備ヘ支面ノ幅六三耗以上ノ支材ヲ以テ兩端ヲ支フル裝置ト爲スヘシ

木製蓋板ノ仕上ノ厚サハ支點ノ間隔一・五二米以内ナルトキ少クトモ六〇耗、一・八三米ナルトキ少クトモ七五耗ト爲スヘシ但シ小形船ニ在リテハ適當ニ斟酌スルコトヲ得

暴露セサル艙口ニ於テハ蓋板ノ代リニ格子蓋ヲ用フルモ妨ナク又第二甲板以下ノ甲板又ハ端壁ニ開口ナキ船樓若ハ閉鎖裝置ノ效力カ第一級閉鎖裝置ノ效力以上ナル船樓

内ノ上甲板ニ於テハ蓋板ヲ備ヘサルモ妨ナシ

第三百七十一條 暴露セル艙口又ハ閉鎖裝置ノ效力カ第一級閉鎖裝置ノ效力ニ及ハサル船樓内ノ上甲板ニ設クル艙口ニハ六一〇耗以内ノ心距ニ幅六三耗以上ノ堅牢ナル帶

金承ヲ第三百六十一條第一項ノ防撓材アルトキハ該防撓材ニ、其ノ他ノ場合ニ於テハ艙口縁材ニ二箇以上ノ鋸ヲ以テ取附ケ且端末ノモノハ艙口ノ各隅ヨリ一五〇耗以内ノ箇所ニ之ヲ取附クヘシ

帶金及楔ハ艙口ヲ閉鎖スル爲有效ノモノニシテ良好ナル状態ニ在ルコトヲ要ス

第三百七十二條 暴露セル艙口又ハ閉鎖裝置ノ效力カ第一級閉鎖裝置ノ效力ニ及ハサル船樓内ノ上甲板ニ設クル艙口ニハ艙口覆布試驗規程ニ依ル甲種覆布二枚以上ヲ備フヘシ

第三百七十三條 暴露セル艙口ニハ覆布ヲ締附クル爲縛索用ノ環附螺釘其ノ他適當ナル裝置ヲ備フヘシ

艙口ノ幅力該箇所ニ於ケル甲板ノ幅ノ六〇%ヲ超エ且縁材ノ甲板上ノ高サカ六一〇耗以上ナルコトヲ要スル艙口ニハ前項ノ裝置ノ外特別ノ締附裝置ヲ備フヘシ

第四節 載炭口及平載炭孔

第三百七十四條 載炭口ノ構造及閉鎖裝置ニ付テハ艙口ニ關スル規定ヲ準用ス

第三百七十五條 船樓甲板及上甲板ニ於テハ左ニ掲クル場所ヲ除クノ外平載炭孔ヲ設クルコトヲ得ス

- 一 船橋樓甲板、船尾樓甲板、船舶滿載吃水線規程ニ定ムル低船尾樓ノ標準ノ高サノ十分ノ一以上ノ高サヲ有スル低船尾樓甲板又ハ船首ヨリLノ八分ノ一ニ相當スル箇所ヨリ後方ノ遮浪甲板上ノ場所
- 二 閉鎖裝置ノ效力カ第二級閉鎖裝置ノ效力以上ナル船樓内ニシテ何時ニテモ近寄り得ル場所
- 三 特殊ノ航路ニ使用スル小形船ノ上甲板ニシテ管海官廳ニ於テ差支ナシト認メタル場所

前項ノ平載炭孔ノ枠及蓋ハ金屬製ニシテ堅牢ナル構造ノモノナルコトヲ要シ又蓋ハ螺込止又ハ挿込止ノモノトシ螺番ニ依リ枠ニ取附クルカ又ハ鎖ヲ以テ枠ニ連結シ置クヘシ

第五節 逃口及昇降口

第三百七十六條 逃口ノ構造及閉鎖裝置ニ付テハ第三百七十七條ニ規定スルモノヲ除クノ外艙口ニ關スル規定ヲ準用ス

當ニ其ノ強力ヲ増スコトヲ要ス

第三百八十條 圍壁艙口ヲ設ケ中間ノ甲板ニ於テ艙口梁及蓋板ヲ備ヘサルトキハ該圍壁艙口直下ノ艙口ニ設クル緣材、艙口梁、縱材、受材及蓋板ニ適當ニ其ノ強力ヲ増スコトヲ要ス

圍壁艙口ノ圍壁ヲ以テ艙口ノ位置ニ於ケル甲板間ノ梁柱ニ代用スルトキハ該圍壁ハ鋼製トシ十分防擲シタルモノト爲スヘシ

第三百八十一條 特殊構造ノ鋼製蓋ヲ備フル艙口ノ構造及閉鎖裝置ニ付テハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第三百八十二條 上甲板又ハ船樓甲板ニ於テ長サ五米ヲ超エ六・五米以下ノ艙口側ニ鋼甲板ヲ張ラサルトキハ艙口ノ兩側ニ附スル梁上帶板ノ幅ヲ艙口ノ長サノ五分ノ一以上ト爲スヘシ

長サ六・五米ヲ超ユル艙口ヲ上甲板又ハ船樓甲板ニ設クルトキハ其ノ兩側ニ鋼甲板ヲ張詰メ艙口ノ前後ニ於テハ漸次其ノ幅ヲ減シテ梁上側板ニ會セシムヘシ

第三百八十三條 船體ニ比シ過大ナル長サ又ハ幅ヲ有スル艙口ヲ設クルトキハ必要ニ應ジ其ノ兩側ニ於ケル鋼甲板、艙口兩端梁及緣材ノ寸法ヲ増シ且特設肋骨ヲ設クル

第三百七十七條 閉鎖裝置ノ效力カ第二級閉鎖裝置ノ效力以上ナル船樓内ノ上甲板ニ設クル逃口ニ在リテハ其ノ周緣ニ山形鋼ヲ取附ケ之ニ門又ハ適當ナル間隔ニ配置セラレタル螺釘及母螺ヲ以テ閉鎖定著シ得ル螺番附ノ水密鋼製蓋ヲ備フルトキハ第三百五十七條ニ定ムル緣材ヲ設ケサルモ妨ナシ

第三百七十八條 上甲板ノ暴露部又ハ閉鎖裝置ノ效力カ第二級閉鎖裝置ノ效力以上ナル船樓ノ船樓甲板ノ暴露部ニ設ケル昇降口ハ鋼製ノ堅牢ナル昇降口室ヲ以テ蔽圍スヘシ

昇降口室ハ鋼甲板又ハ梁上帶板ニ固著スルコトヲ要ス昇降口室ノ戸口ノ數居ノ甲板ノ高サハ昇降口ノ位置ニ應ジ第三百五十七條ニ定ムル緣材ノ高サ以上ト爲シ戸ハ堅牢ニシテ内外兩側ヨリ閉鎖定著シ得ルモノト爲スコトヲ要ス

第六節 雜 則

第三百七十九條 甲板間ノ高サ二・六米ヲ超エ之ニ石炭又ハ貨物ヲ積載スルトキハ艙口梁、縱材、受材及蓋板ハ適

カ又ハ肋材ニ二重副肋材ヲ附スルカ若ハ肋骨ノ深サヲ増シテ該部ヲ補強スルコトヲ要シ其ノ構造ニ付テハ管海官廳ノ承認ヲ受クヘシ

第三百八十四條 特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ニ付テハ管海官廳ハ其ノ程度ニ應ジ本章ノ規定ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第十八章 機關室口

第三百八十五條 機關室口ニハ甲板毎ニ其ノ周緣ニ左表ニ掲クル高サ以上ノ高サヲ有スル緣材ヲ取附クヘシ

甲板ノ種類及位置		緣材ノ高サ(耗)	
暴露セル上甲板	610	暴露セル低船尾樓甲板	457
低船尾樓甲板以外ノ暴露セル船樓甲板(遮浪甲板ヲ含ム)	380	閉鎖裝置ノ效力カ第二級閉鎖裝置ノ效力ニ及ハサル船樓内	229
閉鎖裝置ノ效力カ第一級閉鎖裝置ノ效力ニ及ハサル船樓内	229	閉鎖裝置ノ效力カ第二級閉鎖裝置ノ效力以上ナル船樓内	適宜

第三百八十六條 暴露セル上甲板又ハ船樓甲板ニ於ケル機關室口ハ堅牢ナル鋼製圍壁ヲ以テ蔽圍スヘシ
前項ノ圍壁ノ甲板上ノ高サハ實際上差支ヘナキ限り成ルヘク高クシ少クトモ左表ニ掲クルモノト爲スヘシ

甲板ノ種類	上甲板			圍壁ノ甲板上ノ高サ(米)
	90以下	90ヲ超エ未滿	120以上	
L(米)	1.83	1.83ト2.29トノ間ニ挿間法ニ依リ定メタルモノ	229	0.76
船樓ノ高サ	船樓ノ高サニ應シ前欄ニ掲クル高サトノ間ニ挿間法ニ依リ定メタルモノ			
船樓ノ高サトキ	船樓ノ高サトキハ其ノ兩側ニ於テ梁上側板ト梁上帶板トノ間ニ鋼板ヲ張詰メ之ヲ其ノ前後ニ於テ梁ノ心距ノ二倍延長シ尙之ヨリ前後ニ於テハ漸次其ノ幅ヲ減シテ梁通梁ヲ取附クヘシ			

第三百八十七條 閉鎖裝置ノ效力カ第一級閉鎖裝置ノ效力ニ及ハサル船樓内ニ於テハ機關室口ヲ鋼製圍壁ヲ以テ蔽圍スヘシ

第三百八十八條 前二條ノ圍壁ニ戸口ヲ設クルトキハ其ノ敷居ノ甲板上ノ高サヲ第三百八十五條ニ規定スル縁材ノ高サ以上ト爲シ且戸口ハ成ルヘク蔽圍シタル場所ニ之ヲ設クヘシ
前項ノ戸口ニ設クル戸ハ堅牢ナル構造ト爲シ常設的ニ圍壁ニ取附ケタルモノナルコトヲ要シ暴露セル場所ニ設クルモノハ外開戸トシ内外兩側ヨリ迅速ニ閉鎖シ且定著シ得ルモノナルコトヲ要ス

第三百八十九條 機關室口ハ成ルヘク小ナルモノト爲スヘシ機關室口ニハ成ルヘク各甲板ノ位置ニ於テ適當ナル全通梁ヲ取附クヘシ
機關室口圍壁ノ頂部ハ梁及鋼板ニ依リ有效ニ蔽圍スヘシ鋼甲板ヲ張ラサル甲板ニ於ケル主機室口又ハ汽罐室口ノ長サカ四・五米ヲ超ユルカ又ハ兩口カ相接近シ其ノ合長カ九米ヲ超ユルトキハ其ノ兩側ニ於テ梁上側板ト梁上帶板トノ間ニ鋼板ヲ張詰メ之ヲ其ノ前後ニ於テ梁ノ心距ノ二倍延長シ尙之ヨリ前後ニ於テハ漸次其ノ幅ヲ減シテ梁

上側板ニ會セシムヘシ
鋼甲板ヲ張ラサル甲板ニ於テ主機室口、汽罐室口、艙口等ノ大ナル甲板口カ相接近スルトキハ該口間ノ甲板ニハ鋼板ヲ張詰ムヘシ

第三百九十條 暴露セル上甲板又ハ船樓甲板ニ設クル機關室口ノ圍壁ノ厚サハL三〇米以下ノ船舶ニ在リテハ六・五耗以上、L九〇米以上ノ船舶ニ在リテハ八・五耗以上、L三〇米ヲ超エ九〇米未滿ノ船舶ニ在リテハ六・五耗ト八・五耗トノ間ニ挿間法ニ依リ定メタルモノ以上ト爲スヘシ但シ低船尾樓甲板以外ノ船樓甲板(遮浪甲板ヲ含ム)

上ノ圍壁竝ニ直接波浪ヲ受ケサル部分ノ圍壁ニ在リテハ其ノ厚サヲ一耗減スルコトヲ得
前項ノ機關室口ノ縁材ノ厚サハ圍壁ノ厚サニ一耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲スヘシ
暴露セル上甲板又ハ船樓甲板ニ設クル機關室口ノ圍壁ニハ左表ニ掲クル寸法ノ防擣材ヲ七六〇耗ノ心距ヲ以テ堅ニ縁材ヲ通シテ取附クヘシ但シL三〇米以下ノ船舶ノ船樓甲板上ノ圍壁又ハ直接波浪ヲ受ケサル部分ノ圍壁ノ防擣材ノ寸法ハ適當ニ之ヲ減スルコトヲ得

低船尾樓甲板以外ノ船樓甲板(遮浪甲板ヲ含ム)上ノ圍壁ノ防擣材	L (米)		山形鋼 (耗)
	以上	以下	
上甲板又ハ低船尾樓甲板上ノ圍壁ノ防擣材	30	75×75×7	
	30	75×65×6	
	60	80×70×6.5	
	90	90×75×7	
	120	100×75×7.5	
	120	125×75×7.5	

備考 防撓材ノ長サカ第三百八十六條ニ規定スル機關室口圍壁ノ甲板上下高サヨリ大ナルトキハ適當ニ山形鋼ノ寸法ヲ増スヘシ

第三百九十一條

甲板間ニ於ケル機關室口ノ圍壁ノ厚サハ六・五耗以上、其ノ緣材ノ厚サハ七・五耗以上ト爲シ且適當ニ之ヲ防撓スヘシ但シ圍壁及緣材ノ厚サハ前條第一項及第二項ニ依ルモノヨリ大ナルコトヲ要セス
甲板間ニ於ケル機關室口圍壁カ石炭庫圍壁ヲ兼ヌルトキハ該圍壁ノ構造ハ第十二章第三節ノ規定ニ依リ之ヲ定ムヘシ

第三百九十二條

主機室ノ天窗ハ堅牢ニ構造シ且螺釘又ハ鉄ヲ以テ機關室口圍壁ノ頂部ニ固著スヘシ
機關室頂部ニ於ケル焚火室口、煙筒及通風筒ノ緣材ハ暴露甲板上成ルヘク高キ位置ニ設ケ又焚火室口ニハ常設的ニ取附ケタル堅牢ナル鋼製蓋ヲ備フヘシ

第三百九十三條

第三百五十九條第一項、第三百六十條第一項及第三百六十四條ノ規定ハ機關室口ニ之ヲ準用ス

第三百九十四條

特大ナル乾舷ヲ有スル船舶ニ付テハ管海官廳ハ其ノ程度ニ應ジ本章ノ規定ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

暴露甲板ニ於ケル通風筒ノ緣材ト鋼甲板又ハ前項ノ鋼板トハ左ノ各號ノ規定ニ依リ固著スヘシ

- 一 固著用山形鋼ノ厚サハ緣材ノ厚サニ一耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲シ其ノ堅邊ハ木甲板アルトキハ其ノ上面ヨリ一三耗以上ノ高サニ達セシムヘシ
- 二 前號ノ固著用山形鋼ノ各邊ニ於ケル鉄ノ心距ハ鉄徑ノ四倍以下ト爲スヘシ

通風筒ノ緣材ハ其ノ高サカ九一五耗ヲ超ユルトキハ特別ニ之ヲ支持スヘシ但シ上層船樓甲板ニ設クル通風筒ノ緣材ニ付テハ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第三百九十七條

通風筒ノ「カウル」ハ緣材ノ外面ニ密接セシメ挿入部ノ長サヲ三八〇耗以上ト爲スヘシ但シ徑二〇〇耗以下ノ通風筒ニ付テハ挿入部ノ長サヲ斟酌スルコトヲ得

第三百九十八條

通風筒ノ緣材ニハ「カウル」ヲ取外シタルトキ開口ヲ閉鎖スル爲堅牢ナル栓及覆布ヲ備フルカ又ハ迅速且有效ニ取附ケ得ヘキ金屬製ノ蓋ヲ備フヘシ

第三百九十九條

居住區域等ニ通スル菌形、雁首形其ノ他特殊ノ形狀ノ通風筒ハ構造適當ニシテ螺釘ヲ以テ堅牢ニ甲板ニ取附ケラレタルモノナルコトヲ要ス

第十九章 通風筒及橋孔

第三百九十五條

通風筒ノ緣材ノ高サハ暴露上甲板及前部Lノ四分ノ一間ニ於ケル暴露船樓甲板ニ在リテハ九一五耗以上、其ノ他ノ暴露船樓甲板ニ在リテハ七六〇耗以上ナルコトヲ要ス但シ特大ナル乾舷ヲ有スル船舶ノ通風筒及上層船樓甲板ニ於ケル通風筒ニ付テハ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第三百九十六條

暴露甲板ニ於ケル通風筒ノ緣材ノ厚サハ左表ニ掲クルモノ以上ト爲スヘシ

緣材ノ厚サ(耗)	通風筒ノ内徑(耗)	
	下以	上超
7.5	150-200	
8	200-280	
8.5	280-330	
9	330-380	
9.5	380-430	
10	430	

通風筒ノ緣材ヲ取附クル箇所ニ於テハ鋼甲板ナキトキハ特ニ鋼板ヲ張り又必要ニ應ジ梁ノ間ニ於テ該鋼板又ハ鋼甲板ニ防撓スヘシ

前項ノ通風筒ヲ取附クル箇所ニ於テハ鋼甲板ナキトキハ特ニ鋼板ヲ張りヘシ但シ徑二五〇耗以下ノ通風筒ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第四百條

橋ヲ標止又ハ固定スル甲板ニ鋼甲板ヲ張ラサルトキハ該甲板ノ橋ノ前後ノ梁ノ間ニハ船ノ中央部ニ於ケル該甲板ノ梁上側板ノ厚サ以上ノ厚サヲ有シ橋ノ徑ノ三倍以上ノ幅ヲ有スル鋼板ヲ張ルヘシ
橋ヲ標止又ハ固定スル甲板ニ於ケル橋孔ノ周縁ニハ球山形鋼又ハ球板ト山形鋼トヲ以テ構造シタル緣材ヲ設ケ緣材ノ高サハ橋ノ徑ノ三分ノ一及二九耗ノ中小ナルモノ以上ト爲シ之ヲ橋孔板ニ固著スヘシ
橋孔ヲ設クル爲梁ヲ切斷スルトキハ堅牢ナル縱梁ヲ設クルコトヲ要ス

第二十章 舷牆及舷側諸口

第四百一條

舷牆ハ其ノ高サニ應ジ堅牢ニ構造シ其ノ上緣ヲ有效ニ防撓スヘシ
上甲板ノ舷牆ハ左ノ各號ノ規定ニ依リ構造スヘシ
一 舷牆板ノ厚サハ成ルヘク六耗以上ト爲スヘシ
二 船樓端ニ於テハ必要ニ應ジ舷牆板ノ厚サヲ増加シ船樓外板ノ延長部ノ厚サトノ間ニ急激ナル變化ナカラシ

ムヘシ

三 舷牆ハ一・八米ヲ超エサル間隔ニ堅牢ナル支柱ヲ設ケ之ヲ支持スヘシ

四 支柱ノ箇所ニ於テハ舷側厚板ヨリ手摺ニ達スル防撓山形鋼ヲ附シ之ニ支柱ノ上端ヲ固著シ其ノ下端ハ形鋼ヲ以テ梁上側板ニ堅牢ニ固著スヘシ

第四百二條 舷牆ニ設クル舷門其ノ他ノ諸口ハ船樓端ヨリ成ルヘク隔リタル箇所ニ設クヘシ

舷門等ヲ設クル爲舷牆ヲ中斷スルトキハ其ノ兩側ニ特ニ堅牢ナル支柱ヲ設クヘシ
繫船孔ノ附近ノ舷牆板ハ之ヲ二重張ト爲スカ又ハ其ノ厚サヲ増スヘシ

船樓端ニ於テハ舷牆ノ手摺ヲ肘板ヲ以テ船樓ノ端壁又ハ船樓甲板ノ梁上側板ニ固著スルカ又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ強力ノ急激ナル變化ナカラシムヘシ

第四百三條 木材貨物ヲ積載スル甲板ニ設クル舷牆ハ其ノ高サヲ九九〇耗以上ト爲シ梁ノ箇所ニ特ニ堅牢ナル支柱ヲ設ケ之ヲ支持スヘシ

第四百四條 舷牆ニハ適當ナル放水口ヲ設クヘシ
上甲板又ハ船樓甲板上ノ舷牆カ「ウエル」ヲ形成スル

縁ヨリ高カラサル様爲スヘシ

放水口ニハ約二三〇耗ノ間隔ニ棒ヲ取附クヘシ又戸ヲ取附ケタルトキハ梗塞ノ虞ナキ構造ト爲シ且蝶番ハ黃銅製軸針ヲ有スルモノト爲スヘシ

第四百六條 甲板上ノ水ヲ排出スル爲暴露甲板ニハ船外ニ通スル排水孔ヲ設ケ其ノ他ノ水密甲板ニハ適當ナル排水管ヲ設クヘシ

上甲板下ノ甲板及閉鎖装置ノ效力カ第一級閉鎖装置ノ效力以上ナル船樓内ノ上甲板ニ設クル排水管ハ之ヲ船底ニ導クヘシ但シ排水管ニ第四百七條ノ規定ニ依ル自働不還弁ヲ備フルトキハ之ヲ船外ニ導クコトヲ得

閉鎖装置ノ效力カ第一級閉鎖装置ノ效力ニ及ハサル船樓内ノ上甲板ニ船底ニ導ク排水管ヲ設ケタルトキハ上甲板下ノ場所ニ不意ニ浸水スルコトヲ防ク爲適當ナル装置ヲ爲スヘシ

第四百七條 上甲板下ノ場所ヨリ船側ヲ貫通スル各排出管ニハ自働不還弁二箇ヲ備ヘ中一箇ハ何時ニテモ近寄り得ル場所ニ之ヲ設置スヘシ但シ弁カ容易ニ近寄り得ル場所ニ在リテ上甲板上ノ場所ヨリ之ヲ閉鎖シ得ル装置ヲ有シ且該場所ニ弁ノ開閉ヲ示ス装置ヲ備フルトキハ自働不還

トキハ之ニ設クル放水口ノ全面積ハ上甲板上及低船尾樓甲板上ニ在リテハ左表ニ掲クルモノ以上其ノ他ノ船樓甲板上ニ在リテハ左表ニ掲クルモノノ二分ノ一以上ト爲シ且全面積ノ三分ノ二ハ船ノ中央寄ニ於ケル舷牆ノ半部ニ之ヲ置クヘシ

各舷ニ於ケル舷牆ノ長サ (米)	各舷ニ設クヘキ放水口ノ全面積 (平方米)	舷牆ノ長サ一ニ付 0.061 平方米ノ割合
4	0.726	
6	0.787	
8	0.848	
10	0.909	
12	0.970	
14	1.031	
16	1.092	
18	1.153	
20	1.220	
20ヲ超ユルト		

放水口ノ面積ハ舷弧ノ高サカ船舶滿載吃水線規程ニ依ル標準舷弧ノ高サヨリ小ナル船舶ニ在リテハ前項ニ規定スルモノヨリ適當ニ之ヲ増スコトヲ要シ又「ウエル」ノ長サカLノ十分ノ七ヲ超ユル船舶又ハ特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ニ在リテハ適當ニ之ヲ減スルコトヲ得

第四百五條 舷牆ノ放水口ハ甲板上成ルヘク低キ位置ニ之ヲ設クルコトヲ要シ其ノ下縁ハ成ルヘク舷緣山形鋼ノ上

弁一箇ノミナルモ妨ナシ

前項ノ規定ハ特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ニ在リテハ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得
船樓内ノ上甲板上ノ場所ヨリ船側ヲ貫通スル各排出管ニハ自働不還弁一箇ヲ備フヘシ
船側ニ附スル自働不還弁ハ鑄鐵以外ノ材料ニテ作り船側ヲ貫通スル箇所ノ附近ニ於ケル排出管ハ鐵製又ハ鋼製ト爲シ且亞鉛鍍ヲ施スコトヲ要ス

第四百八條 船樓外板又ハ上甲板下ノ外板ニ設クル舷門、載貨門、載炭門等ニハ堅牢ニシテ定著装置ヲ有スル戸又ハ蓋ヲ備ヘ之ヲ閉鎖シタルトキハ水密トナルヘキ構造ト爲スヘシ

第四百九條 海水ニ於ケル最高滿載吃水線ヨリ一五二耗未滿ノ箇所ニ下縁ヲ有スル舷窓ハ舷窓試驗規程ニ適合スル甲種舷窓又ハ之ト同等以上ノモノナルコトヲ要シ又海水ニ於ケル最高滿載吃水線ヨリ一・二二米未滿ノ箇所ニ下縁ノ最低點ヲ有スル甲板ノ下方ニ設クル舷窓ハ同規程ニ適合スル乙種舷窓又ハ之ト同等以上ノモノナルコトヲ要ス
前項ニ掲クルモノノ外上甲板下ノ場所又ハ閉鎖装置ノ效

力カ第二級閉鎖装置ノ效力ト同等以上ナル船樓内ノ場所ニ設クル舷窓ニハ蝶番ニ依リ取附ケタル内蓋ヲ備ヘ完全ニ水密トナル構造ト爲スヘシ但シ雜居三等旅客ニ非サル旅客又ハ船員ニ専用スル船樓内ノ容易ニ近寄り得ル場所ニ設クル舷窓ノ内蓋ハ取外シ得ルモノト爲スコトヲ得前項但書ノ場合ニ於テハ内蓋ヲ常ニ舷窓ノ近クニ備置ク爲ノ装置ヲ爲スヘシ

第二項ノ舷窓ノ枠ハ黃銅、鑄鋼其ノ他適當ナル金屬ヲ以テ堅牢ニ構造シタルモノナルコトヲ要シ之ヲ鑄鐵製ト爲スコトヲ得ス又蝶番ノ軸針及締附螺釘ハ黃銅製ナルコトヲ要ス

第四百十條 國際航海ニ從事スル旅客船ノ限界線下ノ船側ニ於ケル開口ニ付テハ本章ノ規定ニ依ルノ外船舶區畫規定ノ定ムル所ニ依ル

遮浪甲板船ノ常設閉鎖装置ヲ備ヘサル甲板口ノ位置ニ於ケル放水口ニ付テハ船舶滿載吃水線規程第四百十六條第四項ノ規定ニ依ル

第二十一章 舵及操舵装置

第一節 舵

第四百十一條 本節ノ規定ハ不平衡單板舵ニ付定メタルモ

部ノ截面積ヲ適當ニ増スコトヲ要ス

第四百十四條 舵心材ノ徑ハ舵頭材ノ徑以上ト爲スヘシ但シ上端壺金ノ下方ニ於テハ漸次減少シ下端ニ於テハ舵頭材ノ徑ノ七五%ト爲スコトヲ得

第四百十五條 舵腕ハ舵板ノ兩面ニ交互ニ設クヘシ

舵腕ト舵心材トヲ別箇ニ製造スルトキハ舵腕ハ機嵌其ノ他ノ方法ニ依リ十分舵心材ニ嵌込ミ且栓止ト爲スヘシ此ノ場合ニ於テハ舵心材ノ徑ヲ該部ニ於テ栓溝ノ深サニ應シ適當ニ増加スヘシ

第四百十六條 舵心材ニ最モ近キ鉸孔ノ部分ニ於ケル舵腕ノ寸法ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ
幅 $28.6^3 \sqrt{ArV^2} + \phi + 5$ (耗ニテ)
厚サ $17.2^3 \sqrt{ArV^2}$ (耗ニテ)

a ハ舵板中當該舵腕ニテ支持スル部分ノ面積ニシテ舵心材ノ後面ヨリ測リタルモノ (平方米ニテ)
r ハ舵心材ニ最モ近キ鉸孔ヨリ a ノ重心ニ至ル距離 (米ニテ)

V ハ最大航海速度 (節ニテ) 但シ最大航海速度力カ L 七六米以上ノ船舶ニ於テ一節未滿ナルトキハ一一節トシ其ノ他ノ船舶ニ於テ左ノ算式ニ依リ算定シタル V_m ヨ

ノトス
特殊ノ舵ノ構造及寸法ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第四百十二條 舵頭材、舵心材、舵腕及舵針ハ鐵又ハ平爐若ハ電氣爐ニ依リ製造シタル鋼塊ヨリ鍛造スヘシ但シ豫メ管海官廳ノ承認ヲ受ケタルトキハ鑄鋼材ヲ使用スルコトヲ得又舵腕ハ純粹ノ屑鋼ヨリ鍛造スルコトヲ得鍛造シタル舵腕及舵針ニ付テハ材料試驗ヲ爲スコトヲ要セス

第四百十三條 舵頭材ノ徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$113^3 \sqrt{Ar - 52 + 5 \sqrt{Ar} (0.16V^2 - 0.32V)}$ (耗ニテ)
A ハ舵針ノ中心線ヨリ舵板ノ後端迄測リタル舵ノ全面積 (平方米ニテ)

r ハ舵針ノ中心線ヨリ A ノ重心ニ至ル距離 (米ニテ)
V ハ最大航海速度 (節ニテ)

舵頭材ト舵心材トノ接合部ノ根元ハ十分大ナラシムヘシ專ラ曳船ニ從事スル汽船ニ在リテハ第一項ノ規定ニ依ル舵頭材ノ徑ヲ適當ニ増スコトヲ要シ又舵心材ノ中心線カ舵頭材ノ中心線ノ後方ニ在ル船舶ニ在リテハ舵頭材ノ下

リ小ナルトキハ V_m トス

$V_m = 0.0656L + 6$

φ ハ舵腕ト舵板トヲ固著スル鉸ノ徑 (耗ニテ)
舵心材ノ周圍ニ於ケル舵腕ノ厚サハ前項ノ規定ニ依ル厚サノ七〇%以上ト爲スヘシ

後端ニ於ケル舵腕ノ厚サハ舵板ノ厚サ以上ト爲スヘシ
第四百十七條 舵腕ト舵板トヲ固著スル鉸ハ舵腕ノ幅一一五耗以下ナルトキハ一列、一一五耗ヲ超ユルトキハ二列ニ配置シ各列ニ於ケル心距ヲ徑ノ四・五倍以下ト爲スヘシ

鉸ヲ二列ニ配置スル場合ニ於テハ後端ノモノヲ除クノ外並列配置ト爲スコトヲ得ス

鉸ヲ三列以上ニ配置セントスルトキハ舵腕ノ幅及鉸ノ配置ニ付管海官廳ノ承認ヲ受クヘシ
第四百十八條 壺金ノ心距ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ及一・九米ヲ超ユルコトヲ得ス

$0.26^3 \sqrt{S}$ (米ニテ)
S ハ舵頭材ノ徑 (耗ニテ)

上端壺金ハ成ルヘク之ヲ舵頭管ニ接近セシムヘシ
壺金ノ深サハ舵頭材ノ徑ノ七〇%以上、厚サハ舵頭材ノ

徑ノ二五%以上ト爲スヘシ
第四百十九條 舵針ノ徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ
以上ト爲スヘシ

$$0.45S + 13.5 \quad (\text{サニテ})$$

Sハ舵頭材ノ徑 (耗ニテ)
第四百二十條 船尾材ノ壺金ニ嵌入スル舵針ノ平行部ノ長
サハ舵頭材ノ徑ノ七五%以上ト爲スヘシ但シ下端ノ舵針
ニ付テハ四〇%ト爲スコトヲ得

第四百二十一條 舵頭材ト舵心材トヲ鑄接スルトキハ鑄ノ
厚サハ栓溝ノ深サヲ除キ舵頭材ノ徑ノ二五%以上ト爲シ
螺釘孔ト鑄縁トノ距離ハ螺釘ノ徑ノ三分ノ二以上ト爲ス
ヘシ

第四百二十二條 舵頭材ト舵心材トノ嵌接ノ各部ノ寸法ハ
左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ嵌接
ノ上端ノ幅ハ該部ニ三箇以上ノ螺釘ヲ用フルトキハ適當
ニ之ヲ増スヘシ

- 嵌接ノ長サ $2.5S$ (耗ニテ)
- 嵌接ノ上端ノ幅 $1.75S$ (耗ニテ)
- 嵌接ノ下端ノ幅 $2.5S$ (耗ニテ)
- 嵌接ノ末端ノ厚サ $0.13S$ (耗ニテ)

$$3.75S \sqrt{S} \quad (\text{耗ニテ})$$

Sハ舵頭材ノ徑 (耗ニテ)
第四百二十五條 波浪ノ衝擊等ニ依ル舵ノ扛擧ヲ防ク爲
「ロツキンダ、ピントル」其ノ他適當ノ裝置ヲ設クヘシ

第二節 操舵裝置

第四百二十六條 舵柄又ハ舵柄弧ニ對シテハ甲板上ニ堅牢
ナル回轉止ヲ取附クヘシ但シ操舵機ヲ直接舵柄弧ニ連結
スルトキハ此ノ限ニ在ラス
舵柄又ハ舵柄弧ニハ適當ナル制動裝置又ハ制動索ヲ備フ
ヘシ

第四百二十七條 船尾ニ於ケル操舵裝置ハL六五米以上ノ
船舶ニ在リテハ之ヲ蔽圍シタル場所ニ置クヘシ但シ船尾
樓甲板又ハ其ノ上層甲板ニ設置セル舵柄、舵柄弧又ハ操
舵輪ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第四百二十八條 鍛鋼製ノ舵柄又ハ舵柄弧ノ寸法ハ左ノ各
號ニ掲クルモノヲ標準ト爲スヘシ但シ操舵機ニ直接連結
スル舵柄弧ノ半徑ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル
一 舵頭材ノ中心ヨリ操舵鎖ノ中心線迄測リタル舵柄ノ
長サ又ハ舵柄弧ノ半徑 $830 + 0.017S^2$ (耗ニテ)
二 舵頭孔部ノ寸法 深サ S (耗ニテ)

Sハ舵頭材ノ徑 (耗ニテ)
第四百二十三條 舵頭材ト舵心材トノ接合部ニ用フル螺釘
ノ數ハ成ルヘク六箇以上ト爲シ其ノ截面積ノ和ハ接合ノ
種類ニ應シ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト
爲スヘシ

- 一 水平鑄接ノ場合 $0.003S^3$ (平方釐ニテ)
 - 二 垂直鑄接ノ場合 $0.0044S^2$ (平方釐ニテ)
 - 三 嵌接ノ場合 $0.0053S^2$ (平方釐ニテ)
- rハ鑄接螺釘配置ノ中心ヨリ螺釘ノ中心迄ノ平均距離
(耗ニテ)

Sハ舵頭材ノ徑 (耗ニテ)
前項ノ螺釘ノ母螺ハ締附ケタル後止母螺、割栓等ニ依リ
之ヲ其ノ位置ニ固定スヘシ

第四百二十四條 舵板ノ厚サハ最大航海速力カ一五節以下
ナルトキハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲シ一
五節ヲ超ユルトキハ左ノ算式ニ依リ算定シタル厚サニ超
過速力一節ニ付一耗ノ割合ヲ以テ定メタル厚サヲ加ヘタ
ルモノ以上ト爲スヘシ但シ舵腕ノ心距カ第四百十八條ノ
規定ニ依ル壺金ノ最大心距ト異ル場合ニ於テハ適當ニ増
減スヘキモノトス

$$\text{外徑 } 1.8S \quad (\text{耗ニテ})$$

- 三 舵頭孔部ニ連續スル箇所ノ腕ノ寸法
 - 幅 S (耗ニテ)
 - 厚サ $0.5S$ (耗ニテ)
- 四 外端ニ於ケル腕ノ寸法
 - 幅 $0.67S$ (耗ニテ)
 - 厚サ $0.33S$ (耗ニテ)

Sハ舵頭材ノ徑 (耗ニテ)
鍛鋼製ノ舵柄弧ニ在リテハ腕ノ幅及厚サハ二箇ノ腕ヲ有
スルトキハ前項ノ規定ニ依ルモノノ八五%、三箇ノ腕ヲ
有スルトキハ七七%、四箇ノ腕ヲ有スルトキハ七〇%ト
爲スコトヲ得
鑄鋼製ノ舵柄又ハ舵柄弧ノ寸法ハ其ノ強力カ前二項ノ規
定ニ依ル鍛鋼製ノ舵柄又ハ舵柄弧ノ強力ト同等ト爲ル様
之ヲ定ムヘシ

第四百二十九條 舵柄又ハ舵柄弧ハ燒嵌其ノ他ノ方法ニ依
リ十分舵頭材ニ嵌込ムカ又ハ螺釘ヲ以テ締附クルコトヲ
要シ且栓止ト爲スコトヲ要ス
第四百三十條 舵頭材ニ固定シタル舵柄ト之ニ固定セサル
遊動舵柄弧トヲ併用スルトキハ遊動舵柄弧ノ腕ノ寸法ハ
其ノ全長ヲ通シ第四百二十八條第一項第四號ニ依ルモノ

ト爲スコトヲ得

第四百三十一條 操舵鎖ノ徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ九・五耗未滿ト爲スコトヲ得ス

$$0.38 \sqrt{\frac{S^3}{R}} \quad (R = \text{テ})$$

S、ハ舵頭材ノ徑(耗ニテ)

R、ハ舵頭材ノ中心ヨリ操舵鎖ノ中心線迄測リタル舵柄ノ長サ又ハ舵柄弧ノ半徑(耗ニテ)

操舵圓材ノ徑ハ前項ノ規定ニ依ル操舵鎖ノ徑ノ一・二五倍以上ト爲スヘシ

第四百三十二條 導鎖滑車ハ成ルヘク操舵鎖ヲ短カラシメ

且之ヲ小角度ニ屈折セシメサル様配置スヘシ

操舵鎖ノ中心線迄測リタル導鎖滑車ノ徑ハ鎖徑ノ一六倍以上ト爲シ滑車針ノ徑ハ鎖徑ノ二倍以上ト爲スヘシ

操舵鎖ノ屈折角度カ一二〇耗未滿ナルトキハ導鎖滑車及滑車針ノ徑ヲ前項ノ規定ニ依ルモノノ一・二五倍以上ト爲スヘシ

第四百三十三條 操舵裝置ニ付テハ本節ノ規定ニ依ルノ外

船舶設備規程ノ定ムル所ニ依ル

第二十二章 内張板

第四百三十四條 單底構造ノ船底ニハ彎曲上部迄船底内張板ヲ張り詰ムヘシ

二重底構造ノ船底ニハ艙口直下ノ内底板上及外側肘板上ニ船底内張板ヲ張り詰ムヘシ但シ艙口直下ノ内張板ハ該部ニ於ケル内底板ノ厚サヲ二耗増ストキハ之ヲ省略スルコトヲ得

第四百三十五條 船底内張板ノ厚サハL六〇米以下ノ船舶ニ在リテハ五〇耗以上、L六〇米ヲ超ユル船舶ニ在リテハ六三耗以上ト爲スヘシ

第四百三十六條 二重底内底板ノ上面ニ内張板ヲ張ルトキハ内張板ノ下部ニ厚サ三八耗以上ノ横木ヲ置クヘシ

第四百三十七條 一般貨物ヲ積載スル船舶ノ艙口ニハ厚サ五〇耗以上ノ船底内張板ヲ二三〇耗以下ノ間隔ヲ以テ張ルヘシ

第二十三章 排水裝置

第四百三十八條 各水密區畫室ニハ有效ナル排水裝置ヲ備フヘシ

排水裝置ハ船體カ龍骨ヲ水平ニシテ直立セルトキ及五度ノ傾斜ヲ有スルトキ少クトモ一箇ノ吸引口ニ依リ各區畫室内ノ排水ヲ爲シ得ル様裝置スヘシ

二重底内底板ヲ船側迄延長スルトキハ二重底ノ全幅ニ達スル滲水溜ヲ設クルカ又ハ二重底上面カ凹面ナル場合ニ於テハ中央部及兩側ニ、其ノ他ノ場合ニ於テハ兩側ニ滲水溜ヲ設ケ之ニ吸引口ニ設クヘシ

滲水溜ノ容積ハ〇・一七立方米ヨリ小ナルコトヲ得ス但シ小ナル水密區畫室ニ設クルモノハ此ノ限ニ在ラス石炭庫ノ下部ヲ水密ニ構造スルトキハ該部ニ吸引口ヲ設ケ且其ノ閉塞ヲ防止スル爲適當ナル裝置ヲ爲スヘシ

第四百三十九條 機關室ニ二重底ヲ備ヘサルトキハ中心線

ニ正滲水「ポンプ」ノ吸引口及副滲水「ポンプ」ノ直接吸引口ヲ設ケ且船底勾配カ五度未滿ナルトキハ兩側ニ正滲水「ポンプ」ノ吸引口ヲ増設スヘシ

機關室ニ二重底ヲ備ヘ兩側ニ滲水路ヲ有スル場合ニ於テハ各側ニ吸引口二箇ヲ設ケ各別ノ動力「ポンプ」ニ連結スヘシ但シ内一箇ハ副滲水「ポンプ」ノ直接吸引口ト爲スコトヲ得

機關室ニ於ケル二重底内底板ヲ船側迄延長スルトキハ第四百三十八條第三項ノ規定ニ依ル滲水溜ニ設クル吸引口ノ總數ハ少クトモ正滲水「ポンプ」ノ吸引口三箇及副滲水「ポンプ」ノ直接吸引口一箇ト爲スヘシ

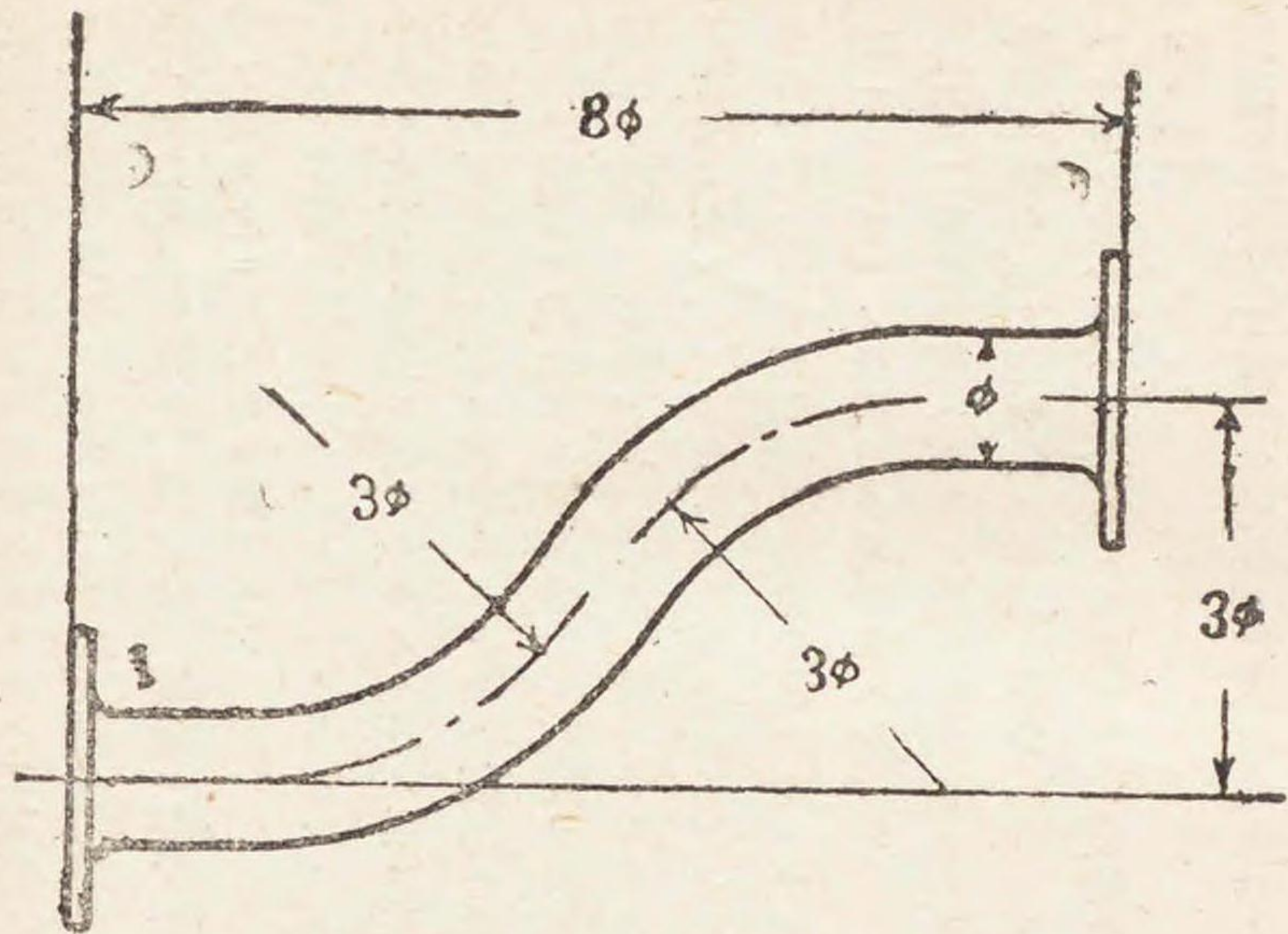
汽機室及汽罐室カ隔離セル場合ニ於テハ各室ニ於ケル吸引口ノ數ハ艙内ニ於ケルモノト同數ト爲シ且汽機室ニ於テハ副滲水「ポンプ」ノ直接吸引口一箇ヲ増設スヘシ

第四百四十條 脚荷水槽トシテ使用スル船首尾艙ニハ之ニ動力「ポンプ」ノ吸引口ヲ設クヘシ

脚荷水槽トシテ使用セサル船尾艙ニ動力「ポンプ」ノ吸引口ヲ設ケサルトキハ適當ノ手動「ポンプ」ヲ備フヘシ脚荷水槽トシテ使用セサル船尾艙ニ動力「ポンプ」ノ吸引口ヲ設ケサルトキハ適當ナル手動「ポンプ」ヲ設ケルカ又ハ船尾隔壁ニ取附ケタル弁又ハ「コック」ニ依リ船尾艙ノ滲水ヲ動力「ポンプ」ノ吸引口ニ導キ得ヘキ裝置ト爲スヘシ

船首水槽頂部又ハ錨鎖庫カ滿載吃水線下ニ在ルトキハ之ニ手動「ポンプ」又ハ動力「ポンプ」ノ吸引口ヲ設クヘシ
機關室ヨリ船首艙ニ至ル吸引管カ他ノ艙内ヲ通過スル場合ニハ滿載吃水線ノ上方ニシテ何時ニテモ近寄り得ル場所ヨリ操作シ得ル螺締弁ヲ船首隔壁ノ船首艙側ニ取附ケ之ニ吸引管ヲ連結スヘシ但シ特殊ノ管配置ヲ爲シタル場合ニ於テ管海官廳ノ承認ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラ

ス
第四百四十一條 軸路ニハ滄水溜ヲ設ケ之ニ動力「ポンプ」ノ吸引口ヲ設クヘシ



第四百四十二條 滄水吸引管ハ成ルヘク二重底内ヲ通過セサル様配置スヘシ
石炭庫内ノ滄水吸引管ニハ鉛管ヲ用フルコトヲ得ス但シ十分ナル保護装置ヲ爲ストキハ此ノ限ニ在ラス

第四百四十三條 管ハ振動ヲ防止スル爲帯金其ノ他ノ方法ニ依リ適當ニ之ヲ取附クヘシ
管ニハ各區間ニ有效ナル膨脹接手又ハ彎曲部ヲ設クヘシ鉛管ノ彎曲部ノ形狀及寸法ハ左圖ニ掲クルモノヲ標準ト爲スヘシ

第四百四十四條 船首隔壁及船尾艙ヲ脚荷水槽トシテ使用スル場合ニ於ケル船尾隔壁ニハ排水用ノ弁又ハ「コック」ヲ取附クルコトヲ得ス前項ノ隔壁ヲ除キ其ノ他ノ水密隔壁ニ排水用ノ弁又ハ「コック」ヲ取附クルトキハ何時ニテモ近寄り得ル場所ニ設ケ且滿載吃水線以上ノ場所ヨリ閉鎖シ得ル装置ト爲スヘシ
滄水及脚荷水ノ吸引管ニ連結スル弁又ハ「コック」ハ何時ニテモ近寄り得ル場所ニ之ヲ設クヘシ但シ滄水吸引管ニ取附クル不還弁ハ此ノ限ニ在ラス

第四百四十五條 脚荷水及貨物ノ積載ニ兼用スル深水槽ニ於テハ貨物ヲ搭載スルトキ脚荷水ノ充水口及吸引口ヲ閉

鎖シ脚荷水ヲ積載スルトキ滄水吸引口ヲ閉鎖シ得ル装置ト爲スヘシ

第四百四十六條 弁匣、「コック」、管等ヲ隔壁板又ハ軸路板ニ取附クルニハ植込螺釘又ハ螺込螺釘ヲ用フルコトヲ要ス

第四百四十七條 滄水吸引管ノ内徑ハ管ノ種類ニ應シ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノヲ標準ト爲スヘシ

- 一 滄水主管及滄水直接吸引管
 $1.67 \sqrt{1(B + D_1) + 25}$ (米ニテ)
- 二 滄水支管
 $2.15 \sqrt{1(B + D_1) + 25}$ (米ニテ)

D_1 ハLノ中央ニ於テ龍骨ノ上面ヨリ隔壁甲板ノ船側ニ於ケル上面迄ノ深サ(米ニテ)

ノハ當該支管ニ依リ排水スヘキ區畫室ノ長サ(米ニテ)前項ノ規定ニ拘ラス滄水主管ノ内徑ハ六〇耗及滄水支管ノ内徑ヨリ小ト爲スコトヲ得ス

滄水支管ノ内徑ハL六〇米以上ノ船舶ノ船首尾艙及軸路ノ滄水溜ニ至ル管ニ在リテハ五七耗ヨリ、其ノ他ノ管ニ在リテハ五〇耗ヨリ小ナラサルコトヲ要シ又何レノ管ト雖モ一〇〇耗ヨリ大ナルコトヲ要セス

第四百四十八條 水槽ニハ充水口ノ反對隅又ハ該水槽ノ最高部ニ空氣管ヲ設ケ之ヲ滿載吃水線ヨリ上方ノ箇所ニ導クヘシ
前項ノ空氣管ノ截面積ノ和ハ充水管ノ截面積以上ト爲スヘシ

空氣管ヲ暴露セル上甲板又ハ船樓甲板上ニ導クトキハ其ノ開口ノ甲板上ノ高サハ上甲板ニ於テハ九一五耗以上、低船尾樓甲板ニ於テハ七六〇耗以上、其ノ他ノ船樓甲板ニ於テハ四五七耗以上ト爲スヘシ但シ特大ナル乾舷ヲ有スル船舶ニ付テハ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第四百四十九條 前條ノ規定ハ油槽ニ之ヲ準用ス
油槽ノ空氣管ニハ取外シ易キ細目金網製隔膜ヲ備フヘシ

第四百五十條 機關室ヲ除キタル各船艙、水槽、油槽其ノ他水ノ溜ル區畫室ニハ測水管ヲ設クヘシ但シ油槽船ノ油槽ニ付テハ此ノ限ニ在ラス
測水管ハ成ルヘク眞直ト爲シ其ノ直下ノ外板ニハ厚キ鋼板ヲ當テ測水桿ノ衝擊受ト爲スヘシ
測水管ハ滿載吃水線以上ニシテ何時ニテモ近寄り得ル場所ニ達セシムヘシ但シ軸路又ハ機關室直下ノ二重底ニ在リテ測水管ノ端ヲ近寄り得ル箇所ニ止メ且ツ之ニ取放チ

得サル螺蓋ヲ備フルカ又ハ自動閉塞装置ヲ有スル「コツク」ヲ備フル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

第四百五十一條 滄水管、空氣管、測水管等ハ貨物又ハ石炭ノ爲破損セサル様之ヲ保護スヘシ

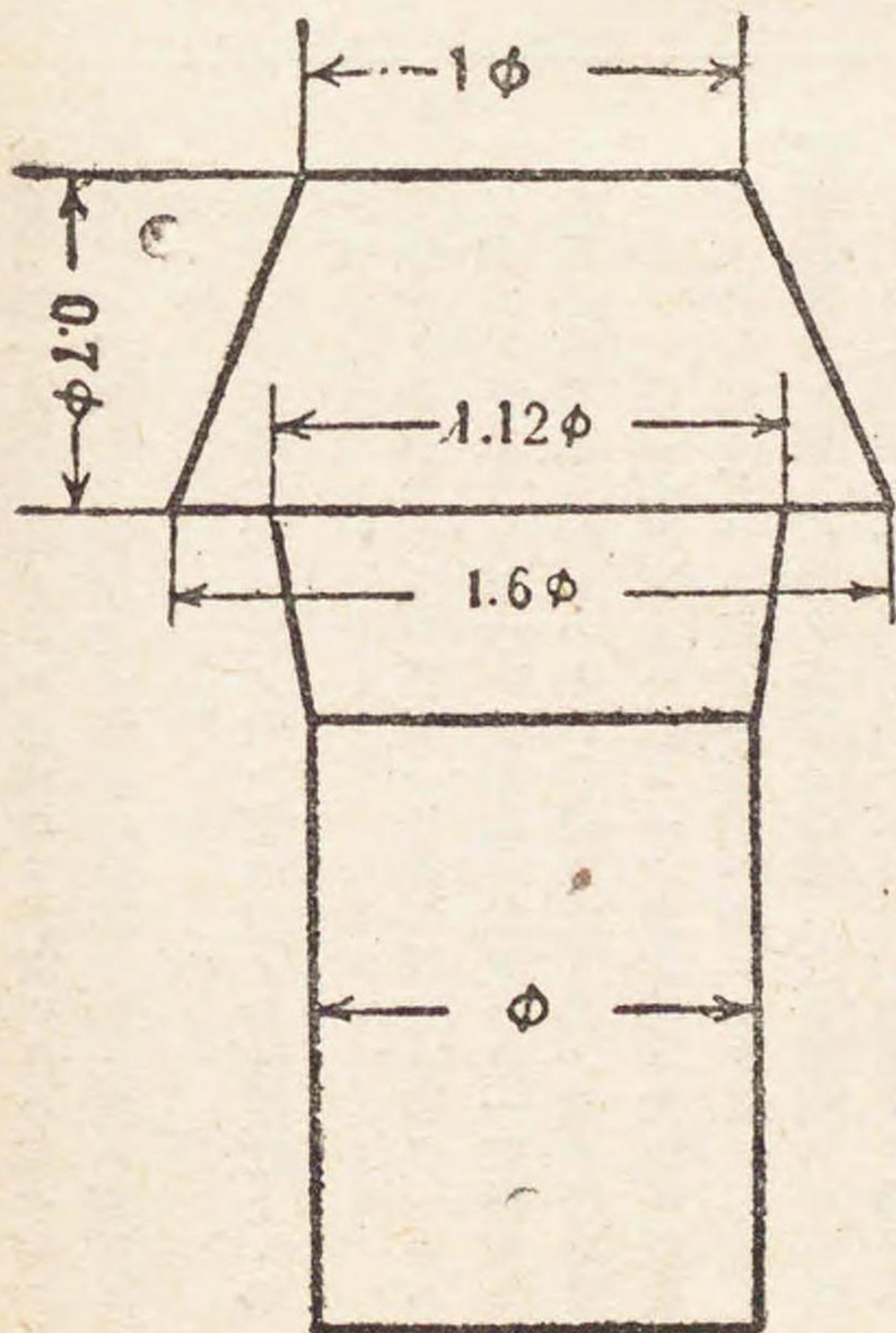
冷凍區畫ニ於ケル滄水管、空氣管、測水管等ニハ十分ナル保温装置ヲ施シ管内ノ凍結ヲ防止スヘシ

第四百五十二條 手動滄水「ポンプ」ハ滿載吃水線以上ノ場所ニテ操作シ得ルモノト爲シ吸引水高ハ七・五米以下ト爲スヘシ

手動滄水「ポンプ」ノ滄水吸引管ノ内徑ハ滄水支管ニ對スル第四百四十七條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定ムヘシ

第四百五十三條 脚荷水吸引管ハ水槽ニ一箇ノ吸引口ヲ設クルトキハ其ノ内徑ヲ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲シ水槽ニ二箇以上ノ吸引口ヲ設クルトキハ其ノ截面積ノ和ヲ左ノ算式ニ依リ算定シタル徑ヲ有スル管ノ截面積ヨリ適當ニ増スヘシ

$4.3 \sqrt{T + 47}$ (耗=テ)
Tハ水槽ノ容量(立方米ニテ)
脚荷水吸引管ノ内徑ハ前項ノ規定ニ拘ラズ六〇耗未満ト爲スコトヲ得ス



第四百五十四條 機關ヲ有セサル帆船ニ在リテハ必要ナル數ノ手動滄水「ポンプ」ヲ備フヘシ

第四百五十五條 排水装置ニ付テハ本章ノ規定ニ依ルノ外機關ノ種類及船舶ノ用途ニ應シ船舶機關規程並ニ船舶區畫規程ノ定ムル所ニ依ル

第二十四章 銕及銕接合

第一節 銕

第四百五十六條 船體主要部分ノ固著ニハ銕孔ヲ打貫キタ

ルトキハ右圖ニ掲クル寸法ノ頸太平銕ヲ、銕孔ヲ錐採シテ穿チタルトキハ直頸平銕ヲ使用スヘシ但シ管海官廳ノ承認ヲ受ケ丸皿銕ヲ使用スルコトヲ得

第四百五十七條 銕ノ徑ハ固著スル材料ノ厚サニ應シ左表ニ依リ之ヲ定ムヘシ

銕 徑(耗)	材料ノ厚サ(耗)	
	上以	下以
13	4.5—	5.5
16	6	— 8.5
19	9	— 12.5
22	13	— 18
25	18.5—	23.5
28	24	— 28.5
32	29	— 32

前項ノ規定ヲ適用スルニ當リ固著スル材料ノ厚サ等シカラサルトキハ板ノ横線接合ニ在リテハ大ナル厚サ、板ノ縦線接合及板ト形鋼トノ固著ニ在リテハ小ナル厚サニ依リ銕徑ヲ定ムヘシ但シ厚サノ差大ナルトキハ銕徑ニ付適當ナル考量ヲ加フヘシ

第四百五十八條 外板ト船首材、船尾骨材、方形龍骨及螺旋軸支肘トヲ固著スル銕ノ徑ハ外板ノ厚サニ應シ前條第一項ノ表ニ依リ定メタル徑カ一六耗以下ナルトキハ之ニ

鋼船構造規程

三耗ヲ、一六耗ヲ超ユルトキハ之ニ六耗ヲ加ヘタルモノト爲スヘシ但シ二八耗ヲ超ユルトキ要セス

第四百五十九條 左ニ掲クル箇所ニハ螺込銕ヲ使用スルコトヲ得

一 長サ三〇〇耗ヲ超ユル銕ニ非サレハ固著シ得サル箇所

二 銕工事ヲ行ヒ得サル箇所

重要ナル固著ニ用フル螺込銕ノ徑ハ之ニ用フヘキ銕ノ徑ニ三耗ヲ加ヘタルモノト爲スヘシ

第二節 銕列及衝接覆板ノ厚サ

第四百六十條 板ノ横線接合ニ於ケル銕列ハ板ノ厚サニ應シ左表ニ依リ之ヲ定メ銕列カ二列以上ナル場合ノ銕ノ配置ハ並列ト爲スヘシ

備考

- 一、板ノ厚サ等シカラサルトキハ小ナル厚サニ依リ鉄列ヲ定ムヘシ但シ厚サノ差大ナルトキハ鉄列ニ付適當ナル考量ヲ加フヘシ
- 二、船首樓及船尾樓ノ外板ヲ除キ船ノ首尾ニ於ケル其ノ他ノ外板ノ縦線ノ鉄列ハ中央部ニ於ケル厚サニ依リ定ムヘシ

第四百六十二條

外板ト船首材、方形龍骨、船尾骨材又ハ螺旋軸支肘トハ少クトモ二列鉄固著ト爲スヘシ

L一〇七米ヲ超ユル單螺旋汽船ノ螺旋軸管ノ下部ニ於テハ外板ト船尾骨材ト少クトモ三列鉄固著ト爲スヘシ

第四百六十三條

鉄孔ノ中心ヨリ板又ハ形鋼ノ縁迄ノ距離ハ鉄徑ノ一・五倍以上ト爲スヘシ

板ノ累接又ハ衝接ニ於ケル鉄列ノ距離ハ縦線接合ニ在リテハ鉄徑ノ二・五倍以上、横線接合ニ在リテハ鉄徑ノ三倍以上ト爲スヘシ但シ外板又ハ鋼甲板ノ横線接合ニ於テ肋骨又ハ梁ノ間ニ規定ノ鉄ヲ配置シ得サルトキハ鉄列ノ距離ヲ鉄徑ノ二・五倍迄減スルコトヲ得

形鋼ノ固著ニ於ケル鉄列ノ距離ハ竝列配置ニ在リテハ鉄徑ノ二・五倍以上、千鳥形配置ニ在リテハ鉄徑ノ二倍以上ト爲スヘシ

第四百六十四條

板ノ衝接ニ於ケル覆板ノ厚サハ板ノ厚サニ覆板ノ種類ニ應シ左表ニ掲クル係數ヲ乘シタルモノ以

上ト爲スヘシ

二重覆板	單覆板		係數
	縦線ニ施スモノ	横線ニ施スモノ	
皿取ヲ施ササルモノ	皿取ヲ施スモノ	縦線ニ施スモノ	1.25
		横線ニ施スモノ	1.00
		皿取ヲ施スモノ	0.70
		皿取ヲ施ササルモノ	0.60

第三節 鉄ノ心距

第四百六十五條 板ノ横線接合ニ於ル鉄ノ心距ハ左表ニ依ル

欄	種	類	心距 鉄徑ノ倍 數ニテ
一	平板龍骨、外板及梁上側板ノ横線（四列鉄接合、五列鉄接合及二重覆板衝接ノ場合ヲ除ク）		3½
二	四列鉄接合及二重覆板衝接ノ横線		
三	鋼甲板、肋板、二重底中心線桁板、梁上帶板、中心線内龍骨ノ貫通板並ニ甲板下縱桁及特設肋骨ヲ構成スル鋼板ノ横線		4
四	二重底ノ内底板及縁板ノ横線		
五	五列鉄接合ノ横線		
六	水槽ヲ構成スル水密隔壁板及水槽ヲ構成スル軸路板ノ横線		4½
七	遮浪甲板、上甲板及下層甲板ノ機關室口及艙口ノ縁材ノ横線		
八	突梁ヨリ下方ニ於ケル橋板ノ横線		5
九	水密隔壁板及軸路板ノ横線（第六欄ノ横線ヲ除ク）		5½

第四百六十六條 板ノ縦線接合ニ於ケル鉄ノ心距ハ左表ニ依ル

欄	種	類	心距 鉄徑ノ倍 數ニテ
一	外板、二重底ノ内底板及縁板ノ縦線		

二	鋼甲板及梁上側板ノ縦線	4½
三	水槽ヲ構成スル水密隔壁板及水槽ヲ構成スル軸路板ノ縦線	
四	檣板ノ縦線	5
五	水密隔壁板及軸路板ノ縦線(第三欄ノ縦線ヲ除ク)	5½

前項ノ規定ニ拘ラスシ一四〇米以上ノ船舶ニ在リテハ首尾ヨリ測リ約シノ四分ノ一ニ相當スル箇所ノ前後適當ノ長サノ間ニ於テ深サノ中央ノ附近ニ於ケル外板ノ縦線ヲ

シ 接合スル鉄ノ心距ハ其ノ徑ノ三・七五倍以下ト爲スヘ

第四百六十七條 形鋼ニ於ケル鉄ノ心距ハ左表ニ依ル

欄	種	類	心距 (鉄徑ノ倍數)
一	中心線内龍骨ノ貫通板又ハ斷切板ト單底肋板トノ固著		4
二	中心線内龍骨ノ貫通板又ハ斷切板ト平板龍骨トノ固著		5
三	前部Lノ四分ノ一間ニ於ケル肋板ト外板トノ固著		5½
四	内龍骨各材相互間ノ固著		
五	肋板ト其ノ上縁ニ附スル山形鋼トノ固著		7
六	肋板ト外板トノ固著(第三欄ノ固著ヲ除ク)		4½
七	縁板ト外板トノ固著		

欄	種	類	心距 (鉄徑ノ倍數)
八	縁板ト實體肋板又ハ組立肋板ニ於ケル肘板トノ固著		
九	縁板ト外側肘板トノ固著		
一〇	中心線桁板ト平板龍骨トノ固著		5
一一	中心線桁板ト實體肘板又ハ組立肋板ニ於ケル肘板トノ固著		
一二	組立肋板ニ於ケル正副肋材ト肘板トノ固著		
一三	前部Lノ四分ノ一間ニ於ケル實體肋板ト外板トノ固著		5½
一四	前部Lノ四分ノ一間ニ於ケル組立肋板ノ正肋材ト外板トノ固著		
一五	心距七六〇耗ヲ超ユル組立肋板ノ正肋材ト外板トノ固著		6
一六	内底板ト中心線桁板又ハ側桁板トノ固著		
一七	實體肋板ト内底板又ハ側桁板トノ固著		
一八	實體肋板ニ附スル防撓材ノ固著		7
一九	實體肋板ト外板トノ固著(第一三欄ノ固著ヲ除ク)		
二〇	組立肋板ニ於ケル正肋材ト外板トノ固著(第一四欄及第一五欄ノ固著ヲ除ク)		
二一	組立肋板ニ於ケル副肋材ト内底板トノ固著		
二二	船首艙ニ於ケル正肋材ト肋板及兩舷結合板トノ固著		5

二二	肋	前部Lノ四分ノ一間ニ於テ滿載吃水線ノ下方ニ於ケル肋骨ト外板トノ固著	5½
二四	骨	船首尾水槽及深水槽ニ於ケル肋骨ト外板トノ固著	
二五	骨	心距七六〇耗ヲ超ユル肋骨ト外板トノ固著(前二欄ノ固著ヲ除ク)	
二六	骨	船内肋骨ト二重底ノ外側肘板トノ固著	6
二七	骨	肋骨ト外板トノ固著(第二三欄乃至第二五欄ノ固著ヲ除ク)	7
二八	特設肋骨及船側縱通材	船側縱通材ヲ構成スル鋼板ト特設肋骨ヲ構成スル鋼板トノ固著	4½
二九	船側縱通材	特設肋骨及船側縱通材ノ内縁ニ付スル山形鋼ノ固著	7
三〇	甲板	船樓端ノ附近ニ於ケル舷緣山形鋼ノ固著	4
三一	甲板	舷緣山形鋼ノ固著(前欄ノ固著ヲ除ク)	4½
三二	甲板	肋骨一本置ニ付シタル梁ト鋼甲板及梁上側板トノ固著	6
三三	甲板	肋骨毎ニ付シタル梁ト鋼甲板及梁上側板トノ固著	7
三四	甲板	暴露セサル甲板及防撓梁ノ梁上側板ニ付スル縱通山形鋼ノ固著	
三五	甲板下縱材及梁下縱材及特設梁柱	甲板下縱材ト鋼甲板トノ固著	5
三六	甲板下縱材及梁下縱材及特設梁柱	特設梁柱、梁下縱材及甲板下縱材ヲ構成スル鋼材相互ノ固著	7
三七	甲板下縱材及梁下縱材及特設梁柱	暴露甲板又ハ水槽頂板ニ於ケル船口ノ縁材ト甲板又ハ頂板トノ固著	

三八	船	暴露セサル船口ノ四隅附近ニ於ケル縁材ト鋼甲板トノ固著	4½
三九	船	暴露セサル船口ト縁材ト鋼甲板トノ固著(前欄ノ固著ヲ除ク)	5
四〇	船	船口梁ノ上下ニ付スル山形鋼ノ固著	7
四一	船	船口縁材ニ付スル横防撓材ノ固著	
四二	水密隔壁	肘板ヲ附セサル防撓材ノ上下兩端部其ノ長サノ一五%ノ間ニ於ケル固著	4
四三	水密隔壁	水槽ヲ構成スル隔壁又ハ軸路ノ防撓材ノ固著	6
四四	水密隔壁	前二欄以外ノ箇所ニ於ケル防撓材ノ固著	7
四五	水密隔壁	水密隔壁板ヲ外板ニ固著スル山形鋼ト隔壁板トノ固著	4½
四六	水密隔壁	水密隔壁板ト二重底ノ内底板及縁板トノ固著	
四七	水密隔壁	水密隔壁板ヲ外板ニ固著スル山形鋼ト外板トノ固著	5
四八	水密隔壁	水密隔壁板ト甲板及軸路トノ固著	
四九	水密隔壁	軸路板ハ二重底内底板トノ板著	
五〇	主機關臺	構成山形鋼ノ固著	5

備考
汽機、發動機及推力受ノ下方ニ於ケル二重底構造又ハ單底構造ノ諸材ノ固著鉄ノ心距ハ本表ニ定ムルモノヨリ適當ニ減少スヘシ

梁上側板及船側縱通材等ノ切込板又ハ斷切板ヲ肋骨間ニ於テ外板ニ固著スル山形鋼ノ各邊ニハ肋骨心距六六〇耗以下ナルトキハ四箇、六六〇耗ヲ超エ七六〇耗以下ナルトキハ五箇、七六〇耗ヲ超エ八四〇耗以下ナルトキハ六箇、八四〇耗ヲ超エ九一五耗以下ナルトキハ七箇ノ鉄ヲ用フヘシ

正肋材ト副肋材トヲ固著スル鉄ノ心距ト鉄徑トノ比ハ當該箇所ニ於ケル肋骨ト外板トノ固著ニ關スル規定ヲ準用シテ定ムヘシ但シ溝形鋼ニ副肋材ヲ附シタル肋骨等ニ於テ固著鉄列カ肋骨ノ深サノ端ニ近キトキハ鉄ノ心距ヲ其ノ徑ノ七倍ト爲スコトヲ得

第四百六十八條 二重底ノ外側肘板、緣板及内底板ト扣山形鋼、扣板又ハ帶板トヲ固著スル鉄ノ心距ハ其ノ徑ノ五倍以下ト爲スヘシ

第四百六十九條 船首材、船尾骨材、方形龍骨又ハ螺旋軸支肘ト外板トヲ固著スル鉄及船尾骨材ト船尾肋板トヲ固著スル鉄ノ心距ハ其ノ徑ノ五倍以下ト爲スヘシ

第四節 雜 則

第四百七十條 固著用山形鋼ノ各邊ノ幅ハ特ニ規定アル場合ノ外其ノ厚サニ應シ左表ニ依リ定ムヘシ

コトヲ得但シ銜接ニ用フル單覆板ノ厚サ又ハ二重覆板ノ厚サノ和ヲ增厚セル鋼板ノ厚サ未滿ト爲スコトヲ得ス

第四百七十三條 肋骨ノ箇所ニ於ケル外板ノ縱緣ヲ固著スル鉄ト肋骨ヲ外板ニ固著スル鉄トノ兼用ニ付テハ左ノ規定ニ依ル

- 一 外板ノ縱緣カ一列銜接合ナルトキハ鉄一箇ヲ兼用スヘシ
- 二 外板ノ縱緣カ二列銜接合ナル場合ニ於テハ外板及肋骨ヲ「ジヨツグル」セサルトキハ鉄一箇ヲ兼用シ外板又ハ肋骨ヲ「ジヨツグル」スルトキハ鉄二箇ヲ兼用スヘシ
- 三 外板ノ縱緣カ三列銜接合ナルトキハ外板ノ緣ニ近キ鉄二箇ヲ兼用スヘシ

第四百七十四條 外板、暴露甲板、二重底内底板並ニ深水槽ノ隔壁板及頂板ニ於ケル鉄孔ハ填隙ヲ施スヘキ側ニ於テ板ノ厚サ一三耗以下ナルトキハ板ノ全厚ニ互リ約六〇度ノ頂角ヲ以テ、厚サ一三耗ヲ超ユルトキハ板ノ厚サノ九〇%ニ互リ約四五度ノ頂角ヲ以テ皿取スヘシ

第四百七十五條 單剪斷ヲ受クル鉄ニ依ル固著ノ代リニ兩剪斷ヲ受クル鉄ニ依ル固著ヲ用フルトキハ鉄ノ效力ハ單

山形鋼各邊ノ幅(耗)			山形鋼ノ厚サ(耗)
一列固著鉄	二列固著鉄 千鳥形著	二列固著鉄	
50	75	100	上以 4.5— 下以 5.5
65	100	115	6 — 8.5
75	115	130	9 — 12.5
90	130	150	13 — 18
90	150	180	18.5—23.5
100	180	200	24 — 28.5
115	200	230	29 — 32

油密一列鉄固著ノ山形鋼ノ邊ノ幅ハ必要ニ應シ前項ニ依ルモノヨリ適當ニ増加スヘシ

第四百七十一條 遮浪甲板船ノ遮浪甲板及其ノ他ノ船舶ノ上甲板ニ設クル暴露セル機關室口圍壁ノ板及防撓材ハ水密隔壁ニ準シ固著スヘシ

第四百七十二條 肋骨心距ヲ增大シタル爲又ハ腐蝕若ハ磨耗ニ備フル爲增厚セル鋼板ノ固著ニ用フル鉄ノ徑、鉄列及銜接覆板ノ厚サハ增厚セサル鋼板ノ厚サニ依リ定ムル

剪斷ヲ受クル鉄ノ效力ノ一・七五倍ニ相當スルモノト看做シ鉄ノ心距及鉄列ヲ變更スルコトヲ得但シ水密又ハ油密ヲ要スル箇所ノ鉄心距ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第五節 深油槽ニ關スル特別規

第四百七十六條 深油槽ヲ構成スル隔壁板、甲板、軸路板及底板ノ縱橫緣ニシテ滿載狀態ニテ油ノ達スル最高面ヨリ下方四・八米ヲ超ユル箇所ニ在ルモノハ少クトモ二列銜接合ト爲スヘシ但シ油槽ト油槽トヲ仕切ル中間隔壁板ノ縱橫緣ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

深油槽ヲ構成スル隔壁板、甲板、軸路板及底板ノ縱橫緣接合ノ固著鉄ノ心距ハ板ノ厚サ一二・五耗以下ナルトキハ鉄徑ノ三倍半以下、一二・五耗ヲ超ユルトキハ鉄徑ノ四倍以下ト爲スヘシ

第四百七十七條 深油槽ノ隔壁板、頂板及底板ノ周圍山形鋼ノ固著鉄ノ心距ハ其ノ徑ノ五倍以下ト爲スヘシ

第四百七十八條 深油槽ヲ構成スル隔壁ノ防撓橫桁ト隔壁板トノ固著ハ橫桁ノ兩端ヨリ其ノ深サノ二倍ニ相當スル箇所迄ノ間ニ於テハ二列鉄固著、其ノ他ノ箇所ニ於テハ一列鉄固著ト爲シ鉄ノ心距ハ其ノ徑ノ四倍以下ト爲スヘシ

防撓横桁ト外板トノ固著ハ二列鋸固著ト爲シ鋸ノ心距ハ其ノ徑ノ四倍以下ト爲スヘシ

第四百七十九條 深油槽内ノ肋骨ト外板トヲ固著スル鋸ノ心距ハ其ノ徑ノ五倍半以下ト爲スヘシ

深油槽ヲ構成スル隔壁及軸路ノ防撓材ノ固著鋸ノ心距ハ其ノ徑ノ六倍以下ト爲スヘシ

第二十五章 電弧熔接

第一節 總則

第四百八十條 本章ノ規定ハ壓延鋼材相互ノ電弧熔接ニ之ヲ適用ス

鑄鋼材、鍛鋼材其ノ他壓延鋼材ニ非サル材料ヲ相互ニ熔接シ又ハ之ト壓延鋼材トヲ熔接セントスルトキハ管海官廳ノ承認ヲ受ケヘシ

鋸接合ニ付規定ナキ接合ヲ電弧熔接ニ依リ行ハントスルトキハ本章ノ規定ノ適用ニ付適當ニ斟酌スルコトヲ得

第四百八十一條 電弧熔接ノ施工ノ箇所、様式等ニ付テハ豫メ圖面及明細書ヲ添へ管海官廳ノ承認ヲ受ケヘシ

第四百八十二條 電極棒ハ其ノ化學成分及材質並ニ之ヲ用ヒ熔接シタル試験片カ第二節ノ規格ニ適合シ豫メ管海官廳ノ承認ヲ受ケタル型ノモノナルコトヲ要ス

第四百八十三條 熔接工ハ當該熔接工事ニ熟練シタル者ニシテ豫メ第三節ノ試験ニ合格シ管海官廳ノ承認ヲ受ケタル者ナルコトヲ要ス

管海官廳ハ熔接ノ施工方法又ハ結果ヲ適當ナラズト認スルトキハ當該熔接工ヲシテ現場ニ於ケルト同一條件ノ下ニ試験片ヲ熔接セシメ第三節ノ規定ニ準シ試験ヲ行ヒ必要アリト認ムルトキハ前項ノ承認ヲ取消スコトヲ得

第二節 電極棒

第四百八十四條 電極棒(被覆電極棒ニ在リテハ其ノ鋼心)ノ化學成分ハ成ルヘク炭素含有量〇・〇六乃至〇・一八%、珪素含有量〇・〇五%以下、滿掩含有量〇・三乃至〇・六%、磷及硫黃ノ含有量各々〇・〇四%以下、窒素含有量〇・〇一%以下ナルコトヲ要ス

電極棒ノ被覆ハ均一ニ塗布セラレ「十分ニ乾燥セラレ」龜裂巢孔等ヲ有セス且部分的ニモ剝落シ居ラサルコトヲ要ス

第四百八十五條 熔著金屬ハ之ノミヲ以テ製作シタル第四號試験片(第二十二條參照)ニ付抗張試験ヲ行ヒ各試験片ノ成績ガ抗張力每平方耗三九瓦以上、標點間伸長百分率二〇以上ノモノナルコトヲ要ス

熔著金屬ハ徑一四耗ノ試験片二箇ヲ二五耗ノ内側半徑ヲ以テ一二〇度以上屈曲スルモ裂疵ヲ生セサルモノナルコトヲ要ス

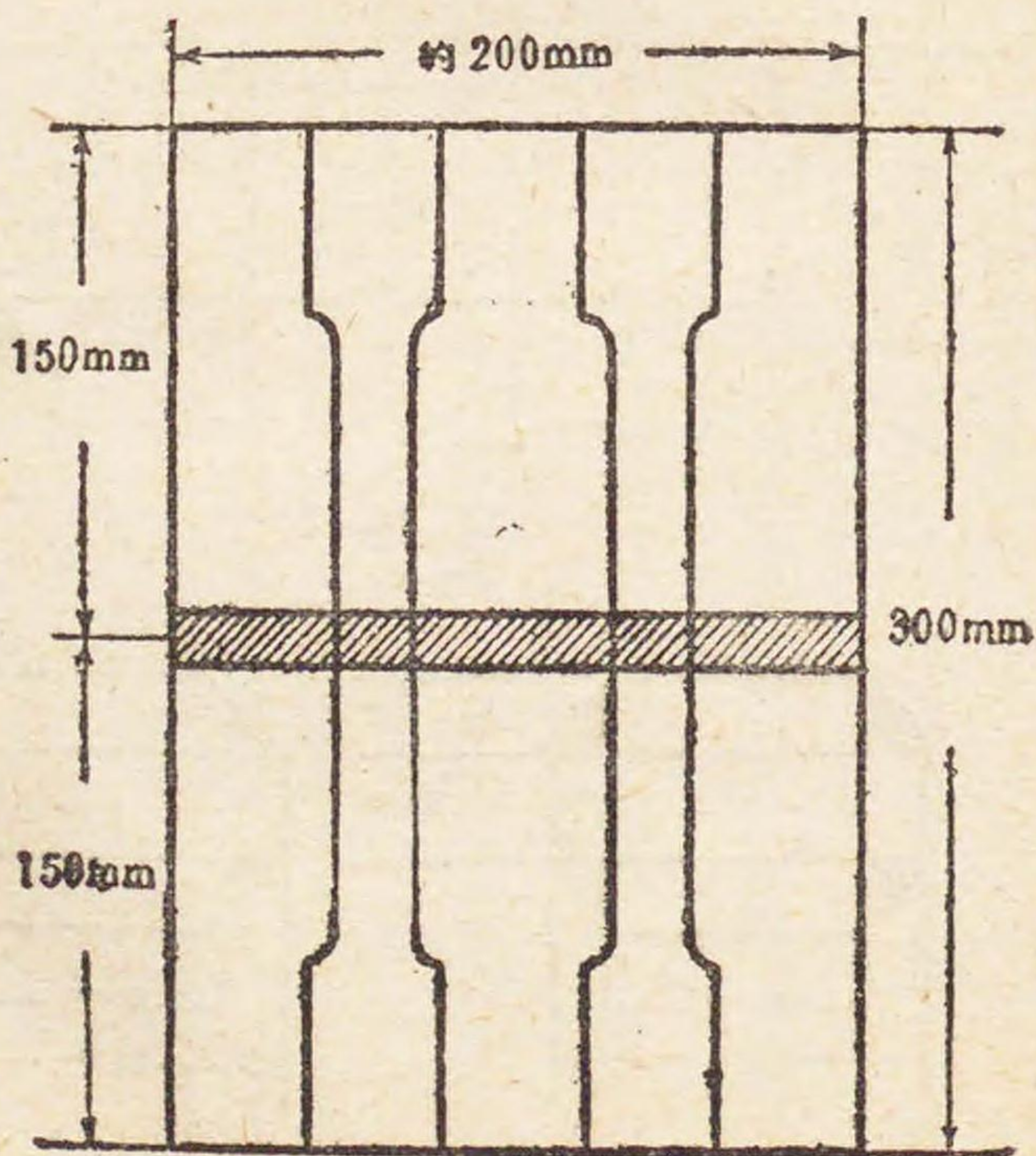
前各項ノ試験ニ於テ試験片中一箇ハ試験ニ合格シ他一箇ハ之ニ合格セサルトキハ更ニ試験片二箇ヲ製作シテ再試験ヲ行ヒ二箇トモ試験ニ合格シタルトキハ之ヲ合格ト爲スコトヲ得

第四百八十六條

衝合熔接試験ノ試験片ハ第二章ノ規格ニ適合スル厚サ六耗、一三耗及一九耗ノ各鋼板ヨリ左ノ各號ニ依リ製作スルモノトス

一 一箇ノ母材ヨリ第一號試験片(第二十二條參照)二箇ヲ作ルコト

二 前號ノ試験片ヲ採取シタル母材ノ該試験片ニ成ルヘク近接シタル箇所ヨリ鋼板ヲ採取シ之ヲ第四節ノ規定ニ從ヒ衝合熔接ト爲シ熔接線ニ直角ノ方向ヨリ該線ヲ中央部ニ置キテ前號ノ試験片ト同一寸法ノ試験片(以下衝合熔接試験片ト稱ス)二箇ヲ作ルコト但シ補強盛ハ平削スルモノトス(附圖參照)



二箇ノ衝合熔接試験片ノ平均抗張力ハ第一號ノ試験片ノ平均抗張力ノ九〇%以上ナルコトヲ要ス

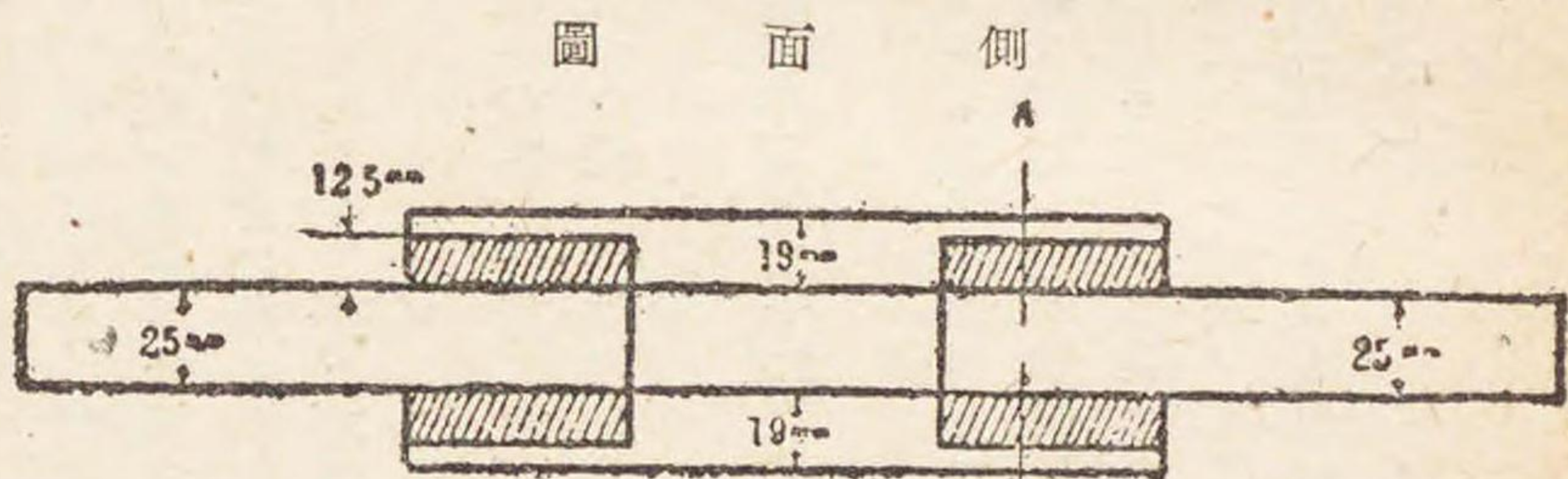
第四百八十七條 側面隅肉熔接試験片ハ第二章ノ規格ニ適合スル鋼板ヨリ左ノ各號ニ依リ製作スルモノトス

一 試験片ノ形狀、寸法及熔接箇所ハ左圖ニ依ルコト但

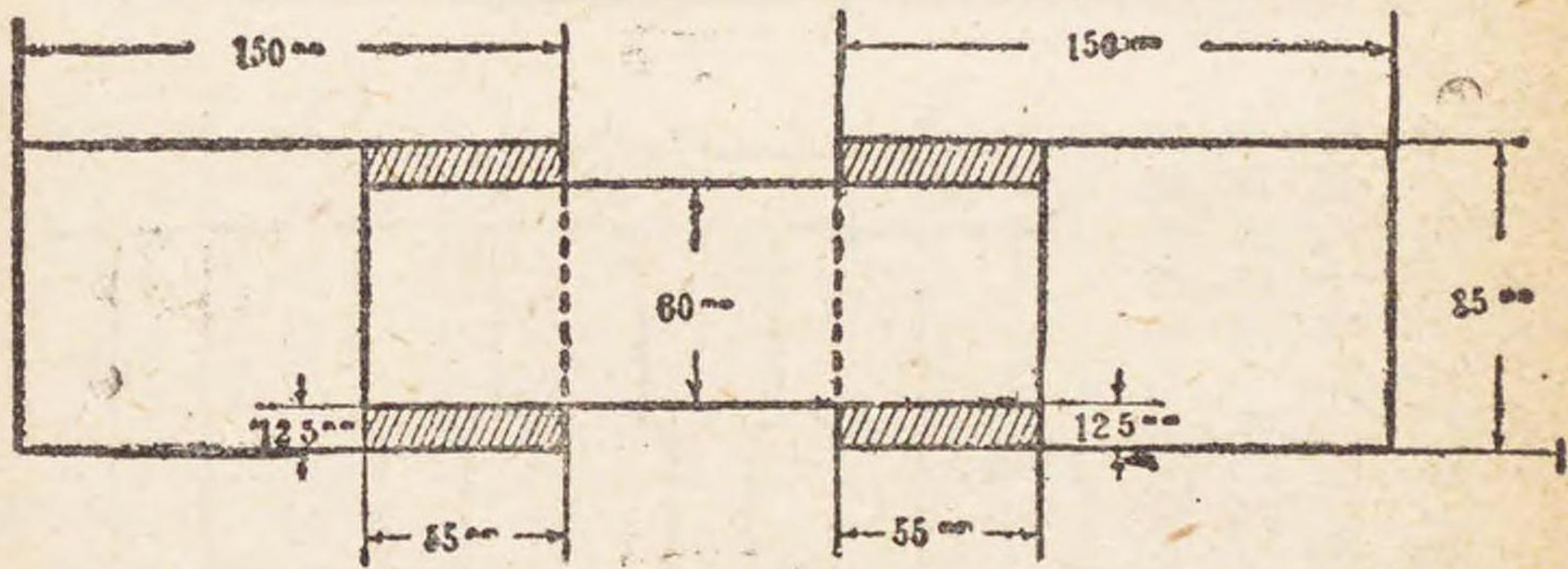
シ隅肉ノ斜面ハ平削スルモノトス

- 二 下向熔接ニ依ル試験片二箇ヲ作ルコト但シ堅又ハ上向専用ノ電極棒ノ試験ヲ受ケントスルトキハ堅熔接又ハ上向熔接ニ依リ試験片ヲ作ルコト
- 三 熔接ハ第四節ノ規定ニ從ヒ行フコト

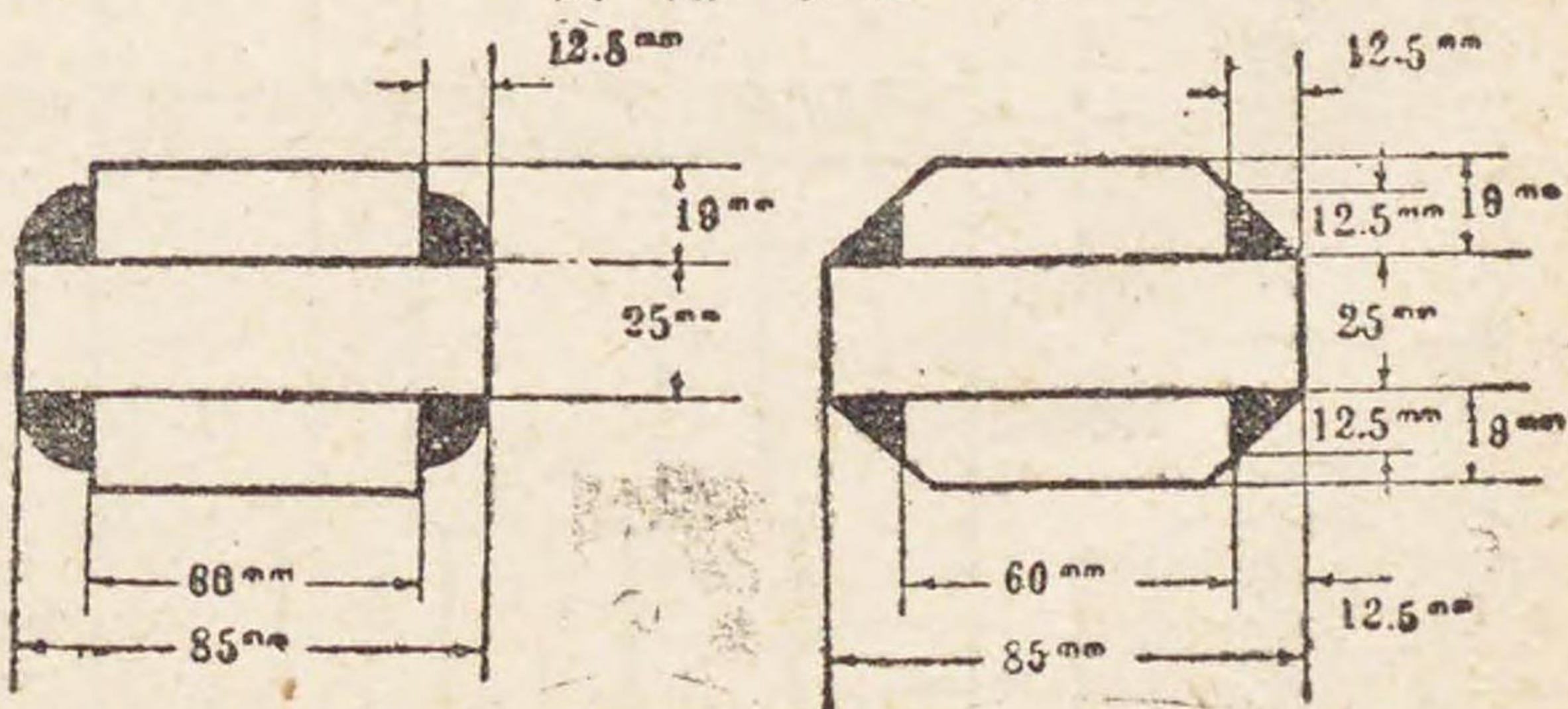
側面隅肉熔接試験片ハ各々四九〇ノ抗張荷重ニ堪ユルコトヲ要ス
 前項ノ試験ニ於テ試験片中一箇ハ試體ニ合格シ他ノ一箇ハ之ニ合格セサルトキハ更ニ試験片二箇ヲ製作シテ再試験ヲ行ヒ二箇トモ試験ニ合格シタルトキハ之ヲ合格ト爲スコ



圖面平



圖斷切B・A



トヲ得

第三節 熔接工ノ技術試験

第四百八十八條

熔接工ノ技術試験ニ用フル試験片ハ左ノ各號ニ依リ製作スルモノトス

- 一 第二章ノ規格ニ適合スル厚サ一〇糎以上一三糎以下ノ鋼板ヨリ第四百八十六條第一項第二號ノ規定ヲ準用シテ第一號試験片(第二十二條參照)及幅三五糎以上ノ屈曲試験片(第二十三條參照)各一箇ヲ作ルコト
- 二 試験片ハ第二節ノ規格ニ適合スル電極棒ヲ用ヒ第四節ノ規定ニ從ヒ熔接スルコト
- 三 堅熔接又ハ上向熔接ノ試験ヲ受ケントスル熔接工ニ對シテハ試験片ノ熔接ハ堅熔接又ハ上向熔接ニテ行フコト

第四百八十九條

前條ノ各試験片ニ付夫々抗張試験又ハ屈曲試験ヲ行ヒ其ノ成績カ左ノ各號ニ適合スルトキハ之ヲ合格トス

- 一 抗張試験 抗張力毎平方糎三七冠以上スルコト
- 二 屈曲試験 常溫ノ儘厚サノ二倍半以下ノ内側半徑ヲ以テ九〇度屈曲スルモ裂疵ヲ生セサルコト

第四百九十條

熔接工ノ技術試験ノ效力ハ一年以内トス

第四節 熔接施工方法

第四百九十一條

電極棒及使用電流ノ種類ハ各熔接工ニ付第三節ニ定ムル試験片製作ニ使用シタルモノト同種ノモノナルコトヲ要シ使用電流ノ量及電壓ハ該試験片製作ノ際使用シタルモノト成ルヘク同一ナルコトヲ要ス
 熔接現場ニハ何時ニテモ電流及電壓ヲ測定シ得ル設備ヲ爲スヘシ

第四百九十二條

母材ハ熔接前之ヲ定位置ニ置キ熔接工事中其ノ位置ヲ保持セシムル爲適當ノ方法ヲ講スヘシ
 母材ノ組合セ及熔接順序等ニ付適當ナル考慮ヲ爲シ熔接ニ因リ生スル反リ、歪ミ及内力ヲ最少ナラシムヘシ
 熔接ト銲接合トヲ併合スル部分ハ成ルヘク熔接後ニ銲接合ヲ爲スヘシ

第四百九十三條

熔接工事ハ成ルヘク蔽圍シタル場所ニ於テ行フヘシ
 寒氣嚴シキ場所ニ於ケル熔接工事ハ成ルヘク之ヲ避クルコトヲ要ス

第四百九十四條

熔接ハ母材ノ熔接面ヲ清掃シ成ルヘク鏽、黒皮、油、塗料、塵、瓦斯切斷ニ依ル燒滓等ヲ除去シタル後之ヲ行フヘシ

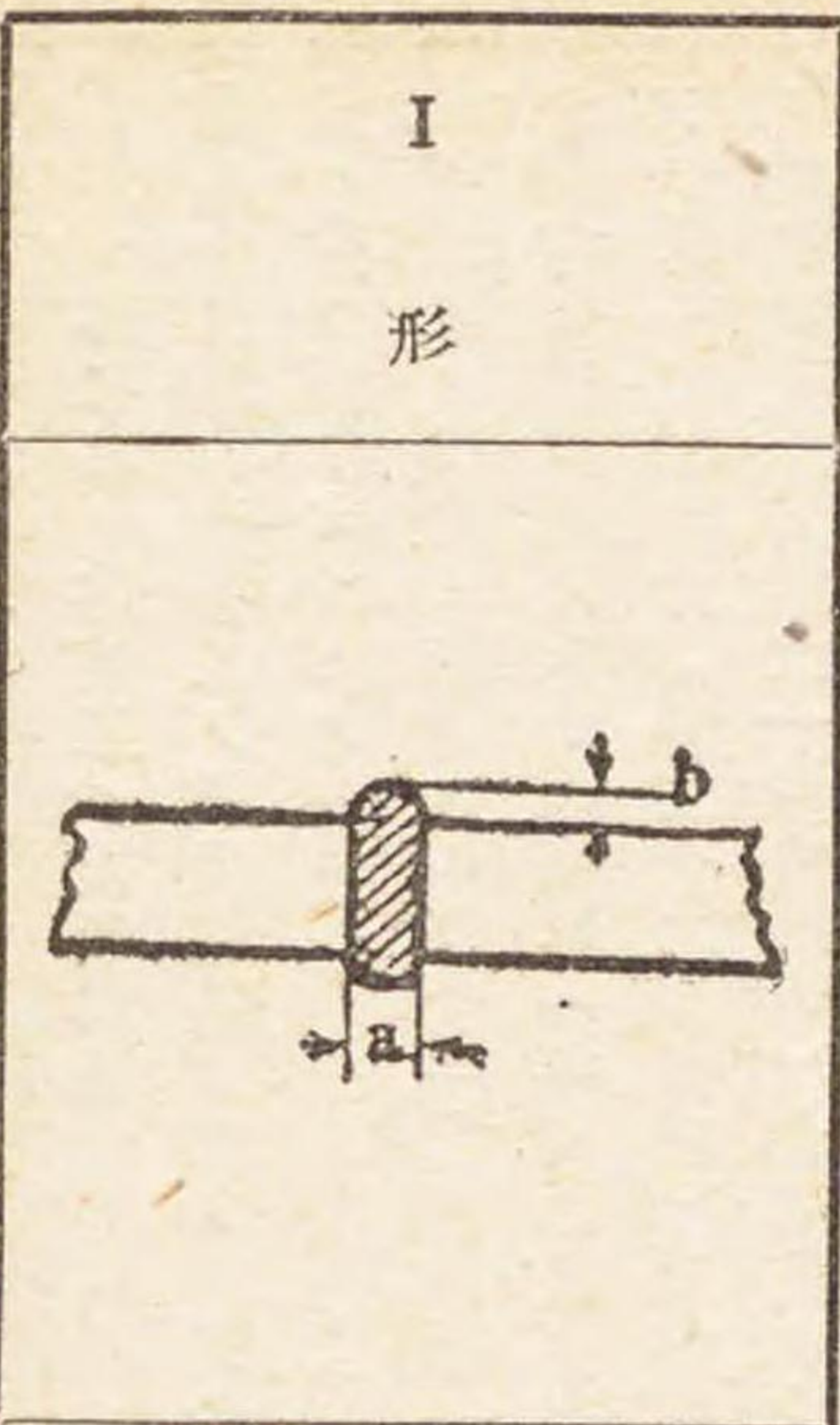
下層熔著金屬上ニ熔接ヲ反覆セントスルトキハ其ノ都度輕ク錘打ヲ爲シ且「ブラツシ」等ヲ以テ熔著金屬ノ表面ヲ清掃スヘシ

第四百九十五條 熔接工事ハ成ルヘク下向ニテ行フヘシ 隔壁、甲板等ノ周壁其ノ他船體ト別箇ニ組立テ得ル構造物ハ成ルヘク之ヲ船ニ取附クル前熔接スヘシ

第四百九十六條 異ナル厚サノ鋼板ノ衝合熔接ハ熔接部ニ於ケル鋼板ノ厚サガ同一ト爲ル迄厚キ方ノ鋼板ニ緩勾配ヲ附シタル後之ヲ行フヘシ

前項ノ規定ハ熔接ノ箇所又ハ板ノ厚サノ差ト母材ノ厚サトノ關係ヲ考慮シ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムルトキハ之ヲ適用セサルコトヲ得

第四百九十七條 鋼板ニ熔接スル肋骨、梁、防撓材等ニ形



板ノ厚サ四耗未満ノモノニ使用シaハ二耗以下bハ一耗トス

鋼ヲ用フルトキハ成ルヘク鋼板ニ平接スル邊ヲ有セサル様形鋼ヲ配置スヘシ但シ船尾水艙内、船首Lノ五分ノ一間及對氷構造部ニ於ケル肋骨ニ付テハ此ノ限ニ在ラス 前項但書ノ箇所ニ於テ外板ニ平接スル邊ヲ有セサル肋骨ヲ使用スルトキハ當該箇所ニ於ケル外板ノ厚サヲ増スカ其ノ他適當ノ補強ヲ爲スヘシ

第四百九十八條 平板龍骨ト中心線桁板又ハ中心線内龍骨トヲ隅肉熔接ト爲シ固著用山形鋼ヲ省略スルトキハ中心線桁板又ハ中心線内龍骨ノ截面積ヲ規定ノモノヨリ該山形鋼ノ截面積ノ七〇%以上増加シタルモノト爲スヘシ

第四百九十九條 衝合熔接ノ様式ハ成ルヘク左表ニ依ルヘシ但シ補強盛ノ程度ハ熔接箇所ニ應シ管海官廳ノ見込ニ依リ適當ニ斟酌スルコトヲ得

X形				V形			
θ	b (耗)	a (耗)	板ノ厚サ (耗)	θ	b (耗)	a (耗)	板ノ厚サ (耗)
60°	2	3	16以上	60°	1	1	4
				"	1.5	2	6
				"	2	"	8
				"	"	2.5	10
				"	2.5	"	11
				"	"	3	13
				"	3	"	14以上 25以下

第五百條 隅肉熔接ノ脚及喉厚ハ夫々薄キ方ノ母材ノ厚サ及其ノ七〇%ヲ標準トス

第五百一條 水密又ハ油密ヲ要スル箇所ノ接合ヲ隅肉熔接ト爲ス場合ニ於テハ片側ハ前條ノ規定ニ依ル連續熔接ト

鋼船構造規程

爲シ他側ノ熔接ハ少クトモ輕連續熔接又ハ斷續熔接ト爲スヘシ

第五百二條 鋼板ト形鋼等トノ熔接ハ水密ヲ要スル場合其ノ他特ニ連續熔接ト爲スヲ要スル場合ノ外成ルヘク斷續

五二五

隅肉熔接ト爲シ且形鋼等ノ兩側ニ施行スヘシ
千鳥熔接ヲ以テ形鋼等ヲ鋼板ニ熔接スル場合ト雖モ其ノ
兩端ニ於テハ並列熔接ト爲スヘシ

第五百三條 斷續隅肉熔接ノ各熔著金屬ノ長サハ七五耗ヲ
標準トス但シ熔著金屬ノ長サニハ其ノ兩端ニ於ケル壺ノ
長サヲ算入セス

熔接セラルル形鋼等ノ各側ニ於ケル斷續隅肉熔接ノ熔著
金屬ノ心距ハ左表ニ依ルヘシ

斷續隅肉熔接ノ種類	薄キ方ノ母材ノ厚サ(耗)	當該固著ノ著ト固著ト爲ス場ノ心距(鉦ノ倍數ニテ)	當該固著ト固著ト爲ス場ノ心距(鉦ノ倍數ニテ)	當該固著ト固著ト爲ス場ノ心距(鉦ノ倍數ニテ)	當該固著ト固著ト爲ス場ノ心距(鉦ノ倍數ニテ)
熔接箇所カ一列鉦固著ト爲スヘキ場合ニ於ケル千鳥熔接	7以下	210	270	310	360
熔接箇所カ二列鉦固著ト爲スヘキ場合ニ於ケル並列熔接又ハ千鳥熔接	15	105	135	155	180
	20以上	135	165	200	225
	7以下	150	180	215	250
	15				
	20以上				

備考	7ヲ超ユルト	420	520	570	210	260	285
鉦心距及母材ノ厚サカ表ニ掲クルモノノ中間ニ在ルトキハ挿間法ニ依リ心距ヲ定ム							

熔著金屬ノ長サ及心距ハ前二項ノ規定ニ依ルモノヨリ母材ノ厚サカ特ニ大ナルトキハ適當ニ増加シ母材ノ厚サカ特ニ小ナルトキハ適當ニ減小スルコトヲ得

第五百四條 鋼板ニ形鋼等ヲ斷續熔接ニ依リ熔接スル場合ニ於テ熔接線力鉦ヲ以テ固著シタル鋼板ノ縱橫線ト交叉スルトキハ該縱橫線ノ箇所ヲ熔接スルコトヲ得ス
平行ナル連續熔接相互ノ間隔ハ成ルヘク二五〇耗以上ト爲スヘシ

第五百五條 累熔接ニ於ケル母材ノ累熔接ノ幅ハ薄キ方ノ母材ノ厚サノ三倍ヲ標準トス

第五百六條 當金接手ニ用フル覆板ノ厚サハ薄キ方ノ母材ノ厚サノ二分ノ一及四耗ノ中大ナルモノ以上ト爲スヘシ

第五百七條 栓熔接ノ孔ノ徑ハ孔ヲ穿ツ母材ノ厚サノ二・五倍及一〇耗ノ中大ナルモノ以上ト爲シ六〇度ノ頂角ヲ以テ皿取スヘシ

第五百八條 氣泡多キ箇所其ノ他不完全ナル熔接箇所ハ之ヲ除去シ再熔接ヲ行フコトヲ要ス

V形衝合熔接ニ於テハ融合部力鋼板ノ裏面ニ到達スル程度ニ熔込ヲ完全ナラシメ熔込不十分ナルトキハ裏面ヨリ熔接底部ヲ削取シ更ニ熔接ヲ施スヘシ

第五百九條 補強盛ハ特ニ必要アル場合ノ外之ヲ平削スルコトヲ得ス

熔接部ハ管海官廳ニ於テ検査ヲ終了シタル後ニ非サレハ之ニ塗裝ヲ施スコトヲ得ス

第二十六章 油槽船

第一節 總則

第五百十條 油槽船ニ付テハ本章ノ規定ニ依ルノ外前二十五章ノ規定ニ依ル

第五百十一條 本章中構造ニ關スル規定ハ船尾ニ機關ヲ有シ第二甲板、中心線隔壁及膨脹「トランク」ヲ備ヘ且縱肋骨式構造法ニ依ル油槽船ニ對シ定メタルモノトス
前項ニ該當セサル油槽船ノ構造及寸法ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第五百十二條 第二甲板ハ上甲板ノ下方二・五米ノ位置ニ油槽、防油區畫及「ポンプ」室ヲ通シ連續的ニ設クヘシ

鋼船構造規程

第五百十三條 膨脹「トランク」ハ上甲板ト第二甲板トノ間ニ設ケ其ノ側壁ハ油槽、防油區畫及「ポンプ」室ヲ通シ連續的ニ構造スヘシ幅カBノ六〇%ヲ超ユル膨脹「トランク」ノ構造及配置ニ付テハ管海官廳ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス

第五百十四條 主油槽ノ長サハ九・二五米以下ト爲シ夏期油槽ノ長サハ一八・五米以下ト爲スヘシ
前項ノ長サヲ超ユル油槽ノ構造及配置ニ付テハ管海官廳ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス

燃料油ヲ積載スル夏期油槽ニハ九・二五米ヲ超エサル間隔ニ制油隔壁ヲ設クヘシ

第五百十五條 貨物油ヲ積載スル場所ノ前後兩端ニハ船底ヨリ膨脹「トランク」ノ頂部ニ達スル長サ九一〇耗以上ノ防油區畫ヲ設クヘシ
前項ノ防油區畫ハ「ポンプ」室ニ兼用スルコトヲ得
貨物油ヲ積載スル場所ト燃料油ヲ積載スル場所トノ間ニ設クヘキ防油區畫ハ管海官廳ノ承認ヲ受ケタルトキハ之ヲ省略スルコトヲ得

第五百十六條 中心線隔壁ハ油槽、「ポンプ」室及防油區畫ヲ縱通シ船底ヨリ膨脹「トランク」ノ頂部ニ達セシム

中心線隔壁ハ油槽内ニ於テハ油密構造ト爲スヘシ但シ管
海官廳ノ承認ヲ受ケタルトキハ水密構造ト爲スコトヲ得
第五百十七條 油槽船ニハ船舶滿載吃水線規程ニ定ムル船
樓ノ標準ノ高さ以上ノ高さヲ有シLノ七%以上ノ長サヲ
有スル船首樓ヲ設クヘシ

第五百十八條 船尾樓ト船橋樓トノ間ニハ甲板下ノ通路ヲ
利用シ得ル場合又ハ之ト同等ノ效力ヲ有スル通路設備ヲ
備フル場合ヲ除クノ外船樓甲板ト同一ノ高さヲ有シ七六
〇耗以上ノ幅ヲ有スル堅牢ナル常設歩路ヲ備フルコトヲ
要ス船員室ヲ船首ニ設ケタル場合ニ在リテハ船橋樓ト船
首樓トノ間ニ付亦同シ

第五百十九條 油密工事ハ叮嚀ニ施工シ油密ヲ要スル箇所
ノ各隅ニ於テハ「シューピース」ヲ用ヒ油密ヲ保ツ構造
ト爲スヘシ外板ノ縦線及油密横置隔壁ノ周圍山形鋼ハ成
ルヘク「ジヨツグル」ヲ避クヘシ

第五百二十條 油ヲ積載スル場所ノ肋骨、縦通材等ニハ成
ルヘク單材ヲ用ヒ組合材ノ使用ヲ避クヘシ
二 重山形鋼ノ代リニ丁形鋼ヲ用フルトキハ其ノ「ウエ
ブル」ニ於ケル鋸力單剪斷ヲ受クルコトヲ考慮シ鋸數ヲ適

當ニ定ムヘシ
専ラ油ヲ積載スル場所ノ「セメント」塗裝ハ之ヲ省略ス
ルコトヲ得

第五百二十一條 横肋骨、横置梁又ハ隔壁ノ防撻堅桁ニ之
ニ交叉スル強力材ヲ通ス爲切込ヲ穿ツトキハ其ノ隅ニ十
分ナル丸味ヲ附スルコトヲ要シ荒打貫ノ儘ト爲スコトヲ
得ス

第五百二十二條 舵頭材ノ徑及舵腕ノ寸法ハ第四百十三條
及第四百十六條ノ規定ニ依ルモノノ一・一倍ト爲スヘシ
舵ノ他ノ部分、操舵裝置及船尾骨材ニ於ケル舵ノ壺金ノ
各部ノ寸法ハ前項ニ依リ増加シタル舵頭材ノ徑ニ應シ之
ヲ定ムヘシ

第二節 船底横肋骨

第五百二十三條 船底横肋骨ハ肋骨板ノ上縁ニ面材ヲ取附
ケタル構造ト爲スヘシ

肋骨板ノ深サハ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以
上ト爲スヘシ

一 Bカ一四米未満ナルトキ

$$11.1S(B-4) - 4.3B + 27D + 410 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

二 Bカ一四米以上ナルトキ

$$11.1S(B-4) + 20.9B + 50D + 110 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

Sハ横肋骨ノ心距(米ニテ)

肋骨板ノ厚サハ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以
上ト爲スヘシ但シ二・五耗ヲ超ユルトキハ二・五耗
トシ九耗未満ナルトキハ九耗トス

一 肋骨板ノ深サカ九〇〇耗未満ナルトキ

$$0.008d_0 + 3.5 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

二 肋骨板ノ深サカ九〇〇耗以上ナルトキ

$$0.0036d_0 + 7.5 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

d₀ハ肋骨板ノ深サ(耗ニテ)

面材ハ形鋼ヲ用ヒタルトキ其ノ截面積ヲ左ノ各號ノ算式
ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

一 Bカ一四米未満ナルトキ

$$1.35(B-5.5)(S+1) \quad (\text{平方釐} = \text{チ})$$

二 Bカ一四米以上ナルトキ

$$0.319(B+22)(S+1) \quad (\text{平方釐} = \text{チ})$$

Sハ横肋骨ノ心距(米ニテ)

肋骨板ノ上縁ニハ船底ノ傾斜ニ等シキ傾斜ヲ附スヘシ
面材ハ船側横肋骨ノ内端ヨリ中心線隔霜ノ堅桁ノ内端迄
又堅桁ナキトキハ成ルヘク隔壁板ノ近ク迄達セシムヘシ

鋼船構造規程

當ニ定ムヘシ

専ラ油ヲ積載スル場所ノ「セメント」塗裝ハ之ヲ省略ス
ルコトヲ得

第五百二十一條 横肋骨、横置梁又ハ隔壁ノ防撻堅桁ニ之
ニ交叉スル強力材ヲ通ス爲切込ヲ穿ツトキハ其ノ隅ニ十
分ナル丸味ヲ附スルコトヲ要シ荒打貫ノ儘ト爲スコトヲ
得ス

第五百二十二條 舵頭材ノ徑及舵腕ノ寸法ハ第四百十三條
及第四百十六條ノ規定ニ依ルモノノ一・一倍ト爲スヘシ
舵ノ他ノ部分、操舵裝置及船尾骨材ニ於ケル舵ノ壺金ノ
各部ノ寸法ハ前項ニ依リ増加シタル舵頭材ノ徑ニ應シ之
ヲ定ムヘシ

第二節 船底横肋骨

第五百二十三條 船底横肋骨ハ肋骨板ノ上縁ニ面材ヲ取附
ケタル構造ト爲スヘシ

肋骨板ノ深サハ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以
上ト爲スヘシ

一 Bカ一四米未満ナルトキ

$$11.1S(B-4) - 4.3B + 27D + 410 \quad (\text{耗} = \text{チ})$$

二 Bカ一四米以上ナルトキ

第五百二十四條 船底横肋骨ニ設クル輕目穴ハ其ノ徑ヲ二
五〇耗以下ト爲シ縦肋骨ニ對スル切込ノ間ニ於テ其ノ中
央附近ニ設クヘシ

第五百二十五條 船底横肋骨ノ肋骨板ハ船側横肋骨及中心
線隔壁ニ肘板ヲ以テ固著スヘシ
前項ノ肘板ハ其ノ遊縁ヲ一三〇耗曲線シ其ノ厚サヲ肋骨
板ノ厚サト等シク爲シ外板又ハ隔壁板ヨリ測リタル幅及
肋骨板ノ上縁ヨリ測リタル深サヲ夫々左ノ算式ニ依リ算
定シタルモノ以上ト爲スヘシ

幅 205B - 960 (耗 = チ)

深サ 210d₁ (耗 = チ)

d₁ハ龍骨ノ上面ヨリ第二甲板梁ノ船側ニ於ケル上面ニ
至ル深サ(米ニテ)

肘板ノ遊縁ノ長サ一・七米ヲ超ユルトキハ厚サハ肘板ノ
厚サニ等シク各邊ノ幅ハ左表ニ掲クルモノニ等シキ山形
鋼ヲ以テ該肘板ヲ防撻スヘシ

肋骨ノ厚サ(耗)	山形鋼ノ邊ノ幅(耗)
12.5 以下	90×75

12.5 ヲ超ユルモノ	90×90

肘板ト中心線隔壁板トハ左ノ各號ノ規定ニ依リ肘板ト同一ノ厚サヲ有スル山形鋼ヲ以テ固著スヘシ

一 L一四五米ヲ超ユル場合又ハL一二八米ヲ超エ且Lト横肋骨ノ心距(米ニテ)トノ積カ四〇〇ヲ超ユル場合ニ於テハ二重山形鋼ヲ附シ二列銲固著ト爲スヘシ

二 前號ニ該當スル場合ノ外L一二八米ヲ超ユルトキハ二重山形鋼ヲ附シ片側ノモノハ二列銲固著、他側ノモノハ一列銲固著ト爲スヘシ此ノ場合山形鋼ノ邊ノ幅ヲ適當ニ定メ一列銲固著ト爲ス山形鋼ノ邊ノ幅ヲ適當ニ定メ一列銲固著ト爲ス山形鋼ノ邊ノ幅ヲ適當ニ定メ一列銲固著ト爲ス山形鋼ノ邊ノ幅ヲ適當ニ定ムヘシ

三 其ノ他ノ場合ニ於テハ單山形鋼ヲ以テ二列銲固著ト爲スヘシ

肘板ト船側横肋骨ノ肋骨板又ハ隔壁ノ堅桁板トハ累接二列銲固著ト爲スヘシ

肘板ヲ外板又ハ中心線隔壁板迄延長シ横肋骨板又ハ堅桁板ニ兼用スルトキハ之ト横肋骨板又ハ堅桁板トハ接手カ

横肋骨板ノ深サ (耗)	防撓山形鋼 (耗)
以下750	125×75×9
900	150×75×9.5
1000	150×90×10.5
以上1100	150×90×11

防撓山形鋼ト縦肋骨トヲ固著スル銲ノ數及徑ハ左表ニ依リ定ムヘシ

鋼球山形	縦肋骨ノ種類及深サ (耗)		防撓山形鋼ノ縦肋骨ニ接スル邊ノ幅	
	銲數	銲徑 (耗)	銲數	銲徑 (耗)
以下180	7	9	1	5
180	5	7	2	5
200	4	6	3	5
220	3	5	4	5
250	2	4	5	5
280	2	3	6	5
300	2	3	6	5

鋼船構造規程

縦肋骨又ハ隔壁ノ水平防撓材ノ中間ニ來ルトキハ累接三列銲固著ト爲シ接手カ縦肋骨又ハ隔壁ノ水平防撓材ノ位置ニ來ルトキハ四列銲固著ト爲スヘシ

横肋骨板ノ累接ハ成ルヘク縦肋骨ノ位置ヨリ遠ザクルコトヲ要ス

第五百二十六條 船底横肋骨ト外板トハ肋骨板ト同一ノ厚サヲ有スル單山形鋼ヲ以テ二列銲固著ト爲スヘシ但シL一四五米ヲ超ユル場合又ハLト横肋骨ノ心距(米ニテ)トノ積カ四〇〇ヲ超ユル場合ニ於テハ背面山形鋼ヲ増設シテ之ヲ一列銲固著ト爲スヘシ此ノ場合背面山形鋼ノ邊ノ爲ニ列銲固著ト爲ス山形鋼ノ銲固著ヲ妨ケサル様山形鋼ノ邊ノ幅ヲ適當ニ定ムヘシ

第五百二十七條 船底横肋骨ト船底縦肋骨トハ山形鋼ヲ以テ固著シ之ヲ交互ニ横肋骨ノ面材ノ下縁迄及横肋骨ノ深サノ二分ノ一迄延長シ肋骨板ヲ防撓スヘシ但シ該山形鋼ヲ輕目穴ノ上端ヨリ低キ箇所ニ止ムルコトヲ得ス

前項ノ防撓山形鋼ノ寸法ハ左表ニ依リ之ヲ定ムヘシ

骨組立肋	溝形鋼				
	五〇〇	五〇〇	四七〇	四四〇	四〇〇
5	4	4	3	3	
22	22	22	22	22	
10	9	8	8	6	
22	22	22	22	22	

第五百二十八條 B一二・二米以下ナル場合ニ於テハ船ノ中心線ヨリBノ約四分ノ一ニ相當スル箇所ノ附近ニ於ケル船底縦肋骨ノ箇所ニ於テ船底横肋骨ノ片側ニ肘板ヲ設ケ之ヲ支持スヘシ

B一二・二米ヲ超ユル場合ニ於テハ船底横肋骨ヲ船側横肋骨及中心線隔壁ニ固著スル各肘板ノ端ノ附近ニ於ケル船底縦肋骨ノ箇所ニ於テ船底横肋骨ノ片側ニ肘板ヲ設ケ

之ヲ支持スヘシ

第五百二十九條 船底横肋骨ノ面材ノ水平邊ノ幅カ一八〇
耗ヲ超ユル場合ニ於テハ各舷ニ於テ少クトモ二箇ノ横肋
骨防撓山形鋼ト面材ノ水平邊トヲ短山形鋼ヲ以テ固著ス
ヘシ

第三節 船側横肋骨

第五百三十條 第二甲板下ノ船側横肋骨ハ船底横肋骨ニ接
續シテ設ケ肋骨板ノ内縁ニ面材ヲ取附ケタル構造ト爲ス
ヘシ
肋骨板ノ深サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲
スヘシ

$$1.35(S+5.4)(h+1) \quad (\text{耗}=\text{チ})$$

Sハ横肋骨ノ心距(米ニテ)

hハLノ中央ニ於テ船底横肋骨ノ中心線ニ於ケル上端

ヨリ第二甲板梁ノ船側ニ於ケル上面ニ至ル深サ(米
ニテ)

肋骨板ノ深サハ在ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲
スヘシ但シ一二・五耗ヲ超ユルトキハ一二・五耗トス

$$1.234 \sqrt{d_0} \quad (\text{耗}=\text{チ})$$

d₀ハ肋骨板ノ深サ(米ニテ)

第五百三十二條

第二甲板下ノ船側横肋骨ト外板トハ横肋
骨板ト同一ノ厚サヲ有スル單山形鋼ヲ以テ二列銕固著ト
爲スヘシ但シD九・二米ヲ超ユル且L一四五米ヲ超ユル場
合又ハD九・二米ヲ超ユル且Lト横肋骨ノ心距(米ニテ)ト
ノ積カ四〇〇ヲ超ユル場合ニ於テハ背面山形鋼ヲ増設シ
テ之ヲ一列銕固著ト爲スヘシ此ノ場合背面山形鋼ノ邊ノ
爲ニ二列銕固著ト爲ス山形鋼ノ銕固著ヲ妨ケサル様山形
鋼ノ邊ノ幅ヲ適當ニ定ムヘシ

第五百三十三條

第二甲板下ノ船側横肋骨ト縦肋骨トハ山
形鋼ヲ以テ固著シ之ヲ交互ニ横肋骨ノ面材ノ縁迄及其ノ
深サノ二分ノ一迄延長シ肋骨板ヲ防撓スヘシ但シ該山形
鋼ハ横肋骨ノ深サ五〇〇耗以下ナルトキハ總テ面材ノ縁
迄達セシムルコトヲ要シ又船側横肋骨ノ下端ノ肘板ノ範
圍ニ在ル縦肋骨ヲ固著スルモノニ在リテハ該肘板ノ遊縁
迄又ハ面材ノ内端迄達セシムルコトヲ要ス

前項ノ防撓山形鋼ノ寸法ハ其ノ長短ニ從ヒ肋骨板ノ深サ
ニ應シ差表ニ依リ之ヲ定ムヘシ但シD一一・五米以上ノ
船舶ノ防撓山形鋼又ハ船側横肋骨ノ下半部ニ附スル防撓
山形鋼ハ總テ長防撓山形鋼ノ寸法ニ依ルヘシ

鋼船構造規程

面材ハ形鋼ヲ用ヒタルトキ其ノ截面積ヲ左ノ算式ニ依リ
算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$1.5(D-5)+11 \quad (\text{平方釐}=\text{チ})$$

Sハ横肋骨ノ心距(米ニテ)

第二甲板ノ舷弧ノ高サカ一五〇耗以上ナル箇所ニ於テハ
舷弧ノ高サ一〇〇耗ニ付一〇耗ノ割合ヲ以テ肋骨板ノ厚
サヲ第二項ニ依ルモノヨリ増スヘシ

面材ハ船底横肋骨ノ上端ヨリ第二甲板ノ横置梁ノ下端迄
達セシムヘシ

第五百三十一條

船側横肋骨ノ上端ハ肘板ヲ以テ第二甲板
ノ横置梁ニ固著スヘシ

前項ノ肘板ハ其ノ遊縁チ一三〇耗曲縁シ其ノ厚サヲ第二
甲板ノ横置梁ヲ構成スル鋼板ノ厚サト等シク爲シ船側横
肋骨ノ内縁ヨリ測リタル幅及横置梁ノ下端ヨリ測リタル
深サヲ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$1.60d_1 \quad (\text{耗}=\text{チ})$$

d₁ハ龍骨ノ上面ヨリ第二甲板梁ノ船但ニ於ケル上面ニ
至ル深サ(米ニテ)

第五百二十五條 第三項、第五項乃至第七項ノ規定ハ船
側横肋骨ニ之ヲ準用ス

横肋骨ノ深サ(耗)	短防撓山形鋼(耗)	長防撓山形鋼(耗)
下以 460	75×75×9	125×75×9
610	75×75×9.5	150×75×9.5
710	90×90×10	150×90×10
上以 810	90×90×11	150×90×11

防撓山形鋼ト縦肋骨トノ固著ニ付テハ第五百二十七條第
三項ノ規定ニ依ル

第五百三十四條

第二甲板下ノ船側横肋骨ヲ横置梁ニ固著
スル肘板ノ下端及船底横肋骨ニ固著スル肘板ノ上端附近
ニ於ケル縦肋骨ノ位置ニハ船側横肋骨ノ片側ニ水平肘板
ヲ設ケ之ヲ支持スヘシ但シD七米未滿ナルトキハ水平肘
板一箇ヲ設クルニ止ムルモ妨ナシ

第五百三十五條

船側横肋骨ノ面材ノ遊邊ノ幅カ一八〇耗
ヲ超ユル場合ニ於テハ少クトモ二箇ノ横肋骨防撓山形鋼
ト面材ノ遊邊トヲ短山形鋼ヲ以テ固著スヘシ

第五百三十六條 上甲板及第二甲板間ノ船側橫肋骨ハ肋骨板ノ内縁ニ面材ヲ取附ケタル構造ト爲スヘシ
肋骨板ノ寸法ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

深サ $6.45(D-1.5)(h+0.6)+280$ (耗=テ)
厚サ $0.009d_0+6$ (耗=テ)

h ハ上甲板及第二甲板間ノ高さ(米ニテ)
d₀ ハ船側橫肋骨ノ深サ(耗ニテ)

面材ハ形鋼ヲ用ヒタルトキ其ノ截面積ヲ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

一 Dカ七・五米未満ナルトキ
 $0.25D(S+5.25)+2$ (平方釐=テ)

二 Dカ七・五米以上ナルトキ
 $0.94(D-5.5)(S-2)+15.5$ (平方釐=テ)

S ハ橫肋骨ノ心距(米ニテ)
橫肋骨ハ遊縁ヲ七五耗曲縁シタル肘板ヲ以テ上甲板橫置梁及第二甲板ニ固著スヘシ

前項ノ肘板ハ其ノ厚サヲ橫肋骨板ノ厚サト同一ト爲シ橫肋骨ノ内縁ヨリ測リタル幅及橫置梁ノ下端又ハ第二甲板ヨリ測リタル深サヲ橫肋骨ノ深サノ一・五倍ト爲スヘシ

橫肋骨板、上甲板橫置梁及前項ノ肘板ハ相互ニ累接ニ列鉸固著ト爲スヘシ

肘板ヲ外板又ハ甲板迄延長シ橫肋骨又ハ橫置梁ヲ構成スル鋼板ニ兼用スルトキハ之ト橫肋骨又ハ橫置梁ヲ構成スル鋼板トハ接手カ縱肋骨ノ中間ニ來ルトキハ累接ニ列鉸固著ト爲シ接手カ縱肋骨ノ位置ニ來ルトキハ累接ニ列鉸固著ト爲スヘシ

橫肋骨ノ下端ノ肘板ハ單山形鋼ヲ以テ第二甲板ニ二列鉸固著ト爲スヘシ

橫肋骨ハ之ト同一ノ厚サヲ有スル單山形鋼ヲ以テ外板ニ固著スヘシ

船側橫肋骨ト縱肋骨トハ第五百三十三條第二項ノ規定ニ依リ短防撓山形鋼ヲ以テ固著スヘシ但シ山形鋼ノ厚サハ

橫肋骨ノ厚サヲ超ユルコトヲ要セス
防撓山形鋼ト縱肋骨トノ固著ニ付テハ第五百二十七條第三項ノ規定ニ依リ

第五百三十七條 船側橫肋骨ニ設クル輕目穴ハ徑一五〇耗以下ト爲シ縱肋骨ニ對スル切込ノ間ニ於テ其ノ中央附近ノ成ルヘク外板ニ接近シタル箇所ニ設クヘシ

第四節 橫置梁

第五百三十八條

橫置梁ハ船側橫肋骨ニ接續シテ設ケ鋼板ノ下縁ニ面材ヲ取附ケタル構造ト爲スヘシ但シ膨脹「トランク」内ノ上甲板橫置梁ノ下端ハ面材ノ代リニ曲縁ト爲スコトヲ得

夏期油槽ニ於ケル上甲板橫置梁ヲ構成スル鋼板ノ深サハ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

一 Bカ一五米未満ナルトキ
 $2.66B(S-1.5)+280$ (耗=テ)

二 Bカ一五米以上ナルトキ
 $5.5(B-8)(S-0.9)+210$ (耗=テ)

S ハ橫置梁ノ心距(米ニテ)

前項ノ鋼板ノ厚サハ其ノ深サニ應ジ左表ニ依リ定ムヘシ

厚サ (耗)	深サ (耗)	
	下以	上超ヲ
9	250—280	
9.5	280—290	
10	290—440	

夏期油槽ニ於ケル上甲板橫置梁ノ下縁ニ附スル面材ハ形

鋼ヲ用ヒタルトキ其ノ截面積ヲ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

一 Bカ一五米未満ナルトキ
 $0.665B+8$ (平方釐=テ)

二 Bカ一五米以上ナルトキ
 $1.055B+215$ (平方釐=テ)

膨脹「トランク」内ノ上甲板橫置梁ヲ構成スル鋼板ノ深サハ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲シ其ノ下端ヲ曲縁ト爲ストキハ其ノ幅チ一三〇耗ト爲スヘシ

但シB一二米以下ナルトキハ曲縁ノ幅チ一二〇耗ト爲スコトヲ得

一 Bカ一二米未満ナルトキ
 $14.5(B-15)(5-S)+470$ (耗=テ)

二 Bカ一二米以上ナルトキ
 $10B+44(S-2.5)+241$ (耗=テ)

S ハ橫置梁ノ心距(米ニテ)

前項ノ鋼板ノ厚サハ其ノ深サニ應ジ左表ニ依リ之ヲ定ムヘシ

厚サ (耗)	深サ (耗)
9	250—340
9.5	340—360
10	360—520

第二甲板横置梁ヲ構成スル鋼板ノ深サハ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

一 Bカ一五米未満ナルトキ

$$4.65(B+14)(S+0.3) \quad (\text{耗}=\text{チ})$$

二 Bカ一五米以上ナルトキ

$$32.3B+134S-442 \quad (\text{耗}=\text{チ})$$

Sハ横置梁ノ心距(米ニテ)

前項ノ鋼板ノ厚サハ其ノ深サニ應シ左表ニ依リ之ヲ定ムヘシ

深サ (耗)	エ超テ 下以
300—340	
340—650	
650—810	

前項ノ防撓山形鋼ノ厚サハ横置梁ヲ構成スル鋼板ノ厚サニ等シクシ其ノ邊ノ幅ハ深サ六一〇耗ヲ超ユル第二甲板横置梁ニ在リテハ長防撓山形鋼、其ノ他ノ横置梁ニ在リテハ短防撓山形鋼ニ對スル第五百三十三條第二項ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定ムヘシ

防撓山形鋼ト縦梁トノ固著ニ付テハ第五百二十七條第三項ノ規定ヲ準用ス

第五百四十一條 夏期油槽ニ於ケル上甲板横置梁ノ下縁ニ附スル面材ハ膨脹「トランク」ノ側壁ヨリ船側横肋骨ノ内縁迄達セシムヘシ

夏期油槽ニ於ケル上甲板横置梁「トランク」ノ側壁ニ固著スル肘板ハ其ノ厚サヲ横置梁ヲ構成スル鋼板ノ厚サト等シクシ甲板ヨリ測リタル深サ及側壁ヨリ測リタル幅ヲ横置梁ノ深サノ二倍ト爲スヘシ

第五百四十二條 膨脹「トランク」内ノ上甲板横置梁ト中心線隔壁又ハ膨脹「トランク」ノ側壁ニ附スル堅桁トハ累接シ横置梁ヲ隔壁又ハ側壁迄到達セシムルトキハ二列

厚サ (耗)	9.5	10	11
--------	-----	----	----

第二甲板横置梁ノ下縁ニ附スル面材ハ形鋼ヲ用ヒタルトキ其ノ截面積ヲ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

一 Bカ一五米未満ナルトキ

$$1.8B+4.3 \quad (\text{平方釐}=\text{チ})$$

一 Bカ一五米以上ナルトキ

$$1.15B+14.0 \quad (\text{平方釐}=\text{チ})$$

第五百三十九條 横置梁ハ之ヲ構成スル鋼板ノ厚サト同一ノ厚サヲ有スル單山形鋼ヲ以テ上甲板トハ一列鉸固著、第二甲板トハ二列鉸固著ト爲スヘシ

横置梁ニ設クル輕目穴ハ其ノ徑チ一〇〇耗以下ト爲シ縦梁ニ對スル切込ノ間ニ於テ其ノ中央附近ノ成ルヘク甲板ニ接近シタル箇所ニ設クヘシ

第五百四十條 横置梁ト縦梁トハ山形鋼ヲ以テ固著シ之ヲ横置梁ノ面材ノ縁迄延長シ横置梁ヲ防撓スヘシ但シ膨脹「トランク」内ノ上甲板横置梁ニ在リテハ交互ニ横置梁ノ下端迄及縦梁ノ下端ヨリ下方一五〇耗ノ箇所迄延長スヘシ

鉸固著ト爲シ堅桁ヲ甲板迄達セシムルトキハ三列鉸固著ト爲スヘシ

中心線隔壁ノ堅桁ノ反對側ニ於テハ上甲板横置梁ト中心線隔壁トヲ肘板ヲ以テ固著スヘシ

前項ノ肘板ノ厚サハ横置梁ヲ構成スル鋼板ノ厚サト等シクシ甲板ヨリ測リタル深サハ横置梁ノ深サノ二倍、幅ハ横置梁ノ深サノ一・三倍ト爲スヘシ

前項ノ肘板ハ横置梁ニ累接二列鉸固著ト爲シ中心線隔壁ニ肘板ノ厚サト同一ノ厚サヲ有スル二重山形鋼ヲ以テ一列鉸固著ト爲スヘシ

第五百四十三條 第二甲板横置梁ノ下縁ニ附スル面材ハ中心線隔壁ヨリ船側横肋骨ノ内縁迄達セシムヘシ

膨脹「トランク」ノ部分ニ於テハ第二甲板横置梁ノ上縁ニ第五百三十八條第九項ニ依ル面材ヲ附シ中心線隔壁ヨリ膨脹「トランク」ノ外方ニ在ル最初ノ縦梁迄達セシムヘシ

第二甲板横置梁ト中心線隔壁ノ堅桁トノ固著ニ付テハ該梁ト船側横肋骨トノ固著ニ關スル規定ヲ準用ス

中心線隔壁ノ堅桁ノ反對側ニ於テハ左ノ各號ノ規定ニ依リ第二甲板横置梁ト中心線隔壁トヲ肘板ヲ以テ固著スヘシ

- シ
- 一 肘板ノ寸法ハ前項ノ規定ニ依リ横置梁ト堅桁トヲ固著スル肘板ノ寸法ト等シクシ其ノ遊縁ヲ一三〇耗曲縁スヘシ
- 二 肘板ト隔壁板トノ固著ニ付テハ第五百二十五條第四項ノ規定ヲ準用ス
- 三 肘板ト隔壁板トヲ固著スル山形鋼ハ總テ横置梁ノ上縁ニ附スル面材迄延長スヘシ
- 四 肘板ノ遊縁ノ長サ一・七米ヲ超ユルトキハ第五百二十五條第三項ニ定ムル寸法ノ山形鋼ヲ以テ該肘板ヲ防撓スヘシ

膨脹「トランク」ノ部分ニ於ケル第二甲板横置梁ノ上縁ニ附スル面材ハ横置梁ヲ構成スル鋼板ノ厚サニ一耗ヲ加ヘタル厚サヲ有スル水平扣板ヲ以テ中心線隔壁板ニ固著スヘシ

第五百四十四條 横置梁ノ端ニ於ケル肘板ヲ横置梁ノ上端迄延長スルトキハ之ト横置梁ヲ構成スル鋼板トハ三列鉸固著ト爲スヘシ

船底縱肋骨

第五百四十五條 船底縱肋骨ハ心距七六〇耗ノトキ其ノ截面抵抗率ヲ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$(S+n)^2(0.0016D^4+0.064D^2+27.7) \quad (\text{釐ノ三乗ニテ})$$

Sハ横肋骨間ノ間隔又ハ横置隔壁ト横肋骨トノ間隔(米ニテ)

nハ一油槽内ニ設クル横肋骨ノ數一箇ナルトキハ零、二箇又ハ三箇ナルトキハ〇・六

L一二二米ヲ超ニル場合ニ於テハ横置隔壁ノ兩側ニ於テ隔壁ヨリ横肋骨ノ心距ノ四〇％ニ相當スル間船底縱肋骨ニ背面山形鋼ヲ附シ外板ニ一列鉸ヲ以テ固著スヘシ

第五百四十六條 船底縱肋骨ハ横置隔壁ノ位置ニ於テ切斷シ遊縁ヲ曲縁シタル肘板ヲ以テ該隔壁ニ固著スヘシ

前項ノ肘板ノ幅及深サハ縱肋骨ノ深サノ二倍ニ六五〇耗ヲ加ヘタルモノト爲シ其ノ厚サハ肘板ノ深サニ應シ左表ニ依リ定ムヘシ但シ縱肋骨力鋼板及面材ヲ以テ構造シタルモノナルトキハ肘板ノ幅ヲ深サヨリ二五〇耗減シタルモノト爲スコトヲ得

肘板ノ厚サ(耗)	肘板ノ深サ(耗)
10	以下 エ超テ 1150
10.5	1150—1250
11	1250—1350
11.5	1350

肘板ハ之ト同一ノ厚サヲ有スル單山形鋼ヲ以テ隔壁ニ固著スヘシ

前項ノ山形鋼ハ横置隔壁ノ最下水平防撓材ヨリ三〇〇耗未滿ノ箇所迄延長スヘシ

第五百四十七條 B一八・五米ヲ超ユルトキハ船ノ中心線ヨリBノ約四分ノ一ニ相當スル箇所ノ附近ニ船底横肋骨ト同一ノ深サヲ有スル斷切桁材ヲ縱肋骨ノ代リニ設クヘシ

斷切板ノ厚サハ横肋骨ノ厚サヨリ一耗ヲ減シタルモノト爲シ其ノ上端ニ斷切板ト同一ノ厚サヲ有シ各邊ノ幅九〇耗ナル二重山形鋼ヲ取附クヘシ

斷切桁材ハ横肋骨ノ心距三米以下ナルトキハ中央ニ一箇、三米ヲ超ユルトキハ心距ノ三等分點ニ各一箇ノ豎山形鋼ヲ取附ケ之ヲ防撓スヘシ

第五百四十八條 斷切桁板ハ横置隔壁又ハ船底横肋骨ニ單山形鋼ヲ以テ二列鉸固著ト爲スヘシ

斷切桁板ト隔壁トヲ固著スル山形鋼ハ桁材ノ上端ヨリ上方一五〇耗以上ノ箇所迄延長スヘシ

斷切桁材ノ面材ト横肋骨ノ面材トハ覆板ヲ以テ固著スヘシ

第六節 船側縱肋骨

第五百四十九條 第二甲板下ノ船側縱肋骨ハ球山形鋼ヲ用ヒ心距七六〇耗ノトキ其ノ截面抵抗率ヲ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シD+0.4Dカ四・五米未滿ナルトキハ四・五米トス

$$10(S+n)^2+20(D+0.4D-5)(S+2n-2) \quad (\text{釐ノ三乗ニテ})$$

Sハ横肋骨間ノ間隔又ハ横置隔壁ト横肋骨トノ間隔(米ニテ)

hハ當該縱肋骨ヨリ船側ニ於ケル上甲板ニ至ル深サ(米ニテ)

nハ一油槽内ニ設クル横肋骨ノ數一箇ナルトキハ〇・一、二箇又ハ三箇ナルトキハ〇・四

第五百五十條 上甲板及第二甲板間ノ船側縱肋骨ノ數ハ甲

板間ノ高サ二・五米ノトキ二箇ト爲シ縱肋骨ニ球形鋼ヲ用ヒタル場合其ノ截面抵抗率ヲ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

- 一 一油槽内ニ横肋骨一箇ヲ設クルトキ
 $32\{1+0.01(D-2)^2\}(S-0.67)$ (噸ノ三乗ニテ)
- 二 一油槽内ニ二箇又ハ三箇ノ横肋骨ヲ設クルトキ
 $32\{1+0.013(D-2)^2\}(S-0.60)$ (噸ノ三乗ニテ)

Sハ横肋骨間ノ間隔又ハ横置隔壁ト横肋骨トノ間隔 (米ニテ)

第五百五十一條 船底彎曲部ニ於ケル縱肋骨ノ寸法ハ船底縱肋骨ト船側縱肋骨トノ間ニ於テ強力ニ急激ナル變化ナキ様之ヲ定ムヘシ

第五百五十二條 船側縱肋骨ハ横置隔壁ノ位置ニ於テ切斷シ遊線ヲ曲線シタル肘板ヲ以テ隔壁ニ固著スヘシ

前項ノ肘板ノ幅及深サハ縱肋骨ノ深サノ三倍ニ二〇〇耗ヲ加ヘタルモノト爲シ其ノ厚サハ肘板ノ深サニ應シ左表ニ依リ定ムヘシ但シ甲板間ニ於ケル肘板ノ厚サハ一〇耗ヲ超ユルコトヲ要セス

(米ニテ)

第二甲板ノ縱梁ハ球形鋼ヲ用ヒ心距七六〇耗ノトキ其ノ截面抵抗率ヲ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

- 一 一油槽内ニ横置梁一箇ヲ設クルトキ
 $50S+0.0027L^2-65$ (噸ノ三乗ニテ)
 - 二 一油槽内ニ二箇又ハ三箇ノ横置梁ヲ設クルトキ
 $50S+0.0025L^2-45$ (噸ノ三乗ニテ)
- Sハ横置梁間ノ間隔又ハ横置隔壁ト横置梁トノ間隔 (米ニテ)

第五百五十四條 縱梁ハ横置隔壁ノ位置ニ於テ切斷シ肘板ヲ以テ隔壁ニ固著スヘシ
 前項ノ肘板ノ幅及深サハ縱梁ノ深サノ四倍ト爲シ其ノ厚サハ縱梁ノ深サニ應シ左表ニ依リ定ムヘシ

肘板ノ厚サ(耗)	縱梁ノ深サ(耗)	
	下以	上超テ
10	150	—
10.5	150-200	—
11	200	—

肘板ノ厚サ(耗)	肘板ノ深サ(耗)	
	下以	上超テ
10	850	—
10.5	850-1000	—
11	1000	—

肘板ハ之ト同一ノ厚サヲ有スル單山形鋼ヲ以テ隔壁ニ固著スヘシ

第七節 縱 梁

第五百五十三條 上甲板ノ縱梁ハ球形鋼ヲ用ヒ心距七六〇耗ノトキ其ノ截面抵抗率ヲ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

- 一 一油槽内ニ横置梁一箇ヲ設クルトキ
 $0.39L+38(S-3)+57$ (噸ノ三乗ニテ)
- (イ) Lカー二〇米未滿ナル場合
 $0.39L+38(S-3)+30$ (噸ノ三乗ニテ)
- (ロ) Lカー二〇米以上ナル場合
 $0.62L\{1+0.5(S-3)\}+30$ (噸ノ三乗ニテ)
- 二 一油槽内ニ二箇又ハ三箇ノ横置梁ヲ設クルトキ
 $0.57L+36(S-2.5)+33$ (噸ノ三乗ニテ)

Sハ横置梁間ノ間隔又ハ横置隔壁ト横置梁トノ間隔

肘板ハ之ト同一ノ厚サヲ有スル單山形鋼ヲ以テ横置隔壁ニ一列鉸固著ト爲スヘシ

肘板ノ各邊ニ於ケル鉸ノ數カ十箇以上ナルトキハ肘板ノ遊線ヲ曲線スヘシ

第八節 外 板

第五百五十五條 平板龍骨ノ幅ハ第五十三條ノ規定ニ依リ之ヲ定メ其ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ中央部Lノ五分ノ三間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ減シ首尾兩端ニ於テハ算式ニ依ルモノノ七〇ト爲スコトヲ得

$$\left(12.2-0.55\frac{L}{D}\right)\left(\frac{L}{100}\right)^2 - \left(1.37-0.33\frac{L}{D}\right)\left(\frac{L}{100}\right) + \left(16.4-0.36\frac{L}{D}\right) \text{ (耗ニテ)}$$

第五百五十六條 中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル船側外板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ
 $1.37\left(\frac{L}{100}\right)^2 + \left(10.9-0.5\frac{L}{D}\right)\left(\frac{L}{100}\right) + \left(4.37+0.2\frac{L}{D}\right)$ (耗ニテ)

第五百五十七條 中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル船底外板ノ厚サハ前條ニ依ル船側外板ノ厚サニ左表ニ掲クル厚サ

ヲ加ヘタルモノ以上ト爲スヘシ

加フヘキ厚サ(耗)	L	
	工超ヲ	下以
0.5	—	135
1.0	135—150	
1.5	150—160	
2.0	160—175	
2.5	175	

第五百五十八條 縦肋骨ノ心距カ七六〇耗ヲ超ユルトキハ超過一〇耗ニ付一〇・一耗ノ割合ヲ以テ船側外板及船底外板ノ厚サヲ増スヘシ

第五百五十九條 舷側厚板ノ幅ハ第三百二十七條ノ規定ニ依リ之ヲ定メ其ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於テハ漸次之ヲ減シ首尾兩端ニ於テハ船側外板ノ首尾ノ厚サニ等シカラシムルコトヲ得

$$\frac{L}{60} \left(\frac{L}{D} - 3.8 \right) + 3.2 \quad (\text{耗} = \text{テ})$$

第五百六十條 外板ノ横線ハ油槽ノ部分ニ於テハ成ルヘク之ヲ少クシ且其ノ位置ハ油密横置隔壁ト十分ニ避距スヘシ

第五百六十三條 中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル第二甲板ノ梁上側板ノ幅ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$0.013L^2 + 980 \quad (\text{耗} = \text{テ})$$

第二甲板ノ梁上側板ノ厚サハ鋼甲板ノ厚サカ一一耗以下ナルトキハ之ニ〇・五耗ヲ加ヘタルモノト爲シ一一・五耗ヲ超ユルトキハ其ノ厚サニ等シク爲スヘシ

第五百六十四條 鋼甲板ノ厚サハ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$1 \quad \text{中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル上甲板}$$

$$7.1 + \left(0.41 \frac{L}{D} - 2.58 \right) \left(\frac{L}{100} \right)^2 \quad (\text{耗} = \text{テ})$$

$$2 \quad \text{首尾ニ於ケル上甲板} \quad 0.663\sqrt{L+42.4} \quad (\text{耗} = \text{テ})$$

$$3 \quad \text{第二甲板} \quad 0.94\sqrt{L-5.4} \quad (\text{耗} = \text{テ})$$

縦梁ノ心距カ七六〇耗ヲ超ユルトキハ超過五〇耗ニ付一〇・三耗ノ割合ヲ以テ鋼甲板ノ厚サヲ前項ノ規定ニ依ルモノヨリ増スヘシ

第五百六十五條 同一横截面ニ於ケル上甲板ノ開口ノ幅ノ和カ二・五米ヲ超ユルトキハ上甲板ノ梁上側板及鋼甲板ノ厚サヲ増加シ其ノ截面積ノ和ヲ開口ノ幅ノ和カ二・五

第五百六十一條 船橋樓ノ兩端及船尾樓ノ前端ノ前後適當ノ間舷側厚板ノ厚サヲ中央部ニ於ケル規定ノ厚サヨリ二〇%増シ船樓外板ヲ適當ノ間船樓外ニ延長シ順次其ノ高サヲ減シ船樓端ヨリ一・五米ヲ超エサル間隔ニ設ケタル鋼板製ノ堅桁ニテ支ヘ上下兩甲板ノ強力ノ連續ニ急激ナル變化ナカラシムヘシ

船尾樓ノ前端カ中央部Lノ二分ノ一間ニ在ルトキハ該端ノ補強ニ付テハ前項ノ規定ニ拘ラス第三百二十九條ノ規定ニ依ル

第九節 甲板

第五百六十二條 上甲板ノ梁上側板ノ幅ハ中央部Lノ二分ノ一間ニ於テハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲シ首尾兩端ニ於テハ其ノ七〇%以上ト爲スヘシ

$$0.037L^2 + 870 \quad (\text{耗} = \text{テ})$$

上甲板ノ梁上側板ノ厚サハ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$1 \quad \text{中央部Lノ二分ノ一間}$$

$$6.9 + 0.4 \frac{L}{D} + \left(0.22 \frac{L}{D} - 0.87 \right) \left(\frac{L}{100} \right)^2 \quad (\text{耗} = \text{テ})$$

$$2 \quad \text{首尾兩端} \quad 6.5 + 0.033L \quad (\text{耗} = \text{テ})$$

米ナル場合ニ於ケル規定ノ梁上側板及鋼甲板ノ截面積ノ和以上ト爲スヘシ

第五百六十六條 第二甲板ノ梁上側板及鋼甲板ノ厚サハ油槽及防油區畫ノ範圍ニ於テハ中央部ノ厚サヲ保持スルコトヲ要ス

上甲板ノ梁上側板及鋼甲板ハ中央部ニ於ケル厚サヲ船尾樓ノ前端ヨリ後方少クトモBノ三分ノ一ニ相當スル箇所迄持續スヘシ

上甲板ノ梁上側板ノ厚サハ船橋樓ノ兩端及船尾樓ノ前端ニ於テ少クトモ六米ノ間中央部ニ於ケル規定ノ厚サヨリ二〇%増スヘシ

船尾樓ノ前端カ中央部Lノ二分ノ一間ニ在ルトキハ該端ノ補強ニ付テハ前二項ノ規定ニ拘ラス第三百二十九條ノ規定ニ依ル

第五百六十七條 油槽ノ部分ニ於ケル上甲板ノ舷線山形鋼ノ厚サハ梁上側板ノ厚サニ等シクシ其ノ各邊ノ幅ハ舷側厚板ノ厚サニ應シ左表ニ依リ定ムヘシ

各邊ノ幅(耗)	150	24以下
	180	24.5—29.0
	200	29.5—30.5

第二甲板ノ舷線山形鋼ハ横置隔壁ヲ貫通セシメ其ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲シ其ノ各邊ノ幅ハL八〇米未滿ノ船舶ニ在リテハ一三〇耗、L八〇米以上ノ船舶ニ在リテハ一五〇耗以上ト爲スヘシ

$$0.756 \sqrt{L+89} \quad (\text{耗ニテ})$$

舷線山形鋼ノ各邊ハ二列鉸固著ト爲スヘシ

第五百六十八條 鋼甲板及梁上側板ノ横線ハ油槽ノ部分ニ於テハ成ルヘク之ヲ少クシ且其ノ位置ハ油密横置隔壁ト十分ニ避距スヘシ

甲板ニ設クル開口ノ四隅ニハ十分丸味ヲ附スヘシ
上甲板ノ舷線山形鋼ニ排水ノ爲切込ヲ設クルコトハ成ルヘク之ヲ避クヘシ

第十節 横置隔壁

第五百六十九條 本節ノ規定ハ油槽ノ隔壁、防油區畫及

「ポンプ」室ノ隔壁ニ適用ス

第五百七十條 隔壁板ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ八・五耗ヨリ小ナルコトヲ得ス

$$7.38 + 0.42H \quad (\text{耗ニテ})$$

Hハ各隔壁板ノ下縁ヨリ船ノ中心線ニ於ケル上甲板迄ノ距離(米ニテ)

水平防撓材ノ心距カ七六〇耗ヲ超ユルトキハ超過一〇〇耗ニ付〇・五耗ノ割合ヲ以テ隔壁板ノ厚サヲ前項ノ規定ニ依ルモノヨリ増スヘシ

隔壁ノ最下部ニ用ウル板ノ厚サハ前二項ノ規定ニ依ル厚サニ一耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲シ其ノ幅ハ船底縱肋骨ニ附スル肘板及其ノ固著用山形鋼ノ上部ニ於テ縱線固著ヲ爲スニ足ルモノト爲スコトヲ要ス

第五百七十一條 横置隔壁ト外板、甲板、中心線隔壁並ニ膨脹「トランク」ノ側壁及頂板トハ二重山形鋼ヲ以テ一列鉸固著ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列鉸固著ト爲スヘシ

前項ノ二重山形鋼ハ横置隔壁ノ深サハ・五米以下ナルトキハ各邊ノ幅ヲ七五耗、厚サヲ隔壁ノ最下部ノ板ノ厚サヨリ二耗減シタルモノト爲シ横置隔壁ノ深サハ・五米ヲ

超ユルトキハ各邊ノ幅ヲ九〇耗、厚サヲ最下部ノ板ノ厚サヨリ二・五耗減シタルモノト爲スヘシ

第一項ノ單山形鋼ノ各邊ノ幅ハ一五〇耗ト爲シ厚サハ隔壁ノ最下部ノ板ノ厚サト等シク爲スヘシ

第五百七十二條 第二甲板下ノ横置隔壁ニハ第五百七十三條乃至第五百七十七條ノ規定ニ依リ堅桁ヲ設クヘシ

堅桁ハ桁板ノ内縁ニ面材ヲ取付ケタル構造ト爲シ桁板ノ寸法ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$$\text{深サ} \quad 31.5(S+0.43)I+150 \quad (\text{耗ニテ})$$

$$\text{厚サ} \quad 0.0033d_0+7.7 \quad (\text{耗ニテ})$$

Sハ當該堅桁ヨリ之ニ隣接スル堅桁、中心線隔壁又ハ外板ニ至ル各區間ノ中心間ノ距離(米ニテ)但シ各舷ニ堅桁三箇ヲ設クルトキハ中央ノ堅桁ニ付テハ其ノ左右ノ堅桁ニ至ル區間ノ中心間ノ距離ノ代リニ其ノ一・一倍ヲ採ルモノトス

Iハ船底縱肋骨ノ上縁ヨリ第二甲板迄測リタル堅桁ノ長サ(米ニテ)

d₀ハ桁板ノ深サ(耗ニテ)

面材ハ形鋼ヲ用ヒタルトキ其ノ截面積ヲ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

一 カ六米未滿ナルトキ

$$1.33I^2 - 1.4(6.79 - h)I + 17.5 \quad (\text{平方釐ニテ})$$

二 カ六米以上ナルトキ

$$0.96I^2 + 1.4I - (h - 2.16) - 7.94 \quad (\text{平方釐ニテ})$$

Iハ船底縱肋骨ノ上縁ヨリ第二甲板迄測リタル堅桁ノ長サ(米ニテ)

hハ堅桁ノ上縁ヨリ船ノ中心線ニ於ケル上甲板ニ至ル高サ(米ニテ)

第五百七十三條 堅桁ニ設クル輕目穴ハ其ノ徑ヲ一五〇耗以下ト爲シ水平防撓材ニ對スル切込ノ間ニ於テ其ノ中央附近ノ成ルヘク隔壁ニ接近シタル箇所ニ設クヘシ

第五百七十四條 堅桁ノ面材ハ縱梁ノ下端ヨリ船底縱肋骨ノ上端迄達セシムヘシ

第五百七十五條 堅桁ノ端ハ桁板ノ厚サニ一耗ヲ加ヘタル厚サヲ有シ遊縁ヲ一三〇耗曲線シタル肘板ヲ以テ縱梁及船底縱肋骨ニ固著スヘシ

前項ノ肘板ノ深サハ縱梁ノ下縁又ハ船底縱肋骨ノ上縁ヨリ測リ堅桁ノ長サノ二〇%以上ト爲シ幅ハ桁板ノ遊縁ヨリ測リ七五〇耗以上ト爲スヘシ

肘板ト堅桁ノ桁板、縱梁及船底縱肋骨トハ累接二列鉸固

著ト爲スヘシ又肘板ヲ隔壁板迄延長シ桁板ニ兼用スルトキハ之ト之ニ隣接スル桁板トハ累接三列鋸固著ト爲スヘシ

第五百七十六條 堅桁ノ桁板ト水平防撓材トハ左ノ各號ノ規定ニ依リ固著スヘシ

- 一 堅桁ノ長サノ略中央ニ於ケル水平防撓材ト桁板トハ其ノ面材ノ縁ニ達スル水平肘板ヲ以テ固著スヘシ
- 二 其ノ他ノ水平防撓材ト桁板トハ山形鋼ヲ以テ固著シ之ヲ交互ニ堅桁ノ面材ノ縁迄及桁板ノ深サノ二分ノ一迄延長シ桁板ヲ防撓スヘシ但シ桁板ノ深サノ二分ノ一ノ箇所カ水平防撓材ノ遊縁ヨリ一五〇耗未滿ノ距離ニ在ルトキハ遊縁ヨリ一五〇耗ノ箇所迄山形鋼ヲ延長スヘシ

前項第二號ノ防撓山形鋼ハ堅桁ノ深サ五〇〇耗以下ナルトキハ總テ面材ノ縁迄達セシムルコトヲ要シ又堅桁ノ下端ノ肘板ノ範圍ニ在ル水平防撓材ヲ固著スルモノニ在リテハ該肘板ノ遊縁迄達セシムルコトヲ要ス

防撓山形鋼ノ寸法ハ其ノ長短ニ從ヒ桁板ノ深サニ應ジ第五百三十三條ノ表ヲ準用シテ之ヲ定ムヘシ但シ堅桁ノ下

サ厚及サ深ノ板桁		サ高ノ間板甲	
3.0 米		2.5 米	
耗	耗	耗	耗
440×9	410×9	440×9.5	430×9
440×9.5	430×9	450×10	440×9.5
450×10	440×9.5	460×10.5	440×10
460×10.5	440×10	480×10.5	450×10.5
480×10.5	450×10.5	500×10.5	470×10.5
500×10.5	470×10.5	530×10.5	490×10.5
530×10.5	490×10.5	550×10.5	510×10.5
550×10.5	510×10.5		

- 三 堅桁ノ端ハ肘板ヲ以テ二列鋸固著ト爲スヘシ肘板ノ幅及深サハ桁板、縱梁又ハ固著用山形鋼トノ累接ノ部分ヲ除キ桁板ノ深サ以上ト爲スヘシ
 - 四 甲板間ノ高サカ二・五米ヲ超ユルトキハ桁板ト隔壁板トヲ二列鋸固著ト爲スヘシ
- 前項ノ堅桁ノ桁板ト水平防撓材トハ山形鋼ヲ以テ固著シ

支點間隔ノ種別	h		算式
	三米以上	三米未滿	
外板又ハ中心線隔壁ト堅桁トノ間隔	三米以上	三米未滿	$5.15S^2h$ (噸ノ三乗ニテ)
	三米未滿	三米以上	$5.15S^2h + 23.3(3-h)$ (噸ノ三乗ニテ)
外板又ハ中心線隔壁ト堅桁トノ間隔	三米以上	三米未滿	$5.15(S-0.75)^2h + 30$ (噸ノ三乗ニテ)
	三米未滿	三米以上	$5.15(S-0.75)^2h + 30 + 13.3(3-h)$ (噸ノ三乗ニテ)

半部ニ附スル防撓山形鋼ハ總テ長防撓山形鋼ノ寸法ニ依ルヘシ

防撓山形鋼ト水平防撓材トノ固著ニ付テハ第五百二十七條第三項ノ規定ヲ準用ス

第五百七十七條 堅桁ハ桁板ト同一ノ厚サヲ有スル單山形鋼ヲ以テ隔壁板ニ二列鋸固著ト爲スヘシ但シD七米以下ナルトキハ一列鋸固著ト爲スコトヲ得

堅桁ト隔壁板トヲ固著スル鋸ノ徑ハD七・六米以下ナルトキハ一九耗、七・六米ヲ超ユルトキハ二二耗ト爲スヘシ

第五百七十八條 膨脹「トランク」内ノ横置隔壁ニハ左ノ各號ノ規定ニ依リ堅桁ヲ設クヘシ

- 一 堅桁ハ遊縁ヲ曲縁ト爲シタル桁板ヲ單山形鋼ヲ以テ隔壁ニ固著シタル構造ト爲スヘシ
- 二 桁板ノ深サ及厚サハ左表ニ依リ之ヲ定メ曲縁ノ幅ハ一三〇耗ト爲スヘシ

B
9
10
12
14
16
18
21
24

之ヲ堅桁ノ内縁迄延長シ桁板ヲ防撓スヘシ

前項ノ防撓山形鋼ノ厚サハ桁板ノ厚サニ等シクシ其ノ邊ノ幅ハ船側横肋骨ノ短防撓山形鋼ニ對スル第五百三十三條ノ規定ニ依リ之ヲ定ムヘシ

防撓山形鋼ト水平防撓材トノ固著ニ付テハ第五百二十七條第三項ノ規定ヲ準用ス

第五百七十九條 第二甲板下及膨脹「トランク」内ニ於ケル横置隔壁ニハ左ノ各號ノ規定ニ依リ水平防撓材ヲ設クヘシ

- 一 水平防撓材ハ球山形鋼ヲ用ヒ心距七六〇耗ノトキ其ノ截面抵抗率ヲ支點間隔ノ種別ニ應ジ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ此ノ場合一防撓材ニ付其ノ部分ニ依リ支點間隔カ異ルトキハ最大ノ間隔ニ對シ算定シタルモノ以上ナルニトヲ要ス

Sハ各場合ニ於ケル支點間隔(米ニテ)
 hハ當該水平防撓材ヨリ船ノ中心線ニ於ケル上甲板ニ
 至ル深サ(米ニテ)

二 最下水平防撓材ハ船底縱肋骨ヲ隔壁ニ固著スル肘板
 ノ上端ヨリ七六〇耗以下ニシテ且該肘板ト隔壁板トヲ
 固著スル山形鋼ノ上端ヨリ三〇〇耗未満ノ箇所ニ取附
 クヘシ

三 水平防撓材ト中心線隔壁ノ水平防撓材及船側縱肋骨
 トハ第五百五十二條ノ規定ヲ準用シ肘板ヲ以テ固著ス
 ヘシ但シ中心線隔壁ノ水平防撓材ノ水平防撓材ニ固著
 スル肘板ハ横置隔壁ノ水平防撓材ノ深サカ二五〇耗未
 滿ナルトキハ其ノ遊縁ヲ曲縁スルコトヲ要セス

第五百八十條 横置隔壁ニハ第二甲板ノ位置ニ膨脹「トラ
 ンク」ノ側壁ヨリ側壁ニ達スル横桁ヲ設クヘシ但シ第二
 甲板ニ依リ該部分ノ横置隔壁ヲ支持スルトキハ此ノ限ニ
 在ラス

横桁ノ幅ハ第二甲板下ノ堅桁ノ幅ノ一・五倍及七五〇耗
 ノ中大ナルモノ以上、桁板ノ厚サハ堅桁ノ桁板ノ厚サ以
 上ト爲シ其ノ遊縁ニ一三〇耗ノ曲縁ヲ設クヘシ
 横桁ト横置隔壁トハ山形鋼ヲ以テ一列鋸固著ト爲シ横桁

二・五米ナルトキハ一五〇×七五×一〇(耗ニテ)、甲
 板間ノ高サ三米ナルトキハ一六五×七五×一〇(耗ニ
 テ)ト爲スヘシ

二 防撓材ノ下端ノ肘板ヲ第二甲板ニ固著スル鋸ノ數ハ
 甲板間ノ高サ二・五米ナルトキハ四箇、三米ナルトキ
 ハ五箇ト爲スヘシ

第五百八十二條 肘板ヲ隔壁板ニ固著スル山形鋼ハ肘板ノ
 端ヲ超エ少クトモ一五〇耗延長スヘシ
 肘板及山形鋼ハ周圍山形鋼ヨリ十分離シテ隔壁ニ取附ケ
 有效ニ填隙シ得ル餘地ヲ存セシムヘシ

第十一節 中心線隔壁
第五百八十三條 第五百七十條ノ規定ハ中心線隔壁ニ之ヲ
 準用ス

Dハ・五米ヲ超ユルトキハ隔壁ノ最上部ニ用フル板ハ其
 ノ幅ヲ一・五米以上其ノ厚サヲ左ノ算式ニ依リ算定シタ
 ルモノ以上ト爲シ其ノ直下ノ板ノ厚サハ其ノ上下ニ隣接
 スル板ノ厚サノ平均以上ト爲スヘシ

0.732D+3.3 (耗ニテ)
第五百八十四條 中心線隔壁ト平板龍骨及上甲板トハ二重
 山形鋼ヲ以テ一列鋸固著ト爲スヘシ

ト中心線隔壁又ハ膨脹「トランク」側壁トハ山形鋼ヲ以
 テ二列鋸固著ト爲スヘシ

横桁ト第二甲板下ノ堅桁トハ桁板ノ厚サニ一耗ヲ加ヘタ
 ル厚サヲ有シ遊縁ヲ曲縁シタル肘板ヲ以テ固著スヘシ
 前項ノ肘板ノ深サハ堅桁ノ長サノ二〇%以上ト爲シ其ノ
 幅ハ横桁ノ内端ニ達スルモノト爲スヘシ

横桁ト堅桁及肘板トハ桁板ト同一ノ厚サヲ有スル二重山
 形鋼ヲ以テ二列鋸固著ト爲スヘシ
第五百八十一條 夏期油槽内ノ横置隔壁ニハ船側縱肋骨ノ
 位置ニ水平防撓材ヲ設クヘシ

水平防撓材ハ球山形鋼ヲ用ヒ心距七六〇耗ノトキ其ノ截
 面抵抗率ヲ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘ
 シ

$$13(1-3)^2(h-0.75)^2+32l+20h-36$$

(hノ三乗ニテ)

lハ水平防撓材ノ長サ(米ニテ)

hハ當該水平防撓材ヨリ上甲板ニ至ル深サ(米ニテ)
 前項ノ防撓材ハ左ノ各號ノ規定ニ依リ堅防撓材ヲ以テ之
 ニ代用スルコトヲ得

一 防撓材ニハ球山形鋼ヲ用ヒ其ノ寸法ハ甲板間ノ高サ

中心線隔壁ト平板龍骨トヲ固著スル山形鋼ハ各邊ノ幅ヲ
 一〇〇耗ト爲シ其ノ厚サヲ左ノ算式ニ依リ算定シタルモ
 ノ以上ト爲スヘシ

$$0.0372L+9.5 \text{ (耗ニテ)}$$

前項ノ山形鋼ノ厚サハ中央部Lノ二分ノ一間ノ前後ニ於
 テハ漸次減少シテ首尾兩端ニ於テハ左ノ算式ニ依リ算定
 シタルモノト爲スコトヲ得

$$0.0284L+9.5 \text{ (耗ニテ)}$$

中心線隔壁ト上甲板トヲ固著スル山形鋼ノ各邊ノ幅ハL
 一二〇米以下ナルトキハ七五耗、一二〇米ヲ超ユルトキ
 ハ九〇耗ト爲シ其ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモ
 ノ以上ト爲スヘシ

$$0.0214L+7.3 \text{ (耗ニテ)}$$

第五百八十五條 第二甲板下ノ中心線隔壁ニハ船底橫肋骨
 ノ位置ニ左ノ各號ノ規定ニ依リ堅桁ヲ設クヘシ
 一 堅桁ノ桁板ノ幅及面材ノ寸法ハ之ニ對應スル船側橫
 肋骨ノモノト等シク爲スヘシ

二 桁板ノ厚サハ船側橫肋骨ノ厚サヨリ一・五耗ヲ減
 シタルモノト爲スヘシ但シ九耗未満ト爲スコトヲ得ス
 三 船底橫肋骨ト堅桁トノ固著ニ付テハ該橫肋骨ト船側

横肋骨トノ固著ニ關スル規定ヲ準用シ第二甲板横置梁ト堅桁トノ固著ニ付テハ該横置梁ト船側横肋骨トノ固著ニ關スル規定ヲ準用ス

四 水平防撓材ト堅桁ノ桁板トノ固著ニ付テハ第五百七十六條ノ規定ヲ準用ス

五 堅桁ハ桁板ト同一ノ厚サヲ有スル單山形鋼ヲ以テ隔壁ニ二列鉸固著ト爲スヘシ

六 堅桁ト隔壁板トヲ固著スル鉸ノ徑ハLト横肋骨心距(米ニテ)トノ積カ三七〇以下ナルトキハ一九耗、三七〇ヲ超ユルトキハ二二耗ト爲スヘシ

第五百八十六條

膨脹「トランク」内ノ中心線隔壁ニハ前條ノ堅桁ノ位置ニ左ノ各號ノ規定ニ依リ堅桁ヲ設クヘシ

一 堅桁ハ遊縁ヲ一三〇耗曲線シタル桁板ヲ單山形鋼ヲ以テ隔壁板ニ固著シタル構造ト爲スヘシ

二 桁板ノ厚サハ堅桁ノ長サカ三米以下ナルトキハ一〇耗三米ヲ超ユルトキハ一〇・五耗ト爲スヘシ

三 桁板ノ幅ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ但シ其ノ下端ヨリ漸次減少シテ上端ニ於テハ左ノ算式ニ依ルモノヨリ一五〇耗ヲ減シタルモノト爲スコトヲ得

$175\sqrt{L-35}$ (米ニテ)

Lハ堅桁ノ長サ(米ニテ)
Sハ堅桁ノ心距(米ニテ)

四 桁板上甲板及第二甲板ノ横置梁ヲ構成スル鋼板トハ累接ニ列鉸固著ト爲スヘシ但シ桁板上甲板迄延長シ該鋼板ニ兼用スルトキハ之ト横置梁ヲ構成スル鋼板トハ累接ニ列鉸固著ト爲スヘシ

五 水平防撓材ト堅桁ノ桁板トハ山形鋼ヲ以テ固著シ之ヲ交互ニ桁板ノ内端迄及水平防撓材ノ遊縁ヨリ二〇〇耗ノ箇所迄延長シ桁板ヲ防撓スヘシ

六 前號ノ防撓山形鋼ノ厚サハ桁板ノ厚サニ等シクシ其ノ邊ノ幅ハ船側横肋骨ノ短防撓山形鋼ニ關スル第五百三十三條ノ規定ニ依リ之ヲ定ムヘシ

第五百八十七條

中心線隔壁ニハ横置隔壁ノ水平防撓材ノ位置ニ左ノ各號ニ依ル水平防撓材ヲ設クヘシ

一 水平防撓材ハ球山形鋼ヲ用ヒ心距七六〇耗ノトキ其ノ截面抵抗率ヲ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スヘシ

$10(S+n)^2 + 20(L-2)(S+2n-2)$ (米ニテ)

Sハ堅桁間ノ間隔又ハ横置隔壁ト堅桁トノ間隔(米ニテ)
hハ當該水平防撓材ヨリ船ノ中心線ニ於ケル上甲板ニ至ル深サ(米ニテ)但シ二米未滿ナルトキハ二米トス

nハ一油槽内ニ設クル堅桁ノ數一箇ナルトキハ一〇・一、二箇又ハ三箇ナルトキハ一〇・三

二 水平防撓材ト横置隔壁ノ水平防撓材トハ第五百七十九條第三號ノ規定ニ依リ肘板ヲ以テ固著スヘシ

第五百八十八條 中心線隔壁ヲ横置隔壁ニ止ムルトキハ横置隔壁ノ他面ニ大ナル肘板ヲ設ケ強力ノ急激ナル變化ヲ避クルコトヲ要ス

第五百八十九條 肘板ヲ隔壁板ニ固著スル山形鋼ハ肘板ノ端ヲ超エ少クトモ一五〇耗延長スヘシ

肘板及山形鋼ハ周圍山形鋼ヨリ十分離シテ隔壁ニ取附ケ有效ニ填隙シ得ル餘地ヲ存セシムヘシ

第十二節 膨脹「トランク」

第五百九十條 膨脹「トランク」ノ側壁板ノ厚サハ第二甲板ノ厚サト等シク爲スヘシ

膨脹「トランク」ノ側壁ハ内面ニ堅桁及水平防撓材ヲ設

ケ之ヲ防撓スヘシ

前項ノ堅桁及水平防撓材ノ寸法及固著ハ第五百八十六條及第五百八十七條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定ムヘシ

第五百九十一條

膨脹「トランク」ノ側壁板上甲板トハ第五百七十一條第二項ノ規定ヲ準用シテ定メタル寸法ノ單山形鋼ヲ以テ一列鉸固著ト爲シ側壁板ト第二甲板トハ

第二甲板ノ舷線山形鋼ノ寸法ニ等シキ寸法ノ單山形鋼ヲ以テ二列鉸固著ト爲スカ又ハ側壁板若ハ第二甲板ノ鋼甲板ヲ曲線シ二列鉸固著ト爲スヘシ

第五百九十二條

膨脹「トランク」ノ側壁ハ後部ニ於テハ機關室圍壁ニ連續セシメ前部ニ於テハ防油區畫外ニ於テ漸次其ノ深サヲ減少シ強力ノ急激ナル變化ヲ避クヘシ

適當ナル補強ヲ爲ストキハ「ボンブ」室及防油區畫ノ内部ニ於テ膨脹「トランク」ノ側壁ニ通行口ヲ設クルコトヲ得

第十三節 艙 口

第五百九十三條

艙口ノ大サ及數ハ油槽内ノ検査、清掃、通風等ニ必要ナル程度ヲ超エテ増加スルコトヲ得ス
二箇以上ノ艙口ヲ同一横截面ニ配置スルコトハ成ルヘク之ヲ避クヘシ

第五百九十四條 船口縁材ノ厚サハ一〇耗以上ナルコトヲ要ス
 高サ七六〇耗ヲ超エ且長サ一・二五米ヲ超ユル側縁材又ハ端縁材ニハ堅防撓材ヲ附シ且縁材ノ上端ヲ適當ニ防撓スヘシ

第五百九十五條 船口蓋板ハ鋼製トシ左ノ規定ニ依リ構造スヘシ
 一 蓋板ノ厚サチ一・二・五耗以上ト爲スヘシ
 二 船口ノ面積一平方米ヲ超エ二・五平方米以下ナルトキハ六一〇耗以下ノ心距ニ於テ一〇〇×七五×一〇(耗ニテ)ノ山形鋼ヲ以テ蓋板ヲ防撓スヘシ但シ蓋板ノ厚サ一五耗以上ナルトキハ此ノ限ニ在ラス
 三 船口ノ面積二・五平方米ヲ超ユルトキハ六一〇耗以下ノ心距ニ於テ一・二五×七五×一〇(耗ニテ)ノ山形鋼ヲ以テ蓋板ヲ防撓スヘシ

第五百九十六條 船口蓋板ニハ徑一五〇耗以上ノ開口ヲ設ケテ蓋板ヲ防撓スヘシ
 船口縁材ニハ各隅ヨリ二三〇耗以内ノ箇所及該箇所ヨリ三八〇耗以下ノ心距ニ配置シタル締具ヲ備ヘ蓋板ヲ油密ニ締附ケ得ル構造ト爲スヘシ

ケ之ヲ螺栓又ハ覗キ蓋ニ依リ油密ニ閉鎖シ得ル構造ト爲スヘシ
 船口縁材ニハ瓦斯「コック」又ハ適當ナル排氣裝置ヲ設クヘシ

第十四節 油槽外ノ構造配置

第五百九十七條 油槽、「ボンブ」室、防油區畫及燃料油庫ヲ除ク船ノ前後部ノ構造ハ縱肋骨式、橫肋骨式又ハ其ノ併用式ト爲スコトヲ得

第五百九十八條 縱肋骨式構造ヨリ橫肋骨式構造ニ移ル部分ニ於テハ強力ノ連續ヲ保持スル様特ニ注意スヘシ
 油槽及防油區畫ノ範圍外ニ於テ第二甲板ヲ設ケサルトキハ強力ノ急激ナル變化ヲ避クル様適當ナル構造ト爲スヘシ

第五百九十九條 機關室、船首尾艙、脚荷水艙、船首船底ノ構造並ニ首尾防撓構造ニ付テハ橫肋骨式構造法ニ依ラサル場合ト雖モ特ニ適當ナル補強ヲ爲スヘシ

第六百條 本節ノ規定ニ於ケル外板、鋼甲板及梁上側板ニハ船樓ニ於ケルモノヲ包含セス
 第六百一節 板ノ横線接合ニ於ケル鉄列ハ板ノ厚サニ應ジ

左表ニ依リ之ヲ定メ鉄列カ二列以上ナル場合ノ鉄列ノ配置

横線ノ種類	板ノ厚サ(耗)	鉄列ノ配置	
		上以	下以
一 中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル船底外板ノ横線	10.0—10.5	列三	列三
二 中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル平板龍骨ノ横線	11.0—12.0	列三	列二
三 船底又ハ船側横肋骨ノ肋骨板及隔壁ニ付スル桁材ノ桁板ノ横線	12.5—13.5	列三	列二
四 中央部Lノ二分ノ一間ニ於ケル船側外板ノ横線	14.0—15.0	列四	列二
五 首尾Lノ四分ノ一間ニ於ケル舷側厚板及其ノ直下ノ外板ノ横線	15.5—17.5	列四	列四
六 首尾Lノ四分ノ一間ニ於ケル上甲板ノ梁上側板ノ横線	18.0—19.5	列四	列四
七 首尾Lノ四分ノ一間ニ於ケル鋼甲板ノ横線	20.0—21.5	列四	列四
八 横置隔壁及中心線隔壁ノ隔壁板ノ横線(第一〇欄ノ横線ヲ除ク)	22.0—24.0	列四	列四
九 膨脹「トランク」側壁板ノ横線	24.5—26.5	列四	列四
一〇 中心線隔壁ノ最下部ノ板ノ横線	27.0—32.5	列三	列三

備考 板ノ厚サ等シカラサルトキハ小ナル厚サニ依リ鉄列ヲ定ムヘシ 但シ厚サノ差大ナルトキハ鉄列ニ付適當ナル考量ヲ加フヘシ

第六百二條 外板ノ縦線、鋼甲板及梁上側板ノ縦線、横置隔壁及中心線隔壁ノ隔壁板ノ縦線並ニ膨脹「トランク」側壁板ノ縦線ハ二列銲以上ノ接合ト爲スヘシ
 L一二五米以上一四五米未満ノ船舶ニ在リテハ船側外板ノ二縦線、L一四五米以上一六〇米未満ノ船舶ニ在リテハ其ノ三縦線、L一六〇米以上一七〇米未満ノ船舶ニ在リテハ其ノ四縦線ヲ前項ノ規定ニ拘ラス船首隔壁ヨリ船尾隔壁ニ至ル迄三列銲以上ノ接合ト爲スヘシ
 前二項ノ接合ニ於ケル銲ノ配置ハ竝列ト爲スヘシ
第六百三條 板ノ横線接合ニ於ケル銲ノ心距ハ左表ニ依ル

欄	種	類	心距 (銲徑ノ倍數ニテ)
一	平板龍骨 外板及梁上側板ノ横線(第一欄及第五欄ノ横線ヲ除ク)		3½
二	鋼甲板ノ横線(板ノ厚サ一二・五耗以下ナル場合)		3½
三	横置隔壁板、中心線隔壁板及膨脹「トランク」側壁板ノ横線(板ノ厚サ一二・五耗以下ナル場合)		3½
四	四列銲接合又ハ二重覆板三列銲接合ト爲ス平板龍骨、外板及梁上側板ノ横線		4
五	鋼甲板ノ横線(板ノ厚サ一二・五耗ヲ超ユル場合)		4

第六百四條 板ノ縦線接合ニ於ケル銲ノ心距ハ左表ニ依ル

欄	種	類	心距 (銲徑ノ倍數ニテ)
一	外板、鋼甲板及梁上側板ノ縦線(板ノ厚サ一二・五耗以下ナル場合)		3½
二	横置隔壁板、中心線隔壁板及膨脹「トランク」側壁板ノ縦線(板ノ厚サ一二・五耗以下ナル場合)		3½
三	外板、鋼甲板及梁上側板ノ縦線(板ノ厚サ一二・五耗ヲ超ユル場合)		4
四	横置隔壁板、中心線隔壁板及膨脹「トランク」側壁板ノ縦線(板ノ厚サ一二・五耗ヲ超ユル場合)		4

前項ノ規定ニ拘ラス左ニ掲グル船側外板ノ縦線ノ接合ノ銲ノ心距ハ船首隔壁ヨリ船尾隔壁ニ至ル間ニ於テハ銲徑ノ三・五倍以下ト爲スヘシ
 一 L一四〇米ヲ超エ一四五米未満ノ船舶ノ船側外板ノ縦線
 二 L一五五米以上一七〇米未満ノ船舶ノ船側外板ノ縦線

縁ニシテ第六百二條第二項ノ規定ニ依リ三列銲以上ノ接合ト爲スモノ

第六百五條 肋骨、梁、桁材、防撓材、舷線山形鋼及隔壁ノ周圍山形鋼ニ於ケル銲ノ心距ハ左表ニ依ル

欄	種	類	心距 (銲徑ノ倍數ニテ)
一	船底又ハ船側横肋骨ト外板トノ固著(第二欄ノ固著ヲ除ク)		4½
二	第五百二十六條又ハ第五百三十二條ニ依リ背面山形鋼ヲ増設スル場合若ハLトSトノ積カ二八〇以下ナル場合ニ於ケル船底又ハ船側横肋骨ト外板トノ固著		5
三	肋骨板相互ノ固著		5
四	肋骨板ト肘板トノ固著		6
五	肋骨板ト面材トノ固著		6
六	横置梁ト鋼甲板又ハ梁上側板トノ固著		6
七	梁ヲ構成スル鋼板相互ノ固著		5
八	梁ヲ構成スル鋼板ト肘板トノ固著		6
九	梁ヲ構成スル鋼板ト面材トノ固著		6
一〇	LトSトノ積カ二八〇ヲ超ユル場合ニ於ケル縦肋骨ト外板トノ固著ノ中横肋骨又ハ隔壁ニ近接スル箇ノ銲ニ依ル固著		3½

二 放水口ハ成ルヘク低キ位置ニ設ケ細長キ形状ノモノト爲スヘシ
「トランク」ノ兩端カ船樓ニ連續スル場合ニ於テハ該部分ニ於ケル上甲板ノ暴露部ノ全長ニ互リ開放欄干ヲ設クルコトヲ要ス

第十七節 「ポンプ」裝置

第六百二十二條 貨物油ニ對シテハ適當ナル「ポンプ」裝置ヲ備ヘ「ポンプ」ハ油密構造ニシテ機關室ト直接連結ナキ「ポンプ」室ニ之ヲ設クヘシ
油「ポンプ」裝置ト脚荷水用「ポンプ」裝置トハ相互ニ區別シ置クヘシ

燃料油用諸管ト貨物油用諸管トハ相互ニ區別シ置クヘシ
第六百二十三條 脚荷水用諸管ハ油槽ヲ又油「ポンプ」裝置ニ屬スル管ハ水槽ヲ通過セシムルコトヲ得ス

油槽ノ前方ニ脚荷水槽ヲ備フル船舶ニ在リテハ其ノ箇所ニ該水槽ニ對スル別箇ノ脚荷水「ポンプ」ヲ設備スヘシ

第六百二十四條 油槽ノ直上ニ在ル甲板間ノ排水ノ爲有效ナル排水裝置ヲ設クヘシ

タル別箇ノ導線ヲ有スル二線式ト爲シ其ノ何レノ部分ヲモ接地スルコトヲ得ス

交流ハ三相式ト爲シ主配線ニハ多心電線ヲ用フヘシ

第六百二十條 「ヒューズ」ハ包裝式ノモノヲ用フヘシ

第六百二十一條 油槽又ハ防油區畫ニハ電燈、配線其ノ他一切ノ電氣設備ヲ設クルコトヲ得ス

「ポンプ」室、甲板間ノ場所及油槽ニ隣接スル場所ニ於ケル電燈ハ之ヲ氣密器具内ニ、配線ハ氣密管内ニ收メ其ノ開閉器ハ兩極型ト爲シ該場所ノ外部ニ設クルコトヲ要ス

「ポンプ」室ハ堅固ナル硝子ヲ以テ内部ト氣密ニ隔離シ且配線ヲ總テ室外ニ設ケタル電燈ニ依リ照明スル裝置ト爲スコトヲ得

油槽、防油區畫又ハ「ポンプ」室ニ於テ使用スル携帯電燈ハ管海官廳ノ承認ヲ受ケタルモノナルコトヲ要ス

第二十節 油槽ノ水密試驗

第六百二十二條 各油槽ハ別々ニ充水シテ其ノ水密ヲ試驗スヘシ

前項ノ水密試驗ハ成ルヘク管其ノ他附屬品ヲ取附ケタル

防油區畫ニハ測深管ヲ設クヘシ

第十八節 通風裝置

第六百十五條 油槽ヲ構造スル桁板其ノ他ノ材料カ瓦斯ノ流通ヲ妨クル虞アルトキハ之ニ十分ナル丸形ノ通氣孔ヲ設クヘシ

油槽ニハ有害瓦斯ヲ排除スル爲人工通風裝置又ハ蒸汽送入裝置ヲ設クヘシ

第六百十六條 「ポンプ」室、防油區畫、甲板室其ノ他蔽圍シタル場所ニハ有效ナル通風裝置ヲ設クヘシ

第十九節 電氣裝置

第六百十七條 密閉試驗ニ依ル引火點攝氏六五度未滿ノ油ヲ積載スル油槽船ノ電氣裝置ニ付テハ船舶設備規程ニ依ルノ外本節ノ規定ニ依ル

第六百十八條 供給電壓ハ左ノ各號ニ掲クルモノヲ超ユルコトヲ得ス

- 一 直流ナルトキ 二二〇ヴォルト
- 二 交流ナルトキ 一一〇ヴォルト

第六百十九條 直流ノ場合ニ於ケル主配線（配電盤ト分電盤トノ間又ハ分電盤ト副分電盤トノ間）ハ各極ニ絶緣シ

後之ヲ執行スヘシ

第六百二十三條 水密試驗ノ試驗壓力ハ主油槽ニ對シテハ膨脹「トランク」ノ最高所以上二・四米、夏期油槽ニ對シテハ上甲板以上二・四米ニ相當スル水高壓力ト爲スヘシ但シ油ノ到達スヘキ最高所ニ相當スル水高壓力ヨリ小ナルコトヲ得ス

第六百二十四條 防油區畫ハ之ニ充水シ艙口ノ頂部迄ノ水高壓力ヲ以テ其ノ水密ヲ試驗スヘシ

第二十七章 對氷構造

第六百二十五條 水中ヲ航行スル船舶ハ成ルヘク本章ノ規定ニ依リ對氷ノ構造ヲ施スヘシ

第六百二十六條 舵頭材ノ徑及舵腕ノ寸法ハ第四百十三條及第四百十六條ノ規定ニ依ルモノノ一・一倍ト爲スヘシ

舵、操舵裝置及船尾骨材ニ於ケル舵ノ壺金ノ各部ノ寸法ハ前項ニ依リ増加シタル舵頭材ノ徑ニ應シ之ヲ定ムヘシ

第六百二十七條 前部ノ五分ノ一間ニ於ケル肋骨ハ左ノ各號ノ一ニ依リ構造スヘシ

一 肋骨ノ中間ニ於テ滿載吃水線上六〇〇耗以上ノ箇所ト二重底縁板ノ外側又ハ船底彎曲下部トノ間ニ船首艙ノ肋骨ノ截面抵抗率ノ七五%以上ノ截面抵抗率ヲ有スル中間肋骨ヲ附スルコト

二 肋骨心距ヲ五〇〇耗以下ト爲シ且前號ノ部分ニ於ケル肋骨ノ強力ヲ前號ニ依ル場合ト同等以上ト爲スコト

第六百二十八條 滿載吃水線上六〇〇耗以上ノ箇所ト輕吃水線下六〇〇耗以上ノ箇所トノ間ニ於ケル外板ノ厚サハ前部Lノ五分ノ一間ニ於テハ前條第一號ニ依リ肋骨ヲ構造シタルトキハ中央部ノ厚サノ一・四倍以上ト爲シ前條第二號ニ依リ肋骨ヲ構造シタルトキハ一・五倍以上ト爲スヘシ但シ二五耗ヨリ大ト爲スコトヲ要セス

前項ノ外板ノ厚サハ船首ヨリLノ五分ノ一ニ相當スル箇所ヨリ後方ニ於テハ漸次之ヲ減シ船首ヨリLノ四分ノ一ニ相當スル箇所ニ於テ中央部ノ厚サニ一致セシムヘシ

第六百二十九條 船首材ニ「ラベツト」ヲ設クルカ其ノ他適當ナル方法ニ依リ船首端ニ於ケル外板ノ先縁ヲ保護スヘシ

第六百三十條 船首隔壁ヨリ後方ニ於テハ第三百十三條乃至第三百十五條ノ規定ニ依ル船側縦通材ヲ設ケ之ヲ船首ヨリLノ四分ノ一ニ相當スル箇所迄延長スヘシ

第六百三十一條 滿載吃水線六〇〇耗ノ箇所ヨリ下方ニ在ル外板ノ縦縁ハ前部Lノ四分ノ一間ニ於テハ少クトモ二列銲固著ト爲スヘシ

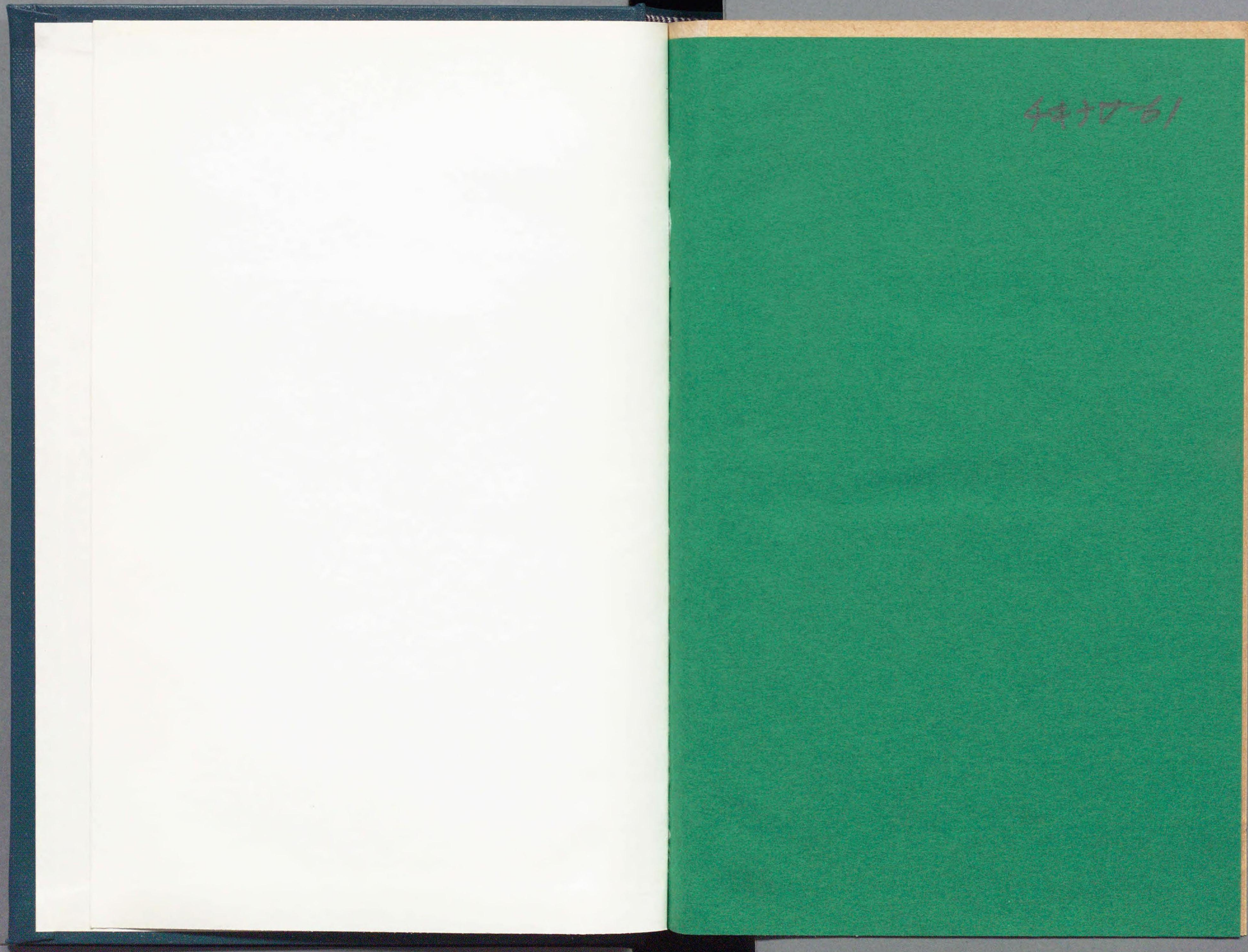
第六百三十二條 滿載吃水線下ニ於テ外板ニ取附クル海水弁、排出管等ハ氷又ハ寒氣ノ爲破損セラレサル様裝置スヘシ

循環水「ポンプ」ノ吸水口ハ之ニ蒸汽ヲ送込ミ得ル装置ト爲スカ其ノ他適當ナル方法ニ依リ氷ノ爲閉塞セラルルコトヲ防止シ得ル様爲スヘシ

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前製造シ又ハ製造ニ著手シタル鋼船ノ構造ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ルコトヲ得



4437-61



